

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
6

北原～大法寺遺跡
十楽寺遺跡
椎ヶ丸～芝生遺跡

1994

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
6

北原～大法寺遺跡
十楽寺遺跡
椎ヶ丸～芝生遺跡

1994

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

序 文

本センターは、平成元年4月1日に徳島県内における埋蔵文化財の調査及び研究を目的として設立されました。本年度で設立5年目をむかえ、平成元年度より徳島県から委託を受けました四国縦貫自動車道（徳島～協間）の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を主な業務としてまいりました。事業を実施するのに必要な体制を整えることができたのは、徳島県教育委員会の御支援の賜であります。

本報告書は、平成2年度に調査を実施した板野郡土成町北原～大法寺遺跡、十楽寺遺跡、椎ヶ丸～芝生遺跡の3遺跡について発掘調査の成果をまとめたものであります。

これらの遺跡はいずれも阿讃山脈南麓に位置しており、旧石器から平安時代にいたる遺構・遺物が確認されました。このうち椎ヶ丸～芝生遺跡の旧石器時代の石器群、北原～大法寺遺跡の弥生土器、十楽寺遺跡の須恵器焼成に伴う灰原と須恵器などは、本地域の歴史を解明する上での基礎資料となるものと考えております。

本報告書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。なお、発掘調査の実施、報告書作成にあたり、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元の皆様に多大の御援助、御協力を頂き、また研究者の方からは貴重な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成6年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 近 藤 通 弘

例 言

- 1 本書は平成2年(1990)度に調査を実施した四国縦貫自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書には北原～大法寺遺跡(板野郡土成町所在)、十楽寺遺跡(板野郡土成町所在)、椎ヶ丸～芝生遺跡(板野郡土成町所在)調査報告を収録した。
- 3 発掘調査は日本道路公団高松建設局から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。

- 4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

凡例

S A	掘立柱建物跡	S E	井戸	S O	窯
S B	竪穴住居跡	S K	土坑(墳)	S P	柱穴
S D	溝	S T	墓	S X	不明遺構

- 5 第4図の地形図は建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「市場」「大寺」を転載したものである。
- 6 方位は国土座標第Ⅳ座標系の北、高さは東京湾標準潮位(T・P)を表す。
- 7 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』1989年度版によった。

- 8 調査にあたっては、次の機関の指導・協力を得た。

徳島県教育委員会 日本道路公団高松建設局 同徳島工事事務所 同協工事事務所
徳島県土木部縦貫道推進局 同中央事務所 土成町

- 9 本書の執筆は以下のとおりである。

I 菅原康夫 II 久保脇美朗 III 久保脇美朗 IV 久保脇美朗

なお、遺物の写真撮影は島巡賢二、佐藤誠二、全体の編集は久保脇が行った。

本文目次

I	調査に至る経緯	1
II	北原～大法寺遺跡	7
1	調査の経過	17
(1)	調査の経過	13
(2)	発掘調査の方法	13
(3)	調査日誌抄	14
2	遺跡の立地と歴史的環境	16
(1)	遺跡の地理的環境	16
(2)	周辺の考古学的環境と遺跡の消長	16
3	調査成果	19
(1)	遺跡の基本層序	19
(2)	(検出された)遺構と遺物	21
(3)	考察	57
4	まとめ	71
III	十楽寺遺跡	115
1	調査の経過	117
(1)	調査の経過	117
(2)	発掘調査の方法	117
(3)	調査日誌抄	119
2	遺跡の立地と地理的環境	123
3	調査成果	124
(1)	(遺跡の)基本層序	124
(2)	(検出された)遺構と遺物	124
(3)	考察	134
4	まとめ	135
IV	椎ヶ丸～芝生遺跡	155
1	調査の経過	161

(1) 調査の経過	161
(2) 発掘調査の方法	162
(3) 調査日誌抄	162
2 遺跡の立地と地理的環境	164
3 調査成果	165
(1) (遺跡の) 基本層序	165
(2) 検出された遺構と遺物	167
椎ヶ丸地区	167
弥生時代の遺構と遺物	167
旧石器時代の遺物	185
芝生地区	206
検出された遺構と遺物	206
(3) 考察	207
弥生時代の遺物について	207
旧石器時代の遺物について	208
4 まとめ	210

插图目次

I	第1図 四国縦貫自動車道（徳島～脇）路線図	4	第35図 S K 1010出土土器実測図	45
II	第1図 北原～大法寺遺跡調査地位位置図	9	第36図 S K 1010出土土器実測図	46
	第2図 北原～大法寺遺跡グリッド配置図	11	第37図 S K 1010出土土器実測図	47
	第3図 北原～大法寺遺跡遺構配置図	11	第38図 S K 1010出土土器実測図	48
	第4図 周辺主要遺跡分布図	17	第39図 S K 1010出土土器実測図	49
	第5図 北原～大法寺遺跡基本土層図	19	第40図 S K 1010出土土器実測図	50
	第6図 S B 1001実測図	20	第41図 S K 1010出土土器実測図	51
	第7図 S B 1001出土遺物実測図	21	第42図 S K 1011実測図	52
	第8図 S B 1002実測図	23	第43図 S K 1011出土土器実測図	53
	第9図 S B 1002出土土器実測図	24	第44図 S K 1011出土土器実測図	54
	第10図 S B 1002出土土器実測図	25	第45図 S K 1011出土土器実測図	55
	第11図 S B 1002出土土器実測図	26	第46図 S K 1012実測図	56
	第12図 S K 1001実測図	27	第47図 北原～大法寺遺跡出土土器種類表	58
	第13図 S K 1001出土土器実測図	28	第48図 北原～大法寺遺跡出土土器種類表	59
	第14図 S K 1001出土土器実測図	29	第49図 北原～大法寺遺跡出土土器種類表	60
	第15図 S K 1002実測図	30	III 第1図 十楽寺遺跡調査地位位置図	118
	第16図 S K 1002出土遺物実測図	31	第2図 十楽寺遺跡グリッド配置図	119
	第17図 S K 1003実測図	32	第3図 十楽寺遺跡遺構配置図	120
	第18図 S K 1003出土土器実測図	32	第4図 十楽寺遺跡土層実測図	121
	第19図 S K 1004実測図	33	第5図 十楽寺遺跡位置図	125
	第20図 S K 1004出土土器実測図	33	第6図 十楽寺遺跡出土土器実測図(1)	126
	第20図 S K 1004出土遺物実測図	33	第7図 十楽寺遺跡出土土器実測図(2)	127
	第21図 S K 1005実測図	34	第8図 十楽寺遺跡出土土器実測図(3)	129
	第22図 S K 1005出土土器実測図	35	第9図 十楽寺遺跡出土土器実測図(4)	130
	第23図 S K 1005出土土器実測図	36	第10図 十楽寺遺跡出土土器実測図(5)	131
	第24図 S K 1006実測図	37	第11図 図杯及び杯蓋内外面の成形・整形痕	132
	第25図 S K 1006出土土器実測図	38	第12図 甕体部外面の叩き目文	132
	第26図 S K 1006出土土器実測図	39	第13図 十楽寺遺跡出土鉄器実測図	139
	第27図 S K 1006出土土器実測図	39	IV 第1図 椎ヶ丸～芝生遺跡調査地位位置図	157
	第28図 S K 1007実測図	40	第2図 椎ヶ丸地区グリッド配置図	159
	第29図 S K 1007出土遺物実測図	40	第3図 椎ヶ丸地区遺構配置図	159
	第30図 S K 1008実測図	41	第4図 芝生地区グリッド配置図	161
	第31図 S K 1008出土土器実測図	41	第5図 芝生地区遺構配置図	161
	第32図 S K 1010実測図	42	第6図 椎ヶ丸～芝生遺跡位置図	164
	第33図 S K 1010出土土器実測図	43	第7図 椎ヶ丸地区基本層序	165
	第34図 S K 1010出土土器実測図	44		

第8図	芝生遺跡基本層序	166	第30図	包含層出土石器実測図	184
第9図	S B 1001実測図	168	第31図	椎ヶ丸地区旧石器調査区略図	186
第10図	S B 1001出土土器実測図	169	第32図	B地点地形測量図	186
第11図	S B 1001出土土器実測図	170	第33図	A地点出土旧石器実測図	187
第12図	S B 1001出土土器実測図	170	第34図	A地点出土旧石器実測図	188
第13図	S B 1001出土土器実測図	171	第35図	A地点出土旧石器実測図	189
第14図	S B 1002実測図	172	第36図	A地点出土旧石器実測図	190
第15図	S B 1002出土土器実測図	173	第37図	A地点出土旧石器実測図	191
第16図	S B 1003実測図	174	第38図	A地点出土旧石器実測図	192
第17図	S B 1003出土土器実測図	175	第39図	A地点出土旧石器実測図	193
第18図	S B 1003出土土器実測図	176	第40図	B地点出土旧石器実測図	196
第19図	S K 1001実測図	176	第41図	B地点出土旧石器実測図	197
第20図	S K 1001出土土器実測図	177	第42図	B地点出土旧石器実測図	198
第21図	S K 1002実測図	177	第43図	B地点出土旧石器実測図	199
第22図	S K 1002出土土器実測図	177	第44図	B地点出土旧石器実測図	200
第23図	S K 1002出土土器実測図	177	第45図	B地点出土旧石器実測図	201
第24図	S K 1003実測図	178	第46図	C地点出土旧石器実測図	202
第25図	S K 1003出土鉄器実測図	179	第47図	C地点出土旧石器実測図	203
第26図	S K 1003出土土器実測図	179	第48図	C地点出土旧石器実測図	204
第27図	S X 1001実測図	180	第49図	表面採集遺物	205
第28図	包含層出土土器実測図	182	第50図	S O 1001実測図	206
第29図	包含層出土土器実測図	183			

表目次

I 第1表	四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査地一覧表	4	III 第1表	十楽寺遺跡出土遺物観察表	136
II 第1表	北原～大法寺遺跡遺構一覧表	74	IV 第1表	椎ヶ丸～芝生遺跡遺構一覧表	212
第2表	北原～大法寺遺跡出土遺物観察表	76	第2表	椎ヶ丸～芝生遺跡出土遺物一覧表	212

図版目次

II 図版1	調査区遠景	89	図版4	S K 1001遺物出土状況（北から）	92
	調査風景	89		S K 1001完掘状況（同）	92
図版2	S B 1001検出状況（南から）	90	図版5	S K 1002掘り下げ状況（北から）	93
	S B 1001完掘状況（同）	90		S K 1002完掘状況（同）	93
図版3	S B 1002検出状況（西から）	91	図版6	S K 1006掘り下げ状況（西から）	94
	S B 1002完掘状況（南から）	91		S K 1006完掘状況（東から）	94

図版 7	S K 1010掘り下げ状況（東から）	95	図版11	出土遺物(6)	153
	S K 1010完全掘状況（東から）	95			
図版 8	S K 1011掘り下げ状況（東から）	96	IV 図版 1	椎ヶ丸調査区遠景	223
	S K 1011完掘状況（同）	96		芝生調査前風景	223
図版 9	S B 1002床面遺物出土状況	97	図版 2	S B 1001完掘状況（南から）	224
	S B 1002ミニチュア土器出土状況	97		S B 1001完掘状況（北から）	224
図版10	S K 1002遺物出土状況	98	図版 3	S B 1003検出状況（西から）	225
	S K 1003遺物出土状況	98		S B 1003完掘状況（南から）	225
図版11	S K 1010遺物出土状況	99	図版 4	S K 1001検出状況	226
	S K 1010遺物出土状況	99		S K 1001完掘状況	226
図版12	出土遺物(1)	100	図版 5	S K 1002検出状況	227
図版13	出土遺物(2)	101		S K 1002完掘状況	227
図版14	出土遺物(3)	102	図版 6	S K 1001・1002完掘状況	228
図版15	出土遺物(4)	103		S K 1003検出状況	228
図版16	出土遺物(5)	104	図版 7	S K 1003掘り下げ状況（西から）	229
図版17	出土遺物(6)	105		S K 1003完掘状況（北から）	229
図版18	出土遺物(7)	106	図版 8	S X 1001検出状況	230
図版19	出土遺物(8)	107		S X 1001完掘状況	230
図版20	出土遺物(9)	108	図版 9	S B 1001遺物出土状況（石斧）	231
図版21	出土遺物(10)	109		S B 1001遺物出土状況（弥生土器）	231
図版22	出土遺物(11)	110	図版10	A地点ナイフ形石器出土状況	232
図版23	出土遺物(12)	111		B地点ナイフ形石器出土状況	232
図版24	出土遺物(13)	112	図版11	B地点ナイフ形石器出土状況	233
図版25	出土遺物(14)	113		B地点スクレイパー出土状況	233
III 図版 1	調査区遠景	143	図版12	S B 1001出土遺物（弥生土器）	234
	A地区自然流路土層堆積状況（南壁）	143	図版13	S B 1003出土遺物（弥生土器）	235
図版 2	灰原検出状況（北東から）	144		S K 1003出土遺物（弥生土器）	235
	灰原検出状況（東から）	144	図版14	包含層出土遺物（弥生土器）	236
図版 3	A地区自然流路内土層堆積状況	145	図版15	出土遺物（弥生石器）	237
	同灰層堆積状況	145	図版16	出土遺物（弥生石器）	238
図版 4	鉄斧出土状況	146	図版17	A地点出土遺物（旧石器）	239
	灰原内遺物出土状況	146	図版18	A地点出土遺物（旧石器）	240
図版 5	自然流路内遺物出土状況	147	図版19	B地点出土遺物（旧石器）	241
	自然流路内遺物出土状況	147	図版20	B地点出土遺物（旧石器）	242
図版 6	出土遺物(1)	148	図版21	B地点出土遺物（旧石器）	243
図版 7	出土遺物(2)	149	図版22	C地点出土遺物（旧石器）	244
図版 8	出土遺物(3)	150	図版23	C地点出土遺物（旧石器）	245
図版 9	出土遺物(4)	151		表面採集遺物	245
図版10	出土遺物(5)	152			

I 調査に至る経緯

I 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国4県を連結する幹線道路として計画された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48年（1973）10月19日「道路整備特別措置法」に基づき建設大臣から第7次の施工命令が出され（昭和54年3月2日整備計画変更、施工命令）、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年1月19日に路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島I.Cを起点とし、吉野川に平行して西進し、板野郡板野町の冲積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇I.Cを結ぶ区間延長41.4km、用地取得面積259haに及ぶ事業である。

昭和61年4月24日道路局長通達により暫定施工に変更され、62年11月6日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月31日には藍住I.C（追加I.C）の施工命令が出され、6月30日に実施計画が認可されている。

この間徳島県教育委員会（以下「県教委」という。）は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局（以下「公団」という。）は、昭和63年6月17日、文化庁に脇～板野間に係る58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年3月30日、工事の施工に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次5か年計画に取り入れられ、平成5年が目標となっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年4月1日、財団法人徳島県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を発足させ、調査に対応することとした。センター発足時には未確定であった徳島～板野間の調査については、平成2年1月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000㎡（暫定分約340,000㎡）、事業区域面積のほぼ13パーセントにあたる文化財対象地が確定した（第1図）。

県と公団との委託契約をふまえ、県とセンターの委託契約は元年6月1日付けで締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び層厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に

応じた調査方法、調査工期について検討を行い、調査を実施した。

前述したように、発掘調査を先行する事によって層厚・調査面積を絞り込んだことに加えて、徳島～板野間の沖積平野では現地表面下3m以深に遺跡が存在することから、遺物の採集が行われなくとも、慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500㎡、2年度は33遺跡76,390㎡、3年度は30遺跡35,748㎡、4年度は残件であった14遺跡6,826㎡について、用地取得がなされた地区から調査を進め、当該区間の調査を完了した（第1表）。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の徳島県埋蔵文化財センター年報を参照されたい。

調査組織及び整理体制は以下である。

事務局長	日下 昭（平成元・2年度） 佐藤信博（平成3・4年度）
総務課長	吉田 寛（平成元・2年度） 木内正幸（平成3年度） 岡本一仁（平成4年度）
主 事	佐藤 馨（平成2～4年度）
研究補助員	扶川道代
臨時補助員	田村隆子 上田暁美 岸いくみ 大岸さとみ 福原幸恵 柴田みのり 藤川淑江
調査課長	桑原邦彦（平成元・2年度） 羽山久男（平成3・4年度）
調整係長	菅原康夫（平成元年度） 島巡賢二（平成2～4年度）
技 師	森長 進（平成元・2年度技術主任） 堀江隆治（平成3・4年度）
調査係長	島巡賢二（平成元年度） 菅原康夫（平成2～4年度）

調査担当

北原～大法寺遺跡

研 究 員 川田浩司（当時） 鈴木康司（当時）
吉川弥生（当時） 久保脇美朗

十楽寺遺跡

研 究 員 鈴木康司（当時） 久保脇美朗

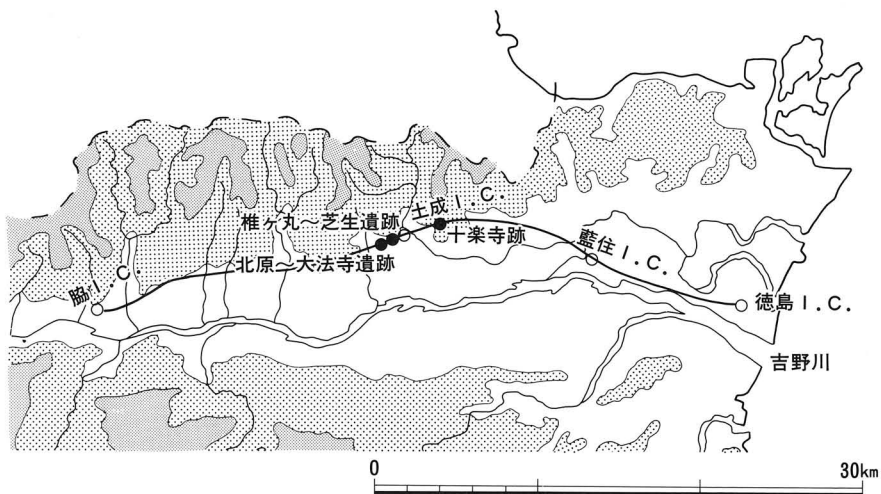
椎ヶ丸～芝生遺跡

研 究 員 鈴木康司（当時） 米倉康博（当時）
柴田昌児（当時） 須崎一幸
久保脇美朗

研究補助員 十川道雄（当時） 原 芳伸（当時）

調査報告書作成業務

北原～大法寺遺跡・十楽寺遺跡・椎ヶ丸～芝生遺跡 研究員 久保脇美朗



第1図 四国縦貫自動車道（徳島～脇）路線図

第1表 四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査地一覧表

遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)				備考
			実掘面積	元年度	2年度	3年度	4年度
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170			
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100			
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30		
4	日吉谷遺跡	阿波郡阿波町日吉谷	4,080	1,840	2,240		第5集所収
5	赤坂遺跡(Ⅰ)	阿波郡阿波町赤坂	800		800		第1集所収
6	赤坂遺跡(Ⅱ)	阿波郡阿波町赤坂	50		50		第1集所収
7	赤坂遺跡(Ⅲ)	阿波郡阿波町赤坂	1,600	600	1,000		第1集所収
8	桜ノ岡遺跡(Ⅰ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	8,000	2,690	5,310		第3集所収
9	桜ノ岡遺跡(Ⅲ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	240	240			
10	桜ノ岡～東正広遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,000		1,000		
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10		
12	山ノ神～八丁原遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30		
13	上喜来遺跡	阿波郡市場町大俣	1,160		900	260	
14	大俣山路～大俣宇佐遺跡	阿波郡市場町大俣	250			250	
15	上喜来蛭子～中佐古遺跡	阿波郡市場町上喜来	12,560		11,720	840	
16	八坂遺跡(Ⅰ)	阿波郡市場町尾開	11			11	
17	八坂遺跡(Ⅱ)	阿波郡市場町尾開	360	360			
18	八坂遺跡(Ⅲ)	阿波郡市場町尾開	114			85	29
19	八坂遺跡(Ⅳ)	阿波郡市場町尾開	2,000	2,000			
20	日吉～金清遺跡	阿波郡市場町尾開	3,100	2,850	250		
21	古田遺跡(Ⅰ)	阿波郡市場町切幡	60		60		
22	古田遺跡(Ⅱ)	阿波郡市場町切幡	510	510			
23	坤山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	60			60	
24	乾山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	850			850	
25	乾山遺跡	阿波郡市場町切幡	2			2	
26	金蔵～上井遺跡	板野郡土成町浦池	2,730	2,730			第1集所収
27	北原～大法寺遺跡	板野郡土成町土成	4,890		4,890		本報告書収
28	前田遺跡	板野郡土成町土成	10,810		7,710	3,100	第2集所収
29	椎ヶ丸～芝生遺跡	板野郡土成町吉田	3,550		3,550		本報告書収
30	北門～涼堂遺跡	板野郡土成町吉田	200			200	
31	広坪～宮ノ下遺跡	板野郡土成町宮川内	60		60		
32	向山古墳群	板野郡土成町宮川内	50				50
33	葬ヶ丸遺跡	板野郡土成町高尾	1,400		1,400		
34	けやき原～林遺跡	板野郡土成町高尾	210		210		
35	西谷遺跡	板野郡土成町高尾	7,300		5,650	1,650	
36	法教田遺跡(Ⅰ)	板野郡土成町高尾	10		10		
37	十楽寺遺跡	板野郡土成町高尾	430		430		本報告書収
38	安楽寺谷墳墓群	板野郡上板町引野	2,140			2,140	
39	関堀窯跡	板野郡上板町引野	20			20	
40	天神山遺跡	板野郡上板町引野	1,330		1,330		第1集所収
41	青谷遺跡	板野郡上板町引野	3,980		3,110	870	第1集所収
42	明神池古墳群	板野郡上板町引野	194		80	114	

遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積（㎡）				備 考
			実掘面積	元年度	2年度	3年度	
43	柿谷遺跡	板野郡上板町泉谷	8,930		3,280	5,650	
44	新池遺跡	板野郡上板町泉谷	31			31	
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宅	15,649			11,507	4,142
46	菖蒲谷西山A遺跡	板野郡上板町神宅	460		130	330	
47	菖蒲谷西山B遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250
48	菖蒲谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115	
49	山田古墳群A	板野郡上板町神宅	2,200			2,200	
50	山田古墓	板野郡上板町神宅	8			8	
51	山田古墳B	板野郡上板町神宅	775			525	250
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30
53	大谷薬師遺跡	板野郡上板町神宅	180		180		
54	祝谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90
55	聖天山遺跡	板野郡上板町神宅	115				115
56	黒谷窯跡	板野郡板野町黒谷	91				91
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860	
58	蓮華谷古墳群（Ⅰ）	板野郡板野町犬伏	353			65	288
59	蓮華池遺跡（Ⅰ）	板野郡板野町犬伏	340		340		第4集所収
60	蓮華谷古墳群（Ⅱ）	板野郡板野町犬伏	1,220		1,220		第4集所収
61	蓮華池遺跡（Ⅱ）	板野郡板野町犬伏	40	40			
62	黒谷川宮ノ前遺跡	板野郡板野町犬伏	10,580	130	10,450		
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840
64	西中富遺跡（Ⅰ）	板野郡板野町西中富	975			975	
65	西中富遺跡（Ⅱ）	板野郡板野町西中富	125			125	
66	東中富遺跡	板野郡藍住町東中富	760			550	210
67	前須遺跡	板野郡藍住町徳命	876			625	251
68	新居須遺跡	板野郡藍住町徳命	190				190
計			133,464				

Ⅱ 北原～大法寺遺跡

1 本章は四国縦貫自動車道建設に伴う北原～大法寺遺跡の発掘調査報告である。

2 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

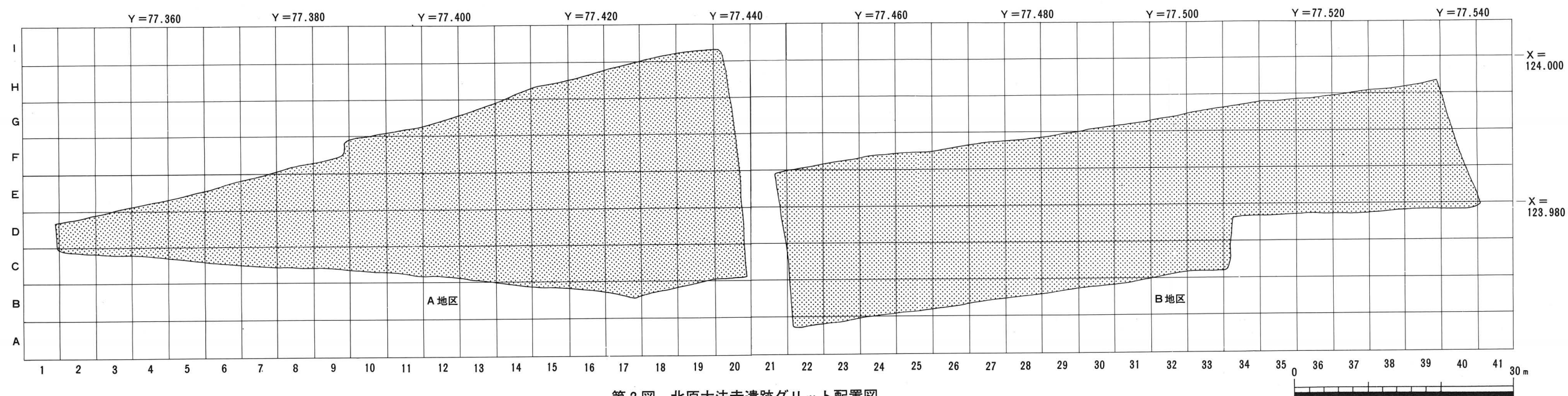
調査期間 平成2年4月28日～10月12日

報告書作成期間 平成4年4月1日～平成5年3月31日

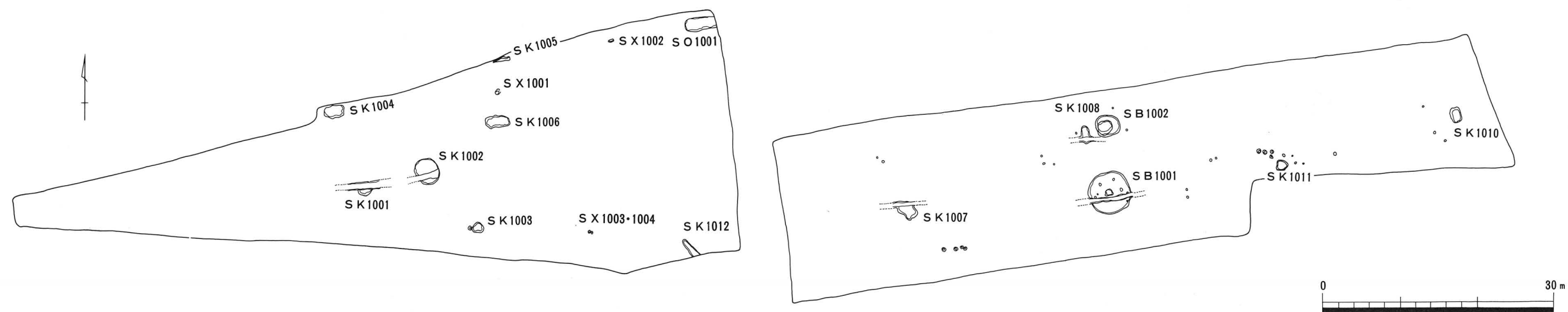
3 遺物番号、挿図番号、図版番号はすべて通し番号とした。

遺跡抄録

遺 跡 名	北原～大法寺遺跡
読 み	きたはら～だいほうじ
所 在 地	徳島県板野郡土成町大法寺214他 X = 123.960～124.005 Y = 77.345～77.550
種 別	集落
時 代	弥生・中世
主 な 遺 構	竪穴住居跡・土坑
主 な 遺 物	弥生土器・石器・須恵器・土師器・青磁



第2図 北原大法寺遺跡グリット配置図



第3図 北原～大法寺遺跡遺構配置図

1 調査の経過

1 調査の経過

北原大法寺遺跡が位置する土成の扇状地一帯では、1985年、縦貫道建設予定地の北に位置する北原地区の一部が県立土成工業団地として造成されたが、それに先立ち実施された発掘調査によって弥生時代の住居跡や土壌が検出され、北原遺跡と命名されて弥生時代の集落遺跡であることが周知されるに至った。今回の縦貫道建設に際しては、そのときの成果と分布調査の結果をふまえ、当初20000㎡を調査対象面積として設定し、試掘調査を行うこととした。5月15日から同21日にかけての期間に実施された試掘調査では、平地部分の路線予定地の多くがほぼその中に収まる形になる扇状地の中を東西に延びる帯状の地溝状陥没地形と、その南側の一段高い扇状地上に合計60ヶ所のトレンチを設け、建設予定地内の遺跡の正確な範囲を把握することに努めた。その結果、地溝状地形部分からの遺物の出土は殆ど無かったが、南側の扇状地部分に設けた16ヶ所のトレンチのうち4ヶ所で扇状地特有の多量の砂礫の堆積の中から弥生式土器が出土し、弥生時代の遺物包含層が存在する可能性が確認された。このため本調査では遺物の出土が殆どなかった地溝状陥没地形内の調査を取りやめ、弥生土器の出土した扇状地上の平坦地部分に4890㎡の調査区を設けて発掘調査を実施することとした。

2 発掘調査の方法

発掘調査を始めるにあたっての基準となるグリッドの配置は発掘調査統一基準に従い第IV系国土座標を基準とし、5m×5mのメッシュを1グリッドとして調査区全体を覆うように区画し、南西の隅から北に向かってはA B Cのアルファベットを、また東に向かっては1・2・3のアラビア数字を記号として記入し、その組み合わせでグリッド名を表記するようにした。なお、調査区が東西に細長いため、中央部を南北に走る町道を境として西側の調査区をA地区、東側をB地区と便宜的に呼ぶこととする。

3 調査日誌抄

- 5月22日 今日から調査区内の杭打ち作業。
- 5月23日 午前中、起工測量立ち会い。午後から人力と機械掘削を併用してA地区より表土除去作業。
- 5月24日 調査区内より弥生土器が出土し始める。
- 5月28日 人力掘削作業と並行して遺構検出作業を行う。
- 5月30日 今日までにS K 1001から1006までの土壌を検出、一部掘り下げ作業にかかる。
- 6月5日 S K 1001・1003上面の遺物の図化作業。
- 6月6日 S K 1002・1005の検出状況の写真撮影、S K 1001の図化作業終了。
- 6月7日 S K 1003の図化作業終了。S K 1005上面の遺物の図化開始。
- 6月12日 S K 1006の検出状況の写真撮影。
- 6月14日 B地区の掘削作業開始。
- 6月18日 今日までに新たにS K 1012とS X 1001から1004までの遺構を検出。
- 6月20日 S K 1002・1006の掘り下げ作業開始。
- 6月21日 S K 1001・1003・1004の遺構内の掘り下げ開始。S X 1001・1002の検出状況の写真撮影。S K 1002の精査終了。
- 6月25日 S K 1006出土の遺物の図化作業を開始。
- 7月4日 S K 1006出土遺物の取り上げ。
- 7月6日 S K 1006完掘。写真撮影。
- 7月10日 S K 1002の完掘状況写真の撮影。
S K 1012の掘り下げ開始。
- 7月11日 S K 1004の掘り下げ作業を終了。
S K 1005出土遺物の図化開始。
- 7月13日 S K 1012の精査終了。写真撮影
- 7月16日 S K 1002・1006の遺構平面図の図化を終了。
- 7月18日 S K 1003の掘り下げと図化作業を終了。
- 7月23日 B地区の遺構検出作業開始。
- 7月25日 S K 1005の遺物出土状況図の作製終了。
- 7月26日 B地区でS B 1001・1002を検出
- 8月1日 B地区の遺構検出作業終了。住居址、土壌の他に30余りのピットが検出される。S B 1001掘り下げ開始。
- 8月6日 S B 1002、S K 1008の検出状況の写真撮影。
- 8月7日 B地区S K 1007の遺構検出状況の写真撮影。S B 1001の掘り下げ終了。
- 8月8日 S B 1002、S K 1008の掘り下げ開始。
- 8月9日 S K 1008の掘り下げ終了。
- 8月16日 S K 1007と同じくB地区検出のピット群の掘り下げを開始。S K 1001を完掘。
- 8月17日 S K 1011の掘り下げ開始。
- 8月20日 S B 1001の床面精査。
- 8月23日 S B 1002内の遺物出土状況の写真撮影。
- 8月24日 S K 1010内掘り下げ開始。S K

1008を完掘。

8月27日 S K1007の掘り下げ終了。

8月29日 S B1002の床面出土遺物の図化作業。

9月3日 S B1002出土遺物の図化作業の継続。

9月5日 S B1001の図化作業開始。S K1011から土器片が多量に出土。

9月6日 S K1008の平面図化作業開始。

9月10日 S B1002の床面精査。S K1010からおびただしい土器片が出土しはじめる。

9月14日 S B1002の床面精査終了。図化作業開始。S B1001は作業を全て終了。

9月21日 S B1002の図化作業終了。S K1010・1011は図化作業を継続。

9月28日 4日連続の雨天のためS K1010・1011の図化作業を強行。

10月3日 S K1011の図化作業を終了。完掘状況の写真撮影も終える。

10月4日 雨天ではあるがS K1010の図化作業を強行。

10月5日 S K1010の図化作業を終了

10月12日 全ての作業を終了。センターに帰還。

2 遺跡の立地と歴史的環境

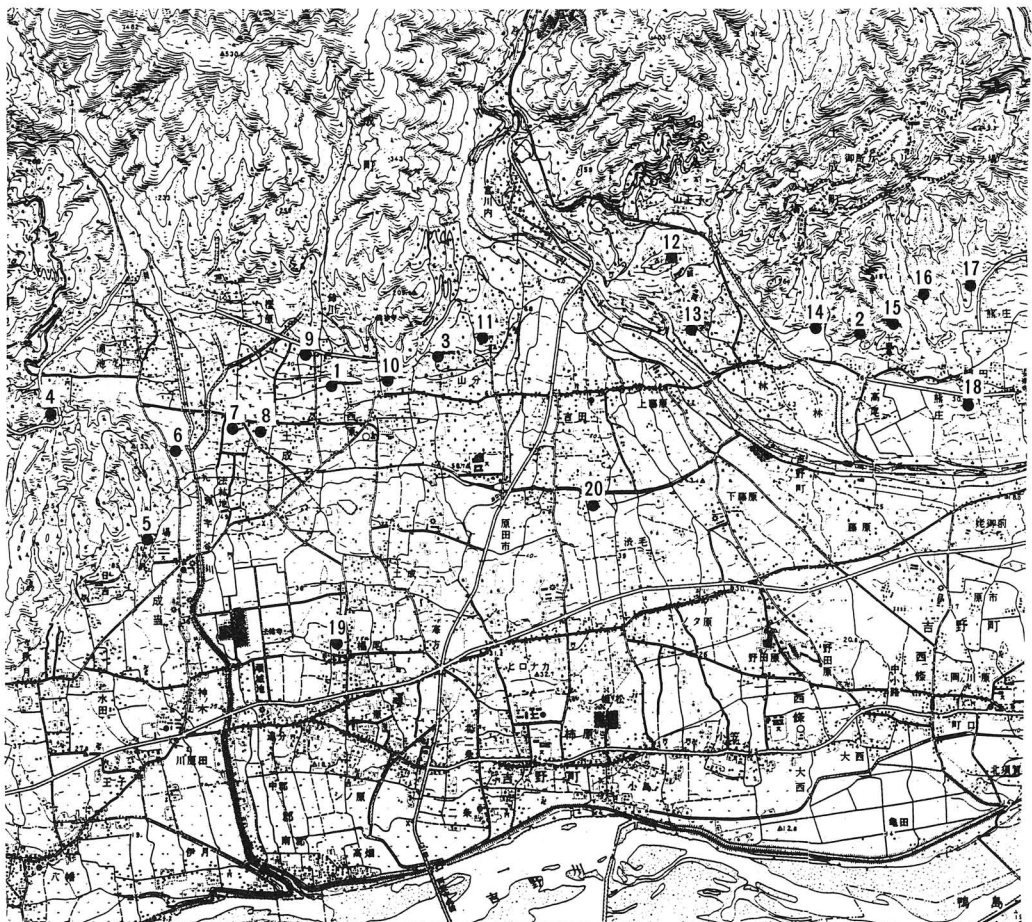
(1) 遺跡の地理的環境

本遺跡が位置する土成町は、その平地部の大部分を阿讃山脈に源を発する宮川内谷川・九頭宇谷川・鈴川谷川などの中小の河川によって形成された県下最大の複合扇状地によって占められている。この扇状地は単にその規模が大きいと言うばかりではなく、その中を東西に走る中央構造線の影響によって成立した地溝状陥没地形や断層崖などの特異な地形が存在している。特に本遺跡が位置している鈴川谷川の扇状地は、扇央部をこの地溝状陥没地形によって東西に分断され、地溝状陥没地形の東側は北池となっている。今回の調査は調査区の北側がこの地溝状陥没地形にそって設定されているため、北側は高いところでは5mの急な崖になってこの北池にむかって落ち込んでいる。

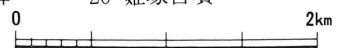
(2) 周辺の考古学的環境と遺跡の消長

今回の報告の対象となった遺跡の位置する土成・上板両町は、吉野川北岸中流域に属し、南の吉野川と北の阿讃山脈の間に中小の河川によって作り出された複合扇状地上に形成された町である。なかでも引野・切幡両丘陵の間を流れる宮川内谷川や九頭宇谷川流域の扇状地の扇頂部から扇央部にかけてや、背後の阿讃山脈の山麓に形成された段丘面や、丘陵から舌状に張りだした尾根の先端部には多数の遺跡が点在し、徳島県下でもこれまで比較的多くの発掘調査が実施されてきた地域である。時期的に最も古いものは旧石器時代まで遡り、今回報告する椎ヶ丸遺跡がその代表的な遺跡として知られている。椎ヶ丸遺跡からはこれまでにナイフ形石器を中心に1000点以上の資料が採集され、この地域のみならず県下最大級の旧石器時代の遺跡とされてきたが、その他にも最近の調査によって、西谷遺跡や葬ヶ丸遺跡・前田遺跡・金蔵～上井遺跡・金地遺跡などから断片的ではあるが資料が出土しており、山麓部を中心に広範な分布を示している。続く縄文時代は遺物の依存状態が悪かったり石器などが単独で出土した場合でも旧石器ほど時期を断定することが困難な場合が多いためか遺跡数も少なく、西谷遺跡の他に前田遺跡・大木～峰延遺跡・金蔵～上井遺跡が知られているだけである。なかでも西谷遺跡は多数の後期中葉の遺物を中心に中期から晩期までの遺物を出土している比較的大規模の大きい遺跡で、貯蔵穴1基を含む3基の土壇は、数少ない縄文時代の遺構として前田遺跡出土の後～晩期の土壇とともに貴重なものである。また、この他に特筆されるものとしては、前田遺跡から出土したチャート製の有舌尖頭器と、金蔵～上井遺跡から

出土した石棒があげられる。いずれも県下での出土例が極めて少ないものであるが、前田遺跡の有舌尖頭器は数少ない草創期の遺物としてだけでなくチャート素材にしたものとしては県下唯一の例であり、旧石器・縄文・弥生の各時代を通じてサヌカイトの使用が一般的ななかであって、同じ前田遺跡から出土したチャート製の極小の石鏃群とともに縄文時代草創期の使用石材を考える上で注目される。この4遺跡は何れも扇状地上に位置し、旧石器時代から縄文時代にかけて断続的ではあるがこの地域を生活の舞台にしていたことが伺える。しかし、次の弥生時代にはいるとこのような様相は大きく変化してくる。今回報告する北原大



- | | | | |
|------------|-----------|-----------|------------|
| 1 北原～大法寺遺跡 | 6 金蔵～上井遺跡 | 11 御所神社古墳 | 16 安楽寺谷墳墓群 |
| 2 十楽寺遺跡 | 7 峰延遺跡 | 12 向山古墳群 | 17 天神山遺跡 |
| 3 椎ヶ丸～芝生遺跡 | 8 大木遺跡 | 13 葬ヶ丸遺跡 | 18 丸山古墳 |
| 4 金地遺跡 | 9 北原遺跡 | 14 西谷遺跡 | 19 穴薬師古墳 |
| 5 赤田山古墳 | 10 前田遺跡 | 15 十楽寺古墳群 | 20 姫塚古墳 |



第4図 周辺主要遺跡分布図

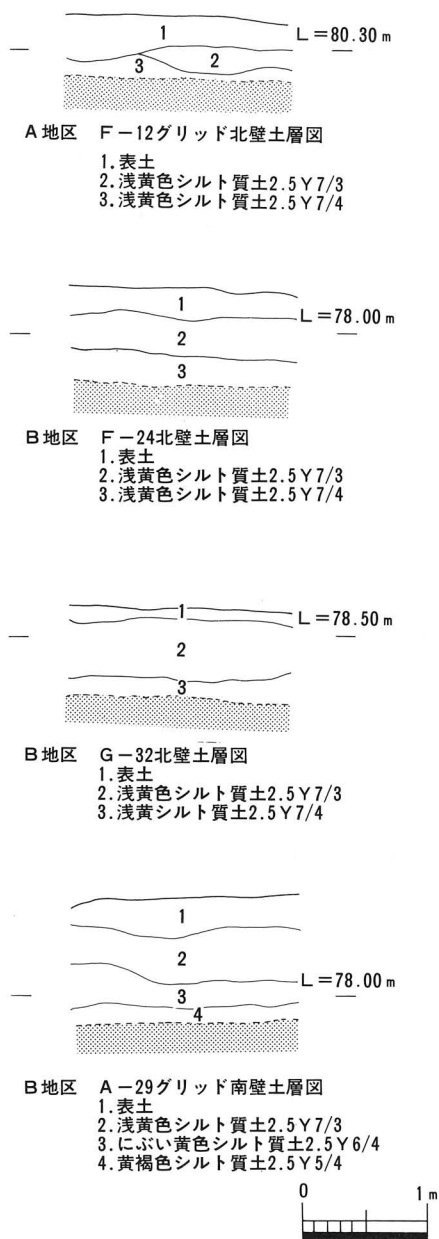
法寺遺跡・椎ヶ丸遺跡以外に天神山遺跡・安楽寺遺跡・西谷遺跡・前田遺跡・大木～峰延遺跡・金蔵～上井遺跡など弥生時代の遺跡は多く、その立地も扇状地以外の河岸段丘や丘陵部にも及び、墳墓として形成された安楽寺遺跡以外は住居址などが検出された集落址であるが、立地条件にかかわらずその時期は安楽寺遺跡・西谷遺跡以外ほぼすべて中期後半から後期初頭の時期に集中するという特徴をもっている。これは、この宮川内谷川流域の弥生時代の集落の特徴というだけではなく、これ以後の古墳時代から奈良時代まで続く傾向で、本格的な集落の復活は平安時代から鎌倉時代まで降らなければ見いだせない。ただ、この間、この地域が全く利用されなかったわけではなく、古墳時代には全期間を通じて古墳の造営がおこなわれたり、奈良時代から平安時代にかけては今回の十楽寺遺跡のような須恵器窯が散発的に築かれている。特に古墳は県下最大の円墳である土成町の丸山古墳をはじめ、安楽寺古墳・十楽寺古墳・皇子山古墳・御所神社古墳・向山古墳群・岩屋古墳・赤田山古墳・姫塚古墳・穴薬師古墳などが知られ、その立地も丘陵の尾根だけでなく扇状地の扇央部近くに位置するものも存在する。平安時代以降、この地域では前田遺跡・峰延遺跡・西谷遺跡などに掘立柱建物群からなる集落が再び出現し、鎌倉以降も継続して集落として機能しつづけている。これは、平安時代、山田古嗣によって築かれたと伝えられる浦池の存在や、金蔵～上井遺跡で確認された鎌倉時代に遡ると考えられる水田面などから、平安時代から鎌倉時代にかけて、水利技術のうえで水に乏しい扇状地の条件を克服するなんらかの方法によって新たに開発が進んだこともこの地域に再び集落が形成される要因の一つになったと考えられる。

上述した遺跡は主として阿讃山麓から扇状地扇頂部にかけてのものが大部分を占めているが、それから更に吉野川寄りの扇央部や扇端部・沖積地地域では遺跡の存在は確認されていない。しかし、上板町東部を流れる泉谷川下流域の扇端部から沖積地にかけての地域や、これに隣接する板野町の黒谷川下流域の沖積地には神宅遺跡や黒谷川郡頭遺跡・宮ノ前遺跡・古城遺跡などの弥生時代以降の遺跡が点在していることを考えると、この地域でも同様の遺跡が発見される確率は極めて高いと考えられ、弥生時代以降の山麓部の遺跡の著しい遍在現象はこれら扇端部から沖積地にかけての調査が進展することによって明らかにされる可能性がある。

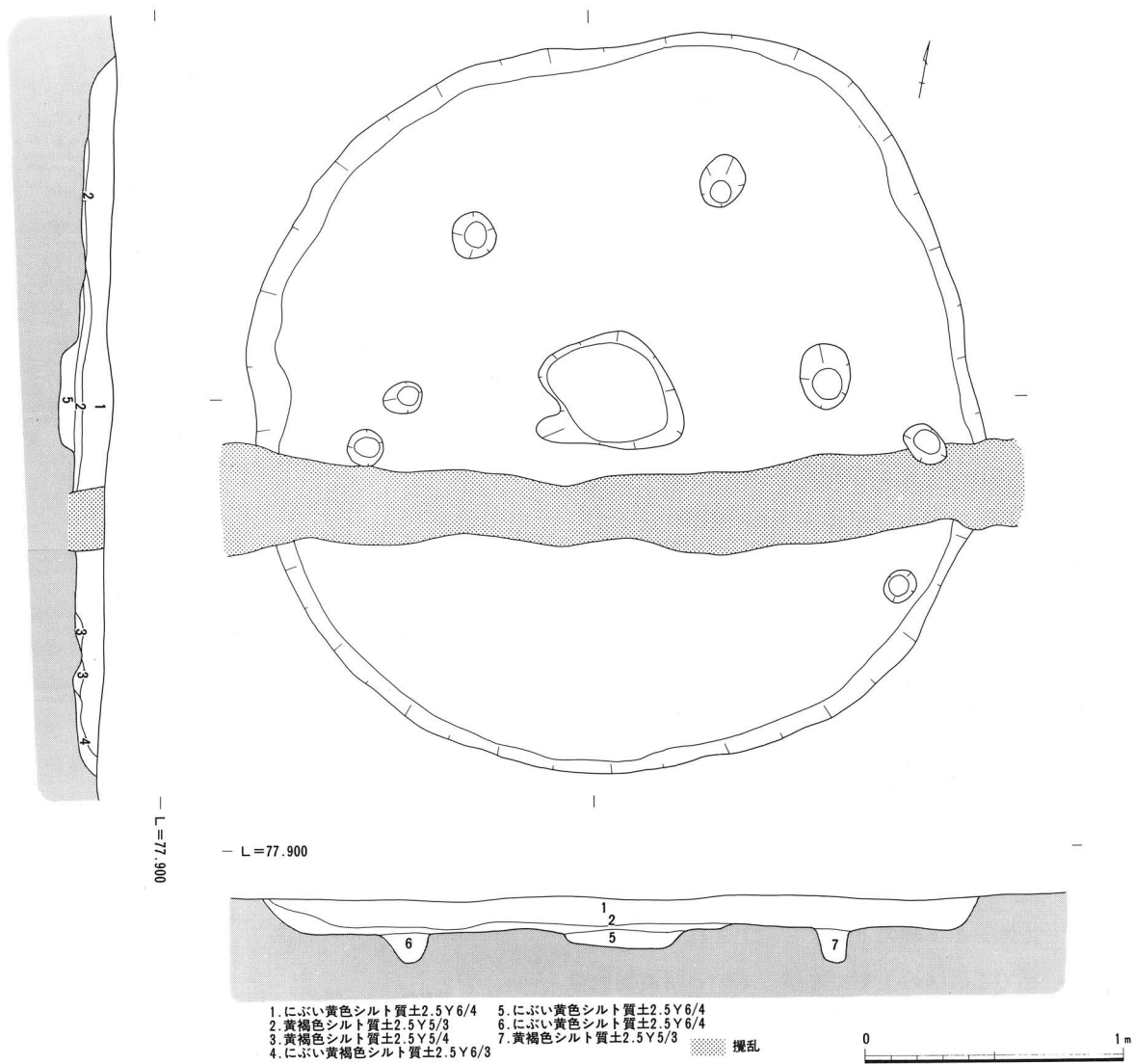
3 調査成果

(1) 遺跡の基本層序 (第4図)

今回の調査の対象となった地点は、北原遺跡の中を東西に走る中央構造線によって引き起こされた地溝帯にそって設けられている。北から南に向かって緩やかに傾斜する扇状地の扇央部を横切る地溝帯の南岸に細長く設けられた調査区は、扇状地の傾斜に沿って地溝帯に面する北西側が最も高く、南東に向かうにつれて序々に下がり、その比高差は2m以上になる。扇状地の堆積のため、基本となる層序は大小の砂岩の円礫と粒子の細かい浅黄色シルトから構成されているが、標高の高い北西側とそれより低い南東側では層序は若干異なっている。北西部では、場所によっては耕作に伴う茶褐色の腐植土の堆積が若干認められるものの、その大部分が地表部の耕作土にまで砂岩の円礫混じりの浅黄色シルト層が露出しているのに対して、南東部に向かうにしたがって表土の耕作土と浅黄色シルト層の間に、同じシルトではあるが明黄褐色土やにぶい黄色土などの色調の異なる層が間層として認められる。弥生時代の遺構は主として浅黄色シルト層の上面から検出されるが、南東部でこの層の上部に堆積している明黄褐色土やにぶい黄色土層からは青磁碗や土師皿・土釜・土鍋などの室町時代頃の遺物が出土しており中世の遺物包含層と考えられるが、遺構などは検出されなかった。



第5図 北原～大法寺遺跡基本土層図

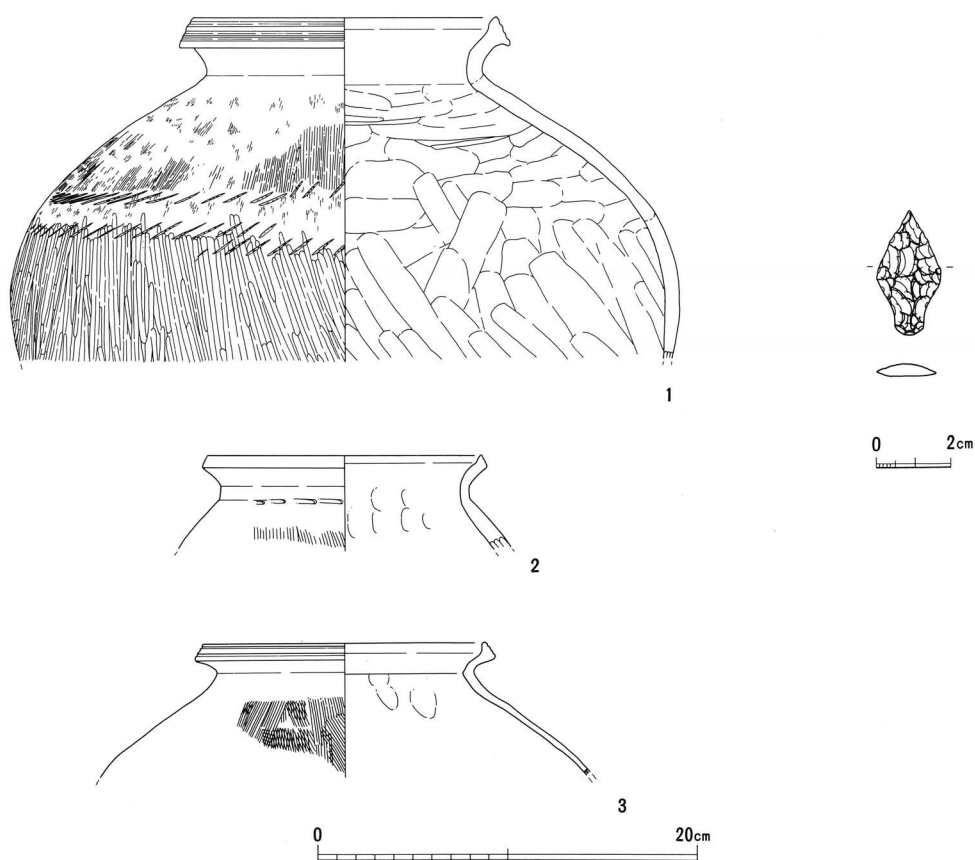


第 6 図 S B 1001実測図

(2) 検出された遺構と遺物

竪穴住居跡（S B 1001）（第 6 図）

B 調査区の東側で検出された直径約5.7m・深さ20cmのほぼ円形の平面プランを持つ竪穴住居である。遺構内の埋土にはぶい黄色シルト土が全体に厚く堆積している以外は、床面上に黄褐色シルトと南側の壁際に礫を多量に含んだにぶい黄色土が認められるだけの比較的単純なものである。壁の立ち上がりは明瞭で、床面には周溝や貼り床の痕跡などは認められなかった。床面のほぼ中央に長さ1.2m・深さ30cmの不整型の炉跡が設けられている。この炉跡と周辺の床面の一部には炭化物を多量に含む灰が堆積し、灰層中とその灰の周囲の床からはサヌカイトの剥片が少なからず検出されたが、この地域の弥生時代の竪穴住居の床面から度々検出されている台石の機能を持っていたと考えられる砂岩の大形の円礫は発見されなかった。住居跡内からはピットが7基検出されているが、柱穴と考えられるものはこの



第 7 図 S B 1001出土遺物実測図

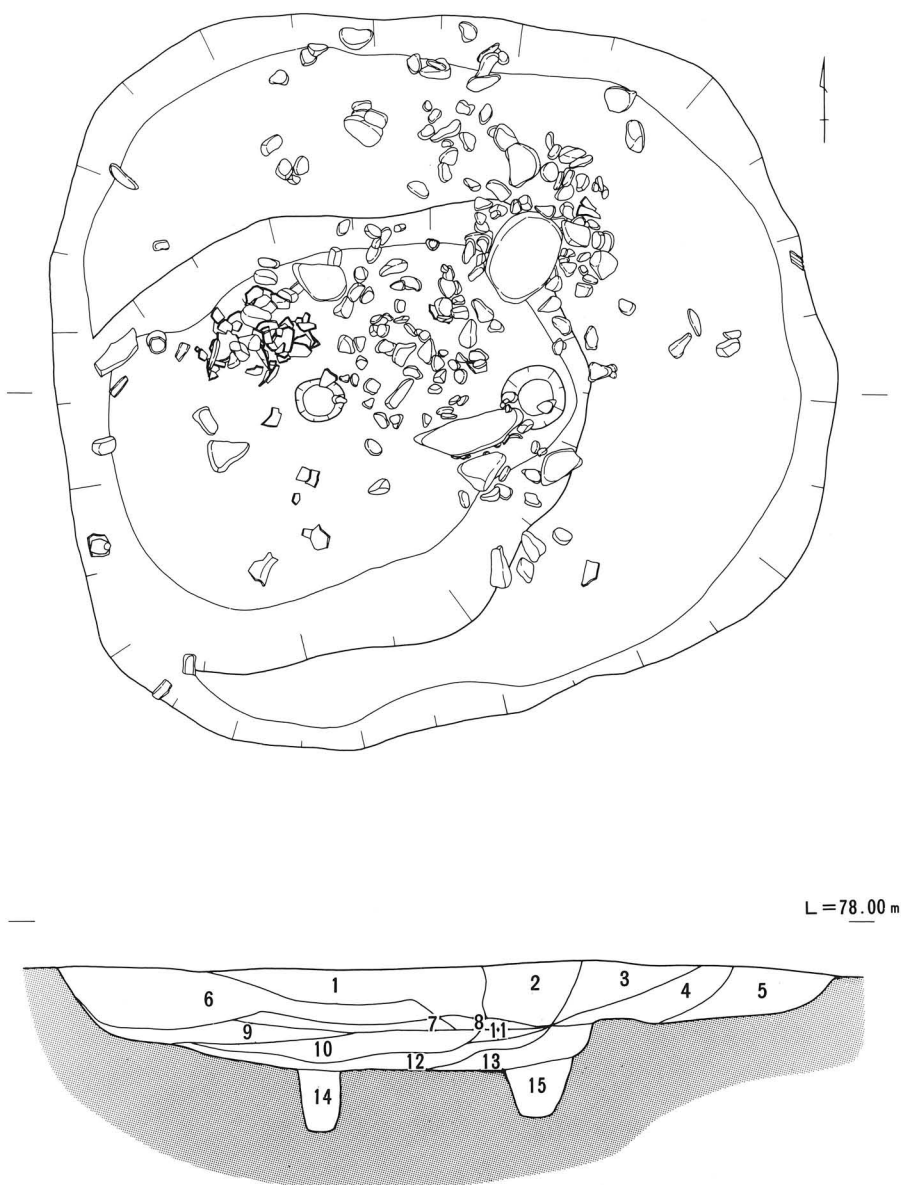
うちの4基と思われ、住居跡南側を東西にはしる攪乱から南では検出できなかった。出土した遺物は少なく、壁際で出土した比較的大きな土器片と炉跡周辺のサヌカイト製の石器以外、埋土中から土器の小片が若干検出されたにとどまっている。

出土遺物（第7図）

1・2・3はそれぞれ壺E・壺A4a・甕B2に分類される土器である。1はくの字形に外反する短い口縁部と球形の胴部をもった個体で、口縁端部は上下に拡張され凹線が施されている。器面調整は胴部の最大径をもつ部分をはさんで外面では上半はハケ目、下半にはヘラ磨きが施され、その境界付近にはヘラによる圧痕文が加えられている。また、同じように内面でも上半部はハケ目が、下半部にはヘラ削りが施されている。2はくの字形に外反する短い口頸部をもつ壺で、胴部はハケ目調整が施され、頸部との境には棒状工具による刺突が加えられている。3は端部を上方に拡張し凹線を施した口縁を持つ比較的小型の甕で、外面にはハケ目、内面には指頭によるナデ調整が施される。4は炉址から出土したサヌカイト製の有茎石鏃で表裏とも比較的丁寧な調整加工が行われている。

竪穴住居跡（S B 1002）（第8図）

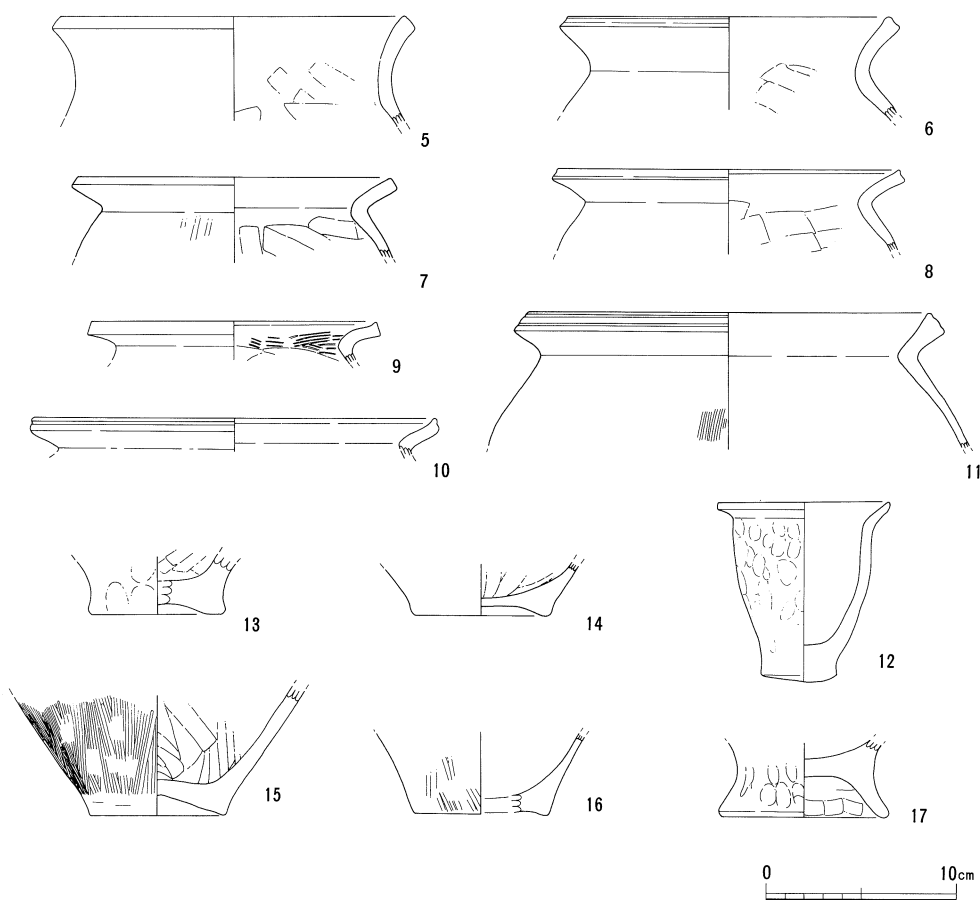
D・E-7グリッドでS B 1001・S K 1008に隣接して検出された長軸方向の長さ約3m・幅約2.8m・深さ30cm弱の円形に近いプランを持つ竪穴住居である。遺構の主軸線上に柱穴と考えられるピットが2個検出されたほか、床面の一部が長さ約1.9m・幅1.7mの大きさでさらに一段掘り込まれている。この掘り込みの埋土とその周辺からはかなり炭化物が検出されたが、床面の焼けた痕跡や焼土の広がりなどは検出されず、炉址の存在は確認できなかった。遺物は床面からかなりの点数が出土したが、土器については細片のものが多く、図示できたものはごく僅かである。この一方で、石器は打製石鏃3・打製石包丁4・柱状片刃石斧2・砥石4と他の遺構と比較して出土点数がかなり多く、この遺構を特徴づけている。このうち、柱状片刃石斧は遺構の埋積土上部に多量に混入していた礫のなかから、台石として使用されたと考えられる砂岩製の大型の円礫2点とともに出土したものであるが、他の石器については殆どのが床面上よりの出土であった。また、この他には床面に設けられた浅い掘り込みの中やその周辺からS B 1001より量は少ないものの、サヌカイトの剥片が出土している。この遺構は通常の竪穴住居よりはかなり小型であることや、床面の中央付近に設置されていることが多い炉址がみられないこと、主軸線上に柱穴と考えられるピットが2個並んでいる以外、柱穴となるようなものが無いことなど現在までこの周辺地域で調査された同時期の住居とはその規模や構造を異にしており、通常の住居址とはその性格を異にする作業場その他の機能をもった小竪穴状遺構とでも呼ぶほうがふさわしいかもしれない。



- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1. にぶい黄褐色シルト質土10Y R5/3 | 9. にぶい黄褐色シルト質土10Y R5/4 |
| 2. 暗灰黄色シルト質土10Y R5/2 | 10. 黄褐色シルト質土2.5Y 5/3 |
| 3. にぶい黄橙色シルト質土10Y R6/4 | 11. にぶい黄褐色シルト質土10Y R5/4 |
| 4. にぶい黄褐色シルト質土10Y R5/4 | 12. 黄褐色シルト質土2.5Y 5/3 |
| 5. 黄褐色シルト質土2.5Y 5/4 | 13. 黄褐色シルト質土2.5Y 5/3 |
| 6. にぶい黄色シルト質土2.5Y 6/4 | 14. にぶい黄色シルト質土2.5Y 6/4 |
| 7. 黄褐色シルト質土2.5Y 5/3 | 15. にぶい黄色シルト質土2.5Y 6/4 |
| 8. にぶい黄色シルト質土2.5Y 6/4 | |



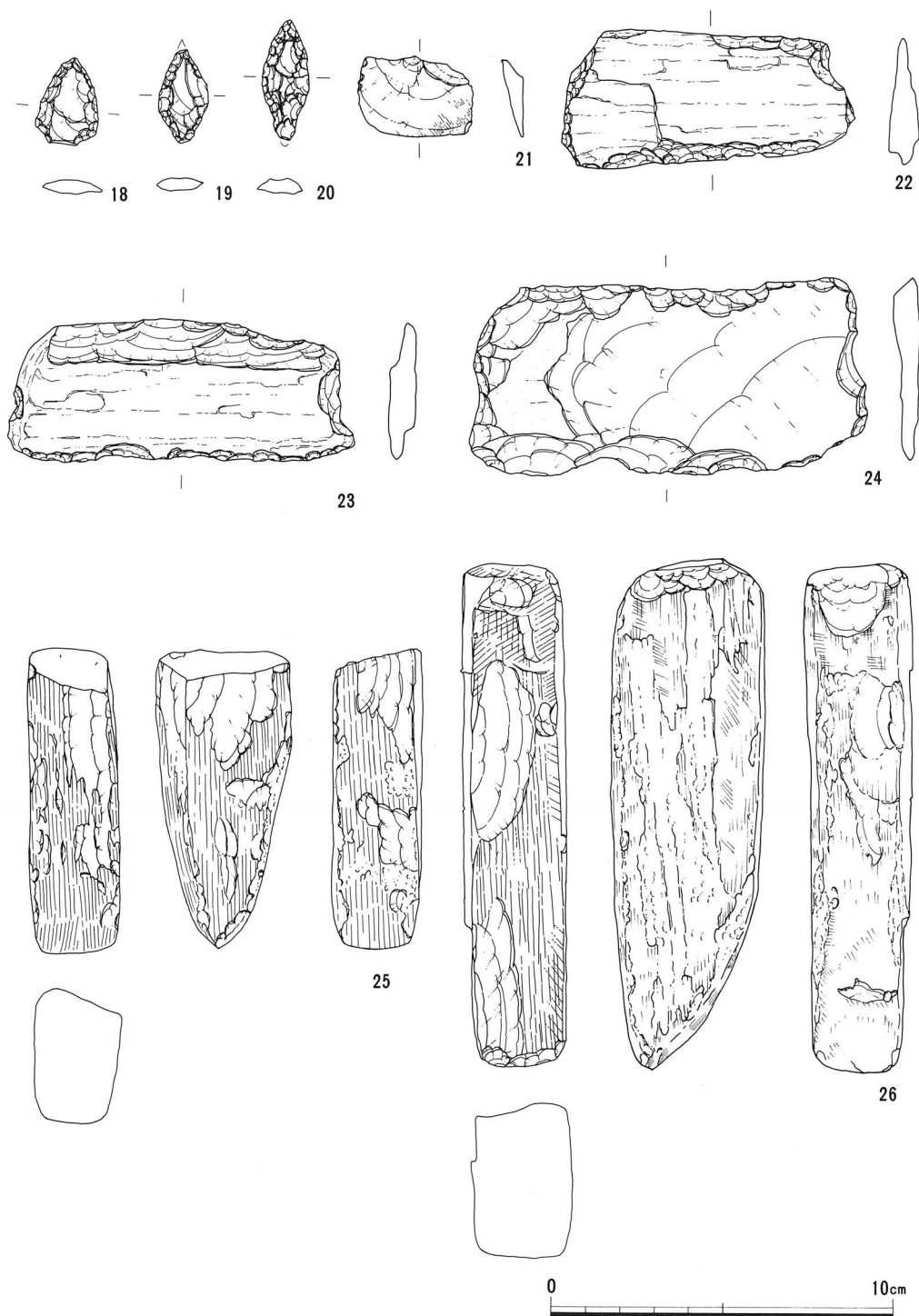
第8図 S B1002実測図



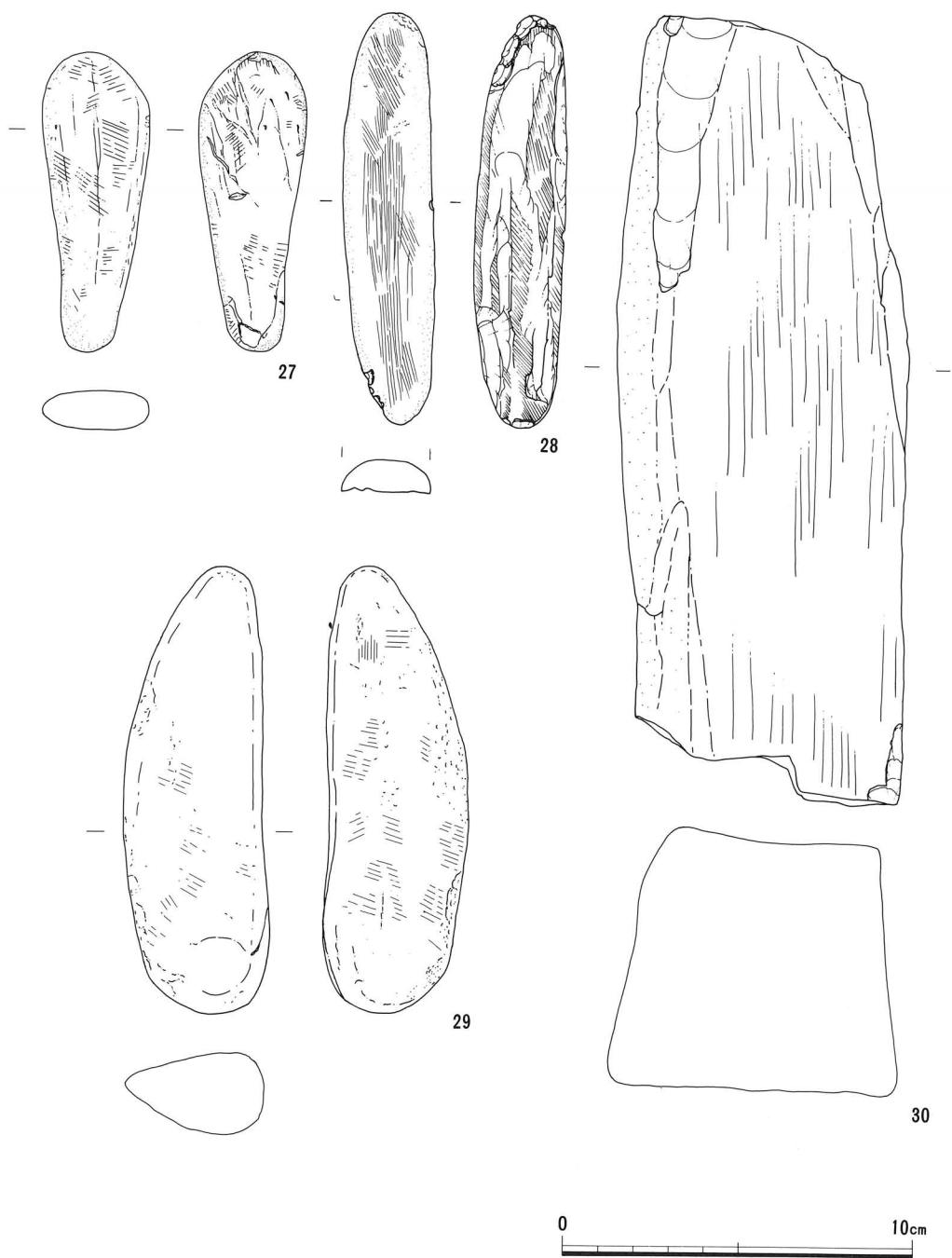
第9図 S B 1002出土土器実測図

出土遺物（第9～11図）

5・6はA 4 a類の壺の口縁部の破片で、6の緩やかに外上方にのびる短い口縁端部には凹線が認められる。何れも内面のヘラ削りは頸部まで及んでいる。7・8はA類、9～11はB類の甕である。8は口縁端部を肥厚させ凹線を巡らせている。9～11の口縁端部の上方への拡張の度合いは小さい。調整の明かなものでは、胴部内面のヘラ削りは頸部まで施されている。12はミニチュアの甕形土器で、遺構の西側の壁際で逆さまの状態で検出されている。口縁はラップ形に開き、胴部全面に指押さえの痕が残されている。18～20はサヌカイト製の有茎石鏃であるが、19・20の2点は逆刺と茎の境が不明瞭である。22～24は結晶片岩製の打製石包丁で、22・23は両端に挾が入れられているのに対して24では片側にしか認められない。25・26は遺構埋積土上部から台石に用いられたと考えられる砂岩の円礫とともに出土した柱状片刃石斧で、26はほぼ原型を保っているのに対して、25は身部の中ほどから破損して



第10図 S B 1002出土石器実測図



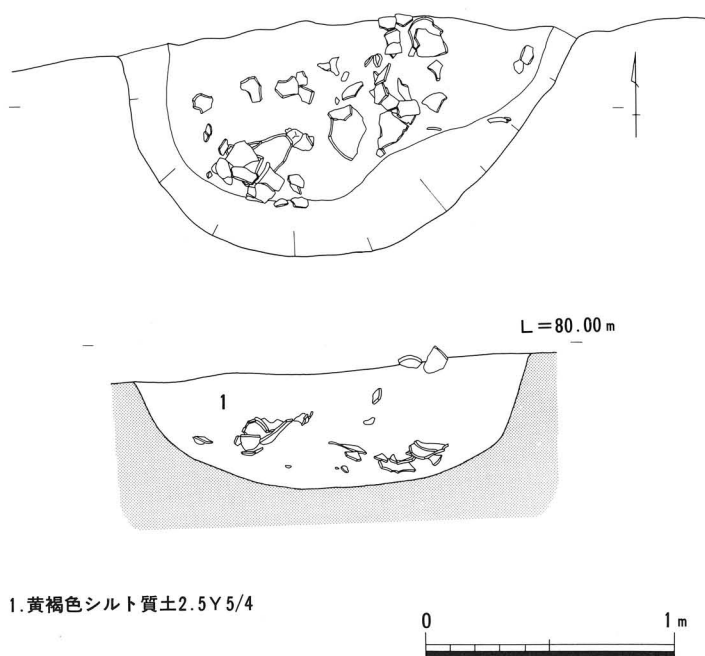
第11図 S B 1002出土石器実測図

いる。両者とも加工の程度は粗く、整形の際の打撃による剝離痕や敲打痕を多く残している。27～29は自然の礫を用いた砥石である。27と29は砂岩あるいは片岩質の礫を未加工のまま使用しているが、28の例ではS K 1006出土の砥石と同じく、粘板岩質の細長い礫を縦に割り、その割った面と裏側の自然面を研磨に使用している。30は砂岩製の大型の砥石である。断面が方形で、一つの面は自然面をそのまま残しているが他の三面は作業面として使用されたため凹面となっている。27～29のような小型の砥石はこれまでも度々この周辺の弥生時代の遺跡から出土しているが、このような大型の砥石の出土例ははじめてで、この遺構の性格を考えるうえで重要な遺物と思われる。

土坑（S K 1001）（第12図）

A地区の西側で検出された土坑である。北側半分を果樹園造成に際しての壕掘によって破壊されているため正確な大きさを明らかにすることはできないが、恐らく直径2 m・深さ50 cm前後の楕円形にちかい平面プランを呈するものと考えられる。検出当初、遺構上面が砂岩の礫に広く覆われ人為的な集石の可能性も考えられたが、調査が進むにつれ、同様な状況の自然の礫溜まりが数カ所で認められたことや、礫中に土器片などの遺物を殆ど含まない事などから自然に堆積したものであると考えられた。遺構内の埋土はシルト質の黄褐色土だけの

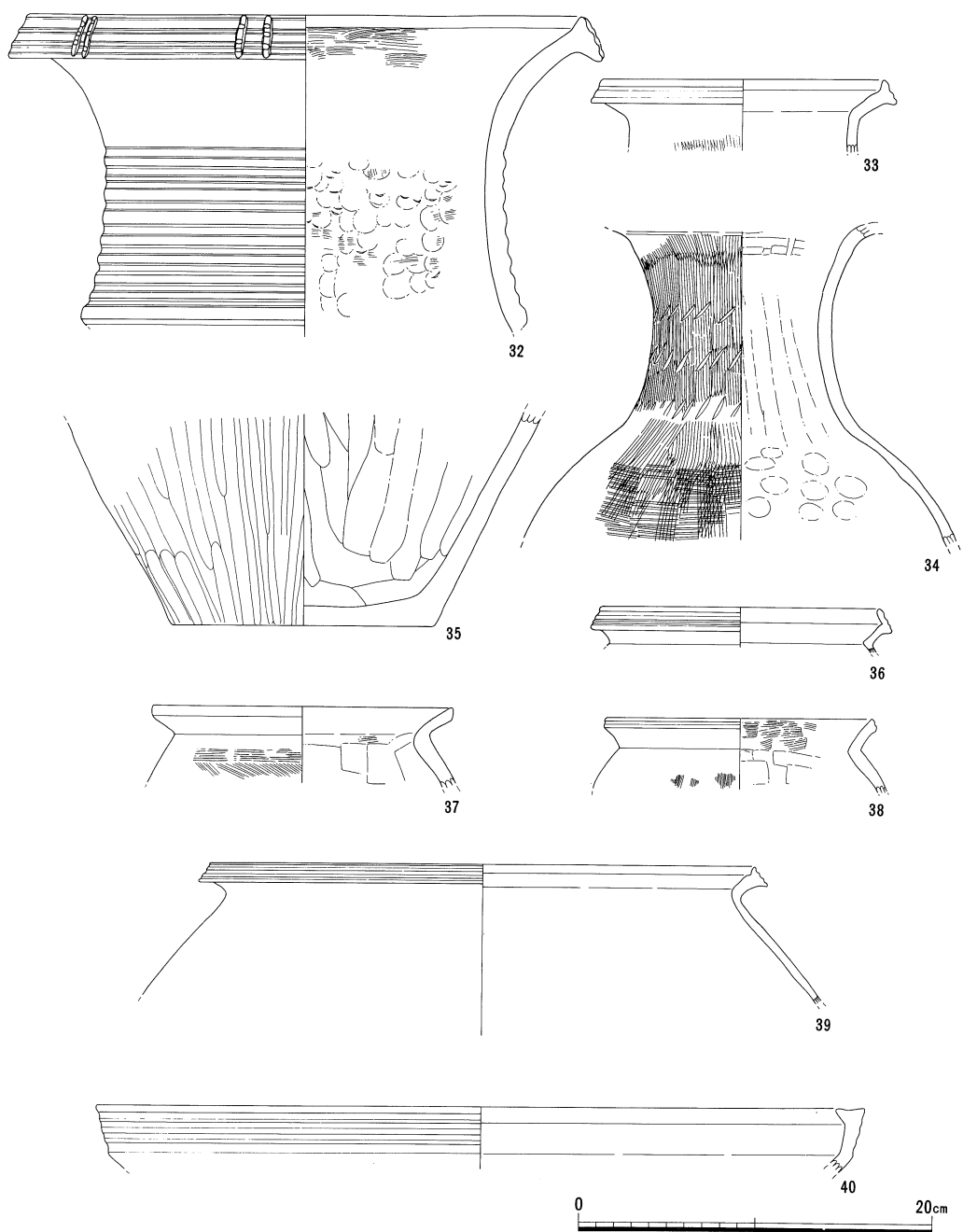
堆積の中に遺物とともにやや大型の礫を混入している程度の単純な状態であった。遺物は遺構の比較的下部から多く出土している。



第12図 S K 1001実測図

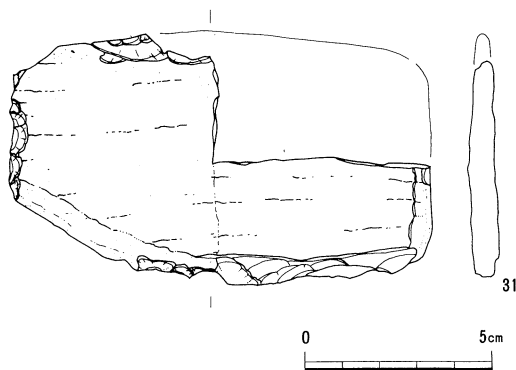
出土遺物（第13～14図）

壺A 1・A 2 a・甕A・B・C 2・鉢がそれぞれ出土している。32は口径20 cm以上をはかるA 1類に分類される大型の壺で、上下に拡張さ



第13図 S K1001出土土器実測図

れた口縁端部には凹線文と棒状浮文が、また緩やかに外反する頸部には幅広の凹線文が多段に施されている。器面調整は外面が横ナデだけであるが、内面はハケ目と指頭圧痕が併用されている。35はこの土器の底部で外面は幅広のヘラ磨き、内面はヘラ削りがそれぞれ施され



第14図 SK 1001出土石器実測図

甕の胴部の調整は外面は不明であるが内面は指頭圧痕とハケ目調整が認められる。40は大型鉢で、やや開きぎみにのびた口縁の上端はほぼ水平に内側に拡張され、口縁下には凹線が施されている。この他の遺物として結晶片岩製の打製石包丁(31)が1点出土している。

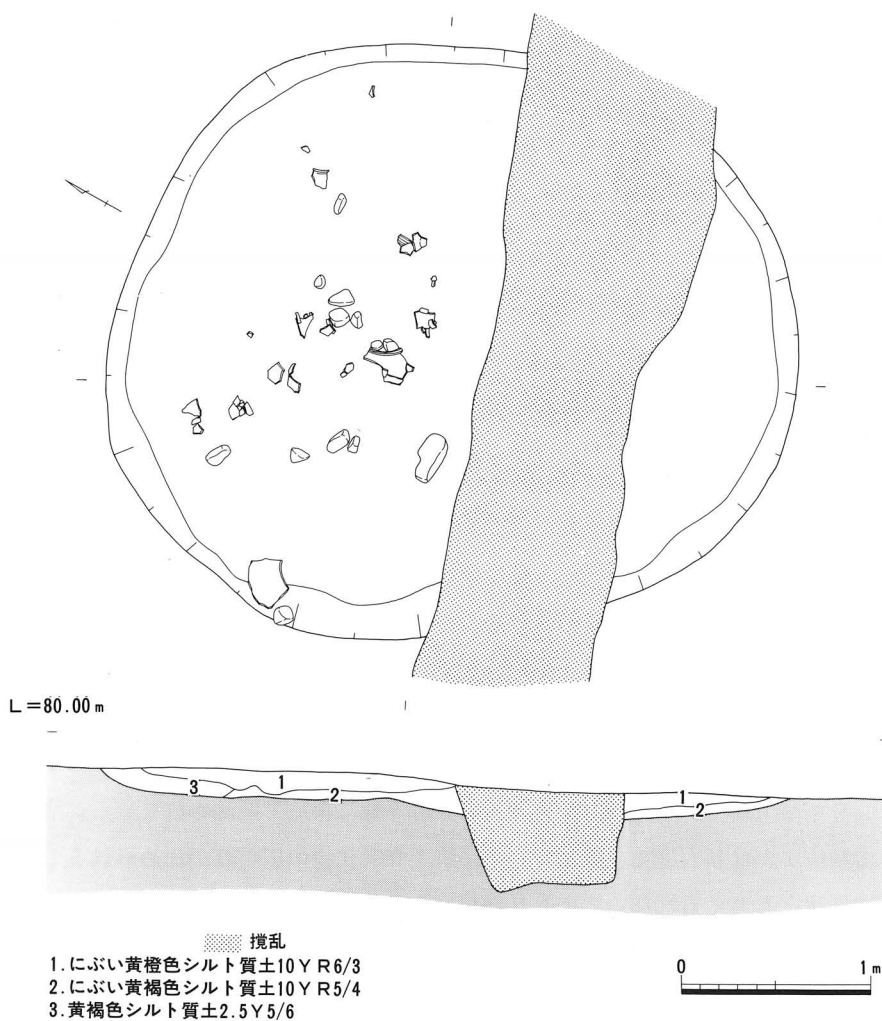
ている。33・34はいずれもA 2 aに分類される口径20cm以下の中型壺で、33は頸部から斜め外上方に伸びた口縁端部が上下に拡張され、凹線が施されている。器面調整は34の場合、外面には頸部から胸部にかけて全面にハケ目調整が施されているが胴部の一部には平行叩きも認められる。内面は口縁は横ナデ、頸部は指頭によるナデ、胴部上半は同じく指頭による圧痕がそれぞれが施されている。甕はA・B・Cそれぞれのタイプが出土している。C類の

土壌 (SK 1002) (第15図)

SK 1001の東で検出された長軸の長さ約3.6m・短軸の長さ3.1m・深さ15cmの楕円形の平面プランをもつ遺構で、南側の一部を耕作の際の濠堀によって攪乱されている。他の土壌と比較して規模がかなり大型で、底面の一部に焼土や炭化物の広がりが認められることから小型の竪穴住居とも考えられないこともないが、この地域の弥生時代の竪穴住居に一般的な床面中央部の炉跡が認められないことや、周溝や柱穴が全く検出されていないことなどから、ここでは一応土壌としておく。また、同程度の規模で同じく底部に集石を伴う焼土層の広がりが検出された土壌が前回の調査でも出土している。遺構内の埋土は上から第1層にぶい黄橙色土、第2層にぶい黄褐色土、第3層黄褐色土の3層に分けられ、いずれもシルト質で大小の礫を多く含んでいるが、第2層では木炭や焼土なども混入している。遺構内の遺物の出土点数は少なく、床面の炭化物の広がりの中から土器の小片がややまとまって検出された以外に、めばしいものとしては側壁近くから大形の甕の破片が出土しているだけである。

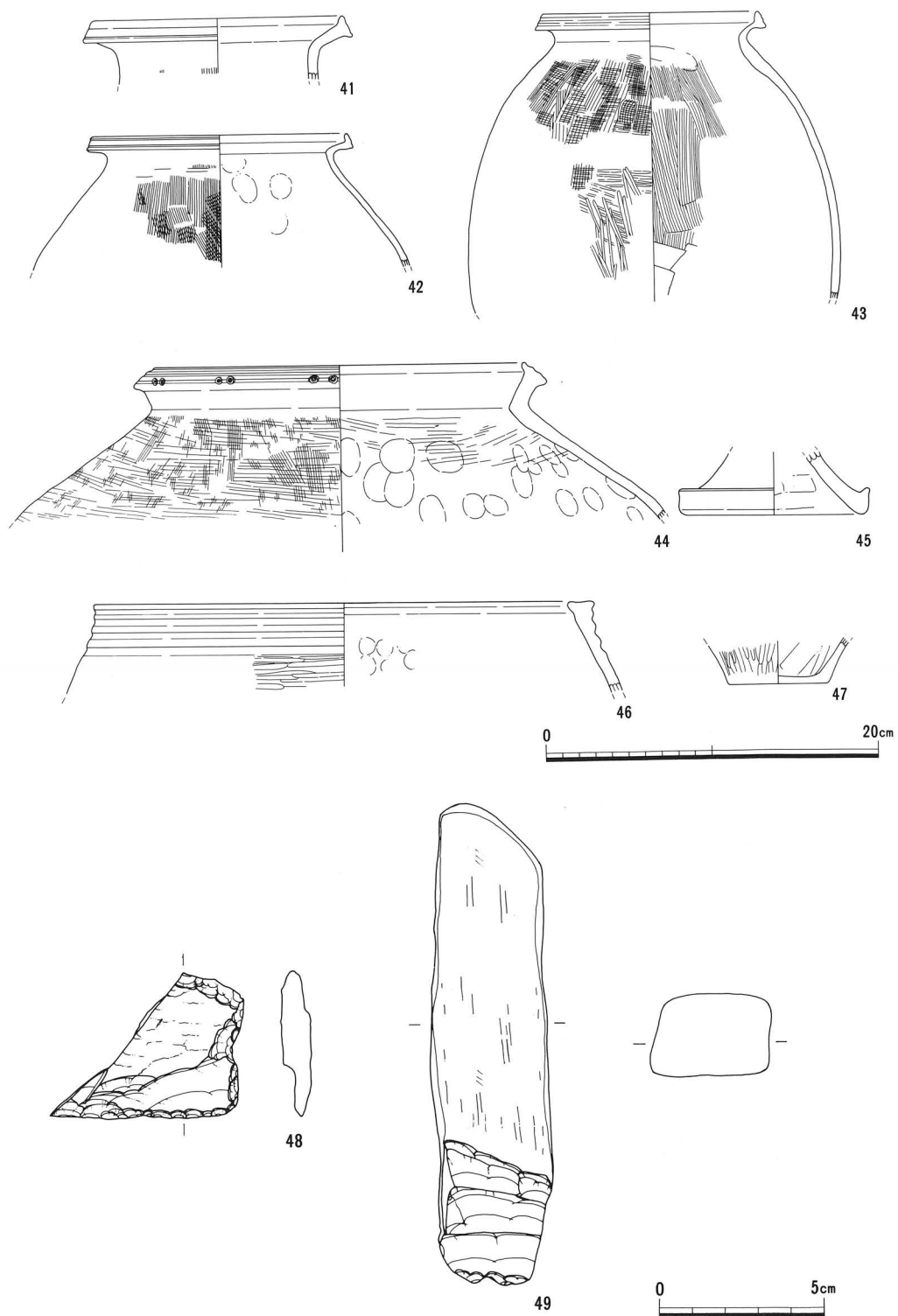
出土遺物 (第16図)

壺A・甕B・Cの他、高杯の脚と無頸壺が出土している。41は壺A 2 a類の口縁部の破片で、内外面とも強い横ナデが加えられている。42・43は口縁端部が上方に拡張される口径14～16cmの比較的小型の甕であるが、胴部の調整は42が外面がハケ目、内面が指頭圧痕である

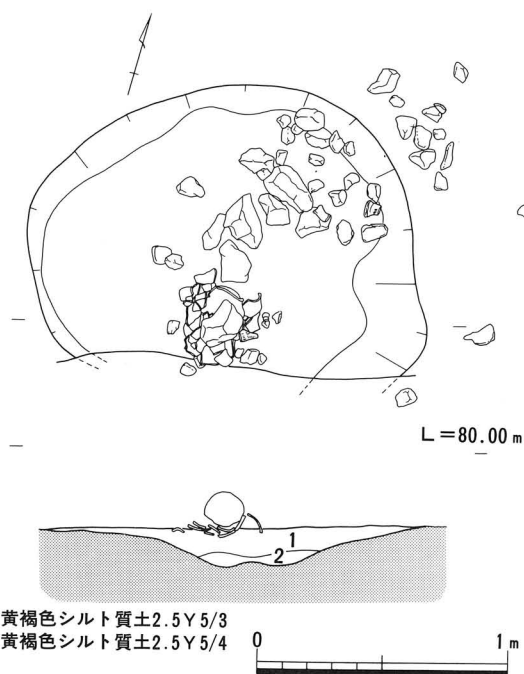


第15図 SK1002実測図

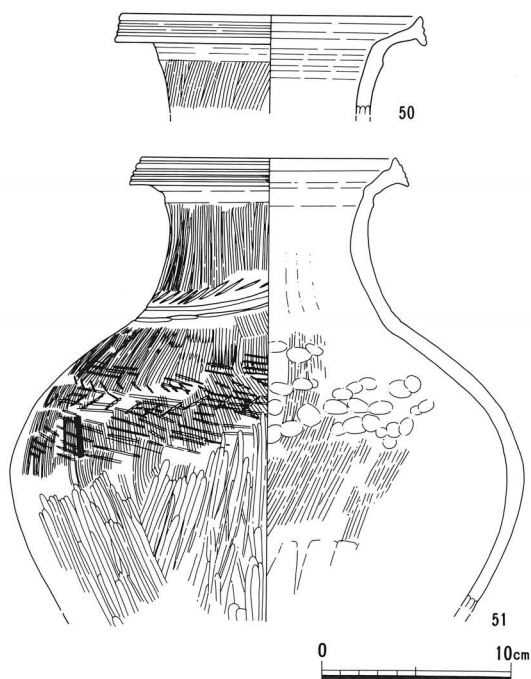
のに対して、43は外面の上半が叩きとハケ目、下半がへら磨き、内面の上半が指頭圧痕とハケ、下半がへら削りと異なっている。今回の調査の出土資料中、B2類の甕で叩きを採用しているのはこの43だけである。44はC2類に分類される口径25cmの大型の甕で、上下に拡張された口縁端部には凹線文とともに竹管文が施される。胴部外面の調整はハケ目と平行叩きが併用され、内面には指頭圧痕とハケ目が施される。23は無頸壺で内傾する口縁の端部は拡張され、口縁下には凹線がつけられる。調整は外面がへら磨き、内面が指オサエが施される。石器は結晶片岩製の打製石包丁（48）と、一端を打ち欠いた細長い礫を用いた砥石（49）が出土している。



第16図 SK 1002出土遺物実測図



第17図 SK1003実測図



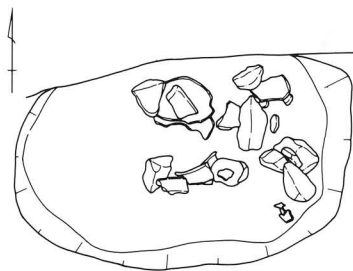
第18図 SK1003出土土器実測図

土壌 (SK1003) (第17図)

SK1002の南側で検出された直径約1.5m・深さ15cmの不整楕円形の皿状の浅い土壌で、南側の一部が攪乱をうけている。遺構検出の時点で遺物がかなり浮いた状態で出土していることから、本来の遺構の掘り込み面はもっと上部に位置し、深さも遺物の出土状況から少なくとも30cmくらいあったものと考えられる。遺構の中からは、砂岩の円礫に混じってほぼ完形に近い壺形土器が横倒しに近い状態で一個体出土している他、炭化したエゴノ実が若干検出されている。

出土遺物 (第18図)

何れもA2aに分類される壺が2個体出土している。50は口縁部のみの破片で、上下に拡張された口縁端部には3本の凹線が施され、口縁部の内外面とも端部近くは強い横ナデ調整が加えられ頸部上端に僅かな突出を生じている。51は50と同じ口縁部の特徴をもつ土器であるが、口縁部の横ナデはさらに強く加えられ、外面の突出が著しい。沈線とヘラ圧痕文によって頸部と区切られた肩の強く張った胴部の上半は平行叩きの後にハケ目調整が加えられ、さらにその上にヘラ圧痕文が巡らされ、下半部はヘラ磨きによって整えられている。



第19図 S K 1004実測図

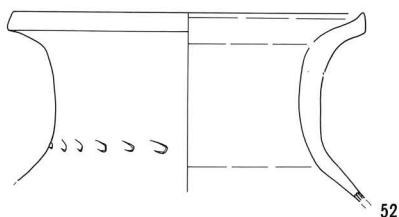
口縁端部には、凹線などの痕跡は認められない。53・54は直口壺の一種で、肩のよく張った球形の胴部から短い口縁部が上に向かってほぼまっすぐに伸びている。いずれも外面はハケ目調整によって整えられ、内面は頸部との境までへう削りが行われている。55は大型の台付き鉢の脚台と考えられるもので、脚台下端面は上方に拡張され凹線文が付けられている。脚

土壌 (S K 1004) (第19図)

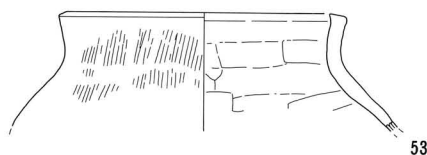
A地区のE-9・10グリッドで検出された長軸1.3m・幅約0.8mの楕円形の土壌で、一部は調査区外に延びている。遺構の埋土は1001同様粘性に乏しいシルト質の土からなる単純な一層で、遺物の他に拳大の大型の礫と少量の炭化物を混入している。

出土遺物 (第20～21図)

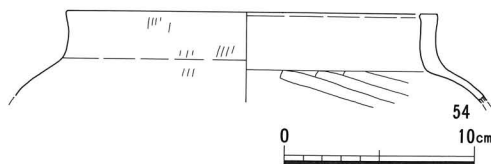
52はA 4 a類の壺で、二次加熱のため器面調整などは明かではないが、頸部には棒状工具による刺突が加えられている。上方に拡張された



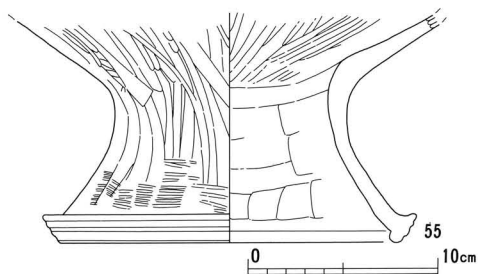
52



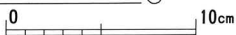
53



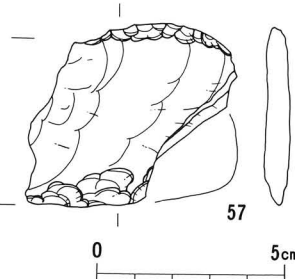
54



55



56



57



第20図 S K 1004出土遺物実測図

台の外表面は平行叩きとナデ調整、内表面はヘラ削りがそれぞれ施されている。56はサヌカイト製の有茎石鏝で、先端と茎の一部を欠いている。57は結晶片岩製の打製石包丁の破片で全体の半分以上を欠失しているが、端部には抉の痕跡が認められる。

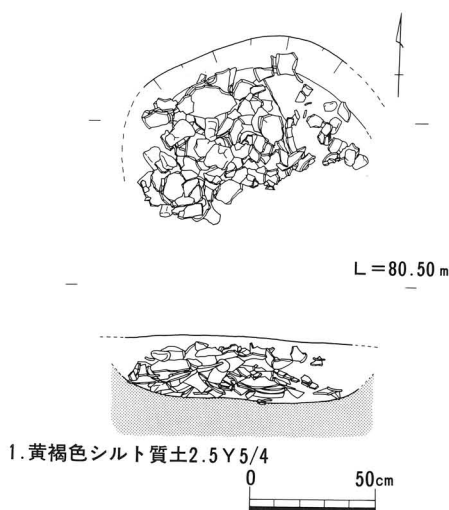
土壙（S K 1005）（第21図）

A地区のG-14グリッドで検出された遺構で、S K 1004同様、調査区の北側の境界線上に位置している。現地表面から僅か10数cmの所から土器片がまとまって出土したため、その周辺を精査して発見した遺構であるが、調査の際の不手際からその時点で既に遺構の大半を失っており、僅かに北側の壁の一部が残っているだけであった。残された部分から類推すると、耕作土直下から掘り込まれた緩やかに落ち込む長さ1m・幅60cmの楕円形のプランをもった遺構であると考えられる。遺構の埋土は黄褐色シルト1層の単純なものだが、土壙内は底面まで土器片が折り重なったような状態で出土している。

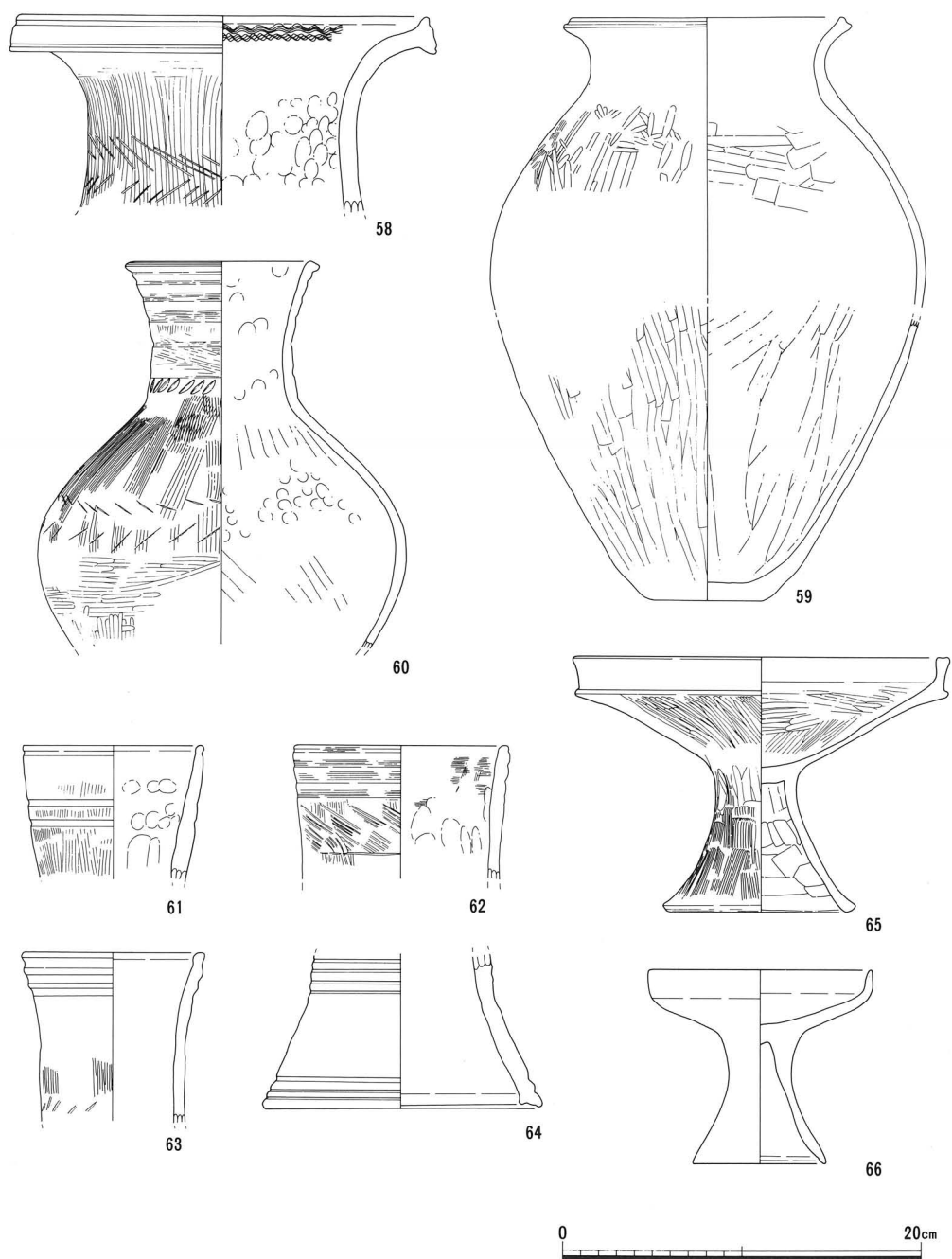
出土遺物（第22～23図）

58はA 1類に属す口径23cmの大型の壺である。外面は粗いハケ目、内面は指オサエによる調整が施され、頸部にはヘラ圧痕文、口縁内面には簡描き波状文が施文されている。59はA 4 a類の壺で、胴部から斜め外上方に伸びる短い口縁の端部には凹線が付けられている。外面は口縁の一部を除いて全面に粗いヘラ磨き、内面は頸部までヘラ削りが施されている。この他にも、この土壙からは同様の壺がもう1個体出土している。61～63は何れも直口壺に属

する土器で、口縁部は軽く外反するものや内湾ぎみのもの、直立するものなど数種類に分けられ、口縁端部も丸くおさめるものの他に、42のような水平面をつくりだし凹線を付けたものがある。高杯は2個体出土している。65は杯部から稜をもって上方に立ち上がる口縁を持ち端部は平坦に仕上げている。66は二次加熱のため遺存状態が悪く口縁部を欠くため細部は正確さに欠けるが、おそらく杯部が碗型の形態の高杯と考えられる。65と同じく脚台端部の拡張は認められないが内面には凹線が付けられる。65の杯部は内外面ともヘラ磨き、脚台部はハケ目調整とヘラ磨きが施され、内面はヘラ削りが加えられる。67はB 1類の甕で、拡張された口縁部に

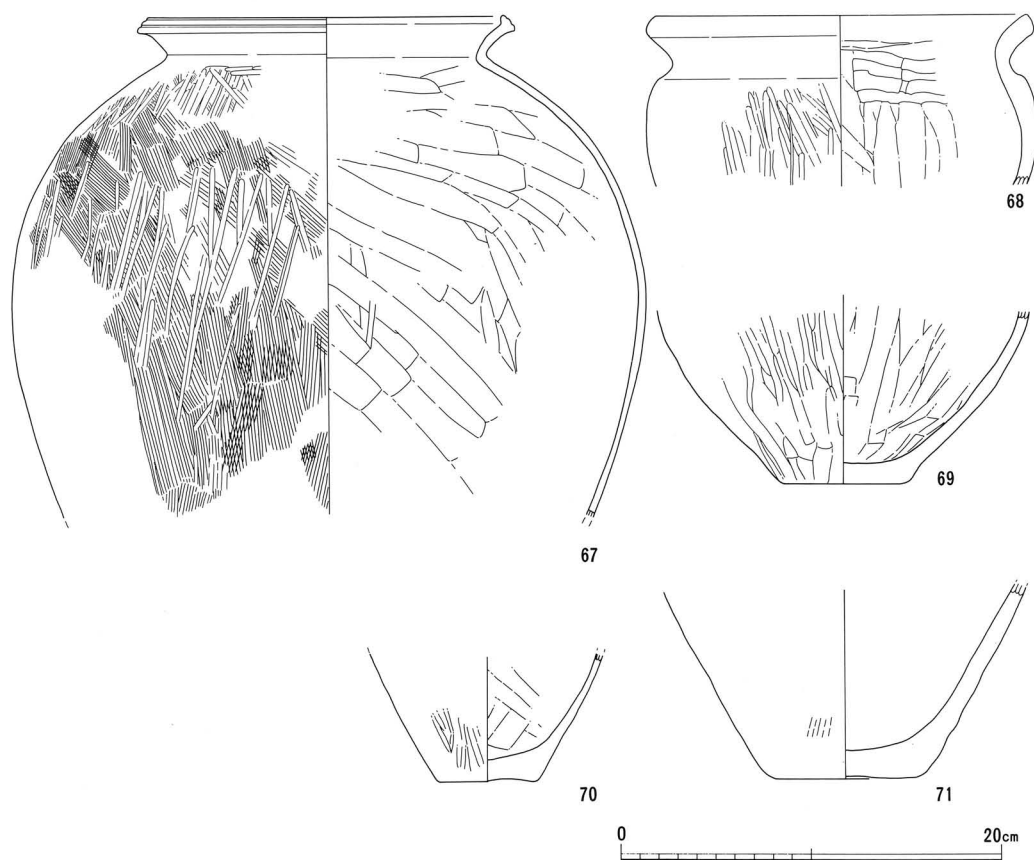


第21図 S K 1005実測図



第22図 S K 1005出土土器実測図

は凹線が2本付けられ、外面はハケ目調整とヘラ磨きが、内面はヘラ削りがそれぞれ施され、ヘラ削りは頸部まで及んでいる。68はD類の甕で、頸部から大きく外反する短くて分厚い口縁端部は丸みをもって仕上げられている。胴部外面はヘラ磨き、内面は頸部までヘラ削りが



第23図 S K 1005出土土器実測図

施され、胴部と頸部の境は強く撫でられて凹線状のくぼみを持つ。

土壌（S K 1006）（第24図）

A地区中央やや北寄りで検出された長軸方向の長さ3.2m・幅約1.5m・深さ20cmの比較的大型の土壌である。検出時の土壌の形状は東西に長い不整楕円形の形態をとるが、遺構の検出された面が、S K 1005同様耕作土直下と非常に浅かったことや、出土した遺物が完形のものに乏しいことなどから、上部を耕作等によってかなり削平されていることが考えられ、本来は方形または隅丸方形に近い形状のものとも考えることも可能であろう。遺構内からは遺物とともに大小の砂岩の礫が炭化物をまじえて出土している。



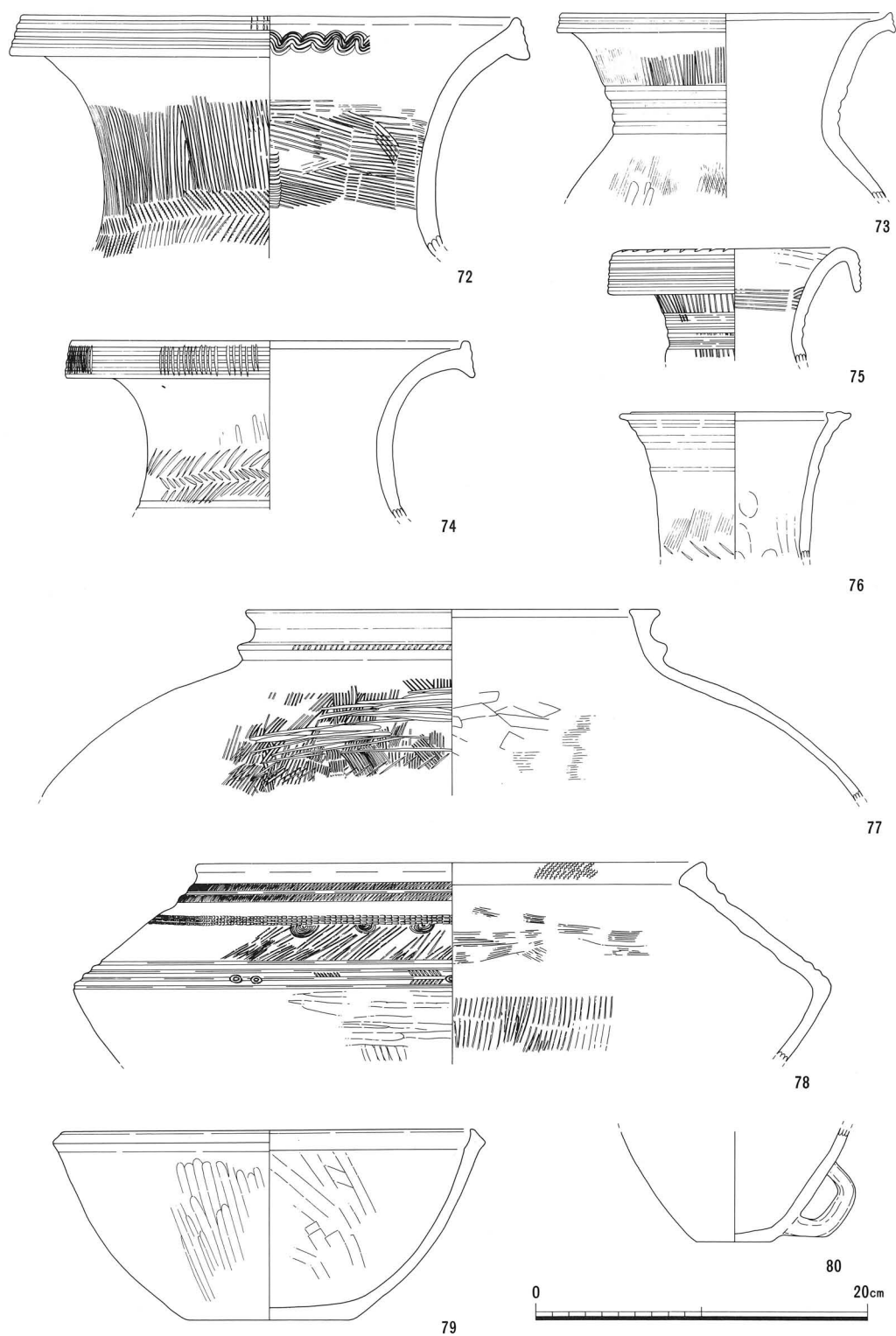
第24図 SK 1006実測図

に外反する口縁端部は内外に拡張され、凹線が付けられている。また、筒状の頸部にも凹線とヘラ圧痕文が認められる。77は端部を外方に拡張した短い口縁部と大きく張った胴部を持つ壺で、頸部には断面三角形で刻み目の施された突帯が一条巡らされている。胴部外面にはハケ目とヘラ磨き、内面はヘラ削りによる調整がそれぞれ施されているが、この他に外面にはさらに貝殻または櫛による圧痕文が巡らされている。78は破片のため全体の形は明かではないが大型の鉢形土器C 1類と考えられるものである。算盤玉形に内方に大きく屈曲する胴部にはななめ外方に拡張された平坦な口縁が続き、端部には貝殻腹縁の圧痕文が付けられている。口縁から算盤玉形に屈曲する胴部上半にかけては凹線によって区画され、櫛描き列点文や扇状文・竹筥文が付けられ、各凹線間には刻み目が加えられている。また、この部分には注口が付けられていた痕跡があることから、SK 1010で出土しているような注口付きの台付き鉢になる可能性が非常に高いものと考えられる。79は小型の鉢形土器で、外側に向かって斜めにそぎ落とされたような斜縁の形態の口縁の内面は横に強く撫でられ、凹面となっている。それぞれ外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りが施されている。この鉢に類似する土器が

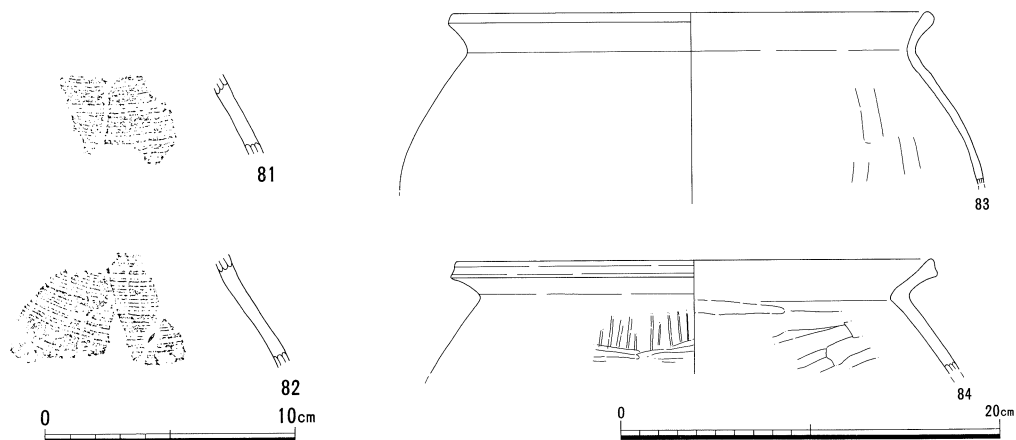
出土遺物（第25～27図）

72～74はどれも口径20cmを越えるA 1類の大型壺で、程度の差はあれ上下に拡張された口縁端部に2～4本の凹線が巡らされているが、72・73はさらにその上にヘラ描き刻線文が加えられている。また、頸部と胴部の境にはハケ目が施された上に凹線や櫛・ヘラによる圧痕文が何段にもわたって带状に巡らされている。口縁内面の加飾は、72の土器にSK 1005の58と同じような櫛描き波状文が認められる。75はA 5類の壺である。いったん斜め外上方に開いた後、下方に大きく垂下する口縁部には凹線文と櫛による刺突が加えられ、頸部にも凹線が付けられている。このタイプの壺の出土はこれ一点のみで、他地域からの搬入品と考えられる。

76はB 3類に属する直口壺で緩やか

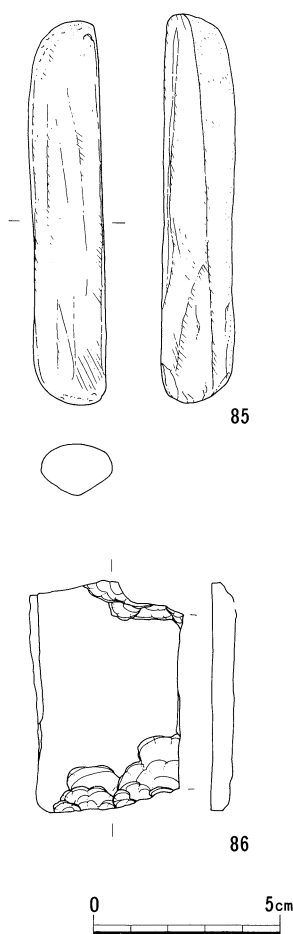


第25図 S K 1006出土土器実測図



第26図 S K 1006出土土器実測図

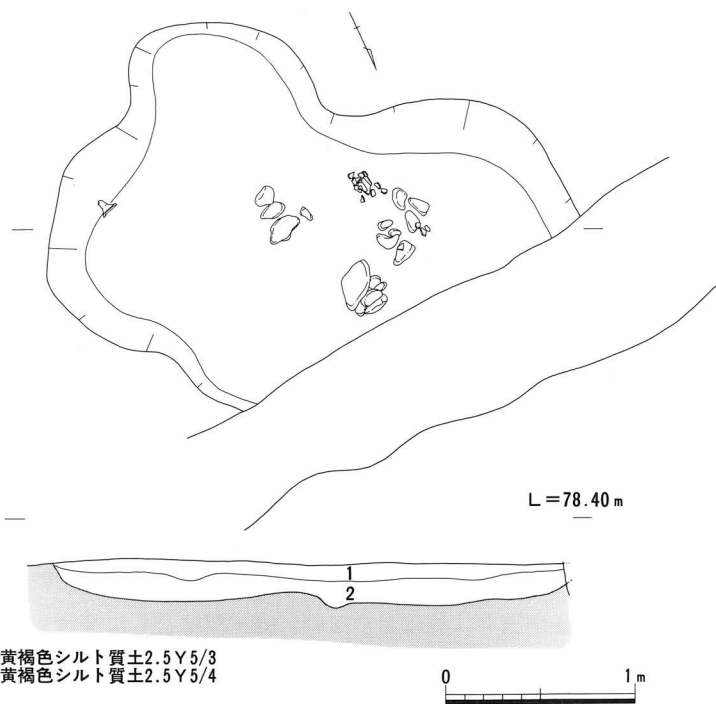
S K 1010からも1点出土している。80はジョッキ形土器であるが遺存状態はよくない。81・82はともに簾状文の施文された壺の破片で、恐らく同一個体と思われる。このように簾状文が用いられる土器は次に述べるS K 1007で若干出土しているだけで稀な存在である。84の甕も残りが悪く、かろうじて口縁端部に凹線状のものが巡らされていることと胴部外面の粗いハケかヘラ磨きのような調整と内面のヘラ削りが認められるが、口縁の形態から83とともにAに分類されるものだと考えられる。この他に、石器が2点出土している。1点は結晶片岩製の打製石包丁の破片（86）で身の中央部付近のため形状は不明である。もう1点は細長い粘板岩の自然礫を縦に半裁したものをを用いた砥石と考えられる石器（85）である。同様の石器はS K 1009でも出土している。



第27図 S K 1006出土石器実測図

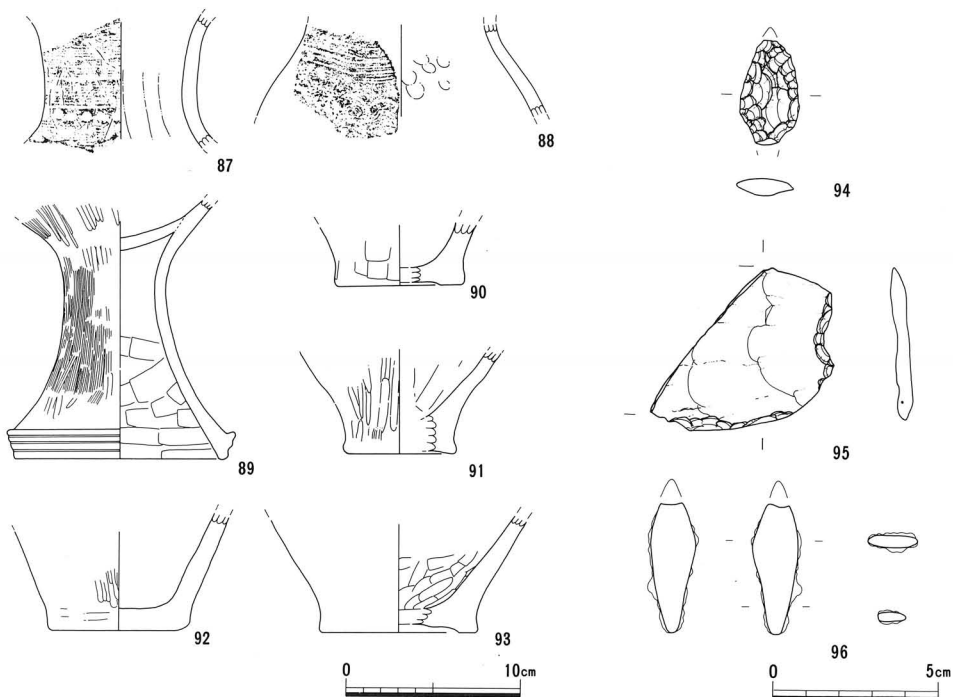
土壌（S K 1007）（第28図）

B地区のB・C-25・26グリッドで検出された不整形の形態の土壌である。遺構は一部耕作による攪乱を受けており全景を伺うことはできないが最大長1.5mをはかる。遺構の埋土は2枚に分けられるが何れも砂質がかったシルトである。出土した土器は細片のものが殆どで、なかには磨



1. 黄褐色シルト質土 2.5Y5/3
2. 黄褐色シルト質土 2.5Y5/4

第28図 S K 1007実測図



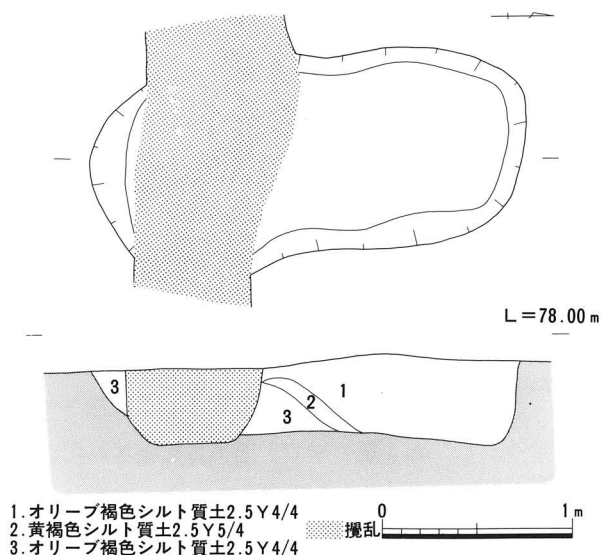
第29図 S K 1007出土遺物実測図

滅しているものも認められ、遺存状態が良好なものは少ない。

出土遺物(第29図)

87・88は簾状文または櫛描文が描かれた壺の頸部の破片で、87は簾状文の間にさらに刺突文が加えられている。2点とも胎土中に砂粒を多量に含み焼成は悪い。89は高杯の脚台部である。脚端部は上方に拡張され凹線が2本つけられている。

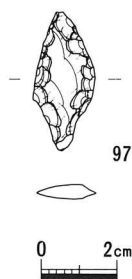
脚部外面はハケ目調整とナデが併用され、内面は粗いへう削りが施されている。一般的に S K 1007 出土の土器には胎土や焼成が他の遺構出土の土器と比較して著しく悪いものが多い。94 はサヌカイト製の有茎石鏝で先端と茎の一部を欠く。95 は結晶片岩製の打製石包丁の破片で、残っている一端には挟りがみられる。96 は鉄製の鏝と考えられる遺物で、身部は偏平で鎚などは認められない。



第30図 S K 1008 実測図

土壌 (S K 1008) (第30～31図)

B 地区の D・E-29 グリッドで検出された長さ 2.3 m・幅 1.1 m・深さ 40 cm の楕円形のプランの土壌で S K 1007 同様、遺構の一部を耕作によって破壊されている。遺構の埋積土はシルト質の粒子の粗い土に礫が混入し締まりは悪い。遺物の出土点数も 1007 同様少なく、弥生土器の小片が若干出土した以外はサヌカイト製の打製石鏝 (97) が出土しているだけである。



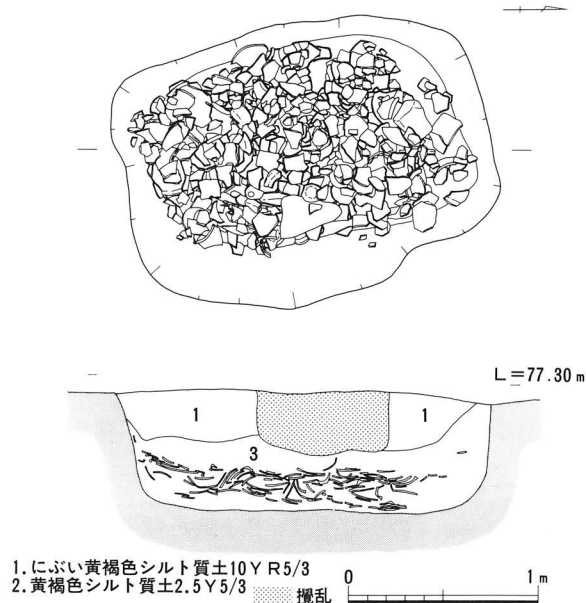
第31図 S K 1008
出土石器実測図

土壌 (S K 1010) (第32図)

E-39 グリッドで検出された長軸方向の長さ 1.9 m・幅 1.5 m・深さ 60 cm の隅丸方形に近い形態の土壌である。遺構内の堆積は 2 層に分かれるが、遺物の出土はほぼ下層に限られる。遺物は検出された当初、土壌内に破片の状態で折り重なる様に出土したため完形のものはいなかったが、整理の過程でその多くが完形または完形に近い状態に復元された。また、土器の中には二次加熱のために赤変してボロボロになった個体が多く認められたが、遺構の埋積土には少量の炭化物が混入しているだけで焼土などは検出されず、壁面などにも熱を受けたような痕跡も認められないことから遺構内で火を焚いた可能性は少なく、遺構に投棄される以前に熱を受けていたものと思われる。

出土遺物 (第33～41図)

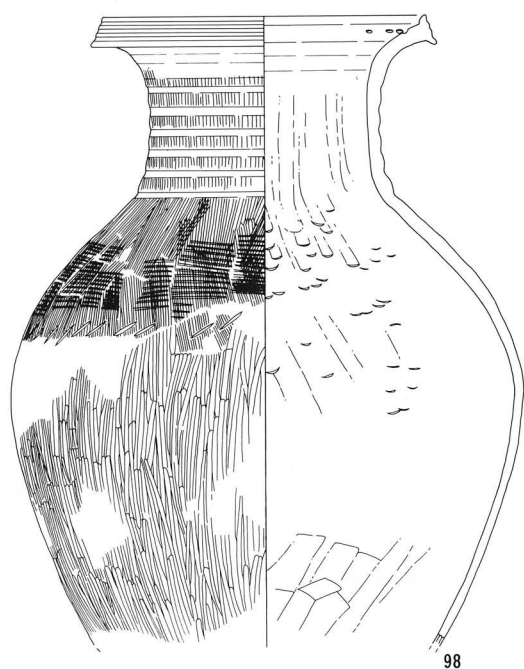
98・99・102・103 は A 2 a 類、100・101 は A 2 b 類にそれぞれ分類される壺である。98・



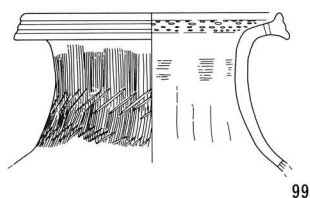
第32図 S K 1010実測図

部と長い頸部には多条沈線が付けられている。頸部から大きく外側に張り出した肩部にかけてはハケ目調整が施された後に櫛によって水平に区画され、その間に同じく櫛描き波状文が描かれている。また、肩部以下はヘラ磨きが施されている。このようなモチーフの壺はこれまでの調査では104の土器しか出土していないが、類似する土器は吉野川下流域の徳島市南庄遺跡で中期末の時期の遺物とともに出土している。より下流域の土器の性格が強い遺物であろうか。105・106はそれぞれE・A 1類に属する壺である。107～112はA 4 a類、113・114はA 4 b類の壺で、107～112では口縁端部を肥厚させたり、上端をわずかに上方に拡張して平坦面を作り凹線をつけている。また、107・110・111の頸部にはヘラまたは角棒による刺突文が施文されている。いずれもA 2類と比較して器面調整や焼成が粗雑で、頸部まで及ぶ内面のヘラ削りも非常に粗い。111は2次加熱のため土器の遺存状態は悪い。113・114は短い頸部から斜め外上方へ直線的にのびる口縁を持ち口縁端部の断面は方形で口縁部の内外面は強くナデられている。115は複合口縁壺または二重口縁壺と呼ばれる大型の壺の口縁部が変化したと思われる壺Cで、軽く内湾する口縁には凹線が6条巡らされ、頸部にもヘラを用いて描かれたと考えられる粗い格子目文がつけられている。胴部内面全体に施されるヘラ削りは極めて粗い。今回の調査では、これ1個体しか出土していないが、前回の調査でも口縁部の破片が1点出土しただけで元々出土数の少ない種類である。この他に壺B 1類(116)・壺B 2類(117)・水差形土器(118)・が出土している。116は二次加熱のため遺存状態が

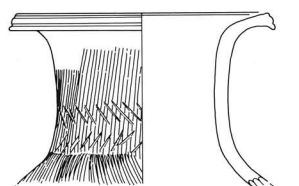
99・102の頸部にはヘラによる圧痕文がつけられているが同様の文様は100や101・102の口縁端部や胴部にかけても見られる。101は胴部外面の調整が上半がヘラ磨き、下半がハケ目と他のA類の壺とは逆に施され、内面の調整もヘラ削りの範囲が頸部付近まで及んでいる。また、103は外面の調整にハケの代わりに叩き目とヘラ磨きが用いられているが、部分的にはハケ目が施された後にヘラ磨きを加えられた痕跡が認められる。101・102は98～101よりも大型の土器で、98の筒状の頸部には凹線文が6条認められる。104は上方にむかって緩やかに開く筒状の頸部に水平に大きく開く口縁がついたA 3類の壺で、上下に拡張された口縁端



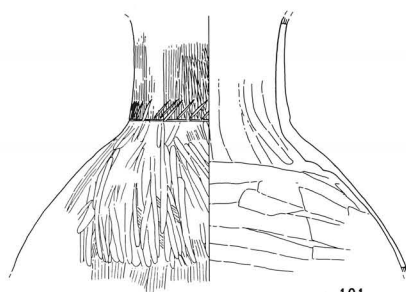
98



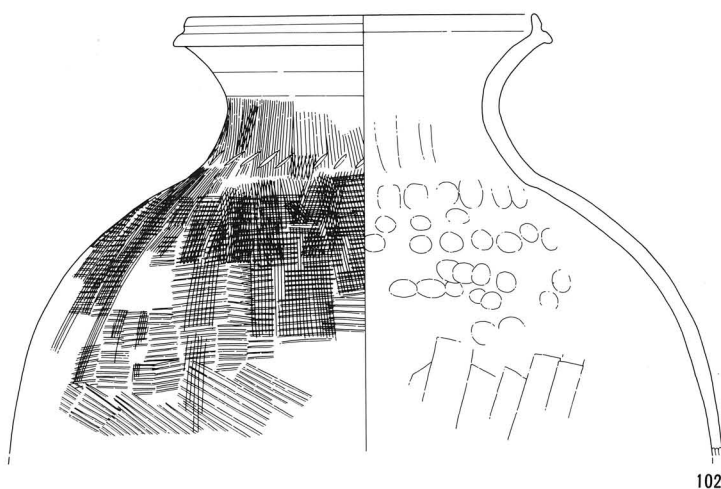
99



100



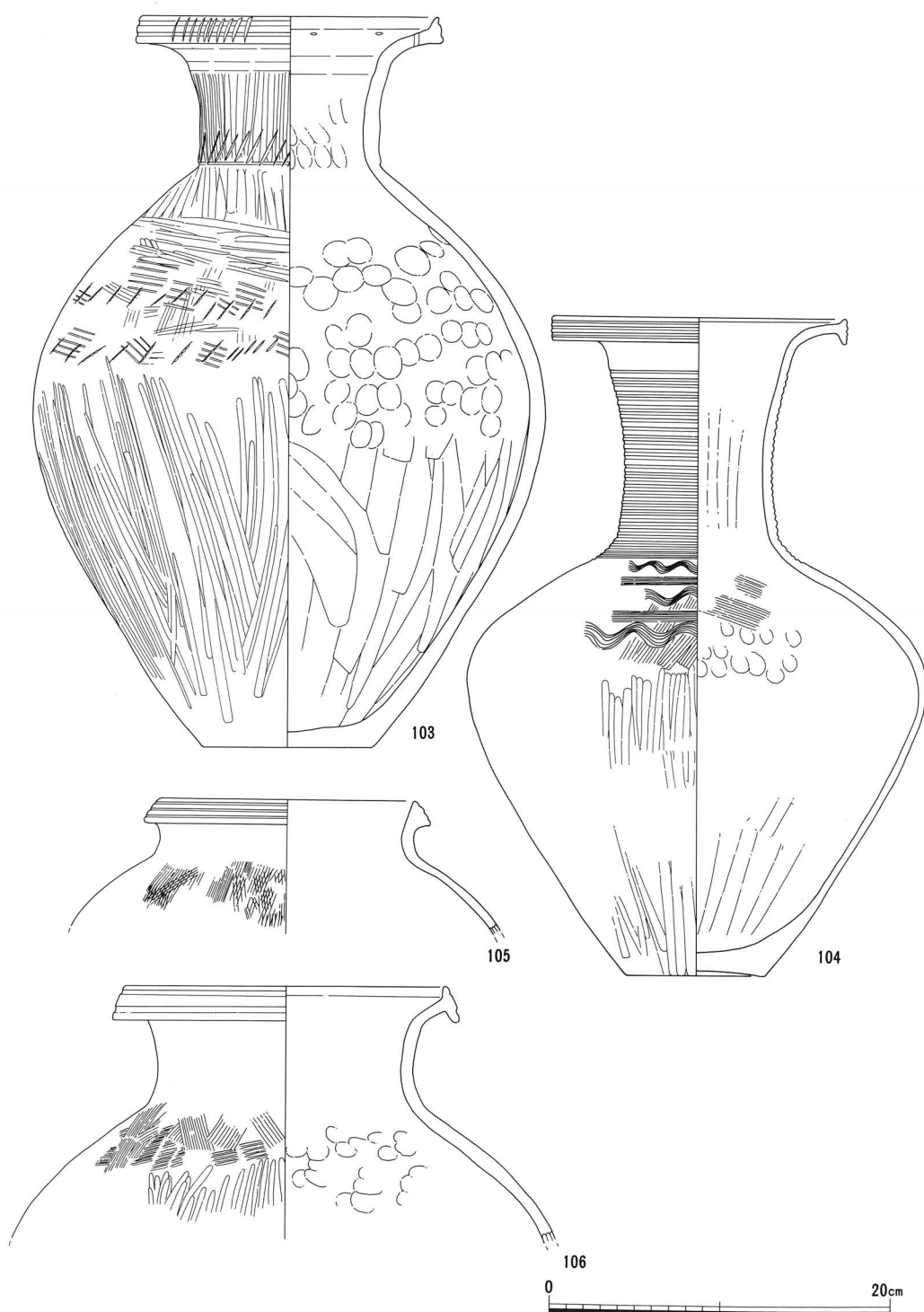
101



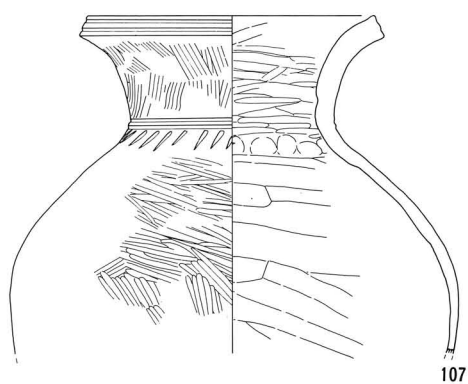
102



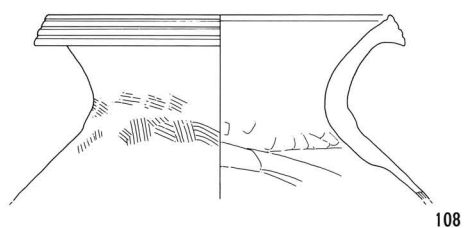
第33図 S K 1010出土土器実測図



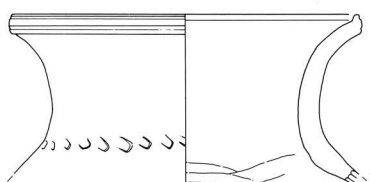
第34図 S K 1010出土土器実測図



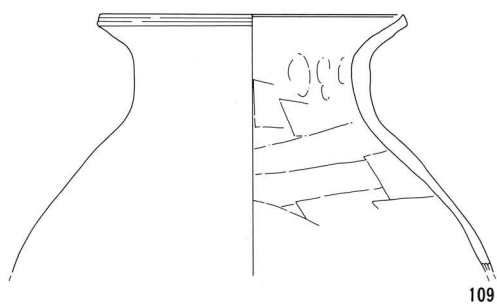
107



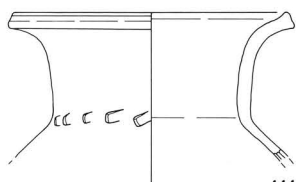
108



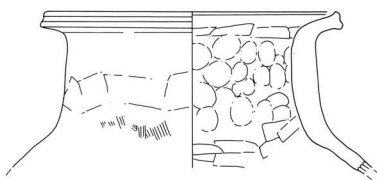
110



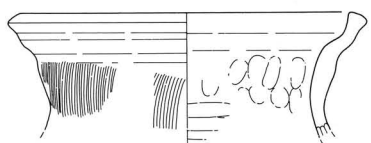
109



111



112



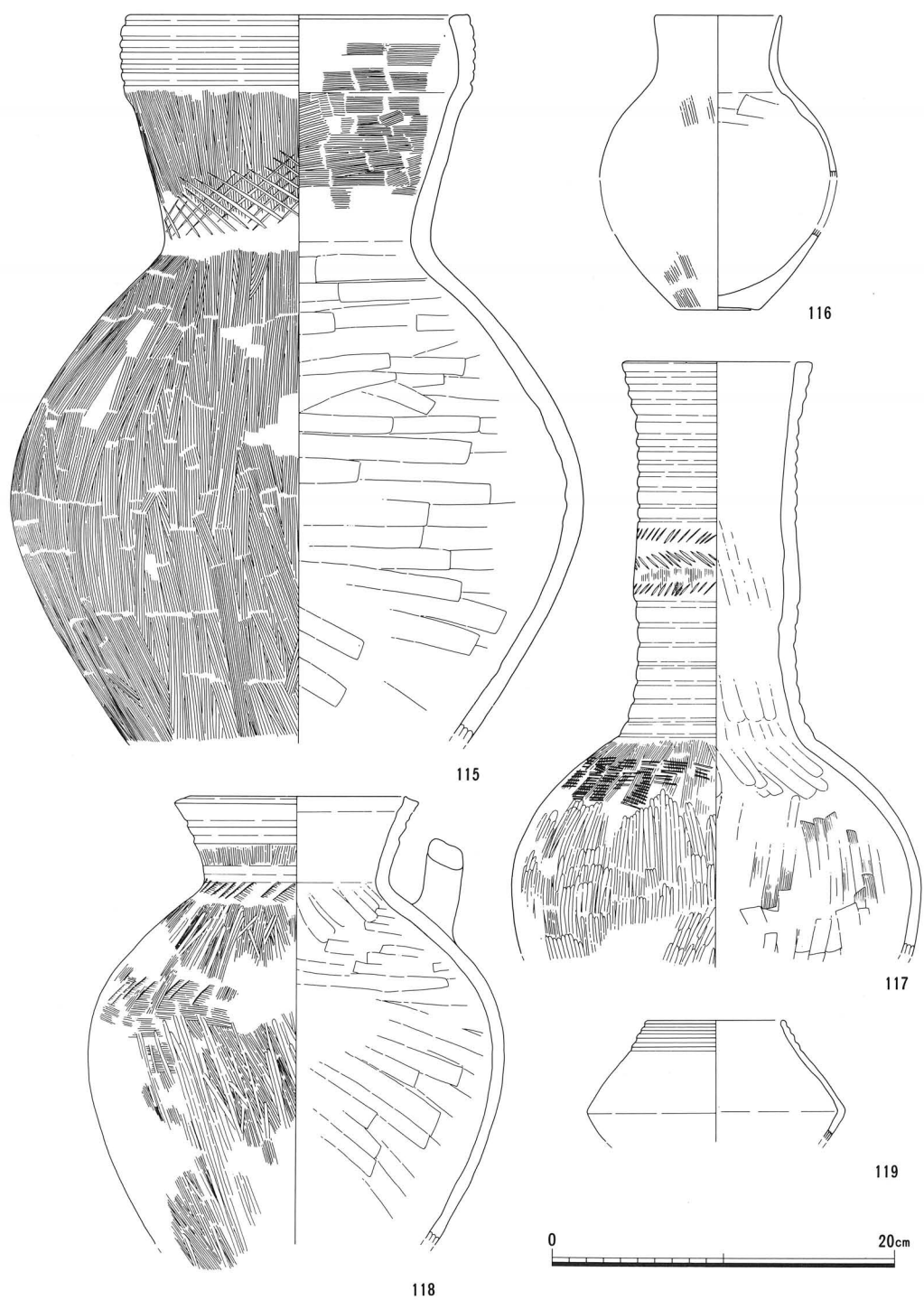
113



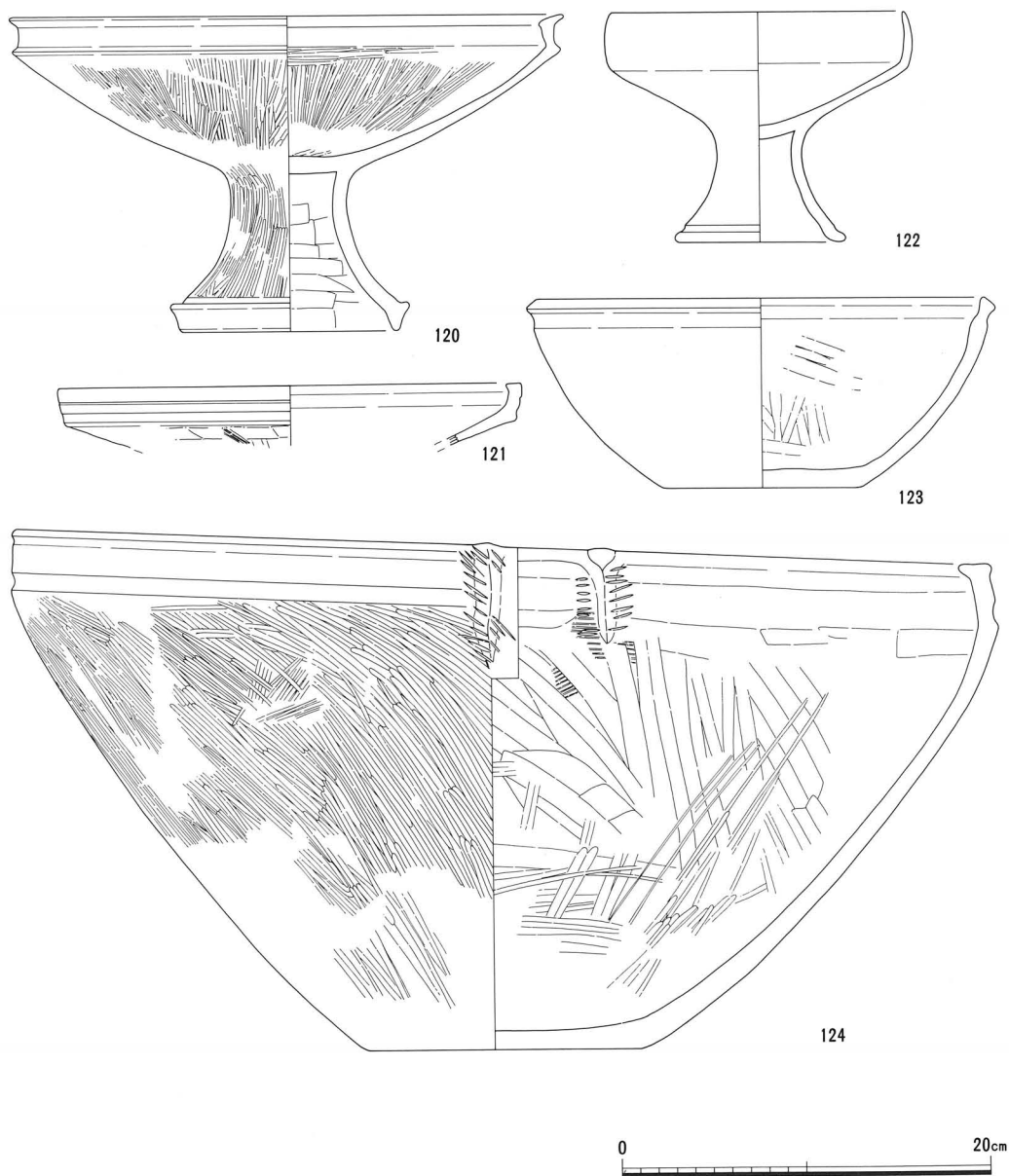
114



第35図 S K 1010出土土器実測図

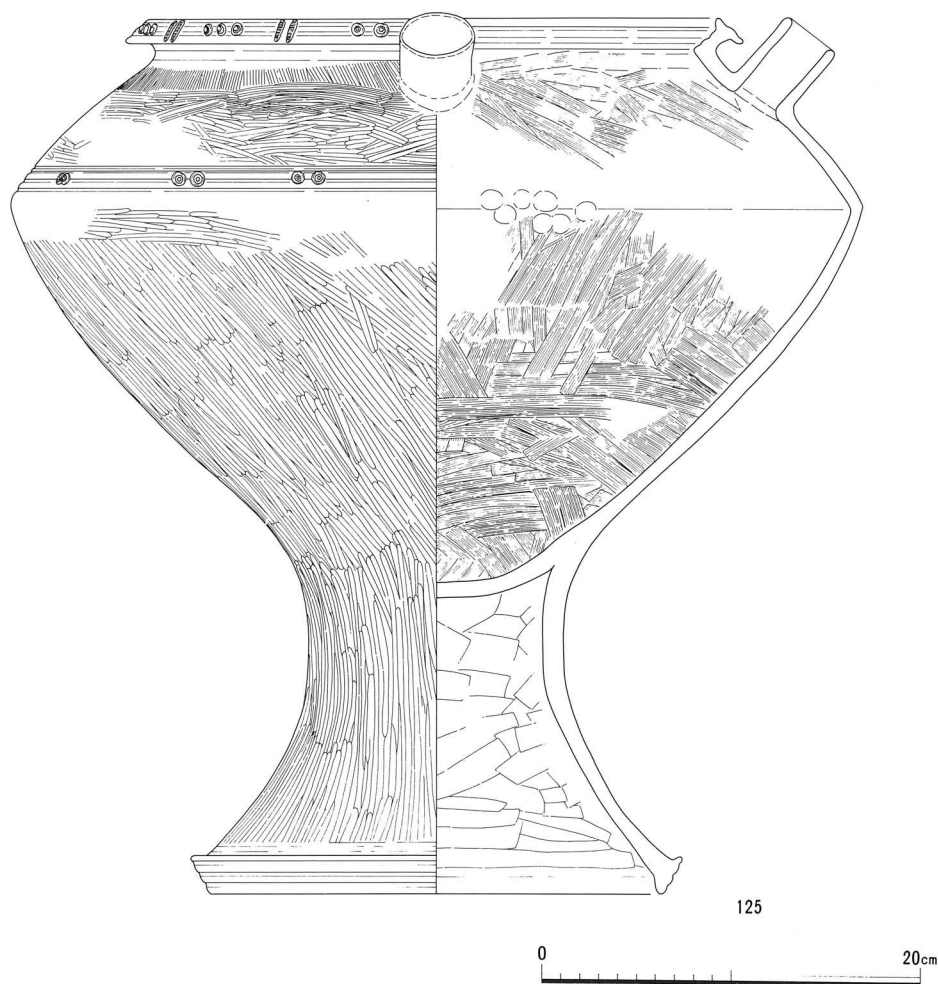


第36図 S K 1010出土土器実測図



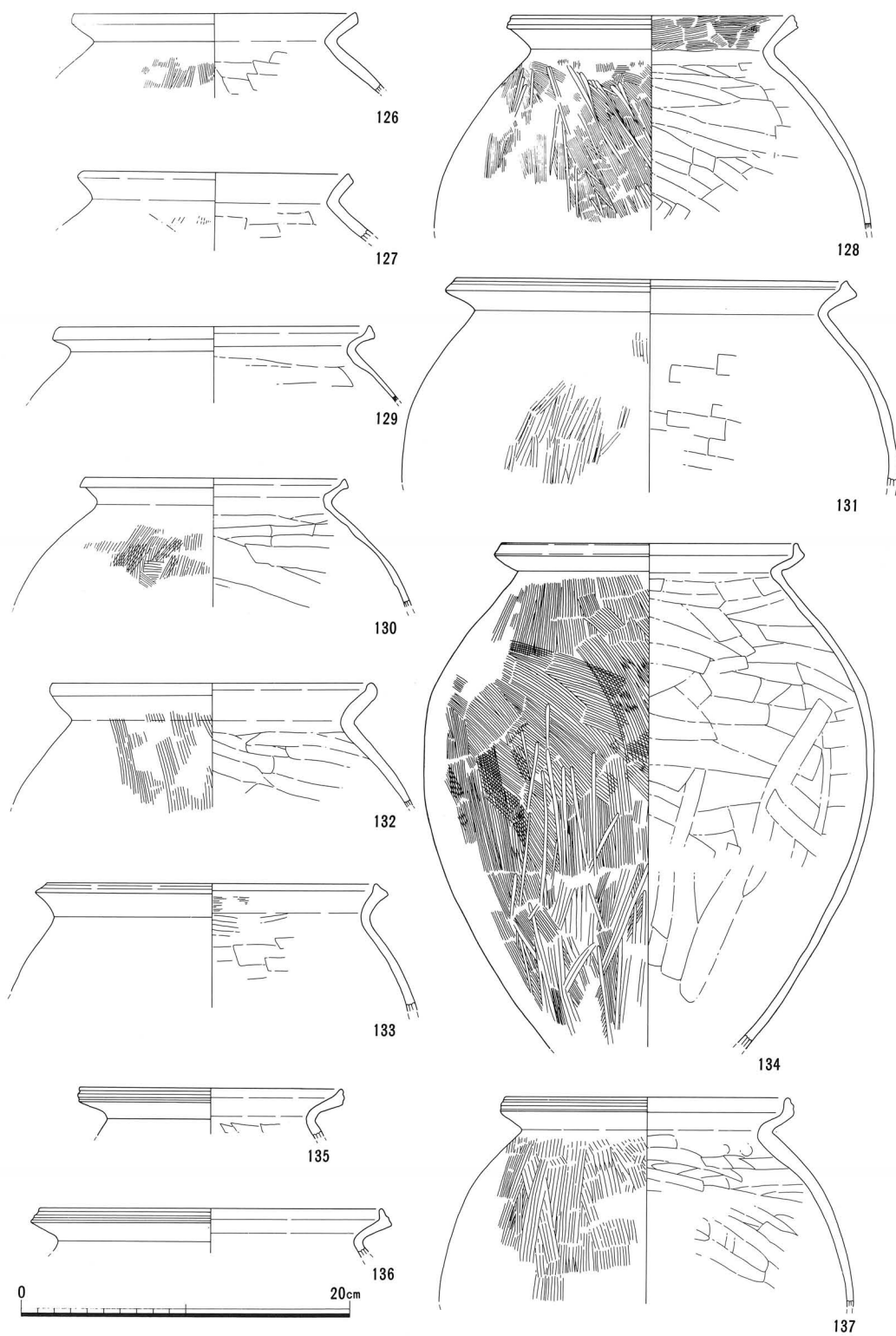
第37図 S K 1010出土土器実測図

悪いが胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りがわずかに残っている。117は球形の胴部に筒形の長い頸部がつけられている。頸部のほぼ中ほどにヘラによる圧痕文を帯状に巡らす以外は口縁直下から胴部との境界まで凹線文がつけられている。器面の調整は100～102の壺と同じ方法が用いられ、胎土や焼成なども同じ作者の手になったかと思われるほど酷似している。胴部上半には118のように把手が取り付けられたような跡も見られるが確実ではない。

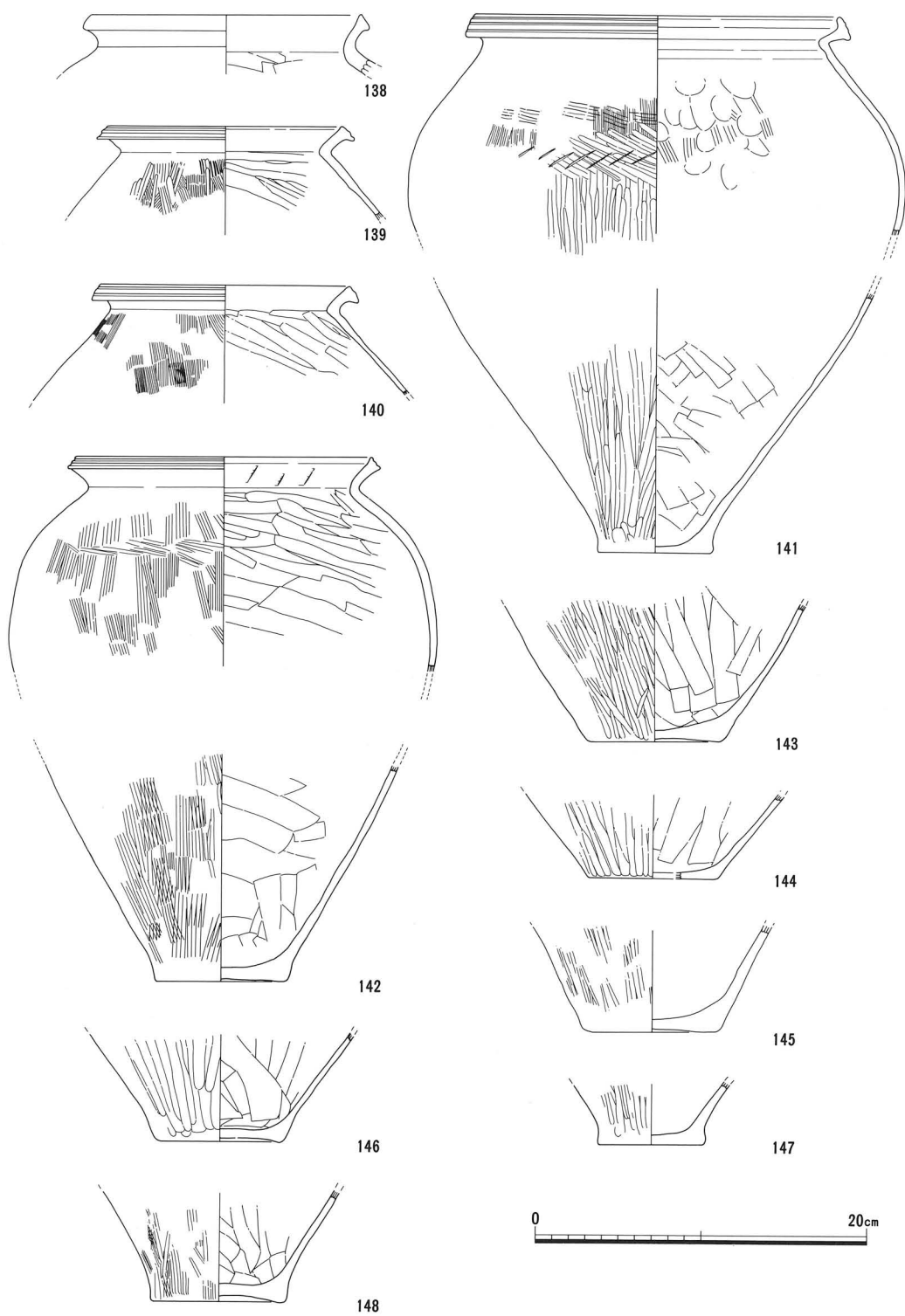


第38図 S K 1010出土土器実測図

これと同じように頸部が著しく伸びる壺は前回の調査でも1例知られているが、胴部が算盤玉形をしており今回の球形のものとは形態が若干異なっている。水差し形土器（118）は、胴部からくの字形に屈曲した直線的に伸びる短い口縁部をもち、ハケ目調整の後、凹線がつけられている。口縁端部は断面方形につくられ中程はややくぼめられている。胴部は口頸部同様、ハケ目調整が施されているが部分的にヘラ磨きによって擦り消され、上半部にはハケによる圧痕がつけられている。無頸壺（119）も116同様二次加熱を受け残りが悪く、僅かに口縁部の凹線の存在が確認できるだけである。高杯は3点出土しているが、遺存状態が良好なのは一点だけである。120は杯部から稜をもって屈曲した口縁部の端部を外方に拡張した高杯A類で、短い脚端部は上方へ拡張されている。杯の内外面と脚の外表面は丁寧なヘラ磨き、

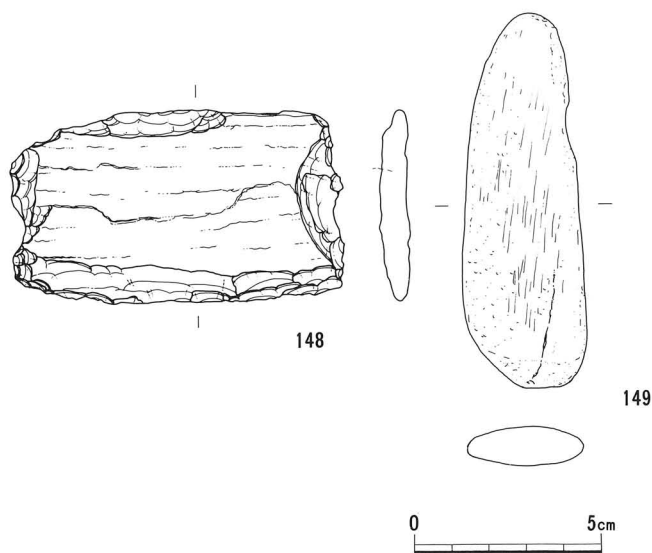


第39図 S K 1010出土土器実測図



第40図 S K 1010出土土器実測図

脚の内面はヘラ削りによって調整されている。121はC類に属すると思われるが二次加熱によっ表面の剝落が著しく杯部の形態も不正確である。脚端部は丸くおさめられ凹線が付けられている。122は杯から直立するように屈曲する口縁端部が平坦に作られ、屈曲部には稜を持たない。大小2点出土している鉢形土器は小型の口径が25cm、大型が52cmと大きさに著しい差が見られる。123の口縁端部は外方に向かって斜めにそぎ落とされるように尖り、口縁直下に凹線がつけられている。124は口縁部近くで軽く内方に屈曲し屈曲部には凹線が付けられ、口縁端部は内外に向かって拡張されて平坦に仕上げられている。2点とも内外面はヘラ磨きによって入念に調整が施されている。125はほぼ完形の注口付き脚台付鉢形土器で、算盤玉形に張る深い胴部にくの字形に屈曲する口縁部が付けられている。上下に拡張された口縁端部と肩部には、凹線がめぐられ竹管文や棒状浮文がつけられている。脚柱部は短く脚部にかけて緩やかに開く。脚端部は上方に拡張され、凹線が3条巡らされている。器面調整は外面が口縁と脚端部に撫で調整が施され、頸部の一部にハケ目調整が加えられる以外は全面にヘラ磨きが施されている。また、胴部内面は板またはハケを用いたナデ調整、脚部内面はヘラ削りがそれぞれ加えられている。同様の注口付き脚台付き鉢形土器は、104に類似した壺が出土した徳島市南庄遺跡の19号土壌から1点出土している。一般的にこの種の土器が出土する場合、多量の土器が伴う場合が多いが今回も同じ状況を示している。甕（126～148）はA・B・C全てのタイプが出土しているが、中でも端部を上方に拡張した口縁を持つC類（129～137）は出土点数が最も多く、次いでA（126～128）、B（138～142）と続く。口縁端部には往々にして凹線が1～2条巡らされ、多いものでは141のように3条も付けら



第41図 S K 1010出土石器実測図

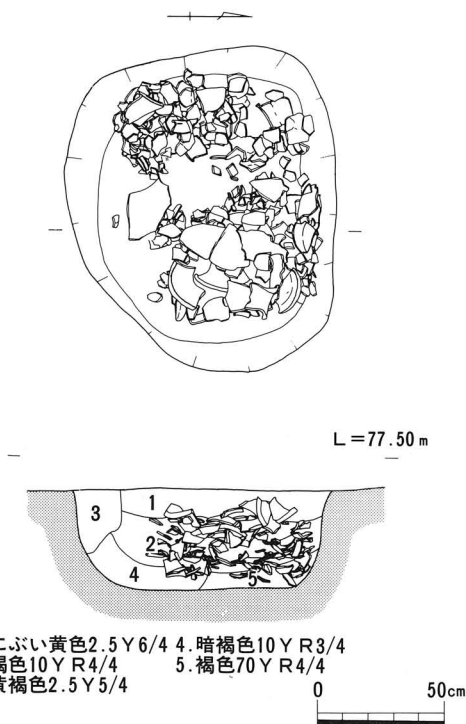
れたものもある。器面調整は141を除いてほぼ同一の手法が用いられている。口縁部は外面が横ナデ、内面がハケなどを用いたナデまたは横ナデが施され、胴部外面はハケ目調整またはこれに不規則なヘラ磨きが施されている。また、内面は確認できるもの全てが頸部との界までヘラ削りが行われている。特に138・139のように口縁端部が上下に拡張されたものまで同一の手

法がとられ、同じく口縁端部を上下に拡張する141とは調整方法が全く異なっている。141は他の甕と異なり内面上半には指押さえとハケ目調整が加えられ、ヘラ削りは下半部にしか認められないばかりでなく、外面の調整も上半部が叩き目とハケ目、下半部がヘラ磨きという方法が用いられている。これと同じ特徴を持つ甕は、この他にはS K 1002・1011から出土しているだけである。この他に石器としては両端に袂を持つ結晶片岩製の打製石包丁（148）と偏平な砂岩をそのまま用いた砥石（149）がそれぞれ1点ずつ出土している。

土壌（S K 1011）（第42図）

S B 1001とS K 1010との間で検出された長さ1.2m・幅1m・深さ40cmの不整楕円形の平面プランを持つ比較的小型の土壌である。おおよそ5層に分けられた遺構内の埋積土中からはS K 1005と同じような状態で多量の土器が出土している。遺物が集中して出土する層は2層で、土壌の底面との間に間層を挟み、遺物の投棄が若干時間をおいて開始されたと考えられる。ここでも1010の遺物に認められたような二次加熱を受けた土器が出土しているが、1010とは異なり埋積土中からは多量の焼土が検出されている。ただ、焼土が出土した層が2

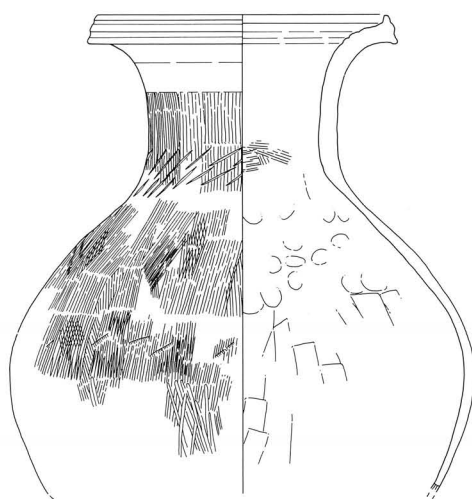
層で、土壌の底面からかなり浮いた状態だったことや、焼土自体が塊の状態では遺物と混在して検出されていることなどから土器の廃棄の際、同じように投棄されたと考ええるほうが妥当であろう。また、これらに混じってS K 1003で出土している炭化したエゴの実の種子が多量に出土している。



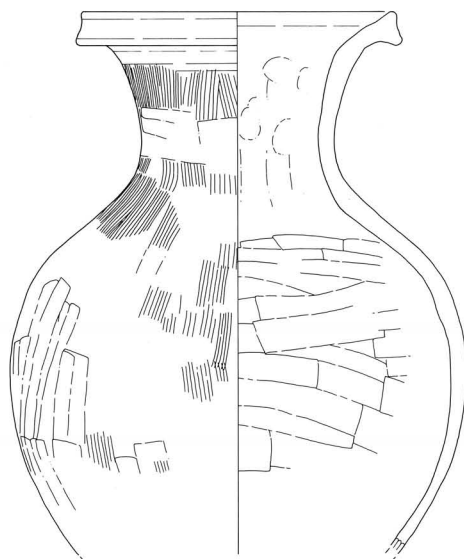
第42図 S K 1011実測図

出土遺物（第43～45図）

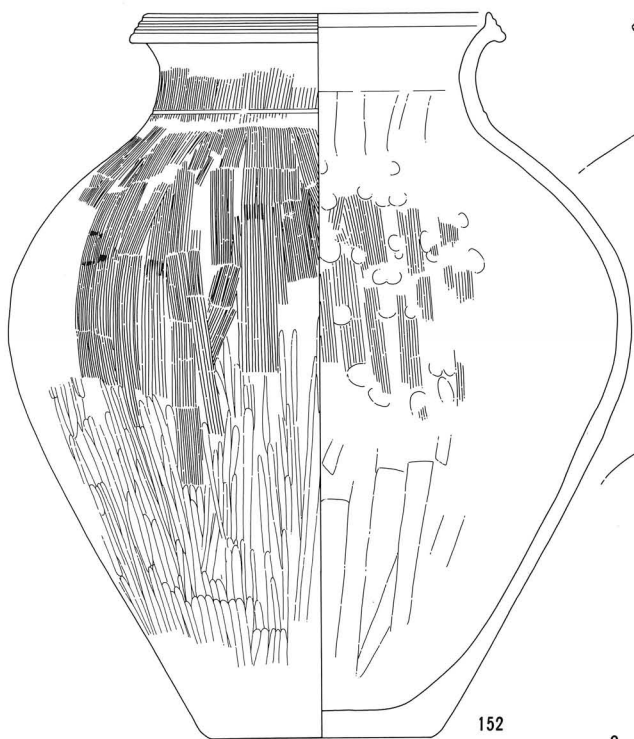
150・151はA 2 b類に属する壺である。150の口縁部から頸部の一部にかけては内外面とも強い横ナデが加えられ、頸部外面に僅かながら突出が認められる。口縁端部には2本の凹線が巡らされている。外面の調整は頸部から胴部上半にかけてはハケ目調整、胴部下半はヘラ磨きがそれぞれ加えられ、頸部と胴部にはヘラ圧痕文が付けられている。また内面の調整は胴部上半が指押さえ、下半はヘラ削りが施されている。



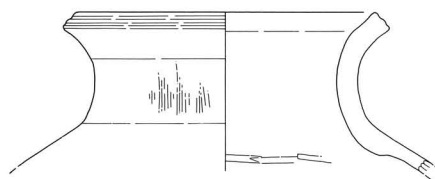
150



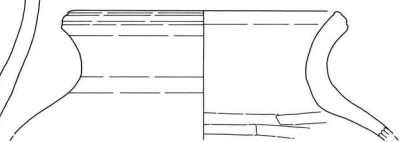
151



152



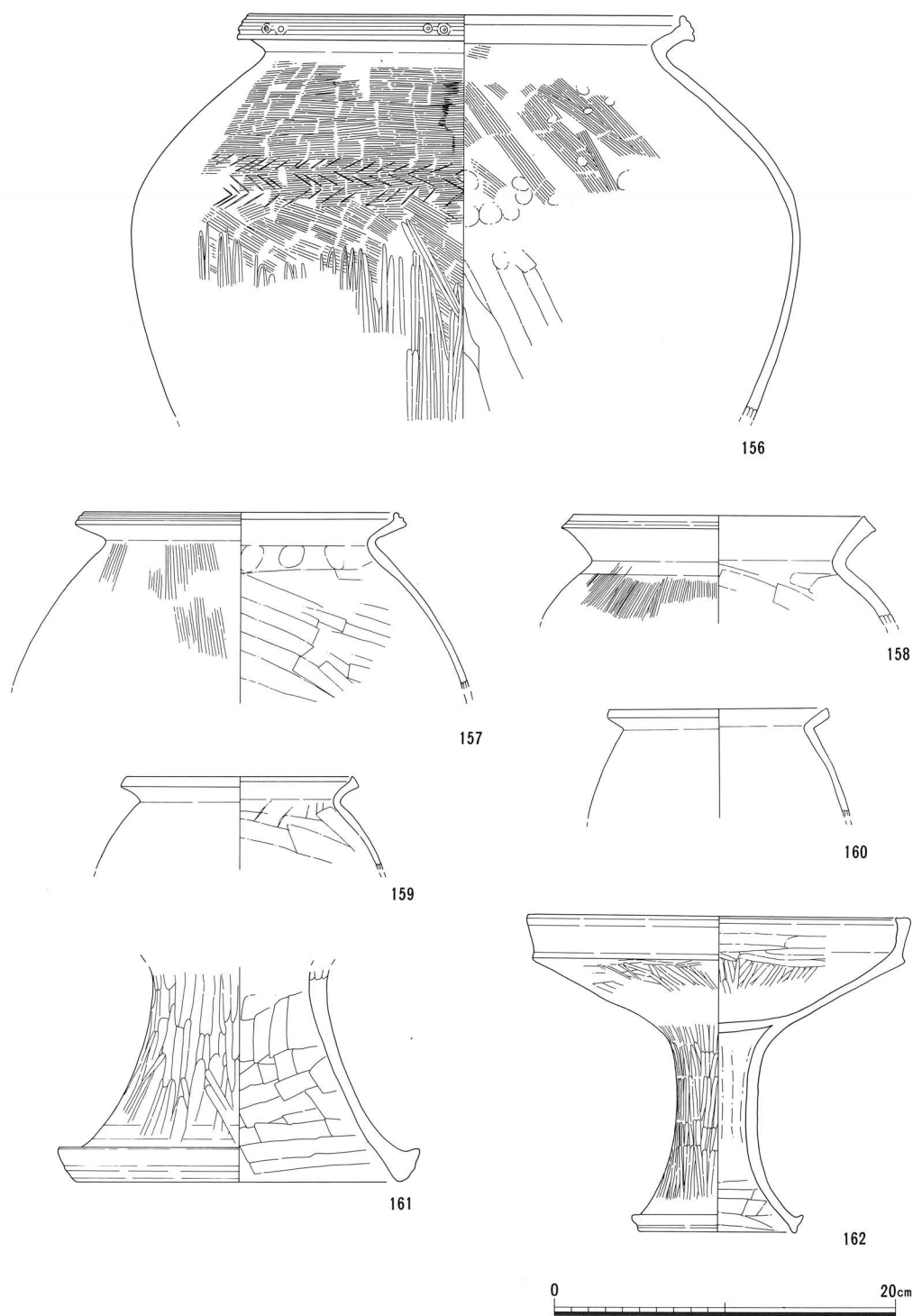
154



155



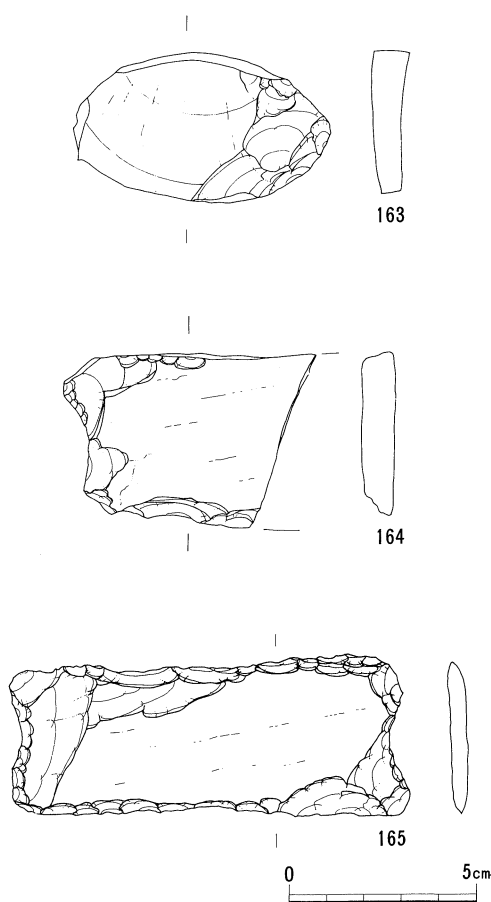
第43図 S K 1011出土土器実測図



第44図 S K 1011出土土器実測図

151は形態や大きさの他、内外面を強く横ナデして僅かな突出が作り出される口頸部など150と類似する点が多いが、器面調整に関しては外面の調整にヘラ磨きの代わりに板ナデを用いることや内面のヘラ削りの範囲がS K 1010出土の99と同じく頸部との境近くまで行われることなど異なる特徴を持っている。152はA 1 類に属する壺であるが、S K 1006などの同種のものに比べて口径が小さく、頸部も短くなって小型化している。内外面の調整はそれぞれ頸部外面から胴部上半にかけてがハケ目、下半がヘラ磨き、内面は頸部と胴部の境付近が指頭によるナデ、胴部上半が指頭圧痕の後ハケ目調整、下半がヘラ削りとなっている。154・155はA 4 a 類に属する壺であるが、2点とも遺存状態が悪く、外面の調整などは不明である。口縁端部も凹線または沈線が付けられていると考えられるが正確には解らない。内面の調整はどちらも粗いヘラ削りが頸部との境まで施されている。156～160の5点の甕のうち158・160はA類、156はB類、157・159はC類にそれぞれ分類される。中でも156は口径25cm、胴

部の最大径が40cmもある大型の土器で、上下に拡張された口縁端部には3本の凹線とともに竹管文が付けられている。B類のなかでも口縁端部の上下への拡張の度合いの強いこの種の甕の場合、器面調整は、通常、胴部上半には叩きとハケ目調整が併用されているが、この土器の場合には一見平行叩きと見間違ふような横方向のハケ目が加えられ、叩き目と同じ効果をあげている。また、大きく外側に張り出す肩部には斜め方向のハケ目とともにヘラ圧痕がめぐられ胴部下半はヘラ磨きが施されている。157から160の甕は二次加熱のために器面調整の明かでないものがあるが、おおむね外面はハケ目、内面は頸部までのヘラ削りが施されていたものと考えられる。161は大型の脚台付き鉢形土器の脚部の破片と考えられる遺物で、太くてやや短い脚柱と上方に大きく拡張された脚端部からなり、脚端部には強い横ナデが加えられ、脚柱部外面は丁寧なヘラ磨き、内面はヘラ削りに

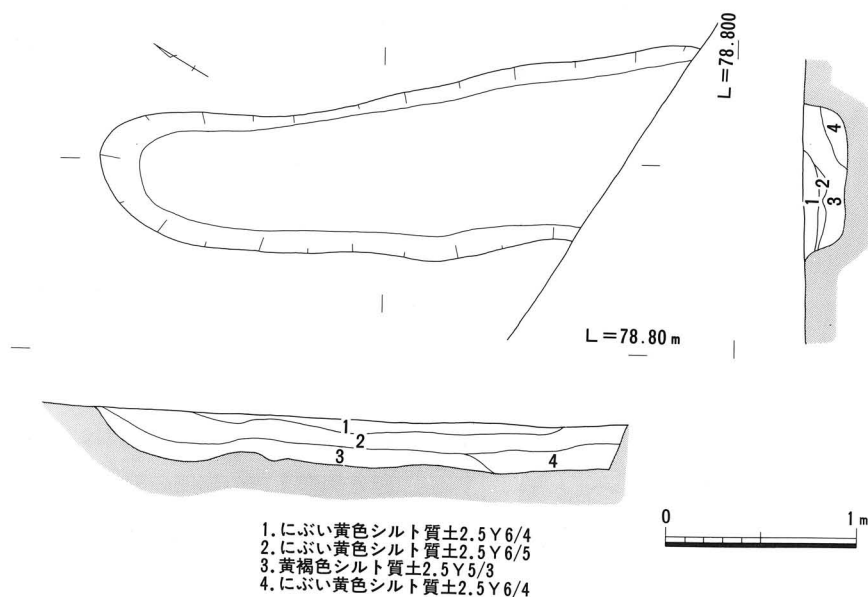


第45図 S K 1011出土石器実測図

よって仕上げられている。162はほぼ完形の高杯で口縁部は杯部から稜をもってほぼ垂直に立ち上がり、端部は内側に拡張されて平坦面を形作っている。脚柱は比較的細長く作られ、張りの弱い脚端部へと続いている。脚端部は上方へ拡張され、凹線が1本巡らされている。石器は石包丁など3点出土している。163はサヌカイト製の削器で厚みのある剥片の一端を表裏に調整を加えて刃部を作り出している。164・165とも結晶片岩製の打製石包丁で表裏何れかに自然面を残し両端には袂が入れられている。

土壌（S K 1012）（第46図）

遺構の一部が調査区外にのびているため全形は不明だが長さ2.8m以上・最大幅80cmの細長い溝状の形態をもった土壌と考えられる。深さ約30cmの遺構の覆土は炭化物や焼土の混入が著しく、一部には炭化物がブロック状に検出されたところもあった。また、側壁や底の一部には熱のために赤変した個所もあり、遺構内で火が燃やされたことは間違いないと考えられる。このように遺構内で火が燃やされたために覆土に炭化物や焼土が混入され遺構の一部に赤変する箇所が認められるものはこの他にもS X 1001や1002・1003がある。何れも弥生土器の小片が若干ではあるが出土していることから弥生時代の遺構であることは明かであるが、遺構の性格などは不明である。



第46図 S K 1012実測図

(3) 考察

出土弥生土器の分類

本遺跡の弥生時代の出土土器については、既に1988年の北原遺跡の報告の中で林慎二氏による分類が行われているが、今回は先の成果を考慮しながら形態と調整の両面から新たに分類を試みることにした(1)。

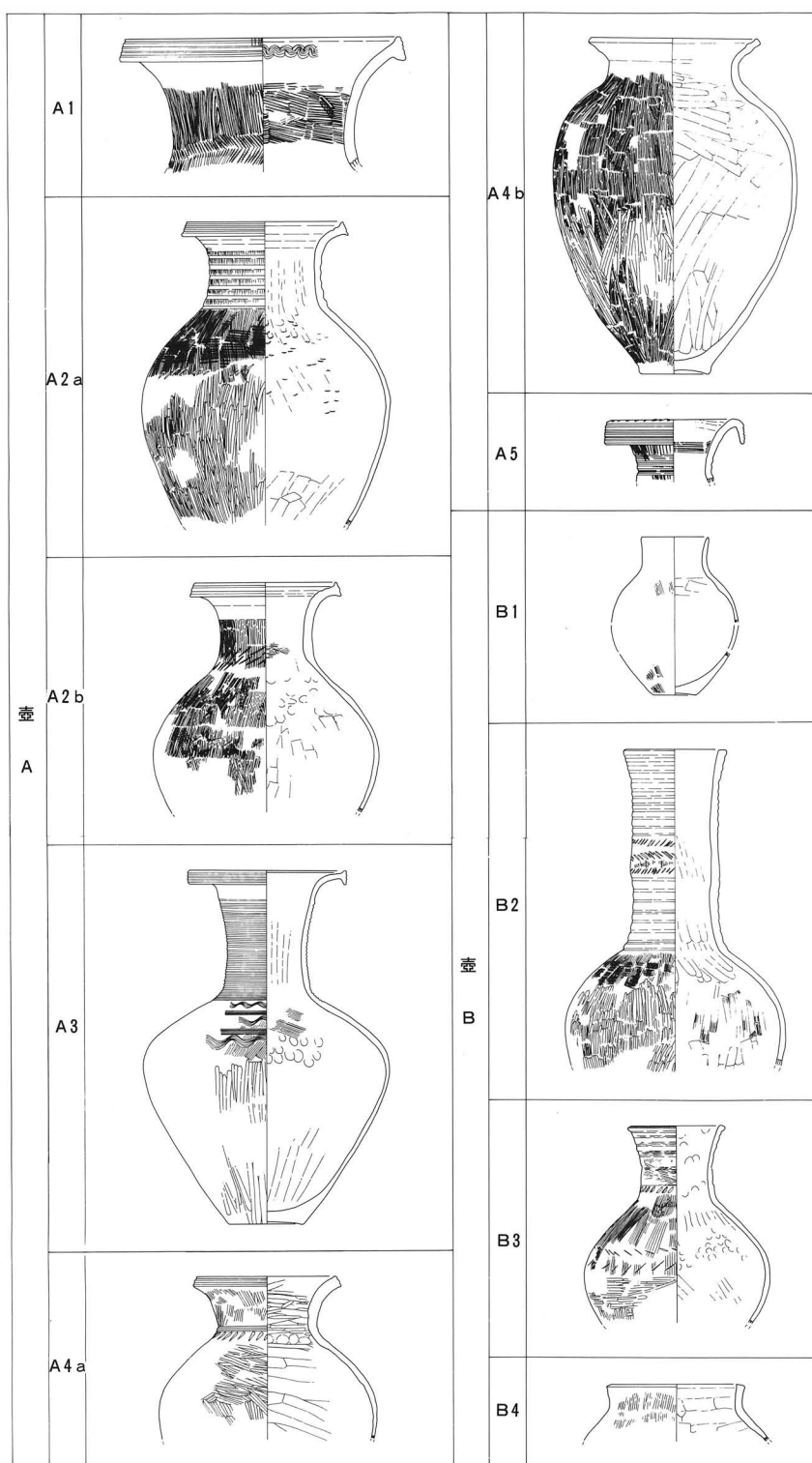
北原遺跡から出土した弥生土器は壺、甕、高杯、鉢、台付き鉢、水差形土器、コップ形土器などから構成されるが、主要な器種は壺と甕によって占められ、特に壺は形態と調整方法から多くの種類に細分が可能である。

壺形土器 今回の調査で出土点数が最も多く形態でも変化に豊んでいる。

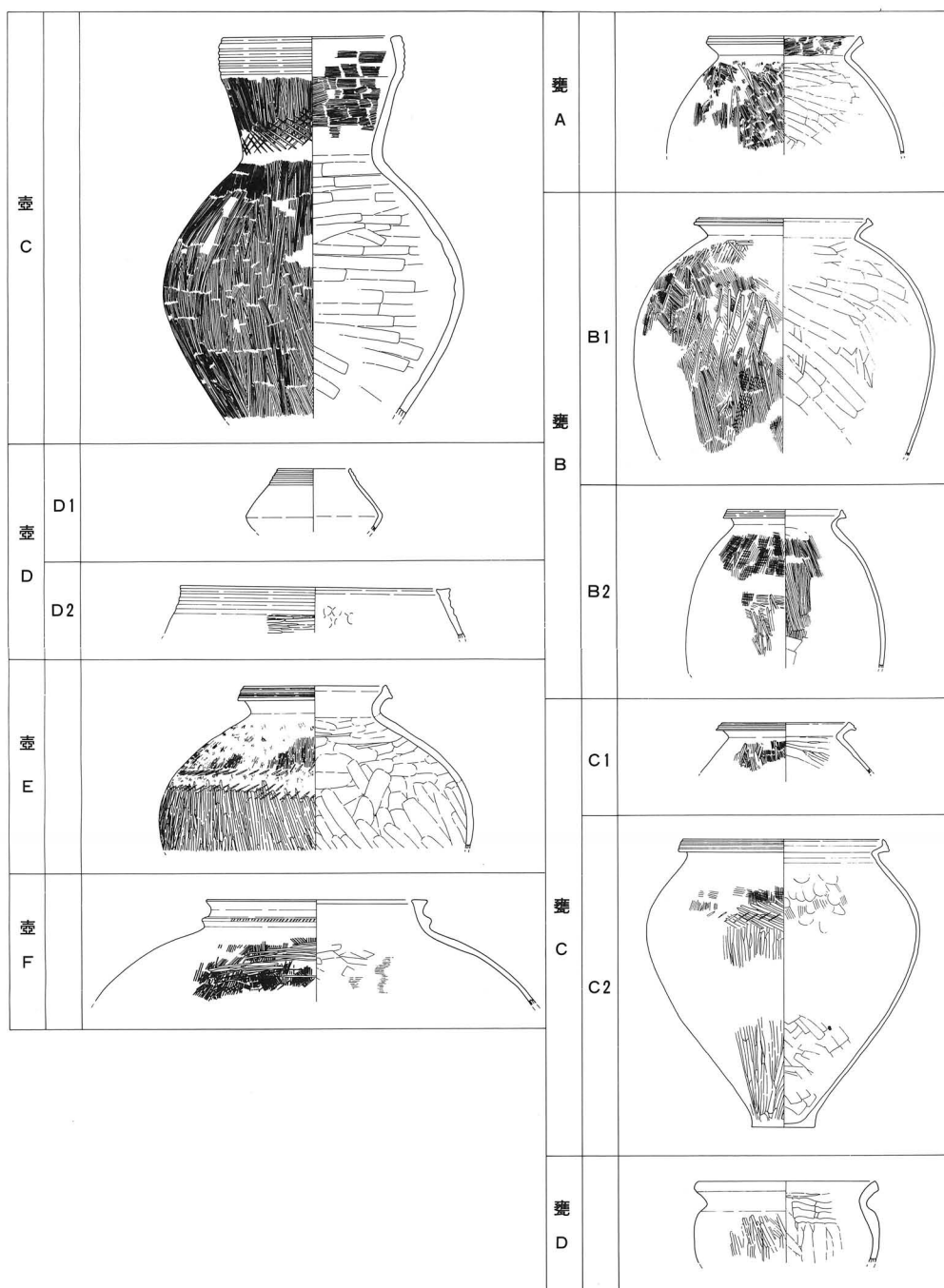
壺A 直立または緩やかに外反する筒状の頸部に、外上方に開く口縁部が付く広口壺とよばれる土器で、形態や器面の調整方法からさらに数種類に分類される。

A 1 比較的短い頸部から外上方または水平方向に大きく開く口縁端部は上下に拡張されてやや広い端面を形成し、その上に凹線または沈線の棒状浮文や篋描刻線文が施されている。口唇部内面には櫛描波状文が描かれるものもある。頸部には粗いハケ目調整が施されたものが多く、その上に櫛や篋による圧痕文や凹線文が施される。内面の調整は、口頸部から胴部上半にかけてが指頭圧痕やハケ目による調整が、また、胴部下半にはヘラ削りが施されている。口径20cmを越える大型のもの(A 1 a)と、20cmに満たない中型(A 1 b)の2種類に分けられ、櫛描波状文はA 1 aに付けられている。

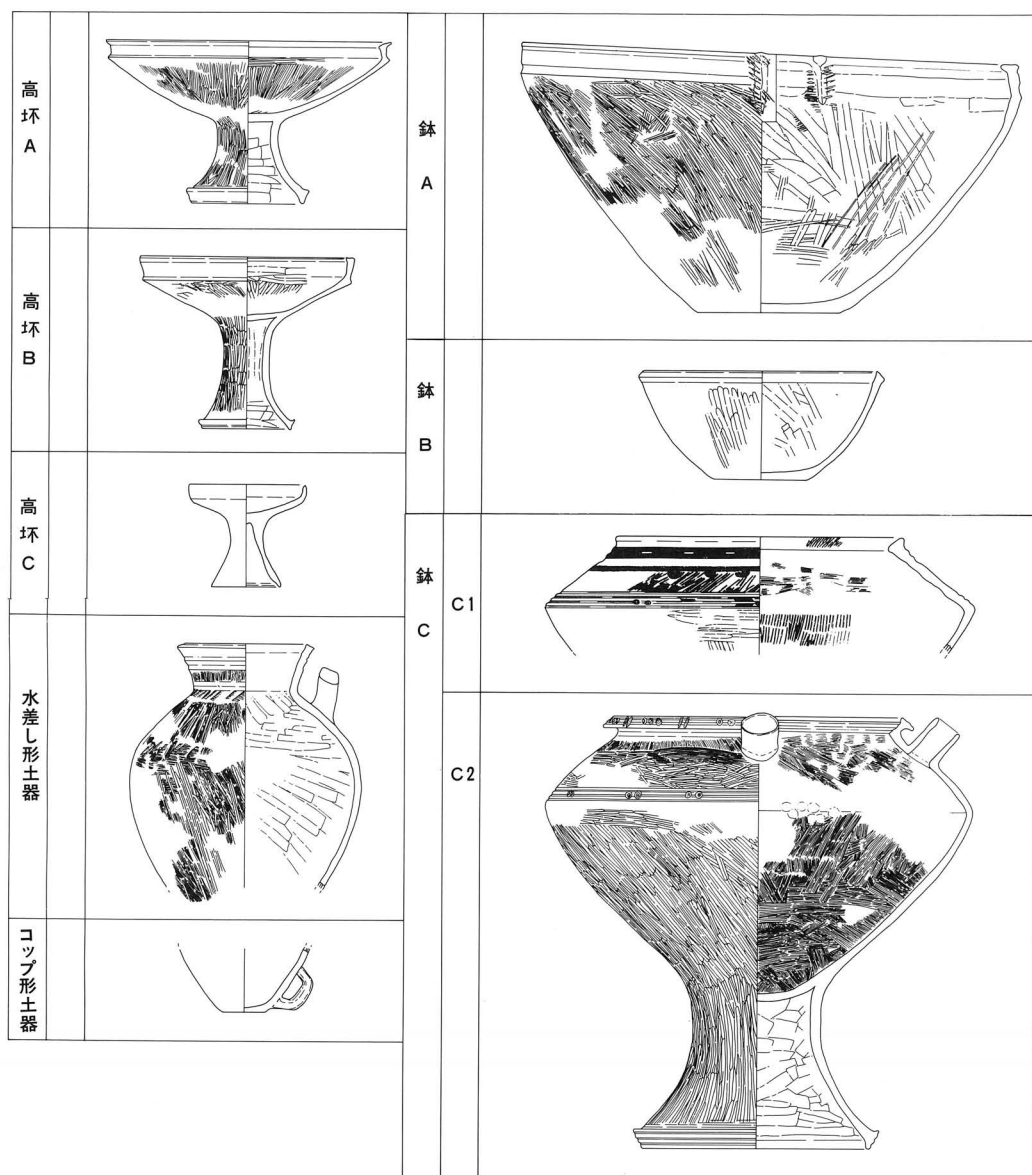
A 2 A 1同様、外上方または水平方向に開く筒状の頸部と、上下に拡張された端部の口縁を持つ口径20cmに満たない中型の壺形土器で、頸部は一般的に長めである。上下に拡張された口縁端部や頸部にはA 1同様、凹線や沈線・ヘラ描刻線文が付けられるが、櫛描波状文は皆無である。また、頸部下半や体部上半にはヘラまたはハケによる圧痕が巡らされている。これは器面の調整方法によってさらにa・bに分けられる。a類の調整は口縁部付近は強い横ナデが加えられ外面に弱い突出が生じるものが多いが、頸部から胴部上半にかけては、縦または斜めのハケ目が、下半部には縦のヘラ磨きがそれぞれ施されている。胴部の最大径付近には、横方向のヘラ磨きまたは並行叩きが、胴部下半にはヘラ磨きがそれぞれ施される。内面は口縁端部付近が横ナデ、頸部から体部の境界付近が指頭によるナデ調整、体部上半が指頭とハケ目調整、下半はヘラ削りが施されている。b類の場合、器表面の調整は口縁付近は強い横ナデが加えられた後、頸部から体部上半にかけてはハケ目、下半部はヘラ磨きがそれぞれ施されているが平行タタキはみられない。内面はa類とほぼ同じ調整が加えられている。



第47図 北原～大法寺遺跡出土土器器種分類図



第48図 北原～大法寺遺跡出土土器器種分類図



第49図 北原～大法寺遺跡出土土器器種分類図

A 3 器高のほぼ半ば付近に最大径をもつ大きく肩の張った胴部と、やや斜め上方に開く筒状の頸部から水平方向に大きく開く口縁部をもった土器である。上下に拡張された口縁端部と頸部には多数の沈線が、また、胴部上半には楕描の波状文と平行線文が交互に加えられている。器内外面の調整はA 2 aと同じ方法がとられている。

A 4 比較的短い頸部から外上方または水平方向へ開く口縁部をもつ壺形土器で、口縁端部

の形状や加飾の有無によってさらに4 aと4 bの二つに分けられる。4 aはA 1・A 2とは異なり、口縁端部の拡張の度合いが弱く、上方へつまみ上げるかやや肥厚させるかして平坦な端面を形成し、そこに1～2本の沈線または凹線を施している。また、頸部には同様の沈線の他、先端の平らな角棒による刺突文が加えられている。器面の調整は外面が縦または斜め方向のやや粗雑なヘラ磨きまたはハケ目調整、内面が頸部以下は粗いヘラ削りが施されている。4 bは、断面が方形に近い形状をもつ口縁部が頸部から斜め外上方に直線的にのびる形態をもった壺で、口縁部内外面を強く横ナデする以外なら装飾が施されず、器面調整も外面はハケ目を中心とする調整が頸部から胴部全面に、内面は胴部全体をヘラ削りによって仕上げるという単純な方法がとられている。これらA 4類の器面調整の方法は、外面の調整にハケ目・ヘラ磨き・平行叩きが用いられ、胴部内面のヘラ削りの範囲が大体胴部半ばで終わっているA 1・A 2類とは大きく異なっている。

A 5 頸部からいったん斜め外上方に伸びた後、下方に大きく垂下する口縁端部がつく形態の壺である。口縁の折り返し部分には櫛による圧痕が加えられ、頸部には粗いハケ目が施された後、凹線が加えられる。口縁部から頸部にかけての破片が1点出土しているだけで、胴部以下は不明である。

壺B 筒状の口頸部がほぼ直立する一般に直口壺と呼ばれるものである。口頸部の形態からさらに細分される。

B 1 頸部から筒状に伸びる口縁の端部は尖り、器外面はハケ目調整、内面は頸部付近までヘラ削りが施されている。口頸部は無文である。

B 2 球形に近い胴部から筒状にのびる口頸部が器高のほぼ半分を占める形態の壺で、長大な口頸部は十数条の凹線文B種とヘラ圧痕文によって埋め尽くされている。器面調整は壺A 2と同様の方法が用いられている。

B 3 筒状の口頸部はハケ目調整の後に凹線文が施され、ヘラ圧痕文が加えられるものもある。同様の圧痕文は胴部にも認められる。口縁の形態は外反して端部を内外に拡張したり平坦にしたものと、内湾気味で端部が丸くおさめられるものなど幾つかに分類できる。

B 4 大きく肩の張った胴部に短い筒状の口頸部がつく。口縁端部は内側に僅かに拡張され平坦面を形作る。器面調整は外面は全てハケ目調整、内面はヘラ削りが頸部まで施されている。

壺C 二重口縁壺あるいは複合口縁壺と称される大型の壺で、今回の調査では1個体しか出土していない。本来は屈曲して直立する口縁の形態をとるが、本例はその屈曲の度合いが弱く、口縁部には複数の凹線が、また頸部には格子目文が巡らされている。器面調整は、外面では凹線が巡らされる口縁以外は全面にハケ目調整が、また、内面は口頸部がハケ目、胴部は粗いヘラ削りがそれぞれ施されている。

壺D いわゆる無頸壺で、口径が30cmの比較的大型のものと8cmの小型のものがあるが、何れも口縁下に4条の凹線が認められる。形態の明らかなものでは胴部は算盤玉形に張る。

壺E 球形に近い形態をとると考えられる胴部に、短い頸部とくの字形に外反する口縁が付く。口縁端部は上下に拡張され、凹線が施されている。胴部内面の調整は上半部は指頭によるナデ調整または圧痕とハケ目調整が、下半部はヘラ削りがそれぞれ施されている。

壺F 球形に近い形態の胴部に上方に直立気味に立ち上がる短い口頸部が付く。口縁端部は内外に拡張されて平坦面を作り、頸部には刻み目をもった断面三角形の突帯がタガ状に巡らされている。器面調整は、口頸部が内外面とも横ナデ、胴部外面はハケとヘラ磨き、内面は指頭圧痕とハケまたは板ナデが施されている。また、肩部付近にはヘラによる圧痕が加えられている。

甕形土器

壺形土器とともに出土土器の中心を占めるが、その種類は少ない。口縁部の形態から4種類に分かれる。

甕A 口縁端部の断面が方形に近い形態を持つものである。

甕B 口縁端部が上方にのみ拡張されるもので、拡張の度合いで2つに分けられる。

B1 口縁端部の上方への拡張が弱く、断面が三角形に近い。口縁端部には凹線が付けられるものと無いものの両者が見られる。

B2 口縁端部の上方への拡張が著しいもので、拡張された端部には本数に差はあるが凹線が付けられている。胴部外面の調整は、全面をハケ目調整しただけのものや、ハケ目調整の後にヘラ磨きを疎に加えたものが多い。内面の調整はヘラ削りが頸部まで及ぶものと、甕C2と同じような調整が施されたと考えられるものに分けられるが、前者が圧倒的に多い。

甕C 口縁端部が上下に拡張されるもので、拡張の度合いと調整方法でさらに2つに分けられる。

C1 口縁端部の上下への拡張が弱いもので、胴部の調整は内面のヘラ削りが頸部近くまで施されるものが殆どを占める。出土点数は次のB2同様、僅かである。

C2 口縁端部は上下へ大きく拡張され、何条かの凹線文や円形浮文がつけられている。また胴部の最大径を有する箇所には往々にしてヘラまたは櫛による圧痕文が巡らされる。胴部の調整は、外面の上半が平行タタキの後、刷毛またはナデ調整が加えられ、下半部は底部付近までヘラ磨きがほどこされている。内面は上半部は指頭圧痕にハケ目またはナデを加え、下半部はヘラ削りが加えられている。出土点数は少ない。

甕D くの字形に強く外反する口縁に比較的短い胴部がつく。口縁部から頸部にかけて横ナデがほどこされるが、頸部と胴部の境は特に強く撫でられ凹線状にくぼむ。胴部外面は全面

ヘラ磨き、内面は頸部までヘラ削りが施される。

高杯 杯部の形態から3種類に分類される。

高杯A 杯部より明瞭な稜をもってほぼ直立する口縁の端部が外方に拡張されたもので、脚端部は斜め外上方に拡張される。杯部と脚部の接合には円盤充填法が用いられる。

高杯B A類同様、杯部から明瞭な稜をもって直立する口縁端部は内外方向に若干拡張され、平坦面を形成する。脚端部は斜め外上方に拡張されるものと拡張されず丸くおさめるものがある。杯部と脚部の接合は円盤充填法。

高杯C 杯部と口縁部との境は直立気味に立ち上がるもののB類のように明瞭な稜を持たないタイプで、脚端部は拡張されない。杯部と脚部は円盤充填法で接合される。

水差し形土器 卵形に近くやや肩の張る胴部に斜め外上方に直線的に開く口頸部がつく。口縁端部は平坦につくられ、頸部には凹線が、また胴部上半にはヘラ圧痕文が巡らされ肩部には把手が横に取り付けられている。器面調整は壺A2類と同様の方法が行われている。

コップ形土器 平らな底部から斜め外上方に直線的に伸びる把手がつけられているが口縁の形態や調整は遺存状態が悪く不明である。

鉢 形態と法量により3つに分けられる。

鉢A 口径50cm前後の大型のもので、平底の底部からいったん斜め外上方に伸びた胴部は口縁部に近づくにしたがって内湾する。口縁端部は内外に拡張され、平坦面を作る。

鉢B 口径25cm前後の小型のもので、口縁端部は外側にむかってさがり内面は強く横撫でが施され口縁に並行して凹線状にくぼむ

鉢C 算盤玉形に強く張る胴部を持つ大型の鉢で肩部には注口を持っている。口縁の形態から2種類に分類される。

C1 無頸で算盤玉形の胴部に続く口縁端部は斜め上方に拡張されている。

C2 算盤玉形の胴部にくの字状に外反して伸びる口頸部がつく。口縁端部は上下に拡張されている。

今回の調査で壺A1類としたものは、紫雲出山遺跡の報告中の広口壺A2類とされた資料の中でも(2)口径20cm前後あるいはそれ以上の大型のものとされた土器にあたるもので、報告書の中では中期3から4にかけての時期に位置づけられている。この類の土器の頸部の文様は普通、何条かの凹線とヘラ圧痕文で構成されているが、SK1001の31は特殊で、頸部に確

認できるだけでも10条の太い凹線が巡らされている。この土器は岡山県雄町遺跡、鹿田遺跡、百間川遺跡など吉備地方でⅣ様式の中段階に位置付けられている高橋 護氏の編年のⅤ－b期からⅥ－a期の壺の口類に類似し、この地域からの搬入品の可能性も考えられる資料である。

壺A2類は、口径20cmに満たない中型の壺で出土点数が最も多いものである。この土器は紫雲出の報告中で広口壺A2類中の中・小型の土器の系譜を引くと考えられるものにA3類とされた頸部に凹線を多条に巡らすものを加えたもので、拡張された口縁部への強い横ナデや胴部外面の調整が上半部をハケ目、下半部をヘラ磨きによって仕上げる点などが共通する(3)。ただ、紫雲出遺跡のこのタイプの壺を飾る口縁端部の円形浮文・棒状浮文や口縁部内面の斜格文・斜線文、頸部の凸帯文などは皆無に等しく、逆に紫雲出で全く認められなかった並行叩きが殆どの土器に施されている。これら紫雲出遺跡で認められた文様はおおむねⅢ様式からⅣ様式の古い段階のものと考えられ、このA2類はそれよりも更に新しい段階のものであろう。このA2類は、前回の北原遺跡の調査で中期末あるいは後期とされた西地区の土壌1や土壌2、今回の調査のSK1010出土の壺の中心的な位置を占める土器で、讃岐では後期初頭の上天神遺跡や大空遺跡の中に類似する形態のものが認められる。

壺A3は出土点数が4個体と少ないうえに、SK1010出土の103以外は頸部または胴部の小片のため詳細は不明な点が多い。103は頸部が長く、肩部の張りも顕著で形態的にはA2とはかなり異なるが器面調整の方法はほぼ同じで、口縁端部と頸部には沈線化してはいるものの凹線が多条に巡らされ、胴部上半は櫛描きの直線文と波状文が交互に施される中期的な色彩の強い土器である。徳島市南庄遺跡19号土壌から類似する文様モチーフと調整のある壺が出土している。櫛描き波状文自体はA1類の口縁内面の文様として使用される例はあるものの壺の胴部に施文される例はA3類に限られる。

壺A4はこれまでの広口壺A1～3が何れも形態や文様などが中期Ⅲ・Ⅳの土器からその系譜を追うことが可能であったのに対して、それまでの土器の系譜とは異なる全く新しい流れのもとに成立した土器と考えられるもので、このことは口縁部の形態と器面調整に最も端的に現れている。これまでのA1～3の壺の多くが口縁端部を上下に拡張するものが普遍的に見られたのに対して、A4では上方のみに拡張するものや単に肥厚させただけのものが多く、明確に上下に拡張されるものは認められない(4)。また、器面調整の方法もA1～3が外面の場合は頸部から胴部上半にかけてがハケ目、下半部がヘラ磨き、内面の場合でも頸部が指頭によるナデ調整、胴部上半が指押さえ＋ハケ目、下半がヘラ削りと言うように全体をいくつかに分割してそれぞれ異なる調整を施すという中期的な要素を踏襲していたのに対して、A4では胴部内面全体がヘラ削りによって処理されていると言う点で、より新しい後期的な要素を持った土器といえる。また、主として頸部付近に認められる圧痕文も、それまでのへ

うまたはハケを用いたものとは異なり先端の平らな棒状の施文具で斜めに刺突するように施している。

A 5 の壺は口頸部のみの破片であるが、よく締まった頸部と大きく垂下した口縁端部はそれぞれ凹線が数条ずつ巡らされ、口縁の屈曲部内面には櫛による圧痕文が加えられている。このような形態の口縁端部を有し凹線文がつけられる壺は、主として畿内とその周辺地域に広く分布するが、この75の例のように口縁部と頸部の何れにも凹線が施されるものは摂津を例にあげると従来のⅢ様式末からⅣ様式の古い段階に成立するようで、この75も少なくともⅣ様式段階に畿内の何れかの地域からの搬入されたものであろう。このタイプの壺は前回の調査を含めてもこのS K 1006出土の1点だけである。

壺Bはいわゆる直口壺と称されるもので紫雲出の報告中では壺Cに分類されるものであるが、B 1のように口頸部が全くの無文で胴部内面がヘラ削りによって調整されるものは報文中には見あたらないようである。B 2類はS K 1010から1点だけ出土したもので、器高の半分近くの長さを持つ口頸部には中央部のヘラ圧痕文帯をはさんで凹線文B種が全面に施されている。同じB 2類の壺は前回の調査でも東地区土壌4で1点出土している。一見後期の長頸壺と関連づけられるような土器であるが、器面調整には壺A 2類やB 3類と同じ方法が用いられており、短頸の直口壺の口頸部分が長大化したものという前回の解釈が妥当だと考えられる。B 3類は紫雲出報告書中のC 2・3類に最も近いものであるが、C 3のように口頸部に凹線を7～8条も加えたものはない。唯一器形のあきらかな38では器面調整はA 2類の壺と共通の方法が用いられ、頸部や胴部には凹線文以外にヘラ圧痕文が加えられるがこのような圧痕文は他の同類の壺にも認められる。器面調整の方法はB 2類と同じ手法がとられる。38と同様の形態の壺は讃岐の後期初頭の大空遺跡や上天神・末則1号墳北端ピットから出土しているが上天神や末則例では胴部内面のヘラ削りの位置が頸部との境付近まで及び、調整方法はB 1類に類似している。B 4類は特異な形態の直口壺で全形を伺えないため明確なことはいえないが、直口壺に含めるよりもむしろ無頸壺の変化したものと考えたほうが妥当なのかもしれない。S K 1004から壺A 4類とともに2点出土しているだけであるが、類似するものは岡山県上東遺跡才の町D-Zから出土し、後期初頭に位置づけられている。

壺Cも紫雲出報告中で壺B 3とされたもので畿内第Ⅳ様式の同種の壺と関連づけられ、一般には中期末で消滅すると考えられている器種である。今回の調査では出土点数はS K 1010から1点出土しているが、前回の調査でも西地区土壌15からⅣ様式段階と考えられる水平口縁の高杯とともに1点出土しているだけで、本県ではもともと出土点数の少ない器種である。

壺D・Eは紫雲出の報告でそれぞれD 2・E 2とされるもので、両者とも中期4の時期に比定されている。しかし、E 2については紫雲出の資料中には頸部に断面三角形の凸帯や指頭圧痕文凸帯・刻目文凸帯を施す例があるが本遺跡の場合、そのような凸帯文の文様自体が

皆無に近い。

甕AはBに次いで出土点数が多いが、胴部内面のヘラ削りは観察できるものはすべて頸部付近まで施されている。Bは最も出土数が多く、本遺跡の甕の中心となるものである。器面調整は、口縁端部の拡張の度合いにかかわらず胴部外面はハケ目調整の上に不規則なヘラ磨きを加え、内面は頸部との境付近までヘラ削りを加えている。ただ、S K 1001の35は紫雲出遺跡で壺Fとされる土器の可能性もある。また、S K 1002出土の43はB類に属しながら胴部外面上半は叩き目とハケ目、下半はヘラ磨き、内面上半は指頭とハケ目、下半はヘラ削りというC 2類と同じ器面調整の方法をとる唯一の例である。前回の調査でも完形品が一個体出土しているが、胎土や胴部上半が著しく張る器形は今回S K 1010から出土した甕C 2に含まれる141に類似している。甕C類でもC 1としたものは口縁端部の形態が異なる他は器面調整はA・Bの甕と変わらない特徴を有するものであるが、C 2類に分類されるものは器面調整に叩き目の技法を採用するが、内面の調整は上半部が指頭とハケ目、下半部がヘラ削りと言うように中期的な調整方法が用いられている。前回の調査を含めて本遺跡出土の甕に叩きの技法が採用されたものはまれで、今回の資料では4例が確認されているだけである。叩き目の技法は隣接する讃岐では中期後半に出現し後期初頭まで残るとされている。特にS K 1010出土の141は胎土中に砂粒と角セン石の結晶を多量に含み讃岐地方からの搬入品の可能性の高い土器である。

高杯A類は前回の報告で口縁端部を外方に拡張する「S字形」に近い形態が後期的様相として捉えられたものである。ただ、口縁部の立ち上がりはB類と同じくほぼ直立しているかやや内傾気味で、隣接する香川県の後期初頭に位置づけられている大空遺跡や上天神遺跡出土例のような口縁部を斜め外上方にのぼし端部を内外に拡張する形態のものとは異なり、胴部との接合は円盤充填方が用いられている。今回はS K 1010から1点出土しただけである。B類のように杯部との境に明瞭な稜を作り出し、ほぼ直立する口縁部の形態をもつものは隣接する讃岐では良好な資料は見あたらないが、吉備地方では仁伍式あるいは鬼川内0とされる段階に一般化する形態のようである。

鉢Aは紫雲出山遺跡出土の大型鉢の系譜を引くもので、前回の調査でも出土例がある。讃岐では大空遺跡の後に位置づけられる一の谷遺跡群大形土坑から出土しており確実に後期まで下る器種である。

鉢Cとした注口付脚台付き鉢形土器は瀬戸内地方を中心に分布する特殊な形態の土器で、出土例も多くない。今回の調査では形態の異なるものが2例出土している。C 1類とした無頸のものは、口縁から算盤玉形を呈する胴部上半にかけての破片で胴部下半から脚台部の詳しい形態は不明であるが、内傾が強い鉢の部分に凹線文や簾状文・扇状文・円形浮文などで飾り口縁端部が斜め上方に拡張される例は広島県塩町遺跡例など一般的に畿内第IV様式並行

段階の時期に多く出土している。一方、C 2 類の「く」の字形に外半する口頸部の端部を上方または上下に拡張するものは、前者より若干遅れて出現し後期初頭まで続くとされる形態のものである。このC 2 類と同じ形態のものは徳島市南庄遺跡の19号土壇からほぼ完全な形のもので出土している。この南庄出土のものは口縁端部の形態や、鉢の肩部に加えられる装飾がヘラ圧痕文であること、器面調整に若干差があることを除けば125の土器に極めて類似するものである。この南庄出土例については調査者は中期末の年代を与えているが、近年発表された注口付脚台付き鉢形土器の集成と編年では南庄の遺物に対して一括性に疑問を投げ同じ土壇内から出土した高杯の脚の形態などから後期に降るものとしている(5)。ただ、口縁部の形態が非常に類似する脚台付き鉢形土器が雄町 5 類のなかに存在している。

出土弥生土器の問題点

本遺跡出土の土器の特徴とその編年的位置づけについては、先述したように1988年の土成町北原遺跡の報告の中で調査者の一人である林慎二氏がその特徴と年代について述べている。その中で、当時の県内の中期から後期初頭の土器の様相の不明瞭な状況を踏まえながら、壺・甕・高杯・鉢など出土した弥生土器のほぼ全ての器種に用いられている凹線文という特徴から、凹線文の盛行する中期後半の畿内第Ⅳ様式平行期の時期に最も近いとする一方、甕の調整に多用される内面のヘラ削りの位置に関する従来の考えから、圧倒的に多い内面上部までのヘラ削りという現象をもとに、より後期的な要素も同時に備えていることを述べ、中期最終末に位置づけている。この甕の内面ヘラ削りについては、東地区土壇 3 出土の甕を取り上げ、ヘラ削りが内面下半しか施されない中期的な特徴の個体と、頸部近くまで加えられる後期的な個体が共存する事実を述べている。また、同じ土壇 3 から出土した高杯や鉢・壺からも中期と後期の土器相の双方を共有する状況を指摘するいっぽう、香川県紫雲出遺跡出土の遺物との比較から、壺の頸部に多用されるハケまたはヘラ状工具による列点文や同じ壺に施される器面調整の方法、胎土などから北原遺跡の土器相を讃岐との強い関連性が伺える資料としてその系譜にも触れている。その後、1992年、「土器から見た瀬戸内の弥生文化 瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性」と言うテーマで松山市で開かれた古代学協会のシンポジウムの中で、菅原康夫氏はこの北原遺跡の土壇 3 の土器に同じ遺跡の西地区土壇 2 の遺物を加えて後期Ⅰとし、後期最初頭の段階に位置づけて林氏の年代観とは若干異なる見解を示した。これは氏が弥生時代中期最終末の土器相を「凹線文の盛行と甕の内面ヘラ削り→凹線文の退化・無文化、甕内面上半までのヘラ削り」という流れで捉えた結果であると考えられる。しかし、これは前回の北原遺跡の出土土器の編年的位置づけに対して 2 人の見解に若干の差があるにも関わらず、少なくとも畿内第Ⅳ様式並行でも新しい段階以降のものであるという点では認識が一致していることを示している。事実、林氏が分析の際に比較の材料に用

いた畿内第Ⅳ様式並行期の紫雲出Ⅲの遺物と比較しても、凸帯文がほぼ皆無に等しく、櫛・竹管などによって描かれた斜線文・斜格文などの各種の加飾性に富んだ文様が少ないことはⅣ様式並行の中でも新しい段階に属するという印象が強く、2人が指摘するように中期最終末から後期初頭の時期という編年の位置づけは当を得たものであったと考えられる。この中期最終末から後期初頭にかけたの時期の資料は、本県の弥生土器と密接な関係にあり、編年と資料の蓄積が進んでいる香川県でも比較的まとまったものとして公表されたものは大空・末則・上天神の各遺跡以外になく、不明な部分が多い。ただ、今回の調査資料中には、本遺跡の弥生土器が若干の年代的な幅を有するものであることが推測できうる遺物が出土していることから、ここでは2人の指摘を踏まえながら各遺構出土の弥生土器の組成と特徴から派生する問題について記述を進めてゆきたい。

今回の調査では、S K 1005・1010・1011の遺構から多量の弥生土器が出土し、それ以外にもS K 1001・1006でも比較的まとまって出土している。これらの遺構出土土器は、広口壺A類や直口壺B類の出土比率や特徴によって大きく2つのグループに分けられる。ひとつは、S K 1006出土遺物を中心とする、壺が大型の広口壺A 1によって占められるもので、同じグループに属するものとしては他に資料が少ないがS K 1001があげられる。出土したA 1類の壺はいずれも口径20cmを越える大型のもので、口縁部から頸部にかけては凹線文の他に棒状浮文が施されるものもあり、比較的加飾に富んだ土器である。また調整に用いられるハケ目はかなり太いものを使用されていることも注目される。この他に、S K 1001では壺A 2が、1006ではB 3が出土している。この1006のB 3と同じ口縁部の形態のものが紫雲出遺跡の壺Cの中にある。もうひとつはS K 1010出土遺物を中心とするもので、1011もこれに属する(6)。これは広口壺A 2類とA 4類が壺の中心を占め、これにA 1類やB 1類その他の壺が若干加わっている。A 1類はS K 1006出土のものなどに比較して口径20cm以下の小型のものが出現し、口頸部の文様も口縁端部の凹線や頸部のへう圧痕文以外は認められず、棒状浮文・櫛描波状文は見られない。この際に注目されるのはS K 1005出土の遺物である。S K 1005では壺A 1が1個体、A 4が3個体出土している。A 1とA 4の壺の共伴はS K 1010・1011でも認められ、A 4類の比率からいっても本来は後者のグループに含められる資料であるが、A 1の壺の口縁部内面に櫛描波状文が施されていることや、共伴する直口壺BがA 1・A 2と同じ調整が施されるB 3であることなど、S K 1001・1006のグループにつながる要素も持っている。直口壺B類はS K 1010・1011でB 1が1点、これと同時期と考えられる前回の東地区土壌3からB 1・B 3が1点ずつ出土している。ただ、前回のB 3類の壺の調整は胴部内面のへう削りがB 1類と同じく頸部との境界付近まで施され今回の1005のB 3類とは異なっている。この直口壺B 3の調整方法に関係する資料として、1992年度に県文化課によって調査された阿波郡阿波町長峰遺跡で出土した土壌一括資料があげられる(7)。畿内第Ⅳ様式段階の

高杯Fを伴う出土遺物の中にはB 3類が数個含まれているが、胴部内面のヘラ削りの位置には胴部下半のみのものと頸部付近までの両者が出土し、これ自体が明確な時期差をもつものでないことが明らかになっている。このようなことを考慮するとS K 1005はよりS K 1010に近いと考えることが妥当であろう。

以上の2つのグループのうち、S K 1001・1006については口頸部に施された文様などが紫雲出遺跡の資料に近く、時期的に1010などに先行するものと考えて誤りはないと考えられる。特にA 1類の壺・31や鉢・78は吉備地方での高橋護氏の編年のV - bからVI - a段階のものに類似し、紫雲出遺跡の紫雲出Ⅲに後続する時期のものであろう。S K 1010・1011については前回の土壌出土の遺物と共通するものが多く、ほぼ同時期のものと考えられるが、その編年の位置づけには前回の報告のように中期最終末のものとし後期に降る可能性があるとする考えと、後期初頭に位置づける二通りの見解があることは先述した通りである。前回の報告では中期的な要素として、壺に施される凹線文や櫛あるいはヘラによる圧痕文などの文様や、甕の一部に見られる胴部内面の過半数のみのヘラ削りを、また、後期的要素としては、壺や甕の一部に見られる胴部内面上半のヘラ削りや甕の胴部外面のハケとヘラ磨きによる調整、高杯A類の口縁端部の外方への拡張をあげているが、これらは今回のS K 1010・1011出土の土器にも全て共通するものである。このうち、中期的とされた凹線文や櫛・ヘラなどの圧痕文は香川県の後期初頭の大空遺跡出土遺物や上天神S K 19出土土器、末則古墳北端ピット出土の土器に認められ、甕の胴部内面下半のヘラ削りも末則古墳出土の甕を見る限り後期初頭まで残り、いずれも中期の決め手にはならないと考えられる。一方、一部の壺や殆どの甕に認められる後期的とされる胴部内面上半へのヘラ削りも先行する1001・1006でも一般的でこれも中期的とされる要素同様、後期の決め手になるものではない。また、高杯Aは口縁端部の外方への拡張を見れば後期的と言えないこともないが、大空遺跡や上天神、末則例のように杯の屈曲部のすぐ上から斜め外方に拡張される形態とは異なり、杯部と脚部の接合にも中期に一般的な円盤充填法が用いられている。ただ高杯については、先行する1006段階でも言えることであるが吉備地方のⅣ様式中葉以後のものと比較すると脚部には凹線文以外の装飾が全く見られないことや、脚端部を拡張しないものが少なからず認められることなどから、この時期には壺A 2類とともに独自の形態のものが存在した可能性が強く、円盤充填法が存在するからといって中期と言い切ることも出来ないのが実状である。この他に、S K 1010段階で今回新たに出土した遺物として、鉢C 2類に分類した注口付き脚台付鉢形土器や壺A 3・C・D 1がある。本遺跡の注口付き脚台付鉢形土器に類似する例は、本県では徳島市南庄遺跡19号土壌例がある。この南庄遺跡の資料については先述したようにそれぞれ中期末と後期初頭に位置づける2通りの見解があるが、口縁部の形態は他の後期の例よりも中期の雄町5類のものに類似している。事実、この土器が出土した南庄遺跡19号土壌の他の遺物をみて

も、透かしの入った高杯の脚意外は櫛描波状文や凹線文B種の施された壺に代表されるように一般に中期に属すると考えられているものによって占められている。壺A 3類も同じ南庄の19号土壌から出土しているが、南庄例の壺の頸部の文様が凹線文であるのに対して本例は沈線が施され、やや新しい様相を示している。また、壺CやD 1も一般的には中期で終わるとされる形態の土器であるが、C類の場合には内面のへう削りの範囲が頸部との境まで及んでいる。このように前回、中期末あるいは後期初頭とされた資料と同時期と考えられるSK 1010・1011出土の個々の資料を検討すると、前回以上に中期的要素と後期的要素が混在し、その編年の位置づけを困難なものにしている。ただ、壺A 4類についてはSK 1004から後期初頭の上東遺跡才の町D-Z出土の壺に類似する壺B 4類とともに出土していることから、上限はともかくその下限が後期に下がる可能性が強いと考えられる。このA 4類に特徴的な胴部内面のへう削りについては、先述した阿波町長峰遺跡の畿内第IV様式段階並行の土壌一括資料のなかのB 3類の壺に胴部内面のへう削りが頸部との境付近まで施される例が存在することから、中期段階で壺の一部にもA 4同様の胴部内面の広範囲なへう削りが採用されていることは間違いないと考えられ、今後の壺A 4類の系譜を考えるうえで注目される。

本遺跡出土の土器は、前回の調査で中期末あるいは後期初頭と大きく一時期のものとしてとらえてきたものを、今回新たに加わった資料をもとにSK 1006に代表される確実に中期に位置づけられるグループと、それに後続するSK 1010のグループに分類し、前者に関してはある程度編年の位置づけを行うことができた。しかし、後者については前回、中期的あるいは後期的とされた特徴を具体的に検証する過程で従来の時期区分の概念を適用できない資料であることを再認識させられる結果となった。これを確実なものにしてゆくにはすでに編年の確立された他地域の遺物の遺構内での共伴例を調査によって検証してゆくことが今後とも必要であろう。また、この2つのグループの差はSK 1005出土の一群の土器が示すように、両者に共通するものが多く、その変化が非常に漸移的であったと考えられるが、一括遺物を中心とした土器の分析によっては今後これらの土器の詳細な流れを把握することも十分可能であろうと思われる。

4 まとめ

本遺跡出土の弥生土器は、前回の調査以来、その編年的位置づけには異なる見解がとられてきたが、今回はそれを確実に中期に属するものとそれ以後の2時期に区分した。ただ、その内容をみると両時期の土器とも相互に類似する特徴をもち、個々の遺物だけでは所属時期を決定することができないものが多い。また、壺や高杯には壺A2類やA4類、高杯A類など、形態や調整方法に独自のものを持ったものが少なくない。出土点数の多い壺A2類の胴部外面は胴部最大径付近とその上下ではハケやヘラ磨きなど種類や方向が異なる調整が胴部を3分割するように施されている。このような胴部外面の調整はそれ以前のⅢ様式並行段階の中小型壺でも認められ、A2類がこれらの系譜の上にあることを示しているが、A2類では新たな要素としてこれに叩き目を加えた例が多く出土している。これは恐らく畿内周辺から叩き目の技法が導入された時点でこれらの壺の調整に新たに採用されたと考えられるが、同時期の甕に叩き目の調整が施される例が極端に少ないのとは対比的である。壺A4については、先述したようにA2類とは異なり、それまでの壺のなかからはその系譜がたどれない土器である。すべての個体に認められる胴部内面のヘラ削りの位置や、外面全面に施されるヘラ磨きの調整の粗雑さなど後期的な色彩の強い土器で、事実、SK1004出土例から下限はほぼ後期まで降ると考えられるが、上限に関してはその系譜同様、明かではない。この土器の系譜と時期の上限が明かにされたなら、SK1010をはじめとする遺物群の所属時期もある程度決定されるものと考えられる資料である。高杯に関しては、A類の杯の形態に独自のものが認められる一方、脚部についてはA・B・C類を問わず凹線以外の分様が全く施されていない。北岸下流域の光勝院寺内遺跡では、紫雲出Ⅲ式並行に位置づけられている一群の土器の高杯の脚部には少量ではあるがヘラ描沈線文や透かしが施された例が存在することから考えて、それ以降に急速に無文化が進んだものと考えられる。

以上のように本遺跡の土器はいずれも中期後葉から後期にかけての時期に属すると考えられるが隣接する地域と比較すると独自色をもったものが少なくなく、系譜をたどれないものが少なからず存在する。しかも、その前後の時期の遺物に関してもいまだに公表されたものは少なく、地域も限定されているのが実状である。したがって本遺跡の土器も今後の新たな資料の増加によって時期や系譜・地域色に対する認識を大きく変更せざるをえない場合も充分考えられる。今後の研究の進展に期待したい。

註

1 前回の調査の際の土器の分類と今回の関係は以下の通りである。

壺 A 1 類：前回の A b 1 類の一部

A 2 類：前回の A b 1 類の一部

A 3 類：前回の出土例なし

A 4 a 類：前回の A b 1 類と A d 類の一部を合わせたもの

A 4 b 類：前回の A a 1 類に該当

A 5 類：前回の出土例なし

B 1 類：前回の分類と同じ

B 2 類：前回の分類と同じ

B 3 類：前回の分類と同じ

B 4 類：前回の出土例なし

C 類：前回の A c 類

D 類：前回の出土例なし

E 類：前回の A a 1 類

F 類：前回出土例なし

甕 A 類：前回の A 1・A 2 類

B 1 類：前回の B 1・B 2 類の一部

B 2 類：前回の分類の B 1 類に含まれていたものの一部

C 1 類：前回の C 1・C 2 類の一部

C 2 類：C 1 類の一部

D 類：前回の D 類

高杯 A 類：前回の A a 類

B 類：前回の C・D 類

C 類：前回出土例なし？

鉢 A 類：前回の A 類

B 類：前回出土例なし

C 1 類：前回の壺 D にあたる可能性、注口の有無は不明

C 2 類：前回出土例なし

2 紫雲出遺跡の報告の中で A 2 類土器を、口径10cm前後あるいはそれ以内の小型品と、口径20cm前後あるいはそれ以上の大型のもの、口径が両者の中間にあるものにわけ、小型のものと大型のものについては、大きさ以外の点でも多くの差異をもち、口径が中間のものは両者の中間の性質をそなえているとしている。

3 S K 1011出土の壺151は A 2 b に含めたが、口縁端部の形態が畿内で広口短頸壺とされる土器

に類似する。

- 4 壺A 4 aとした土器の中でもSK1005の58と1010の107～1012などとは口頸部の形態が異なるため本来、分離すべきものかもしれない。
- 5 妹尾周三「注口付きの脚台付鉢形土器について」古代吉備第14集 1992の論文を参照
- 6 SK1010からは1990年の古代学協会四国支部第四回大会の際に菅原氏によって中期末aとされた南庄遺跡19号土壇出土の遺物の一部に類似するものが後期初頭とされた北原遺跡土壇3あるいは土壇2の遺物と共伴して出土している。
- 7 県教育委員会文化課の御好意で実見させていただきました。記して感謝いたします。

参考文献

- 鎌木義昌 六車恵一 「香川県高松市高松町大空遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』日本考古学協会 1961
- 小林行雄 佐原真他 『紫雲出』詫間町教育委員会 1964年
- 正岡睦夫ほか 「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1972
- 柳瀬昭彦ほか 「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977
- 渡部明夫 「末則古墳調査概報」『香川県埋蔵文化財調査報告』香川県教育委員会 1977
- 高橋護 「弥生土器－山陽－」『考古学ジャーナル』ニューサイエンス社 1980
- 菅原康夫 高橋正則 『光勝院寺内遺跡』徳島県教育委員会 1984
- 徳島市教育委員会 「南庄遺跡発掘調査現地説明会資料」 1985
- 真鍋昌宏 横田周子 『矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会 1987
- 林慎二 谷匡人 『土成町北原遺跡』徳島県教育委員会 1988
- 大久保徹也 「上天神遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』香川県教育委員会 1988
- 西岡達哉他 「一の谷遺跡群」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第7冊 香川県教育委員会 1990
- 地学団体研究会吉野川グループ「土成町の地形・地質と古生物」『総合学術調査報告 土成』土成町・阿波学会・徳島県立図書館 1990
- 福家清司編 『土成前田遺跡』徳島県教育委員会 1990
- 『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性 古代学協会四国支部第四回大会資料』古代学協会四国支部 1990
- 「下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会 1990
- 妹尾周三 「注口付きの脚台付鉢形土器について」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会 1992
- 正岡睦夫 松本岩雄編 『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社 1992

第1表 北原～大法寺遺跡遺構一覧表 (1)

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S B 1001	B・C-29・30・31	572	558	20	弥生土器片、石鏃等	
S B 1002	D・E-30	315	292	53	弥生土器片、磨製石斧、石鏃等	
S K 1001	C-10・11	162	91	60	弥生土器片 打製石包丁等	
S K 1002	C・D-12・13	366	313	17	弥生土器片 砥石、打製石包丁等	
S K 1003	B-13・14	166	113	15	弥生土器	
S K 1004	E-9・10	133	95	30	弥生土器片 石鏃、打製石包丁	
S K 1005	G-14	198	54	24	弥生土器片	
S K 1006	E-14	314	142	21	弥生土器片 砥石、打製石包丁	
S K 1007	B・C-24・25	352	258	23	弥生土器片、石鏃、打製石包丁、鉄鏃等	
S K 1008	D・E-29	232	110	44	石鏃	
S K 1010	E-39	198	153	62	弥生土器片 打製石包丁、砥石	
S K 1011	C・D-34・35	131	108	41	弥生土器 打製石包丁等	
S K 1012	A・B-19	270	80	30	弥生土器片	
S P 1001	D-39	32	28	17	無	
S P 1002	D-38・39	34	29	39	弥生土器片	
S P 1003	E-38	30	24	14	無	
S P 1004	D-36	32	31	24	無	
S P 1005	D-35	21	18	12	無	
S P 1006	D-35	29	26	17	弥生土器片	
S P 1008	D-35	24	23	21	弥生土器片	
S P 1009	D-34・35	40	39	41	弥生土器	
S P 1010	D-34	48	47	26	弥生土器片	
S P 1011	D-34	47	41	23	弥生土器片	
S P 1012	D-34	65	50	24	弥生土器片	
S P 1013	D-34	56	50	18	弥生土器片	
S P 1014	C-34	88	46	18	無	
S P 1015	D-33	26	24	22	無	
S P 1016	D-33	26	26	26	無	

北原～大法寺遺跡遺構一覧表 (2)

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S P 1019	C-32	26	22	9	無	
S P 1020	C-32	36	32	23	無	
S P 1022	E-30	21	16	10	無	
S P 1023	D-29	30	20	14	無	
S P 1025	D-28・29	26	25	14	無	
S P 1026	D-28	31	24	18	無	
S P 1027	D-28	26	20	16	無	
S P 1028	A・B-26	48	44	31	無	
S P 1029	A・B-26	41	39	26	弥生土器片	
S P 1030	A・B-26	59	54	45	弥生土器片	
S P 1031	A・B-26	49	45	29	無	
S P 1032	D-24	41	37	28	無	
S P 1033	D-24	25	22	21	無	
S X 1001	F-14	80	60	12	無	焼土がつまる。
S X 1002	B-16	46	35	18	無	
S X 1003	B-16・17	44	29	35	無	
S X 1004	G-17	75	28	23	無	木炭、焼土を多く含む。

第2表 北原～大法寺遺跡出土遺物観察表 北原～大法寺 S B 1001

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
1	壺 E	口径17 胴部最大径 37	肩の張った球形に近い胴部からななめ外上方にくの字に外反する短かい口縁がつく。口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条めぐらされている。胴部の最大径付近にはヘラ先による圧痕文がめぐらされている。	口縁部の内外面は横ナデ。胴部外面の上半はハケ目調整、下半はヘラ磨きを加えられる。内面は上半部が指頭圧痕の後、板またはハケによるナデ調整、下半部にはヘラ削りが施こされる。	黄褐色土	砂粒などをあまり含んでいない。	
2	壺 A 4 a	口径15	胴部からななめ外上方にのびたやや短かい口縁端部は上方にのみ拡張される。頸部と胴部との境には先端の平らな棒状工具による刺突文がめぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ。胴部外面はハケ目調整、内面は粗いヘラ削り。	明黄褐色		
3	甕 B 2	口径15.8	大きく肩のはる胴部からくの字形に短かく屈曲する口縁端部は上方にのみ拡張され、凹線が巡らされている。	口縁部内外面は横ナデ。胴部外面はハケ目、内面は指頭圧痕が残る。	にぶい褐色		

S B 1002

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
5	壺 A 4 a	口径 (22)	外反する短かい口縁の端部は断面方形につくられている。	口縁内外面は横ナデ調整、頸部以下はヘラ削りが施こされる。	明黄褐色土	砂粒を多く含む。	
6	壺 A 4 a	口径 (17)	口縁端部はやや上方に拡張され凹線が巡らされている。	口縁、内外面は横ナデ調整、胴部外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りが施こされる。	にぶい黄褐色	砂粒を多く含む。	
7	甕 A	口径 (16.5)	口縁端部は断面方形に作られる。	口縁部は内外面とも横ナデ調整。胴部外面はヘラ磨き。内面は頸部との境までヘラ削り。	にぶい黄褐色	砂と小礫を多く含む。	
8	甕 A	口径 (18)	口縁端部は上方に拡張され凹線が施こされる。	口縁部は内外面とも横ナデ調整。胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りが施こされる。	橙色	胎土中に砂粒を多量に混入。	
9	甕 B 1	口径 (15)	口縁端部は上方に拡張される。	口縁部内面はハケ、または板によるナデ調整、外面は横ナデ。胴部内面は頸部との境付近までヘラ削り。	にぶい黄褐色	砂粒を多量に含む。	
10	甕 B	口径 (21)	口縁端部は上方に拡張され凹線が施こされる。	口縁部内外面は横ナデ調整。	浅黄褐色	砂粒を多く含む。	
11	甕 A	口径 (21)	断面方形につくられる口縁端部は肥厚し凹線が2条巡らされている。	口縁部内外面はともに横ナデ調整。胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削り。			
12	ミニチュア土器	口径 (9) 底径 (4)	朝顔形にひろく口縁部を持つ甕のミニチュア土器。	全面に指頭圧痕を残している。	灰黄色	捨て粒を若干含んでいる。	
13		底径 (5)	上げ底の底部。	胴部外面はヘラ削りの後粗いヘラ削り、胴部内面はヘラ削り。	黒褐色	多量の砂を含む。	
14		底径 (6.5)	若干上げ底気味の底部。	外面はヘラ磨き、内面はおそらくヘラ削り。上げ底の底部は、ヘラ削りの後にナデ調整が加えられる。		砂と小礫を多量に混入。	
15		底径 (7)	底部は著しい上げ底。	内面は粗いヘラ削りが施こされる。外面はハケ目調整とヘラミガキ。上げ底の底部はヘラ削りによってとのえられナデ調整が加えられる。	明黄褐色	多量の砂粒を混入。	
16		底径 (6.5)	やや上げ底気味の底部。	外面にヘラ磨きが若干観察される。	淡赤褐色	砂礫を多量に混入。	
17	甕	底径 (8.5)	脚台付きの甕の底部。	底部内面はヘラ削りの後ナデ調整が加えられる。底部外面は指頭による圧痕の後ナデ。	にぶい黄褐色	砂粒を多く含む。	

S K 1001

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
31	壺 A 1	口径 (31)	口縁端部は上下に拡張され凹線が廻らされ棒状浮文が付加される。 頸部はゆるやかに外反し凹線文 B 種が多段に廻らされている。	外面はナデ調整 口縁部内面はナデ調整 頸部内面は指オサエの後にナデ調整。	赤褐色	砂粒を含みや粗い。	
32	壺 A 2 a	口径 (15. 5)	ななめ外上方にひらく口縁端部は上下に拡張され凹線文が 2 条廻らされる。 頸部は筒状。 頸部はゆるやかに外反。	口縁部付近は内外面ともに強い横ナデが施こされる 頸部外面はハケ目調整。内面はナデ調整	明黄褐色	砂粒などをあまり含まない。	
33	壺 A 2 a		頸部はゆるやかに外反。ヘラ圧痕が施こされる。 胴部上半に最大径をもつ。	頸部外面はハケ目調整、口縁部との境は強い横ナデが施こされる。 内面は指頭によるナデ調整が施こされる。 胴部外面はハケ目と平行タキ目が併用される。 内面は指頭による圧痕が施こされる。	明赤褐色	砂粒をほとんど含まない。	
34	壺 A 1	底径 (14. 5)	底部の破片。胴部は平坦な底部から明確な稜をもってななめ外上方にのびる。	外面はハケ目調整の後にヘラ磨き、内面は粗いヘラ削り。	赤褐色	砂粒を多量に含む。	31の壺の底部
35	甕 B	口径 17	頸部でいったん外方に向かって強く屈曲した後内側にむかってふたたび強く内屈し端部を形成する。口縁端部には凹線が 2 条めぐらされている。	口縁部内外面とも横ナデが施こされている。	明赤褐色	砂粒を多量に混入する。	
36	甕 A	口径 16. 5	頸部から外方にむかって直線的に屈曲する口縁端部はやや尖り気味に仕上げられる。	口縁の内外面と胴部の一部は横ナデ調整、胴部内面頸部との境までヘラ削り。	にぶい 橙色	砂粒をあまり混入しない。	
37	甕 A	口径 15	胴部から直線的に短かく立ち上がる口縁端部は断面方形に作られ、凝凹線が施こされる。	口縁部外面は横ナデ、内面はハケ目調整が施こされる。 胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りが認められる。	黒褐色	礫を少量混入する以外、砂粒の混入などは少ない。	
38	甕 C 2	口径 31	胴部から外上方にむかって短かく立ち上がる口縁端部は上下に拡張され凹線が 3 条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整、胴部内面は指オサエの後ハケ目調整が施こされる。	にぶい 褐色	砂粒を多量に混入する。	
39	鉢		ゆるやかにななめ外上方にむかってのびる口縁端部は内外に拡張され頂部には凹面が形成される。 口縁部直下には凹線が 4 条めぐらされている。	口縁部は内外面ともていねいな横ナデ。	橙色	砂粒を多量に混入する。	

S K 1002

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
41	壺 A 2 a	口径 (15)	口縁端部は上下に拡張され凹線が 2 本廻らされている。	口縁部から頸部上半にかけて強い横ナデが加えられ内面には段がつく。 頸部外面はハケ目調整。	赤褐色	砂粒をあまり含まない。	
42	甕 B 2	口径 (15)	口縁端部は、上方にのみ拡張され浅い凹線が 2 本廻らされている。	口縁部は内外面とも横ナデ。 胴部外面は縦のハケ目調整、内面は指頭圧痕の後ナデ調整。	にぶい 褐色	砂粒をあまり含まない。	
43	甕 B 2	口径 (18)	口縁端部は上方にのみ拡張され凹線文が 2 条廻らされている。	口縁内外面とも横ナデ。 胴部外面の上半部はタキ目の後ハケ目調整、下半部はタキ目の後ヘラ磨き。内面上半部はハケ目調整、下半部はヘラ削り。	にぶい 褐色	砂をあまり含まない。	

S K 1002

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
44	甕 C 2	口径(22.5)	口縁端部は上下に大きく拡張されて凹線が3本巡らされ、円型浮文が付けられている。 頸部はくの字形に大きく屈曲する。	口縁部は内外面とも強く横ナデが施こされ頸部まで及ぶ。 胴部は外面の上半部がタタキ目の後にハケ目、内面が指頭によるナデ調整の後ハケ目が施こされる。	にぶい 橙色	砂粒を多く含むが調整がていねいである。	
45	高杯脚部	底径(10.5)	脚部は外下方に向かってハの字形に大きく開き脚端部は外上方にむかって拡張される。	脚端部は強くナデられ凹面となっている脚部外面はナデ調整、内面はヘラ削りが施こされている。	橙色	砂粒を多く含むが外面の表面は入念にナデで砂が浮いていない。	
46	無頸壺 D 2	口径 (30)	ゆるやかに内傾する口縁端部は内外に拡張され平坦面を作り頂部はわずかに凹む。口縁直下には凹線文が4条めぐらされている。	内面は指オサエの後ナデ調整。 外面はヘラ磨き調整。	淡橙色	砂粒を多く含む。	
47	甕底部	底径 (6)	薄手で入念な作り。	内面はヘラ削り調整。 外面はヘラ磨き調整。	橙色	砂粒をあまり含まない。	

S K 1003

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
50	壺 A 2	口径	口縁端部は上下に拡張し4条の凹線、または擬凹線がつけられる。	口縁の内外面は強い横ナデが施こされ段を生じている。	にぶい 褐色	砂粒を含まず	
51	壺 A 2 a	口径 (13) 胴最大径 (31.5)	口縁端部は上下に拡張され凹線が3〜4条廻らされる。また頸部下半と胴部にはそれぞれヘラ圧痕文や沈線が施こされている。	口縁の内外面は強い横ナデが加えられ段を生じている。頸部外面はハケ目調整、内面は指頭によるナデ調整が施こされる。 胴部外面は上半部にハケ目、下半部がヘラ磨きがそれぞれ施こされ肩部には幅の広いタタキ目が加えられている。 内面は上半部が指頭とハケ目、下半部はヘラ削りが加えられる。	にぶい 褐色	砂粒を含む。	

S K 1004

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
52	壺 A 4 a	口径 (18)	筒状の頸部からななめ外上方にのびる口縁の端部は上方にのみ拡張され頸部と胴部の境に棒状の工具による刺突文が施こされる。	口縁部は内外面ともナデ調整頸部以下は不明。	橙色	中に砂礫を多く含む。	
53	壺 B 4	口径 (14)	球形の胴部に直立する短かい口縁部がつけられる。口縁端部は内方にむかって若干拡張され平坦に作られる。	口縁部内面は板またはハケによるナデ調整、外面は全面にハケ目が施こされる。	橙色	石礫を含む。	
54	壺 B 4	口径 (19)	球形の胴部に直立する短い口縁部がつく。口縁端部は内外に拡張され平坦面を作り出す。	口縁から頸部にかけての内面はナデ調整。外面はハケ目調整が胴部まで及ぶ胴部内面は頸部の境までヘラ削りが施される。	明黄褐色土	大小の砂礫を多量に含む。	
55	台付鉢	底径(15.5)	外下方にゆるやかに開く脚端部は上下に拡張され凹線文が巡らされている。	鉢から脚柱部にかけての外面は板ナデ調整、脚端部近くはタタキ目が施こされている。 脚内面はヘラ削りで脚端部近くでは横ナデが加えられる。	にぶい 黄橙色	砂礫を多く含む。	

S K 1005

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
58	壺 A 1	口径 (23)	頸部からななめ外上方に大きく開く口縁をもつ大形の広口壺で口縁部内面には櫛描の波状文がまた頸部外面にはヘラ圧痕文がそれぞれ施こされている。	口縁部内外面から頸部上半にかけて強い横ナデが施こされる。 頸部外面はハケ目調整、内面には指頭圧痕が施こされる。	にぶい褐色	砂粒を含む。	
59	壺 A 4 a	口径 (15)	ななめ外上方にむかっのびる短かい口縁の端部に凹線が 1 条つけられる。	口縁部は内外面とも横ナデ。 胴部外面は粗いヘラ磨き、内面はヘラ削りが頸部付近まで施こされる。	橙色	砂粒を多く含む。	
60	壺 B 3	口径 (10)	筒状の頸部からゆるやかに外反しながらのびる口縁の端部はやや拡張され平坦面を作り出す。口縁部直下から頸部にかけては凹線が何条か巡らされ頸部と胴部の一部にはヘラによる圧痕文が施こされる。	口縁から胴部上反にかけて内面は指頭による圧痕やナデ調整が施こされ、下半部にはヘラ削りが加えられる。	橙色	砂粒を多く含む。	
61	壺 B	口径 (10)	若干内湾気味に上方にのびる筒状の頸部に尖り気味の口縁端部がつく。口縁から頸部にかけては凹線がつけられる。	口縁から頸部外面にかけてはハケとナデが、また内面は指オサエとナデ調整が施こされる。	明赤褐色	小石などを含む。	
62	壺 B	口径 (12)	筒状の頸部からのびる口縁端部は丸くおさめられ口縁直下には凹線が 4 条めぐらされている。	口縁部外面は粗いハケとナデ調整、内面は口縁端部近くはナデそれ以下は指頭圧痕	にぶい橙色	砂粒を多く含む。	
63	壺 B	口径 (10)	筒状の頸部にやや開きぎみにのびる口縁部がつけられ口縁端部は丸くおさめられる。口縁直下には凹線がつけられる。	口縁部内外面はナデ調整、頸部外面はハケ目、内面は指頭圧痕が施こされる。	橙色	砂粒を多量に含む。	
64	脚台	底径 (15)	ハの字形に直線的に開く脚端部は若干、拡張されて凹線状にくぼむ。脚柱部と脚端部には凹線が巡る。	脚部外面はナデ調整？内面も不明。	橙色		
65	高坏 B	口径 (20.5) 器高 (14) 底径 (10)	坏部は口縁との境に稜を持ち、口縁部は横ナデだけで凹線を持たない。 口縁端部はやや外方へ拡張され平坦面を作り出している。 脚端部は丸く収める。	坏部は内外面ともヘラ磨き。 脚部外面はハケ目調整とヘラ磨き、内面はヘラ削りが施こされる。	赤褐色	砂粒を多く含む。	
66	高坏 C	口径 (12) 高さ (10.5) 底径 (7)	坏部はななめ外上方にむかってゆるやかに内湾しながら立ち上がる。脚端部は丸くおさめる	脚部内面はヘラ削り。	黄褐色		
67	甕 B 1	口径 (18.5) 胴最大径 (39)	口縁端部は上方にのみ拡張され拡張された端部には凹線が施こされる。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目とヘラ磨きによる調整が、また内面は頸部までヘラ削りが施こされる。	赤褐色	砂粒を多く含む。	
68 69	甕 D	口径 (20) 底径 (6)	球形に近い胴部に頸部から外上方に屈曲する短かい口縁部がつき口縁端部は著しく肥厚する。	口縁部内外面から頸部外面にかけては横ナデ調整、特に頸部は強くナデられ凹面を形成する。 胴部外面は全面ヘラ磨き。 頸部から胴部内面はヘラ削りが施こされる。	赤褐色	砂粒を含む。	
71	甕底部	底径 (75)					
70	甕底部	底径 (5)	胴部は平底の底部からななめ外上方にむかって直線的に伸びる。	外面はヘラ磨き、内面はヘラ削り。			

S K 1006

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
72	壺 A 1	口径 (30 cm)	ゆるやかに外反しながらななめ外上にのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線とヘラ圧痕が施こされる。 また、頸部外面と口縁内面にはヘラ圧痕と櫛描波状文がそれぞれ施こされる。	口縁端部から 5 ～ 7 cm の間は内外面とも強い横ナデが加えられる。 頸部外面は縦のハケ目、内面は横のハケ目調整と指頭によるナデが施こされる。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	

S K 1006

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
73	壺 A 1	口径 (20)	頸部からいったんなめ外上方に直線的にのびる口縁は端部近くで外方に屈曲し上下に拡張されている。口縁端部と頸部にはそれぞれ凹線が施こされる。	口縁端部付近は内外面とも横ナデ。頸部内面はナデ調整か？頸部外面から胴部にかけてはハケ目とヘラ磨きが併用される。	淡黄色		
74	壺 A 1	口径 (24)	ななめ外上方に大きく開く口縁の端部は上下に拡張されている。口縁端部と頸部にはいずれも凹線とヘラ圧痕文が施こされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整頸部外面はハケ目？内面は指頭によるナデ調整が施こされる。	にぶい 橙色	砂粒を多く含む。	
75	壺 A 5	口径15	いったんなめ外上方にのびた口縁は著しく下方に垂下する。口縁上面には櫛の圧痕が加えられ、垂下した部分と頸部には凹線が施こされている。	頸部内面はハケ目調整が施こされているが胴部近くでは指頭によるナデ調整に変わる。	赤褐色	表面はやや粗い。	
76	壺 B 3	口径 (14)	筒状の頸部から外反して伸びる。口縁端部は内外に拡張され凹線がつけられるとともに口縁直下も凹線がつけられる。頸部にはハケによる圧痕がつけられる。	内面の上半は強い横ナデ、下半は指頭圧痕とハケによるナデが施こされる。頸部はハケ目と横ナデが施こされる。	橙色	砂粒をあまり含まない。	
77	壺下	口径(24.5)	球形の胴部に直立する短かい口縁がつけられる。口縁端部は内外に拡張され、頸部にはキザミを持った太い突帯がタガ状にめぐらされている。また、肩部にはハケによる圧痕も認められる。	口縁は内外面とも横ナデ調整。胴部内面は指オサエ、ハケ目、ヘラ磨きが、また外面にはハケ目調整の後、ヘラ磨きが施こされる。	赤褐色	砂粒をあまり含まない。	
78	鉢 C 1	口径30.5	ソロバン玉形の胴部に端部を内外に拡張した平らな口縁部がつけられる。胴部には明らかに注口が付けられていた痕が認められる。口縁端部には貝殻腹縁文が、また胴部には櫛による斜行する直線文と扇状文がそれぞれ施こされ、口縁直下と肩部には凹線と竹管が使用された文様が巡らされている	口縁部は内外面とも横ナデ調整。胴部の調整は外面上半がハケ目、下半がヘラ磨き、内面上半が板ナデ、下半が粗いナデ調整。	浅黄褐色	砂粒を多量に含む。	
79	鉢 B	口径24.5 底径 6	口縁端部は外方にむかって斜めに傾斜する。口縁内面は凹線状に凹む。	口縁部の内外面はともに強く横ナデが加えられる。胴部外面は粗いヘラ磨き、内面は板によるナデ調整。	黄褐色	砂粒を多く含む。	
80	ジョッキ形土器	底径 4	底部と把手付近しか残存していない。	把手には指頭圧痕が残される。	浅黄褐色	砂粒を多く含む。	
81	壺		胴部のみの破片で形態は不明だが櫛描の簾城文と平行線文が交互に施こされている。	外面はヘラ磨き、内面は指頭圧痕。	赤褐色	きめの細かい精良な胎土。	
82	壺		81と同じように櫛描による簾状文と平行線文が交互に施こされる。	外面はヘラ磨き、内面は指頭圧痕。	赤褐色	砂粒をあまり含まない。	
83	甕 A	口径 (25)	口縁は断面が方かたち近く端部に凹線は認められない。	焼成不良で外面の調整は不明。胴部内面はヘラ削り。	黄褐色		
84	甕 A	口径(24.5)	口縁は断面方形に近く端部に凹線が1条認められる。	外面は粗いハケ目、内面はヘラ削りが頸部との境まで施こされる。			

S K 1007

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
87	壺 A 3 ?		上方にむかってゆるやかに開く筒状の頸部に簾状文と刺突文が交互に加えられている。88と同一個体か？	内面は指頭によるナデが縦方向に施こされている。			
88	壺 A 3 ?		頸部に向かってゆるやかに内弯する壺の肩部の破片。外面には簾状文と波状文描かれている。	胴部内面上半は指頭による圧痕文が施こされる。			

S K 1007

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
89	高坏 脚部	底径 (11)	脚柱は長めで脚端部にむかってゆるやかに開く。 脚端部は上方に拡張され凹線が3条廻らされている。 脚と坏部との接合は円盤充填法。	脚部外面はヘラ磨きとハケ目調整、内面はヘラ削りが施こされる。	赤褐色	砂粒を多く含む。	
90	底部	底径 (7)	上げ底の壺の底部	内外面の調整不明。 二次加熱?	にぶい 橙色	胎土中に小礫を多量に混入している。	二次加熱?
91	底部	底径 (6)	平底の底部	内面はナデ調整? 外面は粗いヘラ磨き。	明赤褐色	小礫を多量に混入している。	二次加熱?
92	底部	底径 (7)	平底の底部	内外面の調整は不明だが外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りか?	橙色	小礫を多量に含む。	
93	壺	底径(28.5)	若干上げ底の底部	外面の調整は不明、内面は細かいヘラ削りが施こされる。	明黄褐色	小礫を多量に混入している。	二次加熱?

S K 1010

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
98	壺 A 2 a	口径17.0	筒状の頸部からななめ外上方にのびる口縁の端部は上下に拡張されている。口縁端部と頸部には凹線が多段に巡らされ、肩部にはヘラ圧痕文も施こされている。	口縁部内外面は強い横ナデ。 頸部外面から胴部上半にかけてはハケ目調整、下半はヘラ磨き。肩部には平行タタキが施こされる。頸部内面から胴部上半は指頭によるナデ。下半はヘラ削り。	明赤褐色	砂粒などをあまり含んでいない。精良なものをうっている。	焼成良好
92	壺 A 2 a	口径13	筒状の頸部から水平に近い角度で外方にのびる口縁の端部は上下に拡張され、凹線がめぐらされている。口縁には円孔が多数あけられ、頸にはヘラ圧痕文が認められる。	口縁部内外面は強い横ナデ。 頸部外面から胴部上半にかけてはハケ目と平行タタキが施こされる。頸部内面はハケと指頭によるナデ調整、胴部上半は指頭圧痕が認められる。	明赤褐色	砂粒などをあまり含まない。	
100	壺 A 2 b	口径13	筒状の頸部から水平に近い角度で外方にのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線がめぐる。頸部にはヘラ圧痕文が施こされ、胴部との境には弱い段がつけられる。	口縁部内外面は強い横ナデが施こされる。頸部から胴部上半にかけての外面はハケ目調整、内面は指頭によるナデ。	明黄褐色		
101	壺 A 2 b		頸部は筒状に仕上げられ、ヘラ圧痕文が施こされる。頸部と胴部の境には弱い段がつけられている。	頸部は外面がハケ目調整、内面は指頭によるナデ。 胴部外面上半はヘラ磨き、下半はハケ目調整、内面はヘラ削り。	橙色	砂粒などをあまり含まない。	
102	壺 A 2 a	口径18	大きく肩の張った胴部からななめ外上方にのびる比較的短かい頸部につけられた口縁端部は上下に拡張され凹線が1条めぐらされている。また頸部にはヘラ圧痕文も認められる。	口縁部は内外面とも強い横ナデが施こされる。 頸部は外面がハケ目、内面が指頭によるナデ調整。 胴部外面は上半部が平行タタキの後にハケ目調整、下半がハケ目調整。 内面は上半部が指頭圧痕、下半がヘラケズリ。	赤褐色		
103	壺 A 2 a	口径17 底径9.5 高さ41	ほぼ中央部で最大径を持つ胴部とやや上方に開き気味の筒状の頸部からななめ外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張されるが下方への拡張の度合いは少ない。口縁端部には凹線とヘラ圧痕文が施こされる他、円孔がつけられている。また、頸部と胴部にもそれぞれヘラ圧痕文が認められる。頸部と胴部の境には弱い段。	口縁部内外面は強い横ナデが施こされる。 頸部外面はヘラ磨き、内面は指オサエ 胴部外面は上半部にタタキ目を施こした後、全面にヘラ磨き、内面は上半部が指頭圧痕、下半がヘラ削り。	橙色	砂粒等を多く含む。	焼成良好。

SK1010

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
104	壺 A 3	口径17 底径8 器高41	細長い筒状の頸部から外方にむかって水平にのびる口縁の端部は上下に拡張され、沈線が施こされる。また頸部にも同様の沈線が多段にめぐらされ、そろばん玉形に肩の張った胴部上半には櫛描の平行線文と波状文が交互に施こされる。 底部はやや上げ底。他の土器と比較して器壁が薄い。	口縁部内外面は横ナデ。 頸部外面はナデ?、内面は指頭によるナデ。 胴部外面上半はハケ目、下半はへら磨き、内面上半はハケと指頭圧痕、下半はへら削り。	黄橙色	砂粒をあまり含まない。	焼成不良 二次加熱か?
105	壺 E	口径15	球形の胴部と直立した短かい口縁をもつ。口縁端部は上下に拡張され凹線がめぐらされている。	口縁部内外面とも横ナデ、胴部外面はハケ目調整。	明黄褐色	砂粒を多量に混入。	
106	壺 A 1	口径16.5	筒状の頸部からななめ外上方に短かく立ち上がる口縁の端部は上下に大きく拡張され凹線が2条めぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整、頸部外面は横ナデ、内面はナデ。 胴部外面上半はタタキ目の後、ハケ目(板ナデ?)調整、下半はへら磨き、内面上半は指頭圧痕とナデが施こされる。	明黄褐色	砂礫を多く含むが焼成は良好。	
107	壺 A 4 a	口径15 胴部最大径23	球形の胴部から大きく外反して外上方にのびる口縁は端部にむかうほど肥厚し断面は方形に仕上げられる。口縁端部には凹線、頸部には沈線がめぐらされ頸部にはへらによる刺突文が施こされる。	頸部外面はハケ目調整、内面はへら磨きと板ナデ。 胴部外面は粗いへら磨き、内面は全面にへら削りが施こされ頸部との境には指頭圧痕が残される。	橙色	砂粒などをあまり含まない。	
108	壺 A 4 a	口径18	頸部からななめ外上方に外反しながらのびる口縁の端部は上方に拡張され凹線がめぐらされる。	遺存状態が悪く調整が明らかではないが頸部から胴部にかけては粗いハケ目がまた胴部内面には粗いへら削りが施こされている。	橙色		
109	壺 A 4 a	口径15.5	筒状の頸部からななめ外上方に直線的にのびた口縁の端部は上方にのみ拡張され凹線(?)が1条めぐらされている。	口縁外面は遺存状態が悪く調整は不明にのびた口縁の端部は上方にのみ拡張され凹線(?)が1条めぐらされている。	赤灰色	砂礫を多量に含む。	
110	壺 A 4 a	口径18	口縁端部を上方にのみ拡張し、拡張した口縁端部に凹線をめぐらせる。 頸部には先端が平らな角棒による刺突が施こされる。	口縁部は内外面とも横ナデ。 頸部から胴部外面にかけてはへら磨き、頸部内面はナデ調整。 胴部内面は頸部付近までへら削り。	明褐色	砂粒を多く含む。	
111	壺 A 4 a	口径14	筒形の頸部からななめ外上方に短かくのびる口縁の端部は上方に拡張され凹線がめぐらされている。また頸部と胴部の境には棒状工具による刺突が施こされる。	口縁部は内外面とも横ナデ。 頸部内面はナデ調整、外面はへら磨きに加えられる。 胴部上半はへら磨き、内面は頸部までへら削りが施こされる。	橙または赤褐色	砂粒を含む。	
112	壺 A 4 a	口径15.5	筒状の頸部から外方に短かくのびる口縁の端部は上方にのみ拡張され凹線が施こされている。	口縁部外面は横ナデ。 頸部外面は板によるナデ、内面は指頭による圧痕。 胴部外面はハケ目調整?内面はへら削り。	橙色	砂粒などを多く含む。	
113	壺 A 4 b	口径17.5	いったんななめ外上方にゆるやかにのびた口縁は端部付近で若干内傾する。	口縁部内外面は強い横ナデが施こされる。頸部外面はハケ、内面は指頭圧痕とへら削りが施こされる。	褐色		
114	壺 A 4 b	口径17.5 胴部最大径26 底部7 器高36.5	短い頸部にななめ外上方に直線的にのびる口縁がつく。 口縁端部の断面は方形、底部はあげ底。	口縁部内外面は横ナデ。 外頸部以下はハケ目調整で下半部はへら磨き加わる。 内面も頸部以下はすべてへら削り。	褐色	砂粒などを含んでいるが甕の胎土に類似。	
115	壺 C	口径19	頸部からゆるやかに内湾する口縁のいったんゆるやかに外上方に開く。頸部に内湾する口縁がつく。 口縁端部は平たんに作られ口縁外面には凹線が6条めぐらされている。 頸部にはへら先による格子目文が付けられる。 頸部から胴部にかけては、ハケ目調整が行なわれる。	口縁内面は一部横ナデ。 頸部内面はハケ目調整がそれぞれ施こされている。 胴部は頸部との境まですべて粗いへら削りが施こされる。	にぶい褐色 内面 灰白色	砂礫を多く含む。	

S K 1010

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
116	壺 B 1	口径 7 底径 5	球形の胴部に直立する口縁部がつく、口縁端部は尖る。底部は若干上げ底。	外面は頸部と胴部の 1 部にハケ目調整が認められるだけ。内面は頸部の境までヘラ削り 口頸部内面ナデか？	橙色	砂粒を多く含む。	
117	壺 B 2	口径 10.5 胴部最大径 23.5	球形の胴部から筒状の長い頸部がほぼ直上に向って伸びる。口縁端部は平坦に作られ長い頸部には多数の凹線とヘラ圧痕文が付けられる。 頸部はハケ目調整の後に凹線が施こされる。	長い筒状の頸部内面から胴部上半は、指頭によるナデをほどこし胴部中ほどはハケ目下半はヘラ削りをそれぞれ施こす。 胴部上半は平行タタキの後ハケ目調整 胴部中部から下半部にかけてはヘラ磨きが施こされる。	赤褐色	砂粒を含む。	
118	水差し形土器	口径 12.5 胴部最大径 24	直線的に外上部に伸びる断面方形の口縁の端部から頸部にかけて凹線がめぐらされ頸部と胴部上半にはそれぞれハケによる圧痕文が付けられる。	口縁から頸部には入念なナデ調整が施こされ頸部との境付近は指頭によるナデ調整が施こされ、それ以下はヘラ削りが加えられる。 頸部から胴部にかけてハケ目調整が施こされ下半部にはヘラ磨き加わる。	浅黄橙色	砂礫を含む。	
119	壺 D 1	胴部最大径 15	そろばん形の胴部に短かい口縁部が付く。 口縁端部直下に凹線が 4 条めぐらされ円孔が打たれている。おそらく平底で台はつかない。	調整不明。	橙色		
120	高杯 A	口径 29.5 器高 16.8 底径 8.5	口縁部は稜線をもってやや内傾気味に上方に立ち上がり端部は内外方に拡張される。	口縁部は内外面とも横ナデ。 杯部は内外とも入念なヘラミガキ脚端部は上方に拡張された面は強く横ナデ調整が加えられる。 脚内部はヘラ削りが行なわれる。 脚（部）はヘラミガキ	橙色		
121	高杯 C	口径 24	口縁部が稜をもって屈曲し直立する口縁端部は平坦に作られ口縁部には凹線が廻らされる。	・杯は内面は横ナデとヘラ磨き、外面は板ナデ調整？ヘラ磨き。	橙色	砂粒を多く含む。	
122	高杯 B	口径 15.5 器高 12.5 底径 9	二次加熱のため調整はおろか、外形も不明稜杯の口縁は稜を持って上方に立ち上がる、端部は尖る。 脚端部は拡張されず丸くおさまられ凹線が廻らされている。		灰色		
123	鉢 B	口径 24 器高 10 底径 10.5	底部からゆるやかに内湾しながらなめ外上方にのびる口縁端部は内側から外側に向ってななめにそぎ落としたように傾斜する。この口縁端部直下は内外とも凹線状に凹む。	内外面とも強く横ナデが加えられている。 内外面ともあらいが、ヘラ磨き加えられている。 内面はナデ調整加わる？	灰白色	砂粒を多く含む。	
124	鉢 A	口径 50 底径 12.5 器高 27	底部からななめ外上方にのびる体部は口縁部付近で内湾する。 口縁端部は内方に拡張する。	口縁部は横ナデ。 胴部外面はヘラ磨き、胴部内面はヘラ磨きと横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	
125	鉢 C 2	口径 30 底径 21 器高 46	算盤玉形の胴部にくの字形に外反して伸びる口頸部がつく。口縁端部は上下に拡張され、肩部には注口が付けられる。	口頸部は横ナデ。 胴部外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整とナデ。	赤褐色	砂粒を含む。	
126	甕 A	口径 17	頸部からくの字形は屈曲して外上方にのびる口縁の断面は方形。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部内面は頸部との境までヘラ削りが外面はハケ目が施こされる。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	
127	甕 A	口径 16	直線的な口縁部は断面方形。	口縁の内外面は横ナデ調整。 胴部内面は頸部との境までヘラ削りが外面はハケ目が施こされる。	淡黄色	砂粒を含む。	
128	甕 A	口径 17	直線的にななめ外上方にのびる断面方形の口縁端部は肥厚され凹線がめぐらされる。	口縁内面はハケ目調整、外面は横ナデが施こされる。 胴部内面はヘラ削り、外面はハケ目調整の後頸部近くまでヘラ磨き加えられる。	赤褐色		

S K 1010

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
129	甕 B 1	口径19	頸部でくの字に屈曲して外上方にのびる短かい口縁端部は上方に拡張される。	二次加熱をうけているせいか遺存状態が悪く胴部表面の調整は不明。 内面は頸部との境までへら削りが加えられる。	橙色	砂粒を若干含む。	
130	甕 B 1	口径16	短かい口縁端部は外上方にのみ拡張する。	口縁部内外面とも横ナデ調整。 胴部内面はへら削り外面はハケ目調整。			
131	甕 B 1	口径23.5	頸部からくの字になめ外上方にのびる口縁端部は上方に拡張され浅い凹線が施こされる。	胴部は内面が頸部との境までへら削りが、外面はへら磨きが施こされる。	にぶい 黄橙色	砂粒を多く含む。	
132	甕 B 1	口径19.5	頸部でくの字形に屈曲する口縁はやや内湾気味に外上方にのびる。 端部は上方にのみ拡張され丸くおさめる。	口縁内外面は横ナデ。 頸部の一部から胴部にかけてハケ目調整。 内面は頸部の境までへら削り。	灰白色	砂礫を多量に含む。	
133	甕 B 1	口径20	胴部からなめ外上方にのびる短かい口縁端部は上方に拡張され凹線が巡らされる。	口縁部、内外面とも横ナデ調整。 胴部内面は頸部との境付近までへら削り←粗い 外面は二次加熱による遺存状態が悪く不明	黄橙色	砂礫を多く含む。	
134	甕 B 1	口径15.5	やや内湾気味に外上方にのびる口縁端部は上方に拡張され強くナデ調整がくわえられて凹線状にくぼむ。	口縁部内外面とも横ナデが加えられる 胴部内面は頸部との境以下はへら削りが加えられる。外面はハケ目調整が加えられ下半部にはさらにへら磨きが施こされる。	橙色	砂粒を多く含む。	
135	甕 B 1	口径16	若干内湾気味になめ外上にのびる口縁端部は上方に拡張され凹線を2条廻らす。	口縁の内外とも強い横ナデ。 胴部内面は頸部との境までへら削りが施こされる。			
136	甕 B 1	口径21	なめ外上方に直線的にのびる口縁端部は上方に拡張され凹線が2本巡らされている。	口縁内外面とも横ナデが施こされている。	橙色		
137	甕 B 1	口径17	やや内湾気味になめ外上方にのびる口縁端部は上方に拡張され凹線が2本巡らされる。	口縁部内外面とも強い横ナデ調整が行なわれる。 胴部内面は頸部との境までへら削りが行なわれる。外面はあらいハケ目。	赤褐色	砂粒などを含む。	
138	甕 B 1	口径16	口縁部は上下に拡張され、内外面ともナデ調整が施こされる。	胴部内面は頸部との境付近までへら削りが施こされる。	橙色	石粒を多く含む。	
139	甕 C 1	口径14	頸部からくの字形に屈曲して、直線的になめ外上方にのびた口縁端部は上下に拡張され凹線が2条廻らされている。	口縁部は内外面とも強い横ナデが加えられている。 胴部外面はハケ目、内面は頸部との境までへら削りが加えられる。	橙色		
140	甕 C 1	口径15	頸部からくの字形に屈曲して直線的になめ外上方にのびた口縁端部は上下に拡張され凹線が2条廻らされている。	口縁部は内外面とも強い横ナデが加えられている。 胴部外面はハケ目、内面は頸部との境までへら削りが加えられる。 内面のへら削りはない。	明褐灰色	大粒の礫などを混入している。	
141	甕 C 2	口径22 底径7	頸部でくの字に屈曲し水平に近い方向にのびる。 口縁端部は上下に拡張されている 底部は口縁部に比べて著しく小さい。	口縁内外面の強く横ナデが加えられる 強く張った胴部上半はタキ目の上にハケ目調整が施こされ胴部最大径のところにはハケによる圧痕が施こされる 胴部下半はへら磨きが施こされる内面の上半は指頭圧痕とハケ目調整、下半部はへら削りがそれぞれ施こされる。	にぶい 橙色	砂粒を多量に混入する。	

S K 1010

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
142	甕 C 1	口径17 底径 8	胴部からくの字形に屈曲してななめ外上方に直線的にのびる短い口縁端部は上下に拡張され凹線が廻らされているが拡張の度合いは弱い。	胴部内面は頸部との境までヘラ削り。胴部外面は上部がハケ目、下部がヘラ磨き。	赤褐色	砂粒を多く含む。	
143		底径 (8)	やや上げ底の壺の底部。	内面はヘラ削り。外面は入念なヘラ磨き。	橙色	砂粒を多く含む。	
144		底径 (8)	つぼの底部。	内面は幅広のヘラ削り、外面は幅広のヘラ磨き。	黒褐色	砂粒を多く含む。	
145		底径 (7.5)	やや上げ底気味になっている。	底部の内面はヘラケズリと磨き、外面は入念なヘラ磨き。	灰褐色	砂粒を含む。	
146		底径 (7.5)	やや上げ底の底部。	ヘラ削りの後ナデ調整。内面はヘラ削り。外面は入念な磨き。	赤褐色	砂粒を多く含む。	
147		底径 (6.5)	平底の底部。	外面はヘラ磨き。			
148		底径 (8)	つぼの底部。	内面ヘラ削り、外面ヘラ磨き。上げ底ヘラ削りで整える。底部の立ち上りはヘラ削りを加えてある。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	

S K 1011

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
150	壺 A 2 b	口径 (13)	筒状の細い頸部から水平方向にのびる口縁端部は上下に拡張され凹線が廻らされる。	口縁部の内外面は強く横ナデされ後がつく。 頸部から胴部上半にはハケ目調整下半はヘラ磨き。 頸部と胴部最大径の部分にはヘラによる圧痕がつく。 頸部はハケによるナデ調整。 体部上半は指頭圧痕、内面下半はヘラ削り。	橙色	砂礫混入。	
151	壺 A 2 b	口径 (16)	筒状の頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は上下に拡張されて強い横ナデが加えられて凹線状にくぼむ。また、口縁内外面も強くナデられて段がつく。	頸部の一部と体部は板ナデや磨きの後にナデ調整が加えられる。 頸部内面は指頭によるナデ。 胴部上半までヘラ削り、部分的に二次加熱をうけている。	赤褐色	砂粒を多く混入。	
152	壺 A 1	口径 (15.5)	肩のよく張った胴部に短い頸部がつく。口縁端部は上下に拡張され凹線がつけられる。	口縁の内外面は横ナデ調整。 頸部内面上半は指頭によるナデ。 頸部外面は頸部から胴部上半にかけてはハケ目の調整。 胴部内面上半は指頭と指オサエ下半はヘラ削り 胴部外面上半はハケ目の調整下半はヘラ磨き	赤褐色	砂礫を多く含む。	
153	壺 A 1		頸部にはヘラによる圧痕。	頸部外面はハケ目。 内面は指オサエとナデ調整。	赤褐色	砂粒を多く含む。	破片。
154	壺 A 4 a	口径 (15.5)	ななめ外上方にゆるやかに外反しながらのびる、口縁端部は上方にわずかに拡張され (凹線風の横ナデ) がめぐらされている。	口縁の内外面は横ナデ。 頸部内面指頭によるナデ、頸部外面ハケ目とヘラ磨きを加えられる。 胴部上反内面は粗いヘラ削り 胴部上反外面はハケ目とヘラ磨きを加えられている	淡黄色	砂粒を多く含む。	
155	壺 A 4 a	口径 (13.5)	ななめ外上方にゆるやかに外反する、のびる短い口縁の端部は丸みを持ち凹線が施される。	内面は頸部は指オサエ胴部上半は粗いヘラ削り。 外面は口縁から胴部の一部までは幅広く横ナデ。	淡黄色	砂礫を多量に混入。	
156	甕 C 2	口径 (25.5) 胴最大径 (43.5)	胴部上半で大きく肩のはる器形。頭部から「く」の字に屈曲する、短い口縁端部は上下に拡張され凹線と円形の竹管文が施される。	内面は胴部上半はハケと指オサエ、下半はヘラ削り。 外面は胴部上半はハケ、下半はヘラ磨き。	赤褐色		

S K 1011

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
157	甕 B 1	口径 (18.5)	頸部でくの字に屈曲する口縁端部は上方に拡張されそこに凹線が2本巡らされている。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部内面は頸部との境で指頭圧痕を残しながらそれ以下はヘラ削り。 胴部外面上半はハケ目調整。	橙色	砂礫を多く混入。	
158	甕 A 1	口径 (17)	頸部から外上方に直線的にのびる断面方形の口縁端部は肥厚され横ナデが加えられる。	口縁内外面は横ナデ調整、一部は胴部上半にまで及ぶ。 胴部内面は頸部との堺までヘラケズリ、胴外面はハケ目が施されている。	橙色	砂粒を多量に含む。	
159	甕 B 1	口径 (13)	口縁端部は上方に拡張される。	口縁内外面は横ナデ調整。 胴部内面指頭によるナデ (?) の後ヘラ削り。 胴部外面不明。	明褐色	砂礫を多く含む。	
160	甕 A	口径 (13)	口縁端部は方形に近い。	内面ヘラケズリ。	にぶい赤褐色		
161	台付鉢?	底径 (19)	ゆるやかに変曲する、脚柱と上方に拡張された脚部をもつ。	端部は強く横ナデが施こされ凹線状に凹む。 内面はヘラ削り外面は入念なヘラ磨き 脚端部近くは横ナデ。	浅黄橙色	砂粒を多量に含む。	
162	高坏 B	口径 (22) 器高 (18.5) 底径 (9)	稜をもって直立する口縁部は前後に拡張され平らに作られる。	口縁部内外面は横ナデ杯内外面はヘラミガキ、横なでで凹線状に施こされる 脚柱部は細く脚端部は極端に広がらない 端部は上方に拡張され凹線が施こされる。 脚柱内部は指頭によるナデ外部はヘラミガキ。 脚端部はヘラ削り。			

S B 1001 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
4	打製石鏃	32	17	3	14	サヌカイト	

S B 1002 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
18	打製石鏃	25	18	4	22	サヌカイト	
19	打製石鏃	27	15	4	18	サヌカイト	
20	打製石鏃	35	13	4	23	サヌカイト	
21	削器	24	33	5	37	サヌカイト	
22	打製石包丁	40	86	8	40.4	結晶片岩	
23	打製石包丁	41	100	8	43.1	結晶片岩	
24	打製石包丁	55	116	7	73.7	結晶片岩	
25	柱状磨製石斧	88	39	38	190	結晶片岩?	
26	柱状片刃石斧	146	30	45	450	結晶片岩?	
27	砥石	85	30	11	42	片岩?	
28	砥石	117	25	9	40.9	粘板岩	
29	砥石	127	40	23	240	砂岩?	
30	砥石	224	83	74	2450	砂岩	

S K 1001 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
40	打製石包丁	65	112	7	57.9	結晶片岩	

S K 1002 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
48	打製石包丁	50	88	8	23.3	結晶片岩	

S K 1004 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
56	打製石鏃	42	24	4	3.5	サヌカイト	
57	打製石包丁	48	55	6	22.9	結晶片岩	

S K 1006 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
85	砥石	102	19	13	39	粘板岩	
86	打製石包丁	60	41	6	29.9	結晶片岩	

S K 1007 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
94	打製石鏃	31	18	5	2.7	サヌカイト	
95	打製石包丁	48	55	5	16	結晶片岩	

SK1008 出土石器計測一覧表

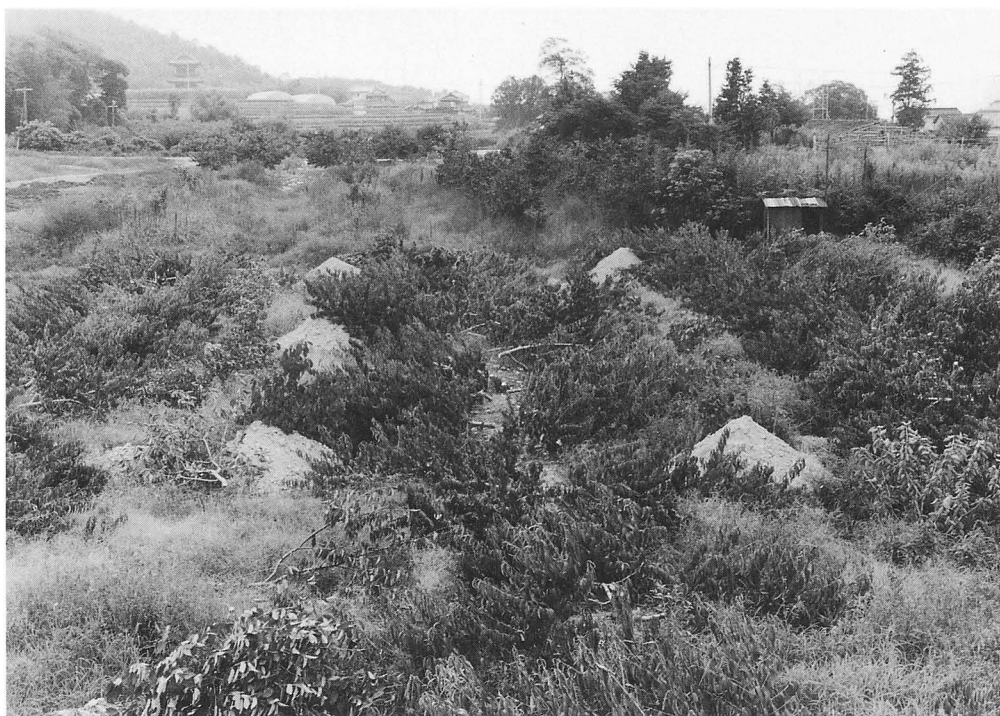
番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
97	打製石鏃	36	16	4	2.2	サヌカイト	

S K 1010 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
148	打製石包丁	50	88	8	60	結晶片岩	
149	砥石	99	32	10	68	砂岩?	

S K 1011 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
163	削器	39	68	9	36.7	サヌカイト	
164	打製石包丁	46	66	9	42.1	結晶片岩	
165	打製石包丁	42	106	5	54.7	結晶片岩	

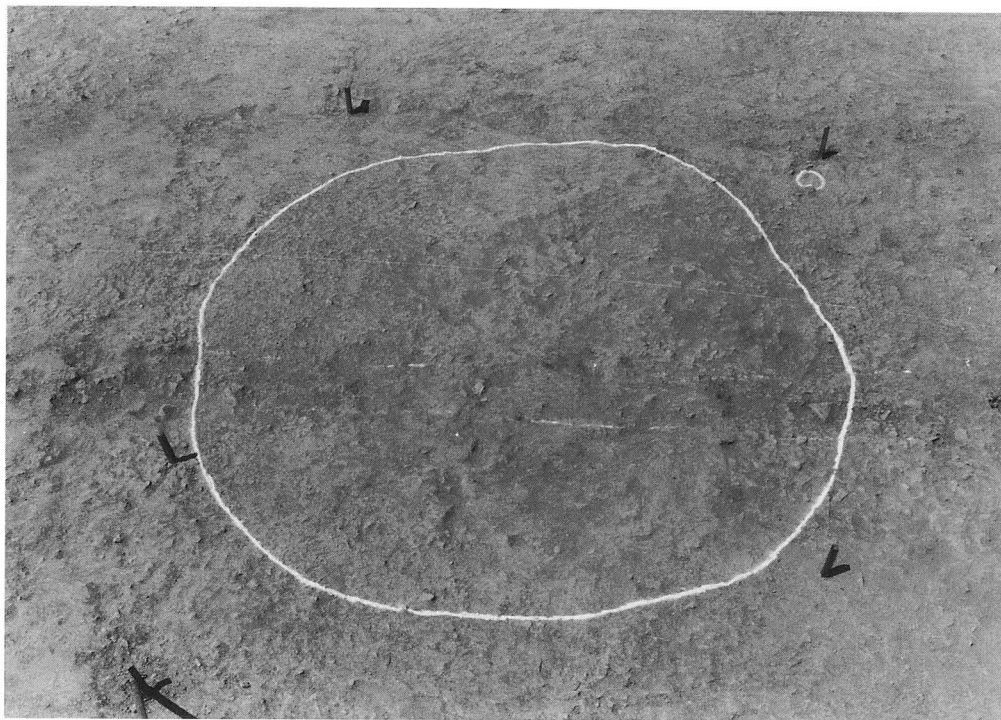


調査区遠景

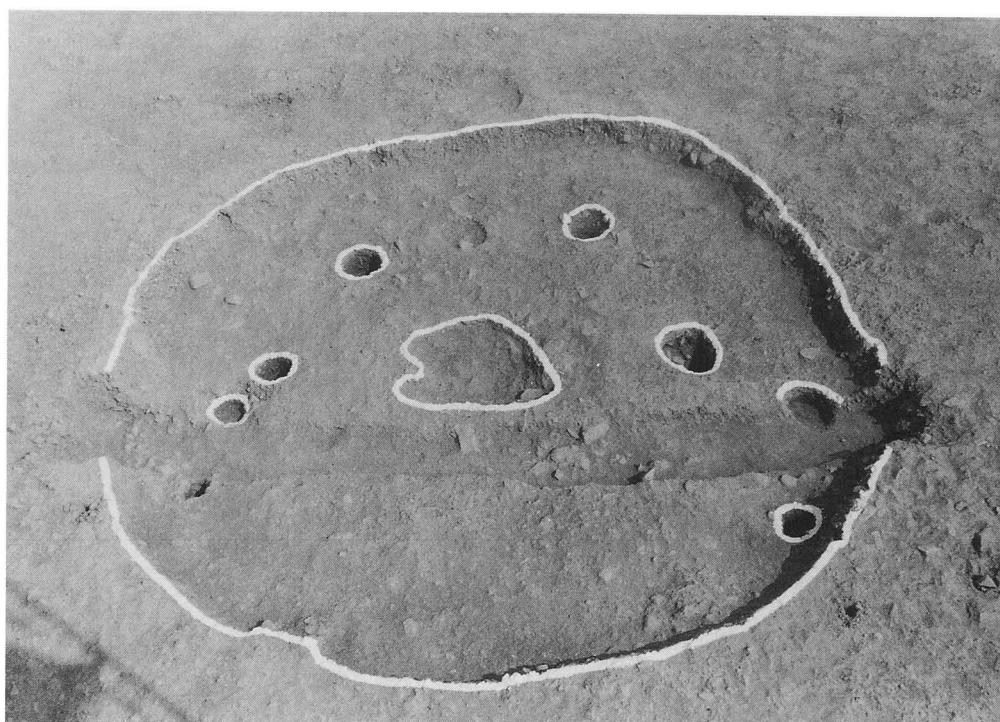


調査風景

図版 2



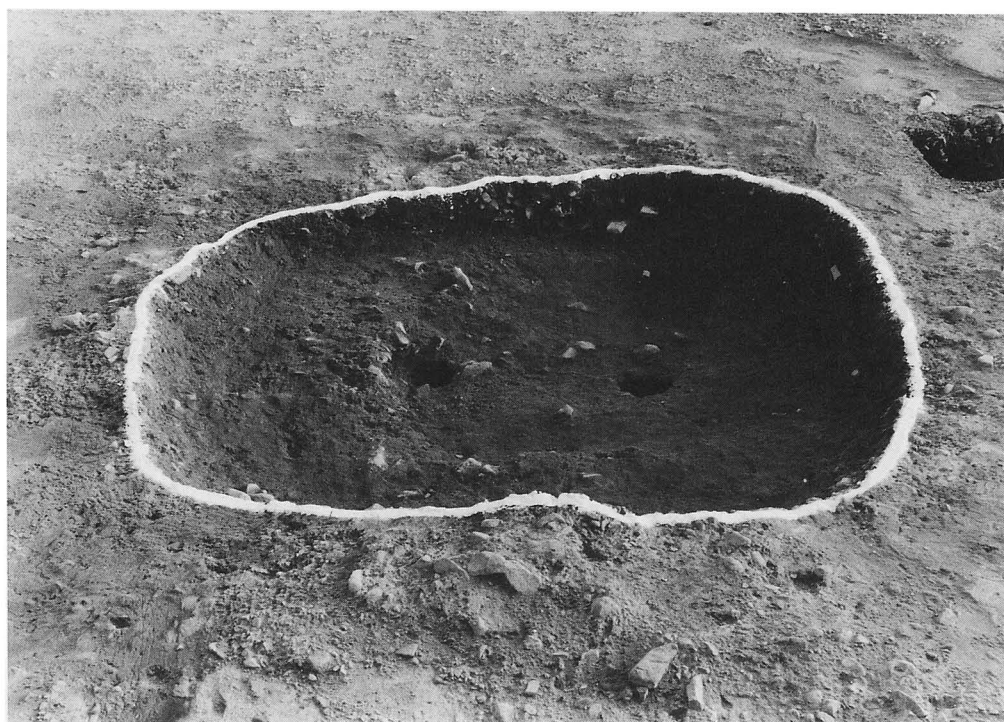
S B 1001検出状況（南から）



S B 1001完掘状況（同）



S B 1002検出状況（西から）



S B 1002完掘状況（南から）

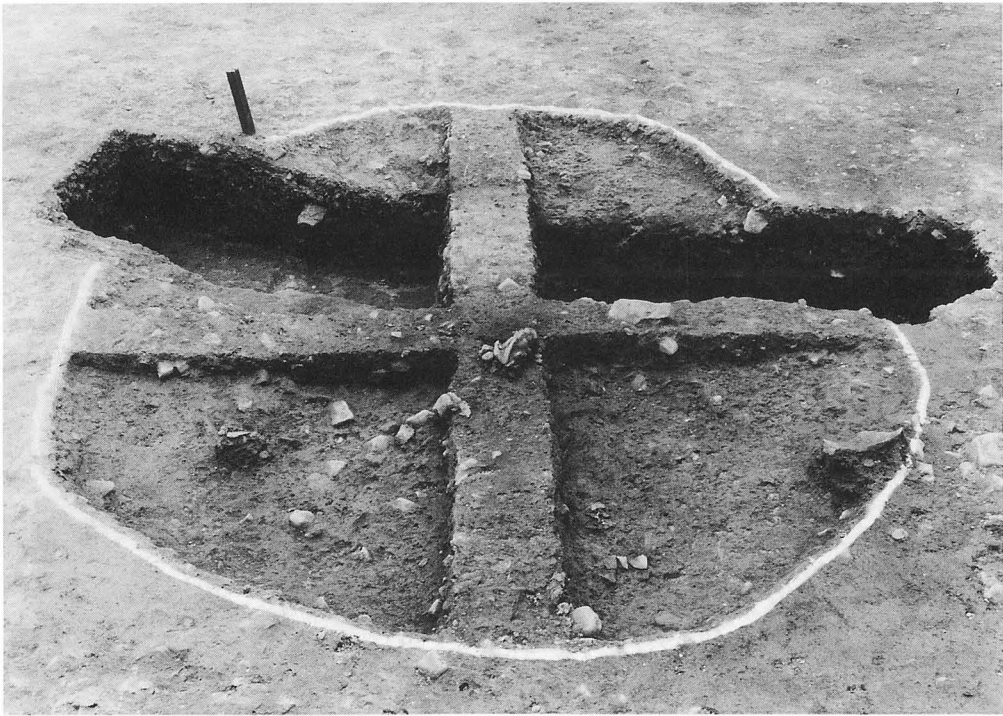
図版 4



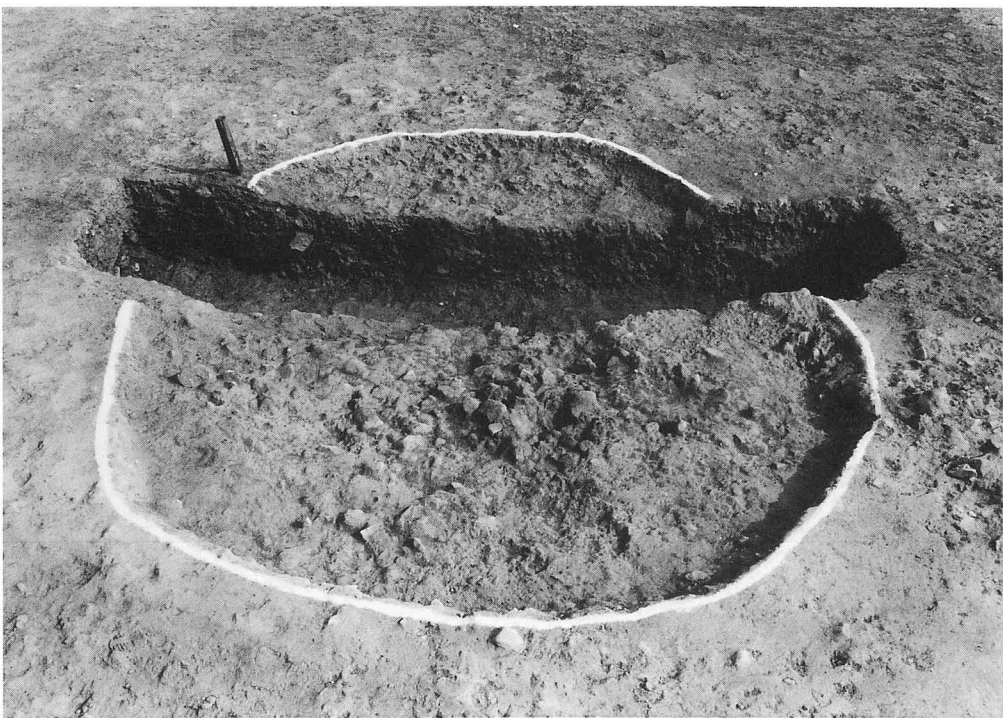
S K 1001遺物出土状況（北から）



S K 1001完掘状況（同）

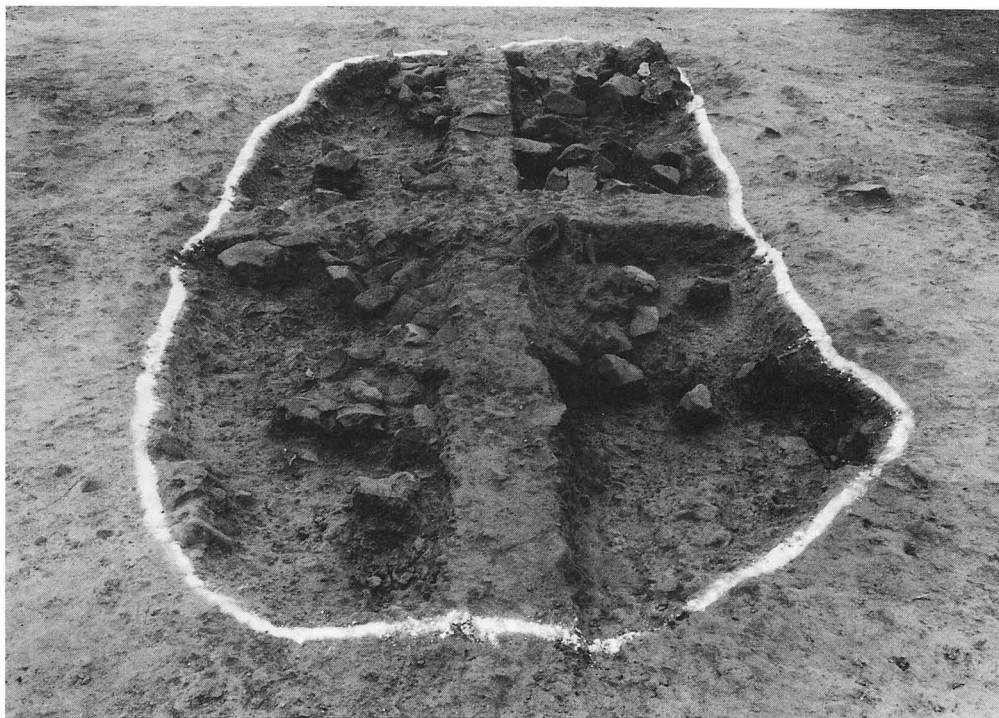


S K 1002掘り下げ状況（北から）

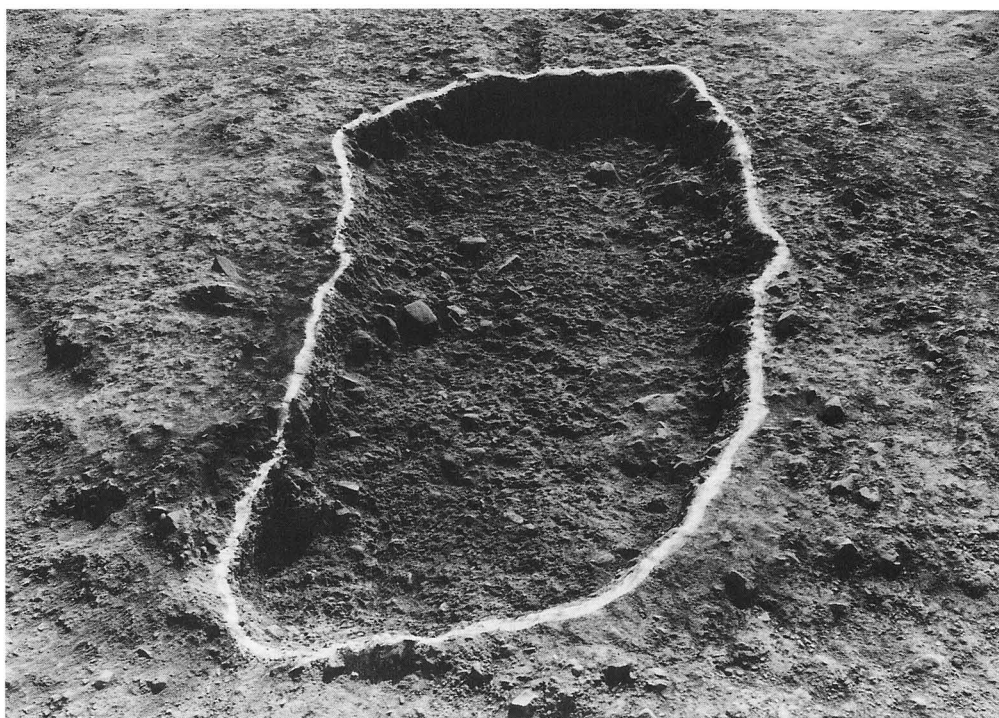


S K 1002完全掘状況（同）

図版 6



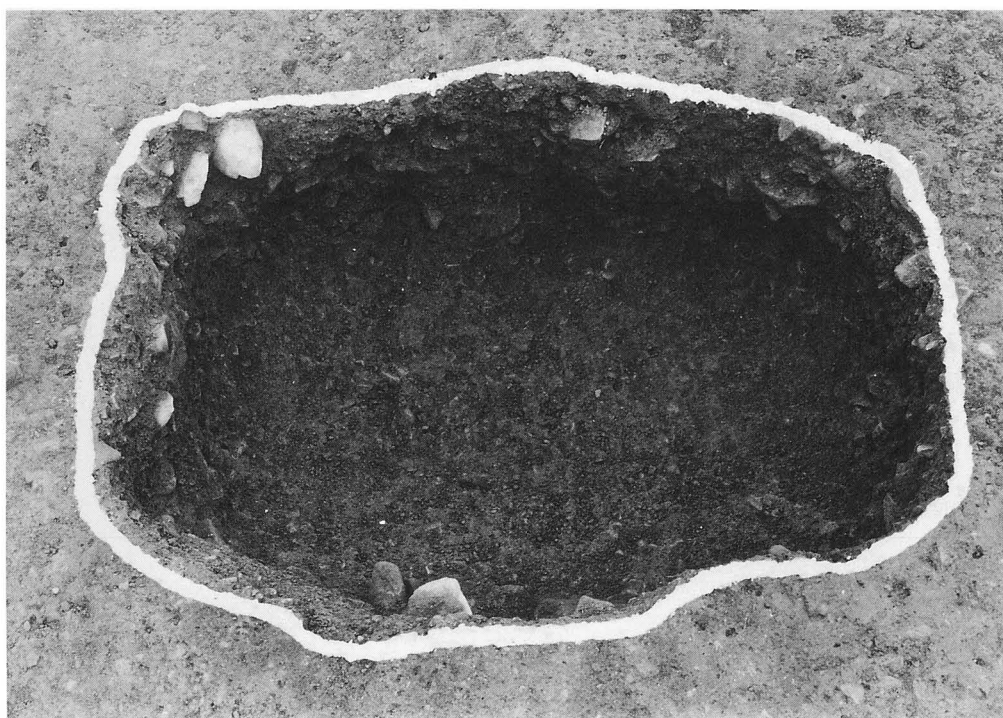
S K 1006掘り下げ状況（西から）



S K 1006完掘状況（東から）

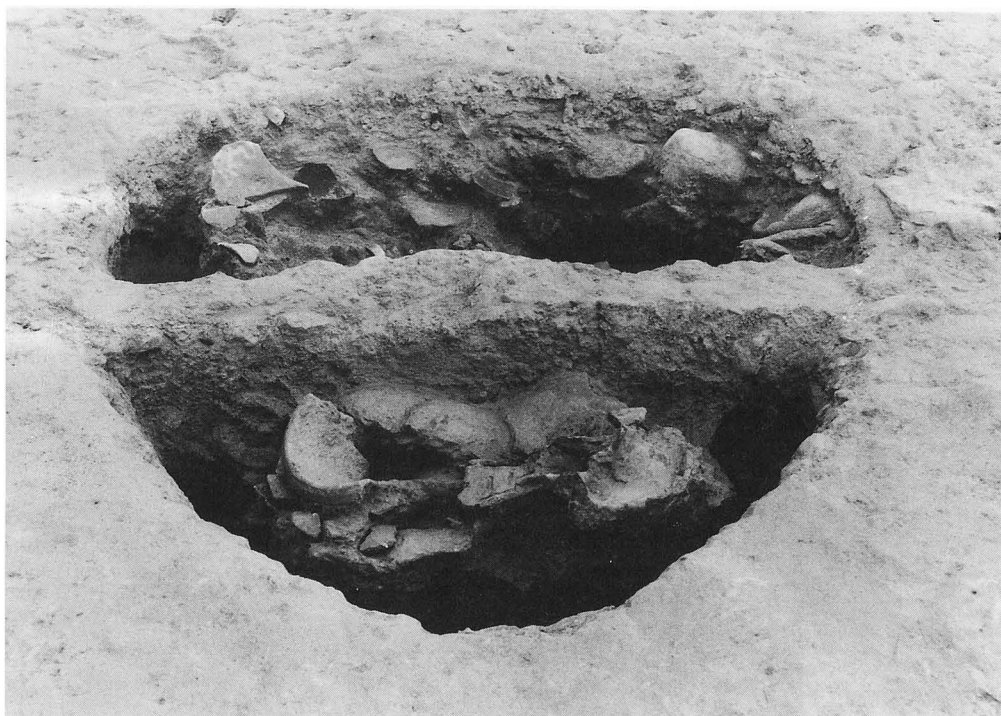


S K 1010掘り下げ状況（東から）

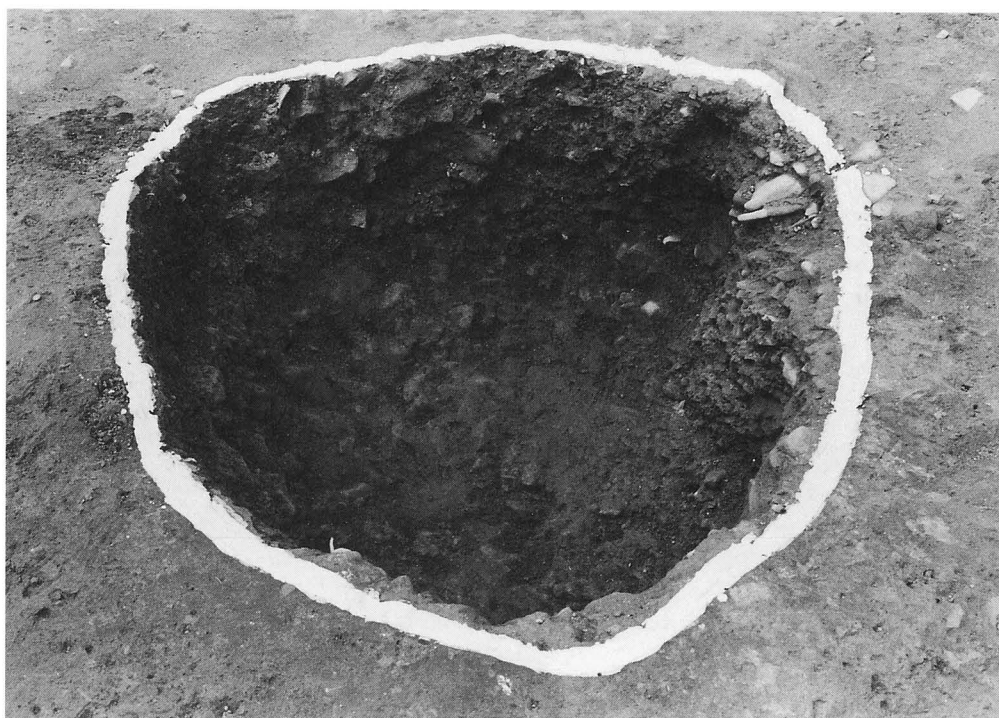


S K 1010完掘状況（東から）

図版 8



S K 1011掘り下げ状況（東から）



S K 1011完掘状況（同）



S B 1002床面遺物出土状況



S B 1002ミニチュア土器出土状況

図版10



S K 1002遺物出土状況



S K 1003遺物出土状況

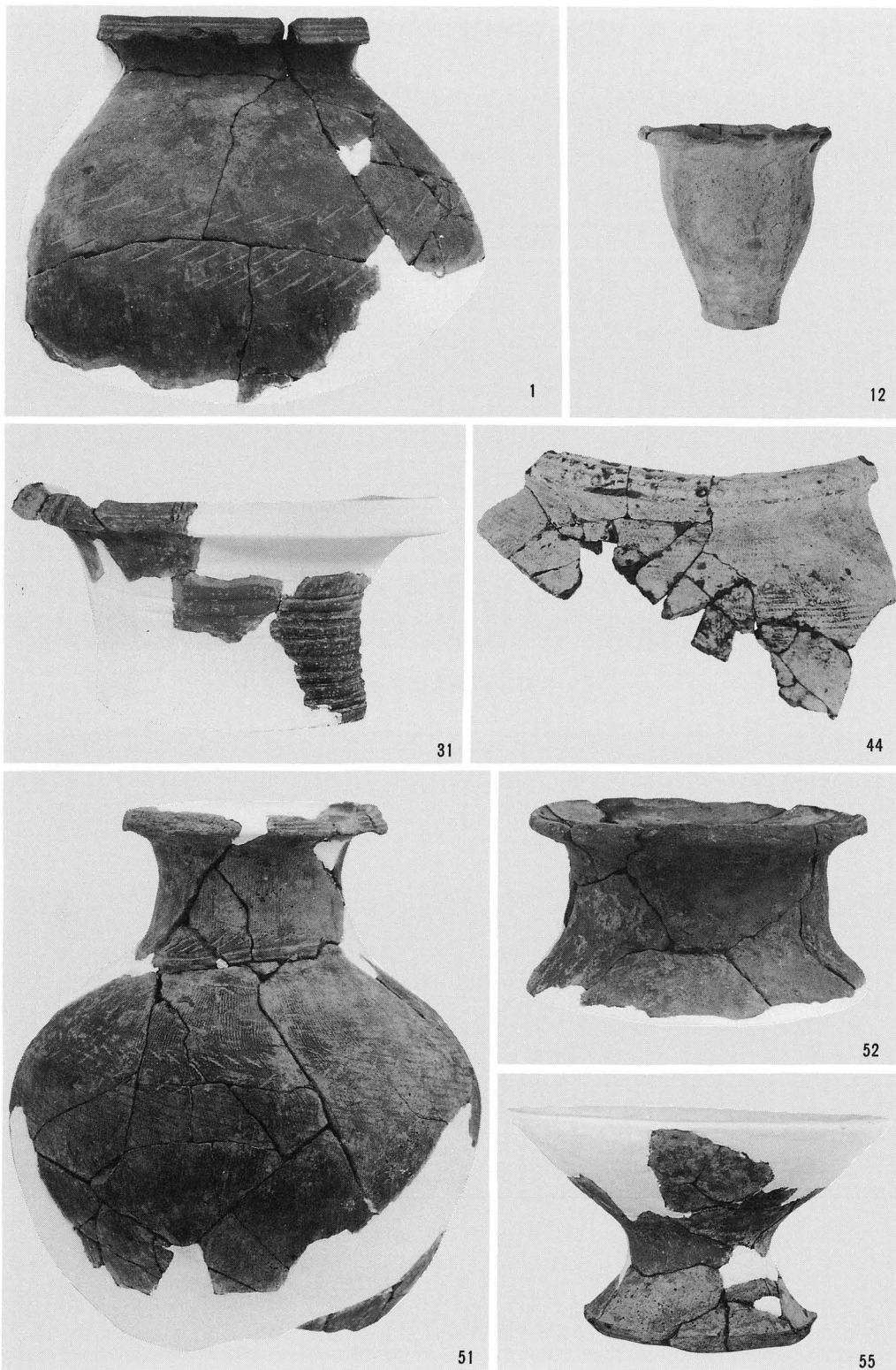


S K 1010遺物出土状況

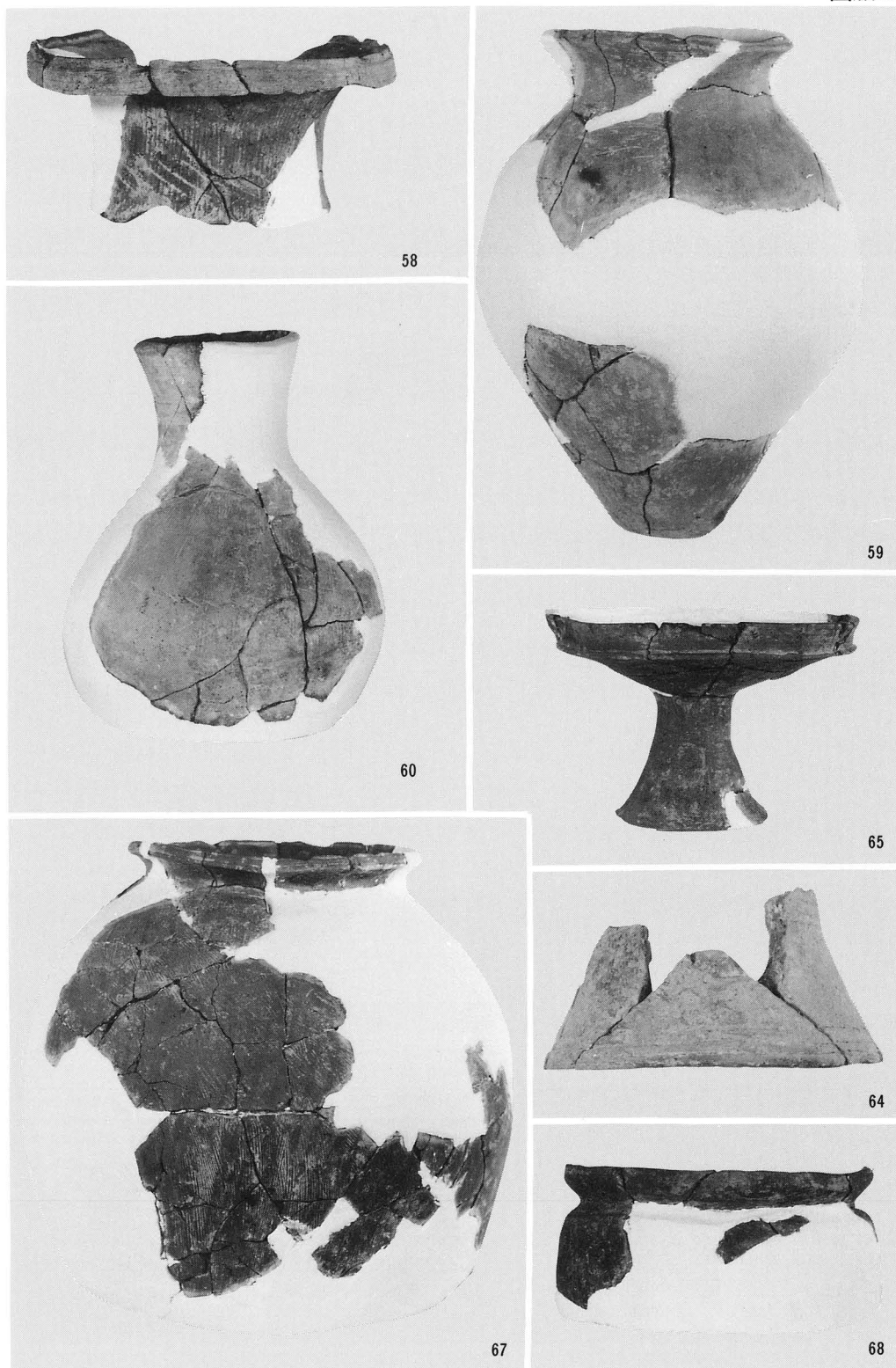


S K 1010遺物出土状況

图版12

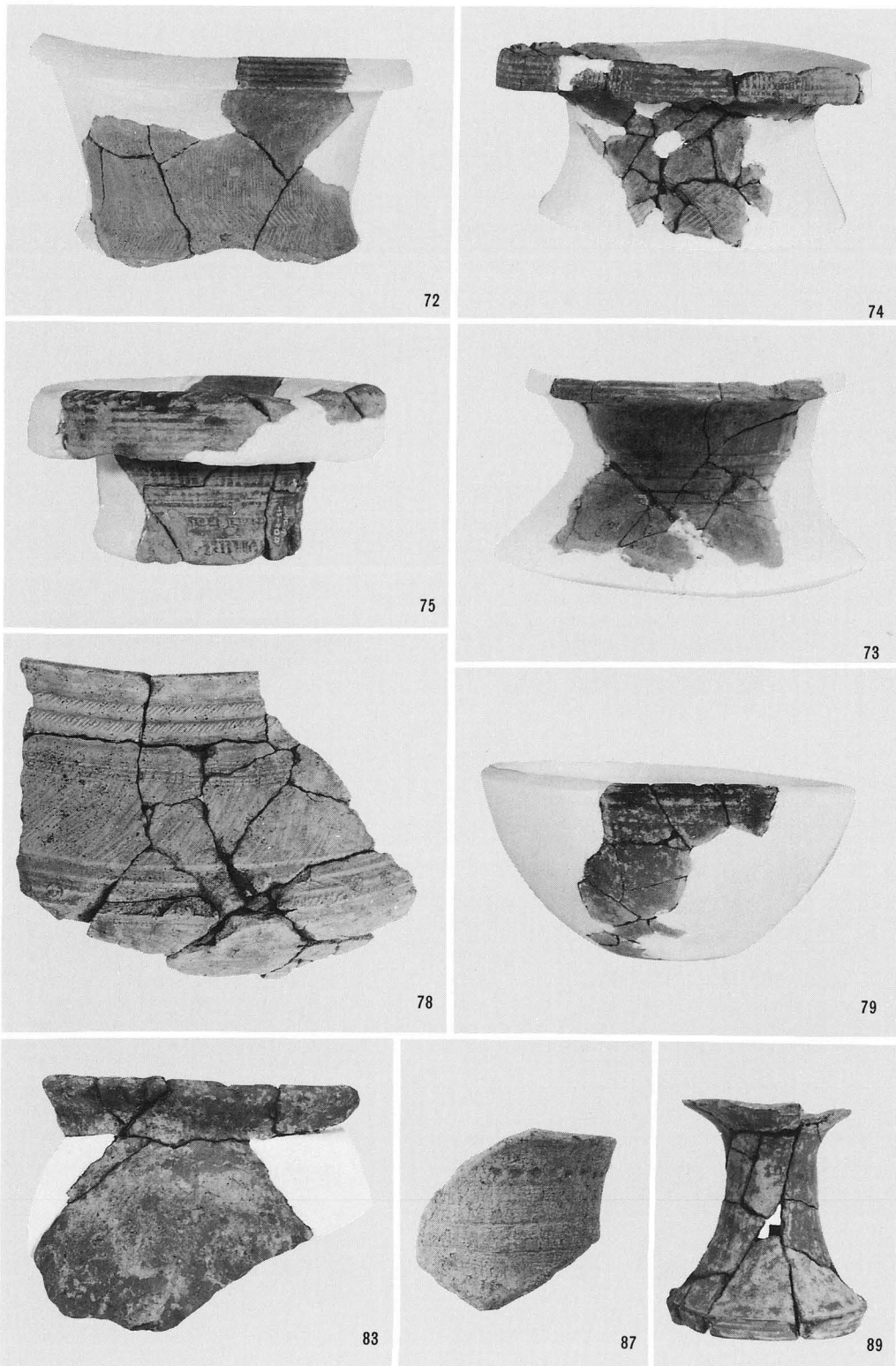


出土遺物 (1)

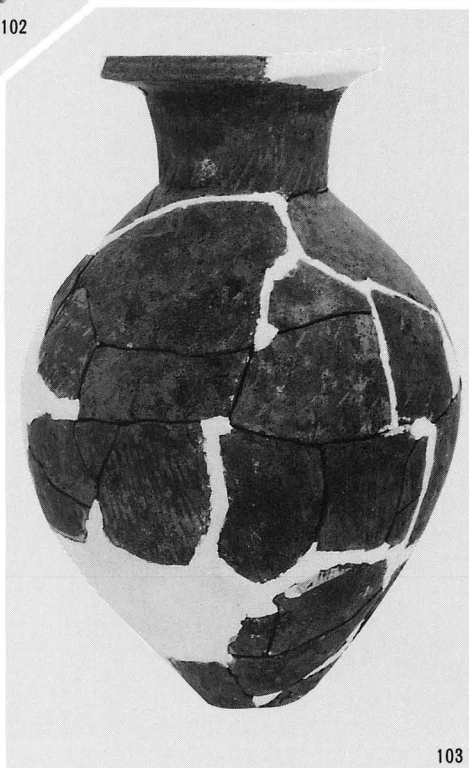
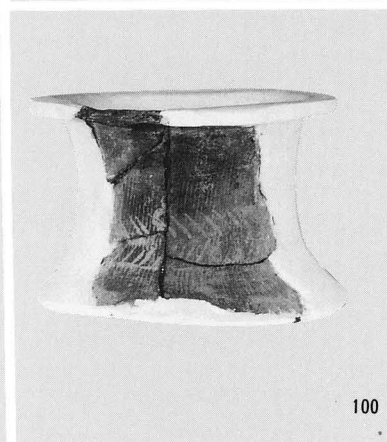
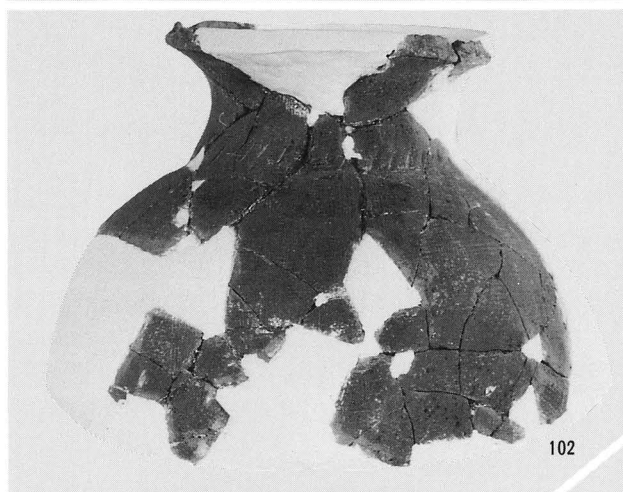
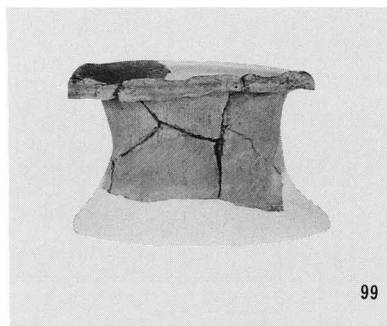
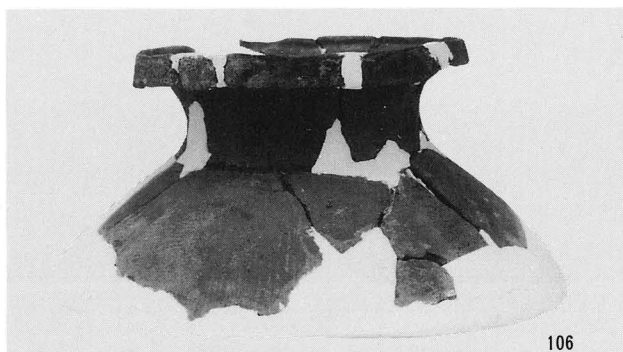


出土遺物 (2)

图版14



出土遺物 (3)



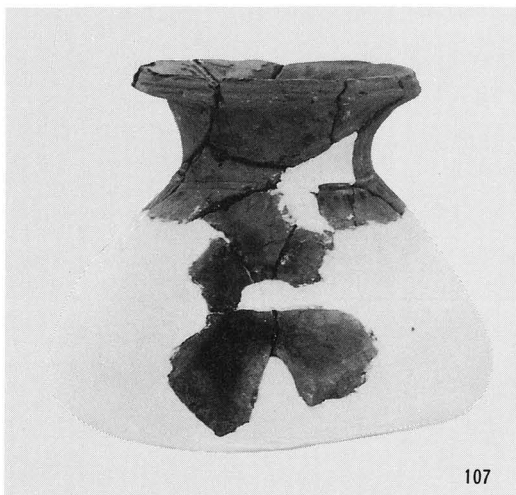
出土遺物 (4)



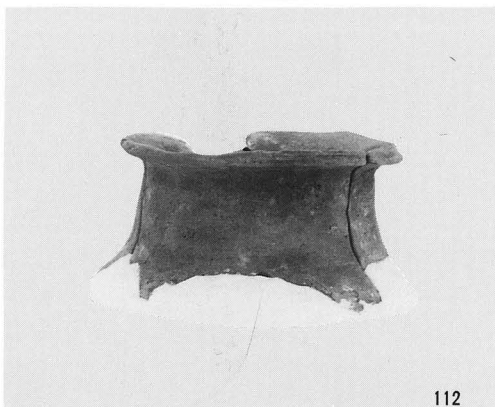
108



110



107



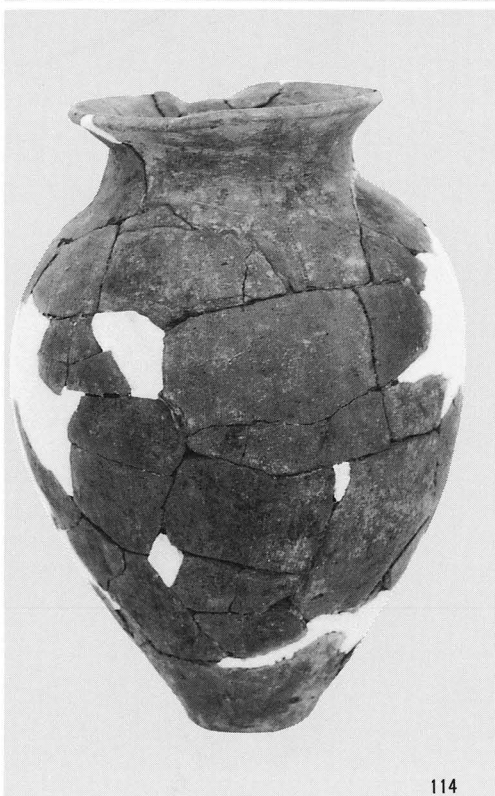
112



111

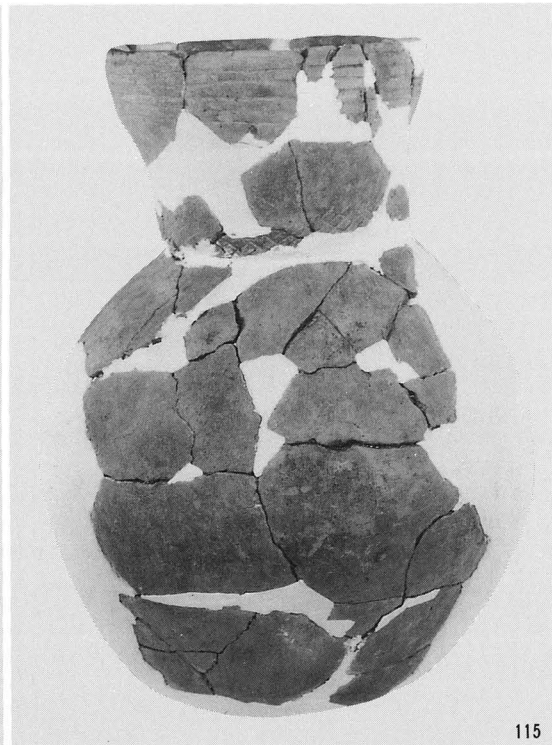
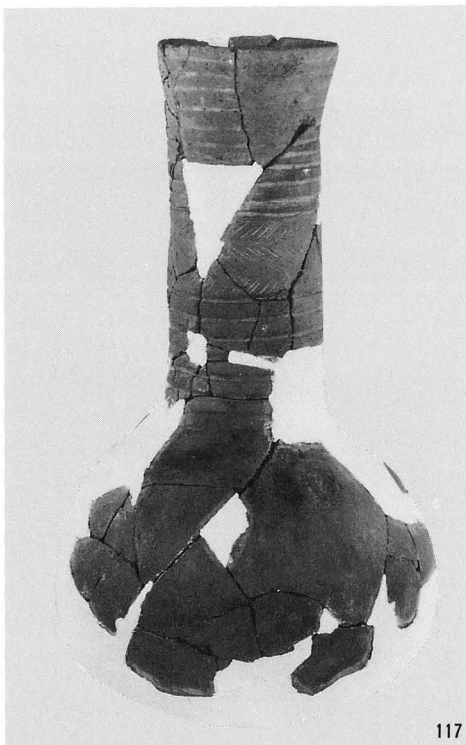


109

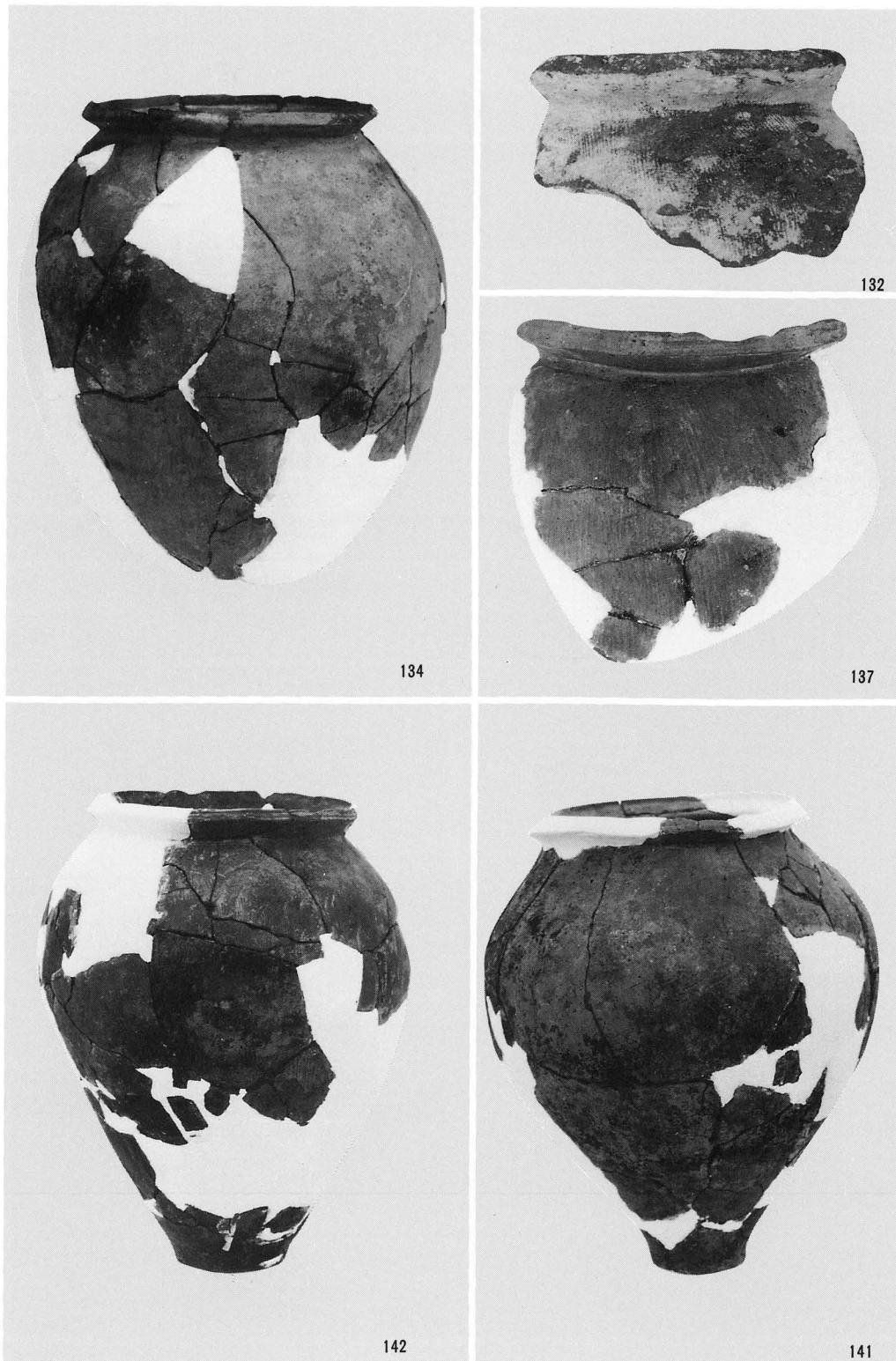


114

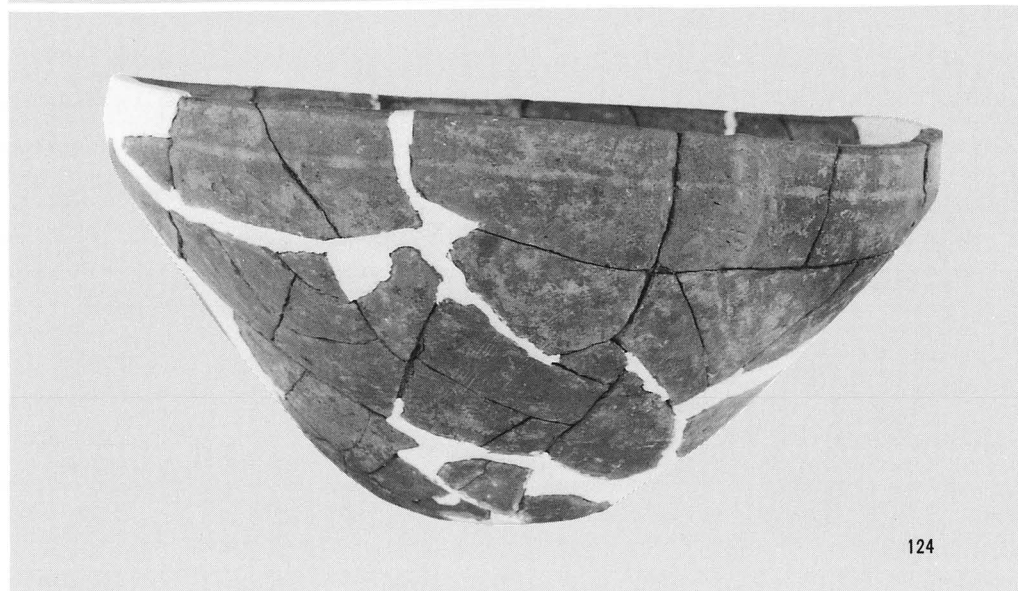
出土遺物 (5)



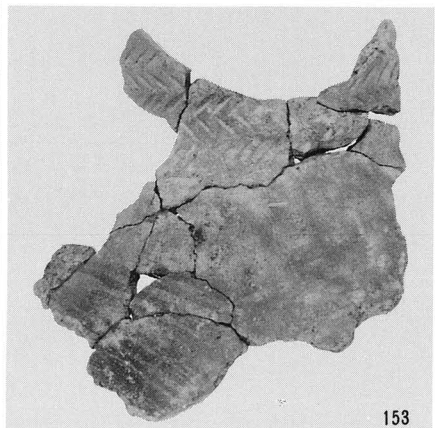
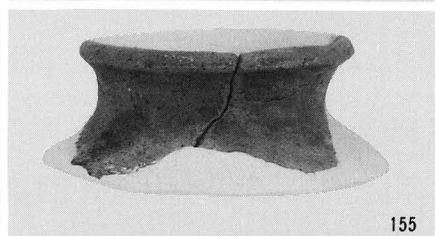
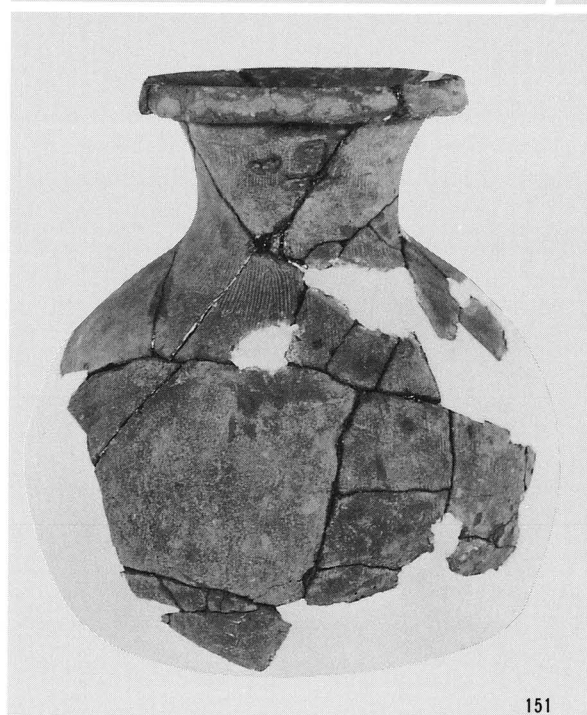
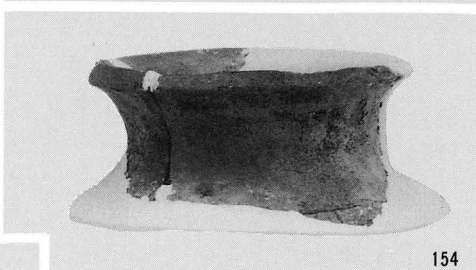
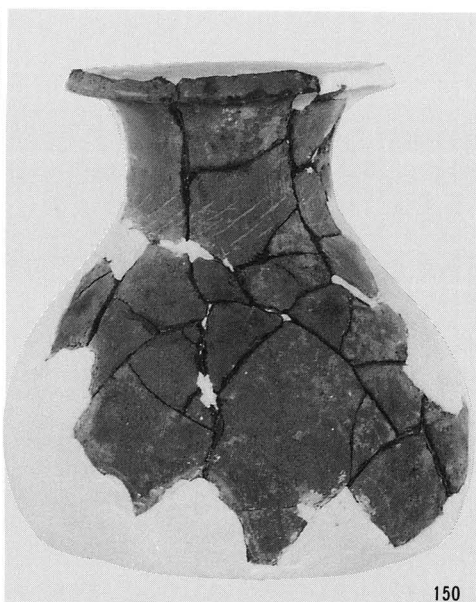
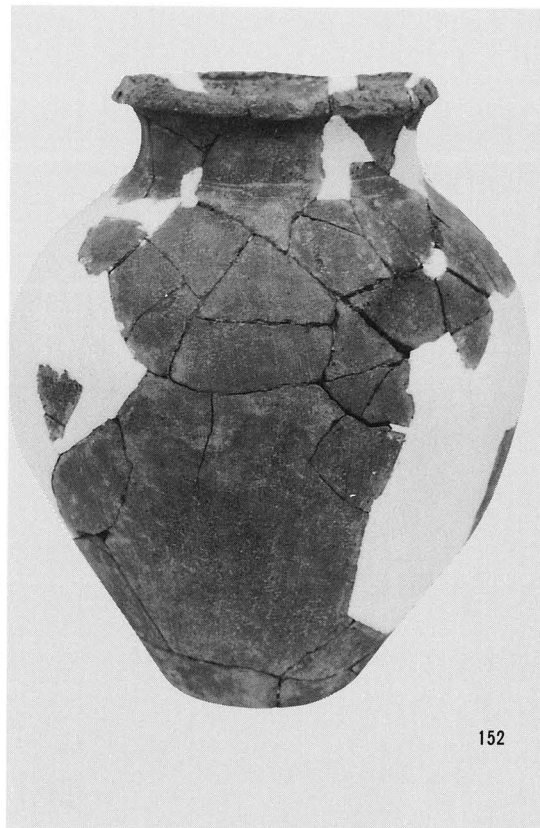
出土遺物 (6)



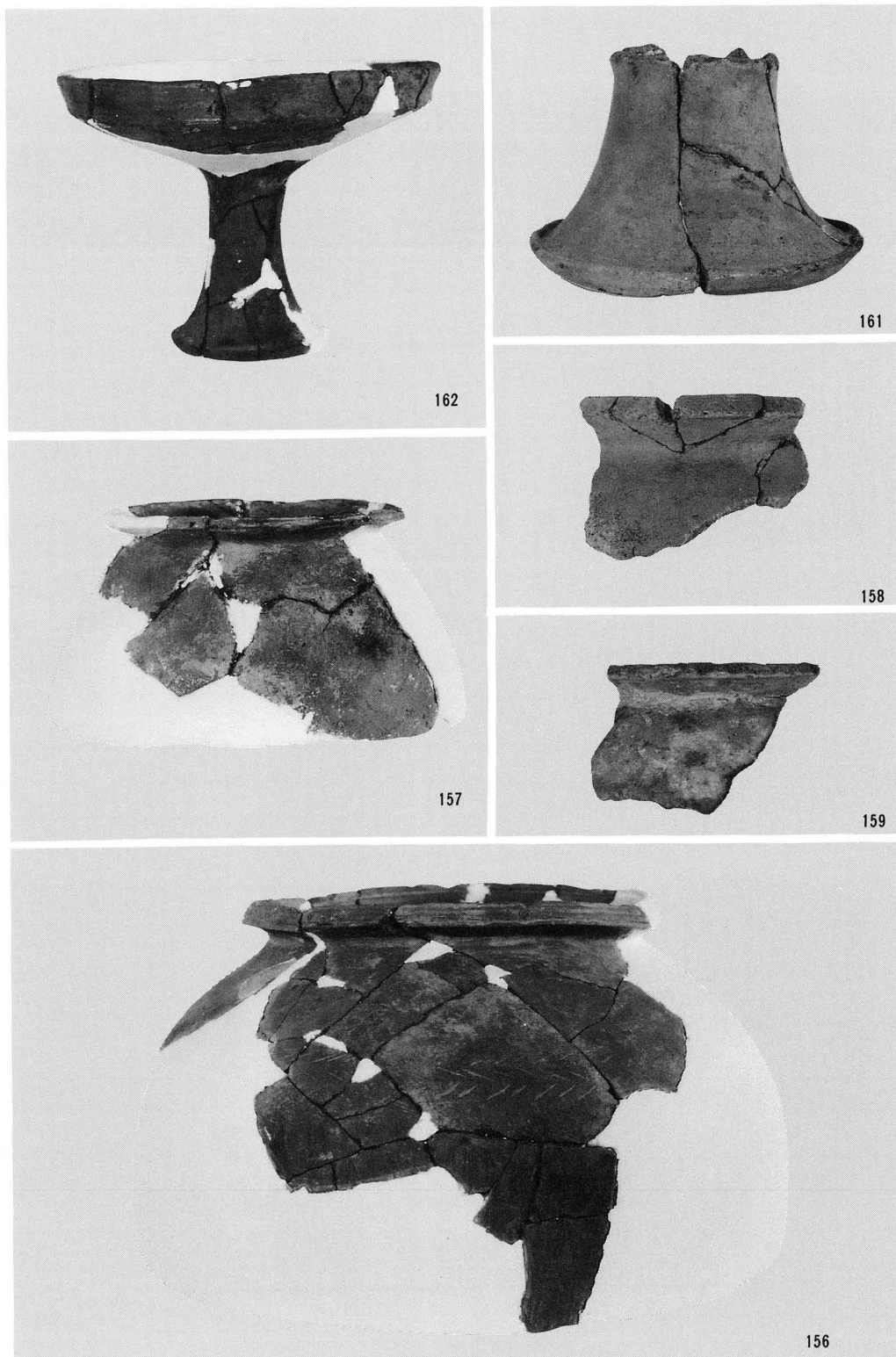
出土遺物 (7)



出土遺物 (8)

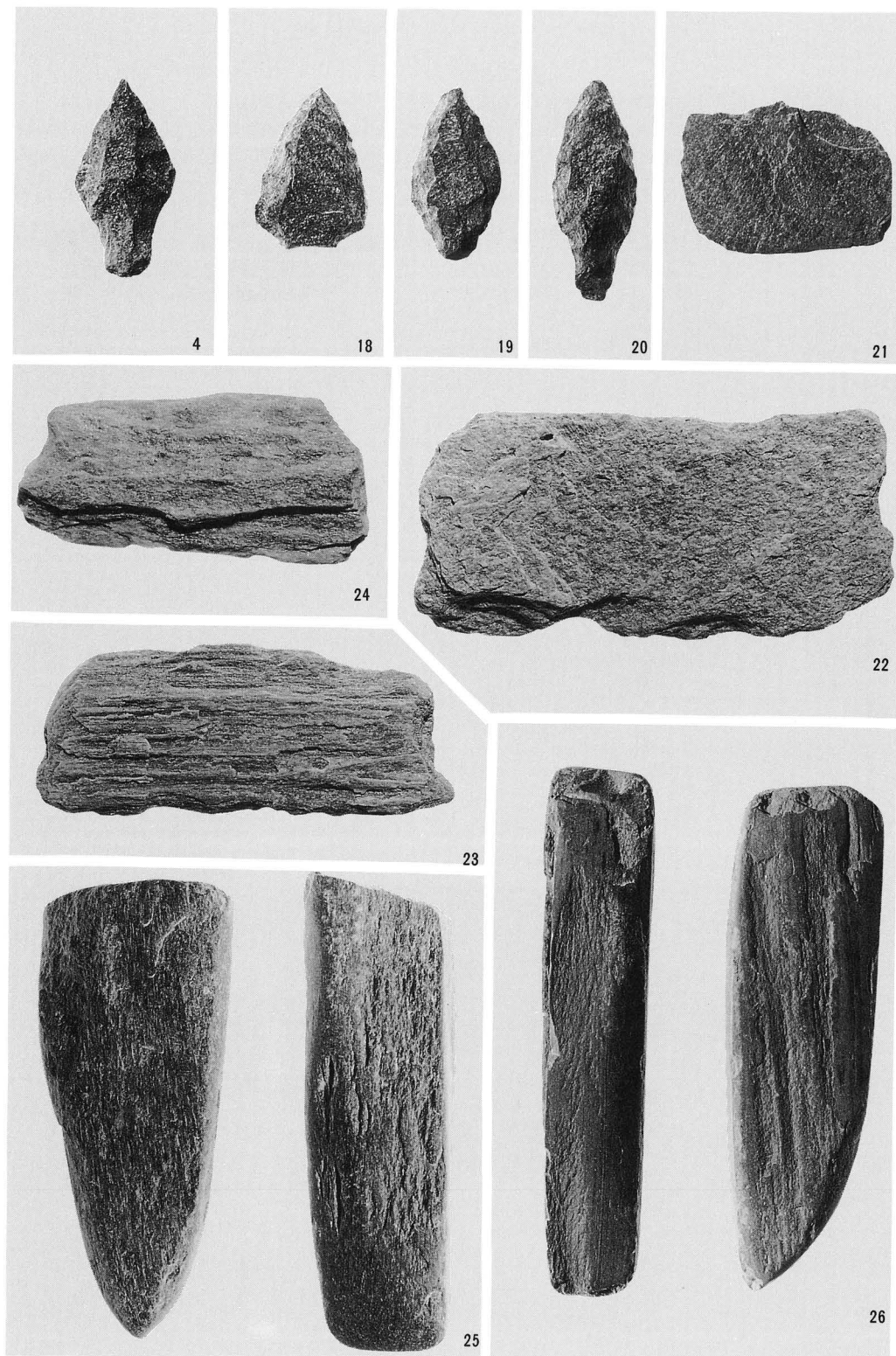


出土遺物 (9)

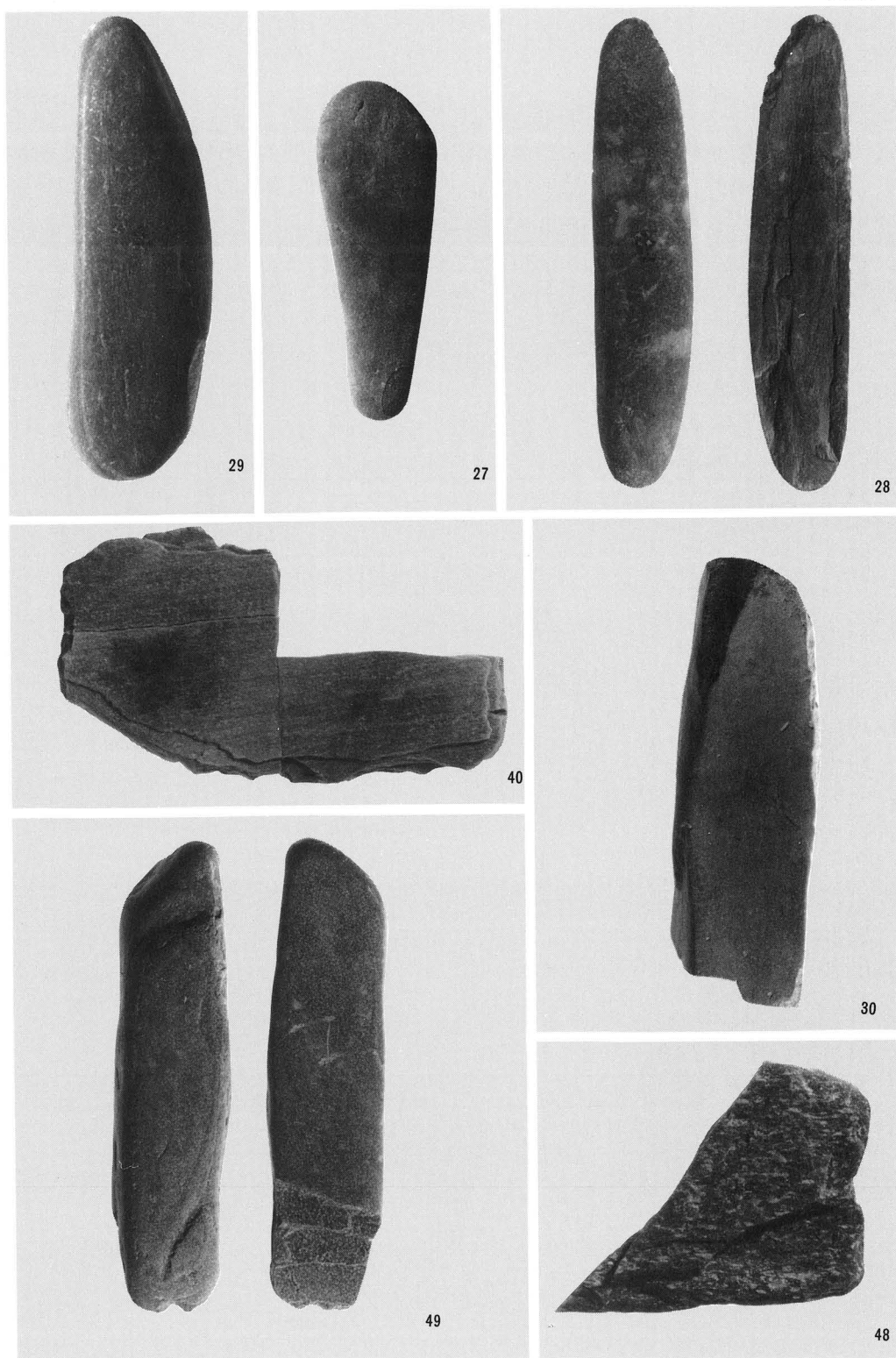


出土遺物 (10)

图版22

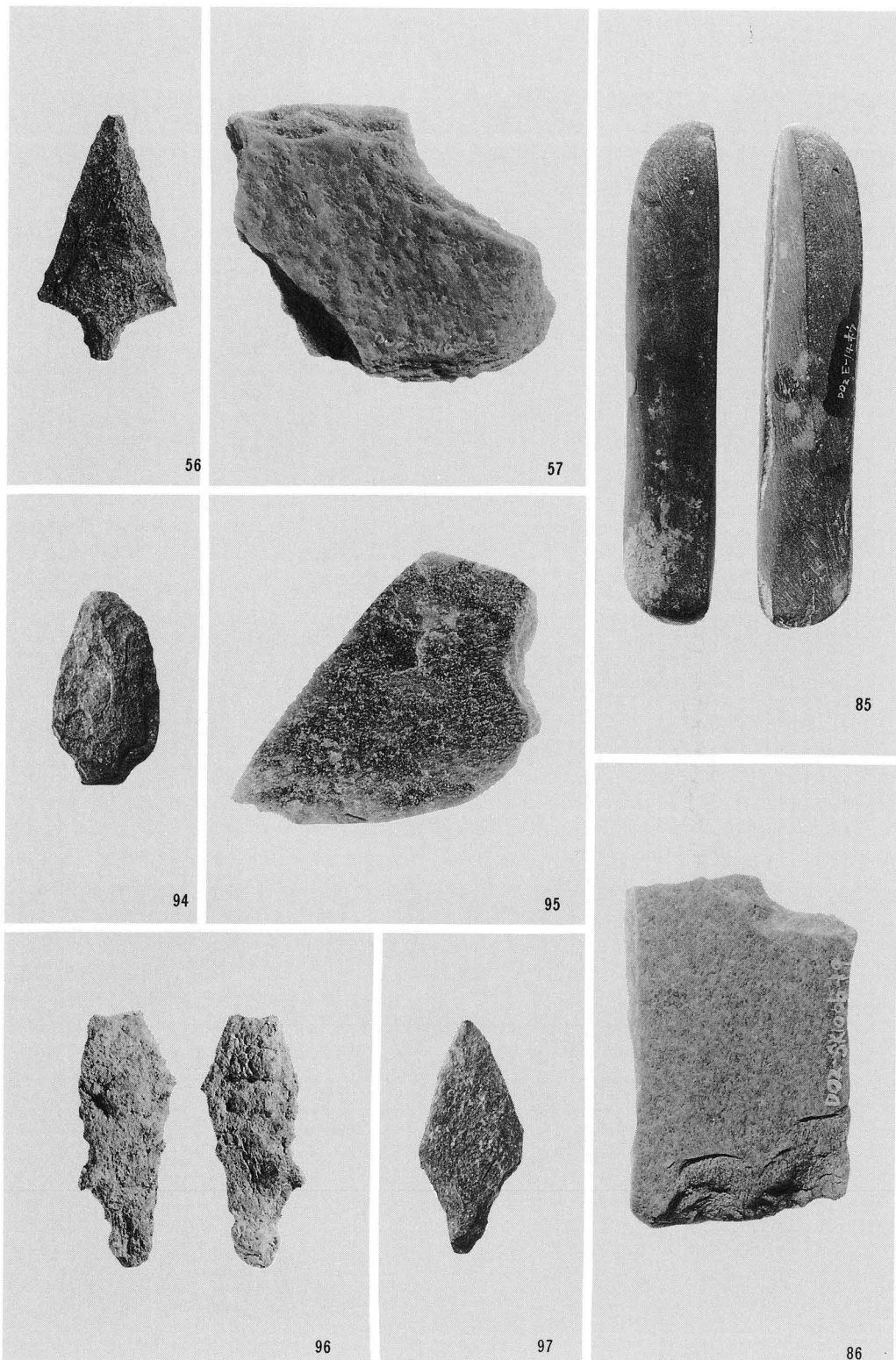


出土遺物 (11)

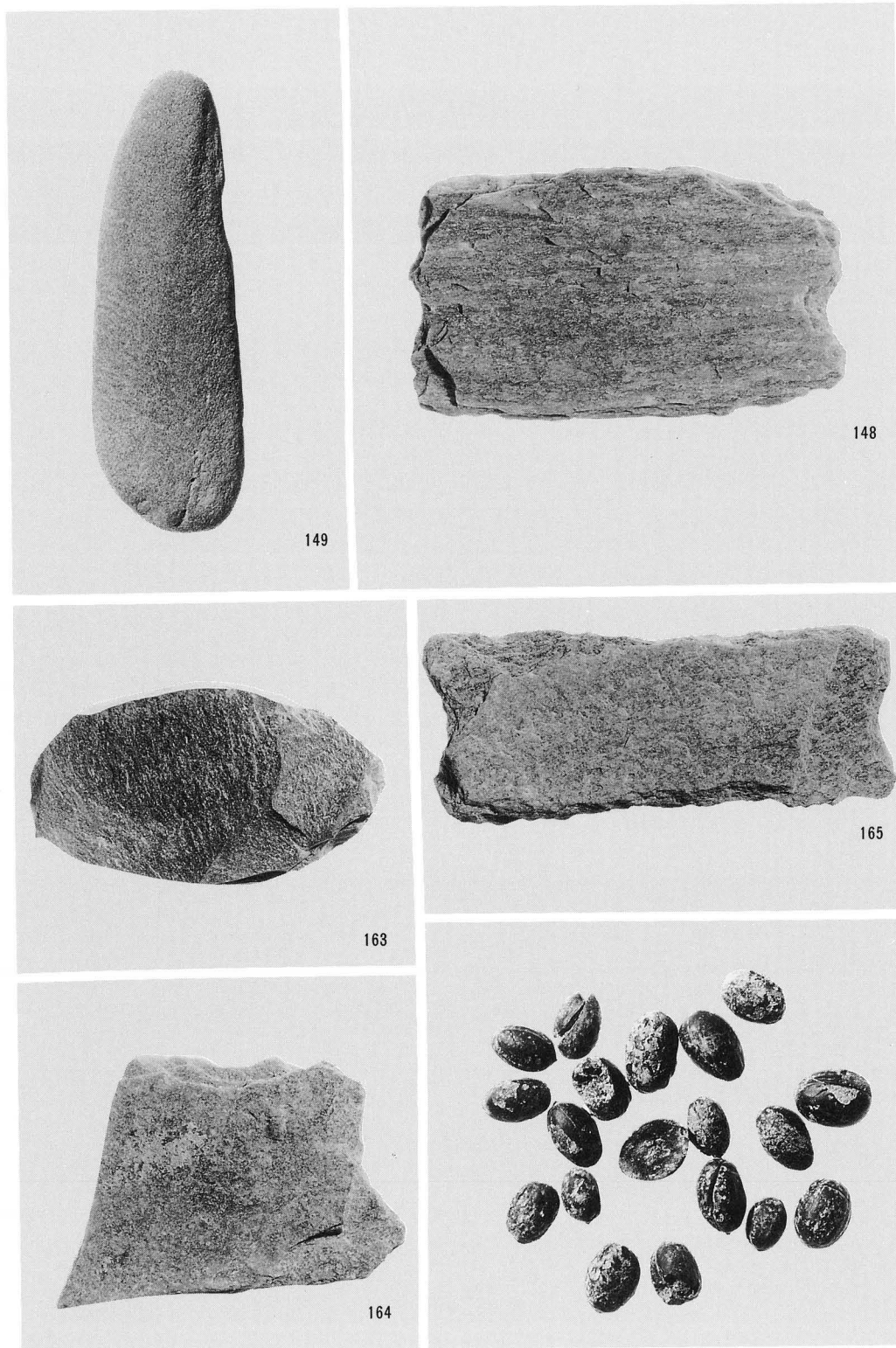


出土遺物 (12)

図版24



出土遺物 (13)



出土遺物 (14)



Ⅲ 十 樂 寺 遺 跡



1 本章は四国縦貫自動車道建設に伴う十楽寺の遺跡発掘調査報告である。

2 発掘調査期間及び報告書作成の期間は次の通りである。

発掘調査期間 平成2年11月24日～12月8日

報告書作成期間 平成4年4月1日～平成5年3月31日

3 遺物番号、挿図番号及び図版番号は全て通し番号とした。

遺跡抄録

遺 跡 名	十楽寺遺跡
読 み	じゅうらくじいせき
所 在 地	徳島県板野郡土成町字法教田159-2 他 X=124.375～124.410 Y=81.065～81.100
種 別	窯跡
時 代	奈良・平安
主な遺構	窯跡・灰原
主な遺物	須恵器・土師器・鉄斧

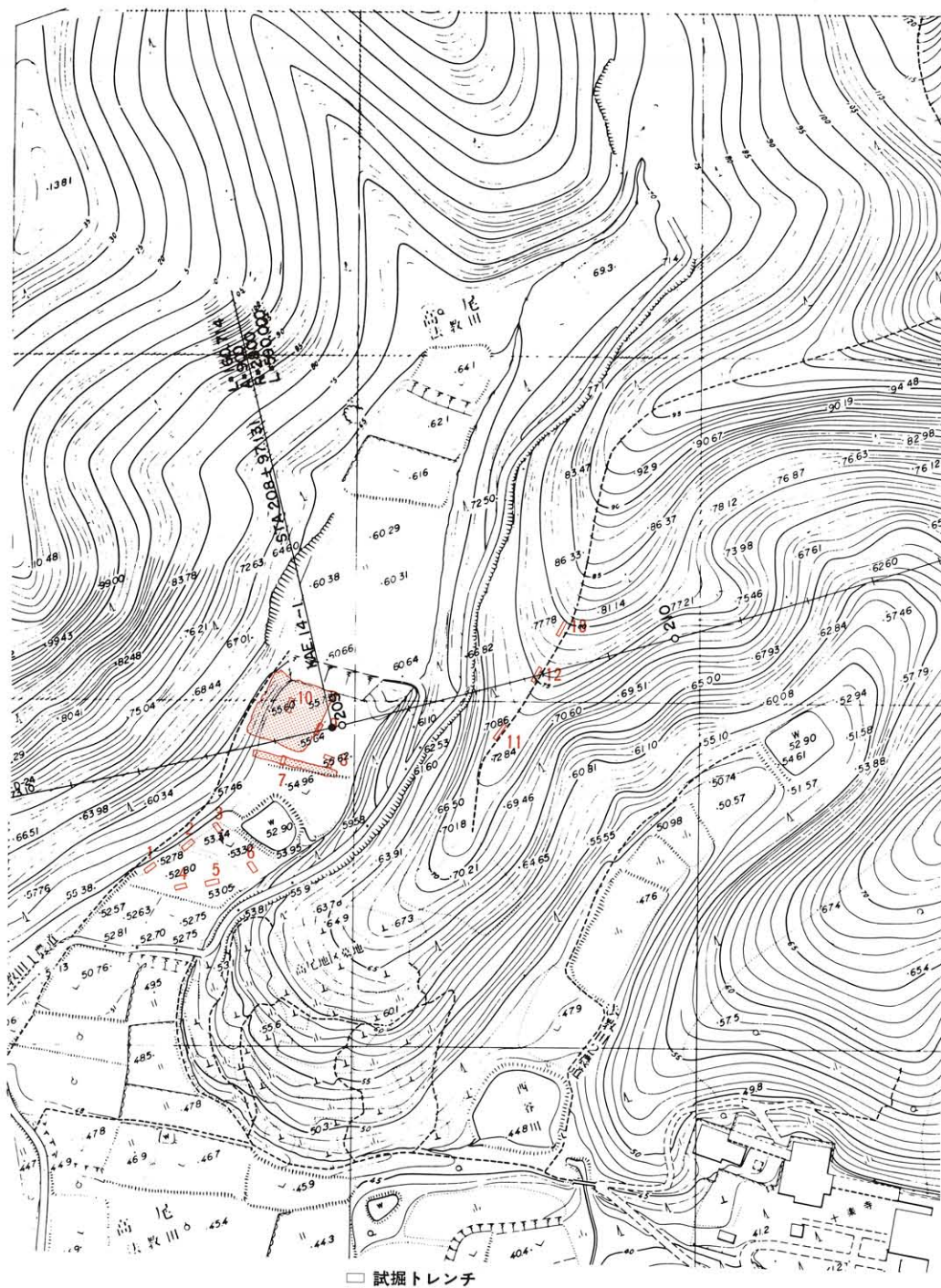
1 調査の経過

(1) 調査の経過

本遺跡が位置する阿讃山脈南麓の四国縦貫自動車道建設予定地は、調査に先立って実施された遺跡分布調査の際は山林と休耕田だったため遺物の採集などはなかったが、路線予定地に隣接する尾根の先端部が、十楽寺古墳群として知られていたことや、周辺の山麓部に須恵器の窯跡の存在が知られていたことから、調査の対象地としてあげられた。試掘は十楽寺古墳群の西側の谷一つ隔てた尾根の一部と、この尾根よりさらに西側の狭い谷を対象に実施することとした。谷は開墾されて小規模な溜め池と水田となっていたが、調査はこの谷と尾根に小規模のトレンチを合計13ヶ所設定して実施した。その結果、路線予定地内の中では谷の一番奥のNo7とNo10a 2ヶ所のトレンチから須恵器を中心とする遺物が出土した。このうち、山裾部分に設けたNo10トレンチからは、遺物の他に木炭と灰からなる層の堆積が認められ、出土遺物の中に窯壁とみられるものが混じっていたことや、近くで窯跡や灰原が確認されていることなどから、窯跡の存在が予測された。また、水田の中央部に設定されたもう1ヶ所のNo7トレンチでは、遺物が出土した層が開田の際に先の山裾付近から移動させたものであることが地権者の話で明かとなった。一方の、尾根部分の調査では、3ヶ所設けたトレンチとも表土を除去した段階ですぐ岩盤が露出し遺構の存在する可能性は皆無と判断される状態であった。このため、本調査は、この谷のNo10の試掘トレンチ周辺を中心に行うこととし、これに二次堆積ではあるが遺物の出土した水田中央部の一部を遺物採集を目的として調査区として加えて実施することとした。

(2) 発掘調査の方法

調査を始めるにあたってのグリッド配置は発掘調査統一基準にしたがって第Ⅳ系国土地座標を基準とし、5m×5mのメッシュを1グリッドとして調査区全体を覆い、南西の隅から北に向かってはA B Cのアルファベット、東に向かっては123のアラビア数字をそれぞれの記号としてふり、その組み合わせでそれぞれのグリッド名を表記することとした。なお、今回の調査では調査区が2ヶ所に分かれているため、北西の山裾側の調査区をA地区、水田中央部に設定されたほうをB地区と便宜上呼ぶこととする。



第1図 十楽寺遺跡調査地位置図

(3) 調査日誌抄

1990年

11月14日 調査区内の表土の機械掘削作業を行う。

11月17日 調査区内の人力掘削作業開始。

11月19日 A地区の一部に灰原らしき部分を検出。

11月22日 灰原の範囲を一応おさえる。

11月26日 A地区の灰原に隣接して自然流路の存在を確認。自然流路の掘り下げに着手。

11月29日 灰原の検出状況写真を撮影後精査開始。

12月3日 灰原精査と自然流路掘り下げの過程で流路内への灰原の広がりを確認。

12月5日 流路内の灰原の検出状況の写真撮影。撮影終了後灰原精査開始。精査の過程で下部に新たな灰層を確認。

12月10日 灰原の精査、及び流路内のセクション図作製。

12月12日 セクションの写真撮影。

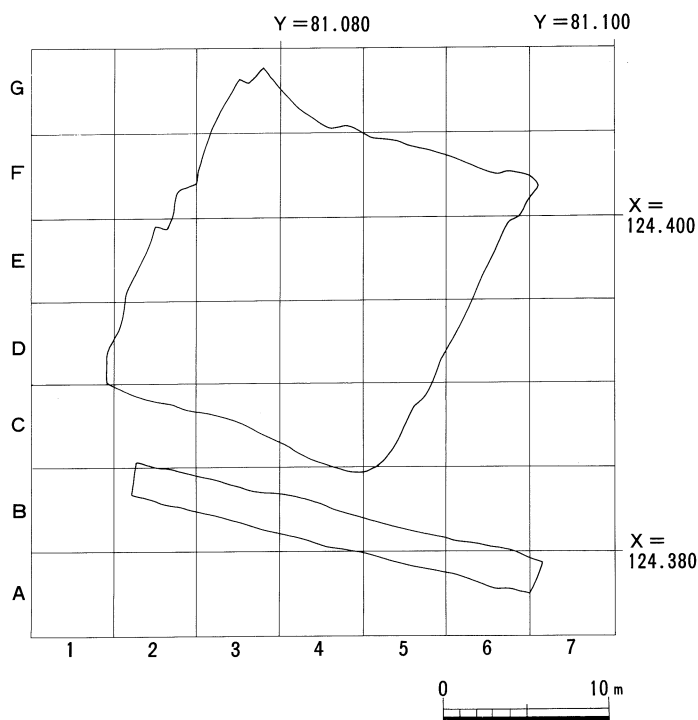
12月13日 人力掘削及び灰原精査を全て終了。完掘状況写真の撮影。

12月14日 調査区内の地形測量開始。

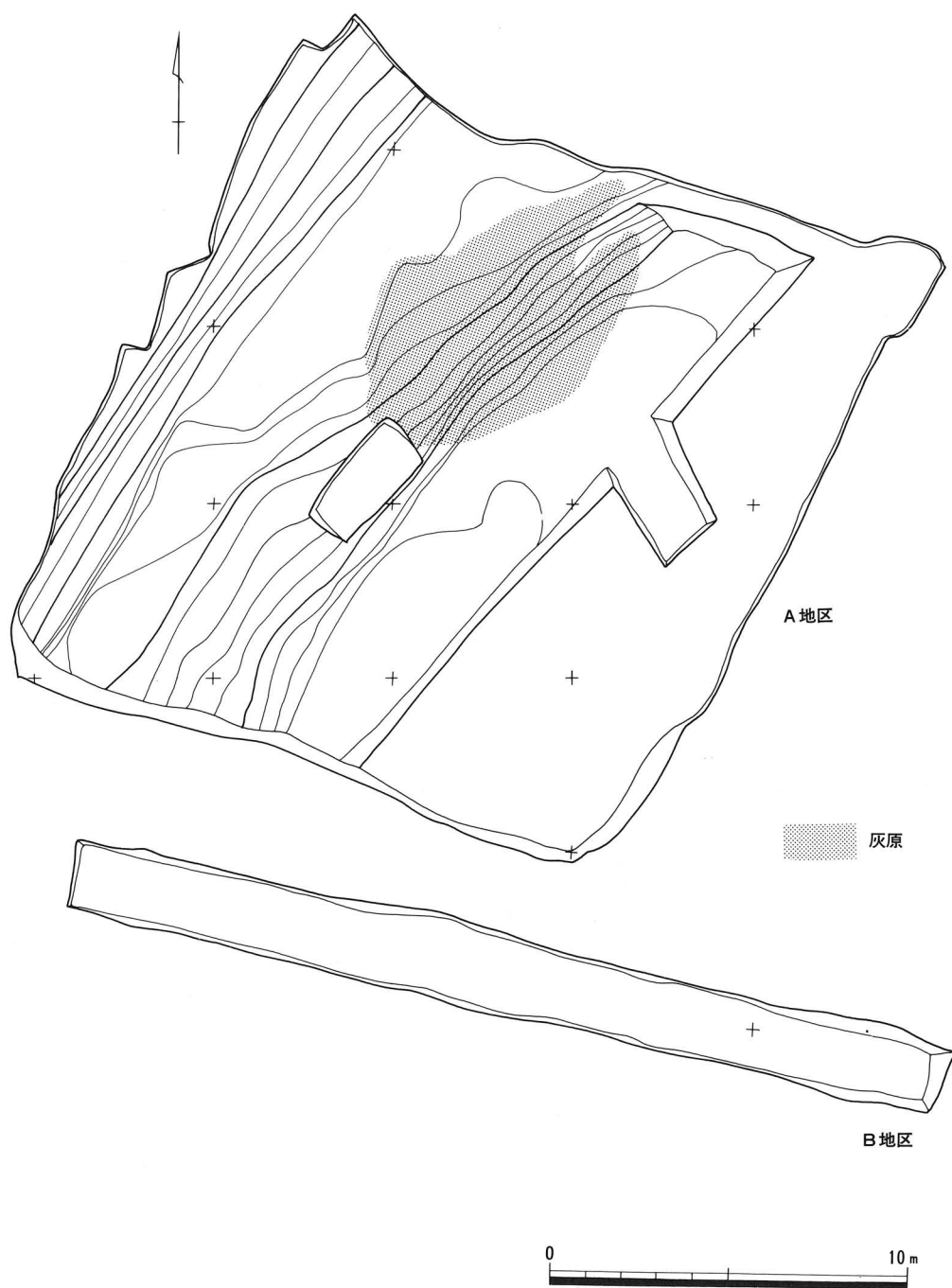
12月17日 地形測量を終了。

12月18日 調査区内のセクション図作製作業を全て終了。

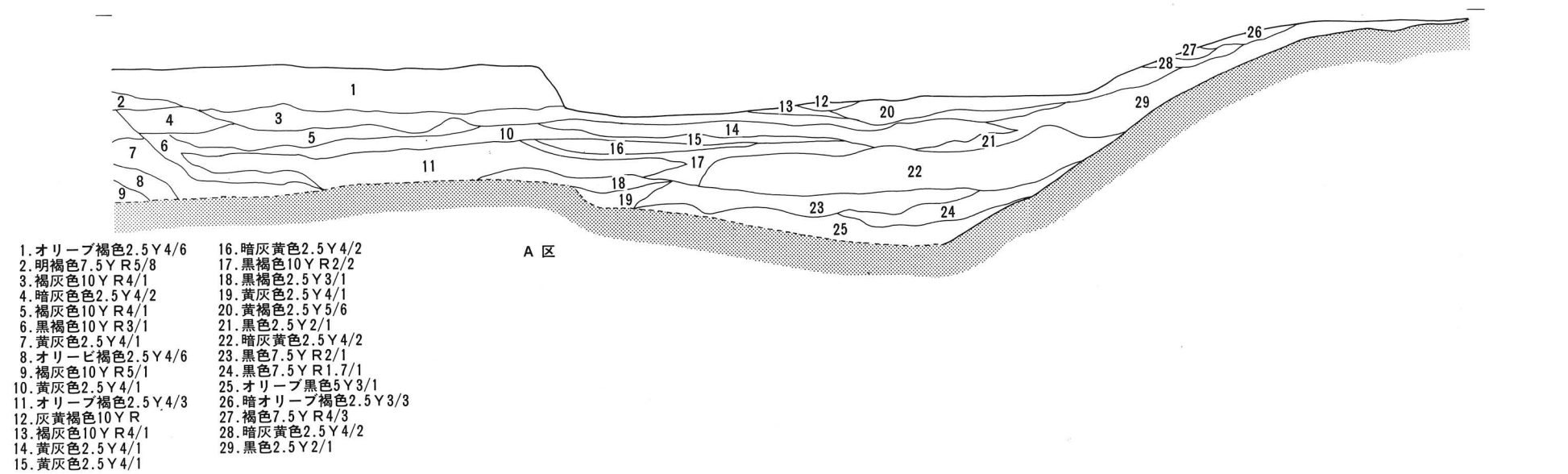
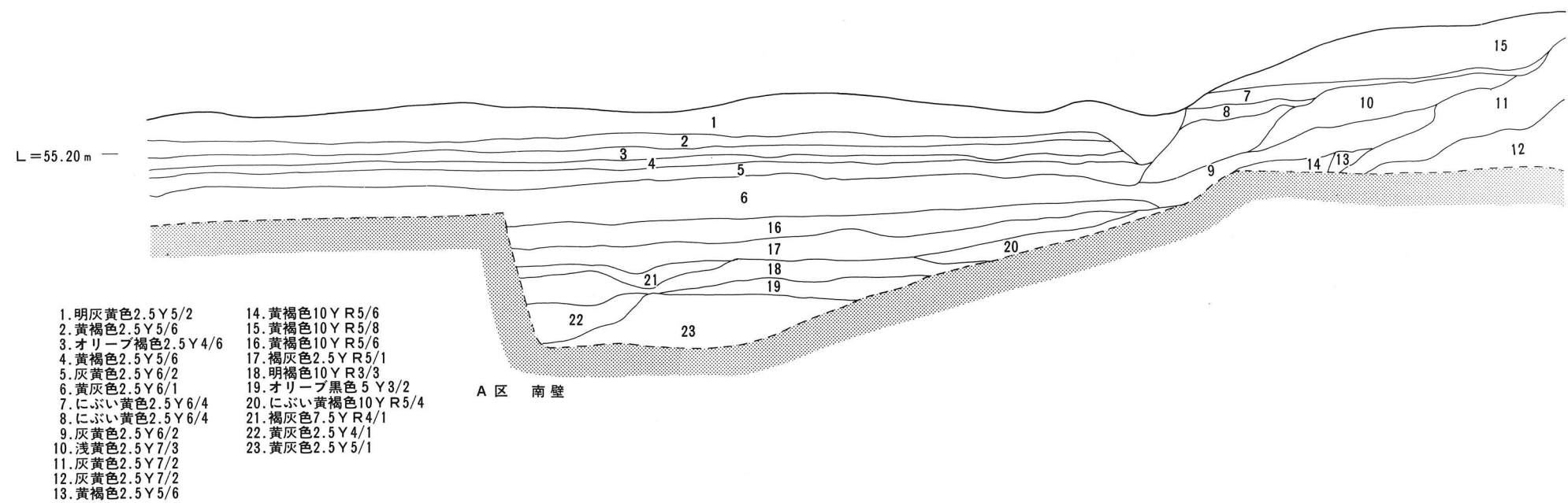
12月19日 午前中全ての作業を終了、午後センターに帰還。



第2図 十楽寺遺跡グリッド配置図



第3図 十楽寺遺跡遺構配置図



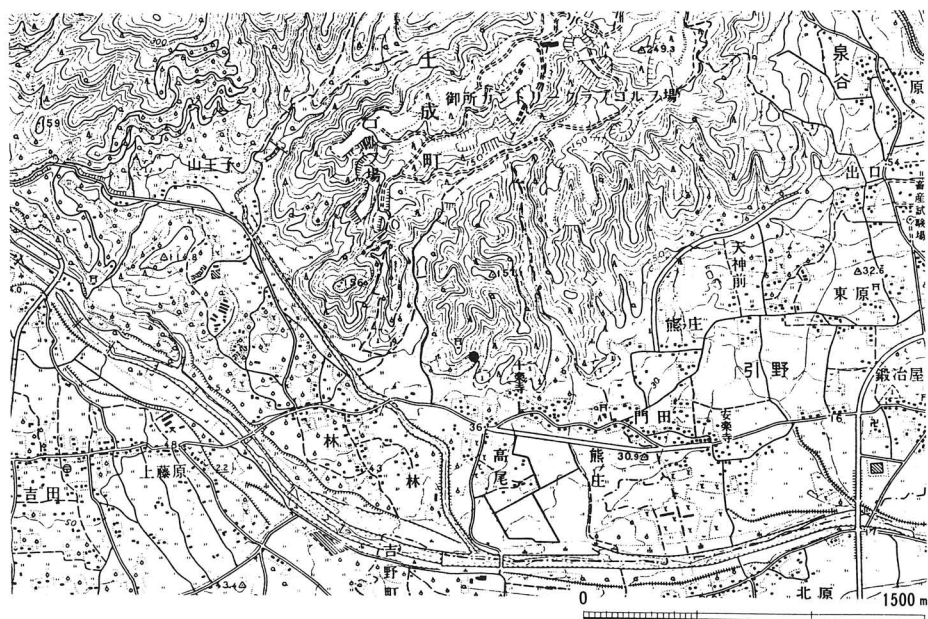
第4図 十楽寺遺跡土層実測図



2 遺跡の立地と環境

周辺の地理的環境

吉野川北岸の中流域に位置する土成・上板の両町は、町の北側を徳島・香川の県境を東西に走る阿讃山脈から南に延びた比較的急峻な丘陵状の尾根が連続し、麓の平坦部の大部分もここから流れ出る中小の河川によって形成された扇状地によって占められている地域である。これら中小の河川の中でも土成町を流れる宮川内谷川は、吉田から柿原にかけて扇状地を形成したあとその流れを大きく東に転じ、上板町で同じく阿讃山脈から流れ出た泉谷川と合流して板野町にはいり、矢武・下庄付近を経て旧吉野川に流れ込むこの地域でも最も規模の大きい川である。この宮川内谷川と泉谷川に挟まれた引野地区は、阿讃山脈から南に向かって延びた尾根の末端部に小支谷が複雑に入り組んだ丘陵地帯となっている。本遺跡はこの引野の丘陵地帯の中でも一番南西の部分に位置し、西谷川にむかって開口する小支谷の比較的奥まった地点に位置している。



第5図 十楽寺遺跡・位置図

3 調査成果

(1) 遺跡の基本層序

本遺跡が位置する西谷川に向かって開口する小支谷は、発掘調査以前は開墾によって平坦にならされ、小規模な水田と溜め池が谷筋に沿って点々と並んでいる状態であった。調査区は、試掘によって窯跡の残存する可能性があるかと判断された水田の一部と、西側に延びる尾根の東斜面の裾部を含め、A・Bの2地区を設定した。そのうち、南側のB地区については、水田の開墾の際に破壊された窯の土が客土された場所であることが判明したため、遺物の採取のみの調査となった。また、一部に山の斜面部をふくめ調査区を設定したA地区についても、斜面に堆積している表土を除去した時点で岩盤が露出し、窯本体は完全に破壊されていることが明かになり、これに続く水田の平坦部でも山裾近くでは水田土壌を取り去ると同じ状況が認められた。ただ、調査区の大半は谷を流れていた旧河道にかかり、シルトと砂礫・粘土の互層が連続している状況が観察された。しかし、窯が操業していた当時は河の水量はかなり少なかったらしく、河道内に流れ込んだ灰原の上下を覆う層は何れも粘性のあるシルト質の土によって占められている。

(2) 検出された遺構と遺物

検出された遺構

今回の調査で窯の存在が予想された西側の山裾部は、開墾による削平が予想以上に激しく、窯本体は床面まで完全に失われその構造や位置を正確に明らかにすることはできなかった。ただ、河道内から出土した窯壁の破片には壁材として粘土に混入された植物の茎の痕跡とともに、側壁を作る際に補強材として組まれたと考えられる並行に並んだ木材の痕跡が残されているもの（図版8-7・8）があり、窯構築の際の状況を伺い知ることができる。また、かろうじて削平を免れた自然流路よりの斜面では、窯壁片と灰・木炭・焼土などが地山面に固着した状態で認められる箇所があり、前庭部または焚口があるいはこの近くに存在した可能性が考えられた。

灰原 前を流れる旧河道からは岸から河道内に流れ込んだ状態で上下2枚の灰原の広がりが見出された。この灰原は河道の岸に沿って、それぞれ上層が長さ10m・幅4m、下層が長さ8m・幅2.5mの規模で残っている。この2枚は、河道の中では間層を挟んでいるが、岸に近づくにつれてその厚みを減じ最後には重複している。山裾から自然流路内にかけての緩斜

面上という不安定な堆積状況のため、灰原自体は2次堆積の可能性が非常に強いと考えられる。

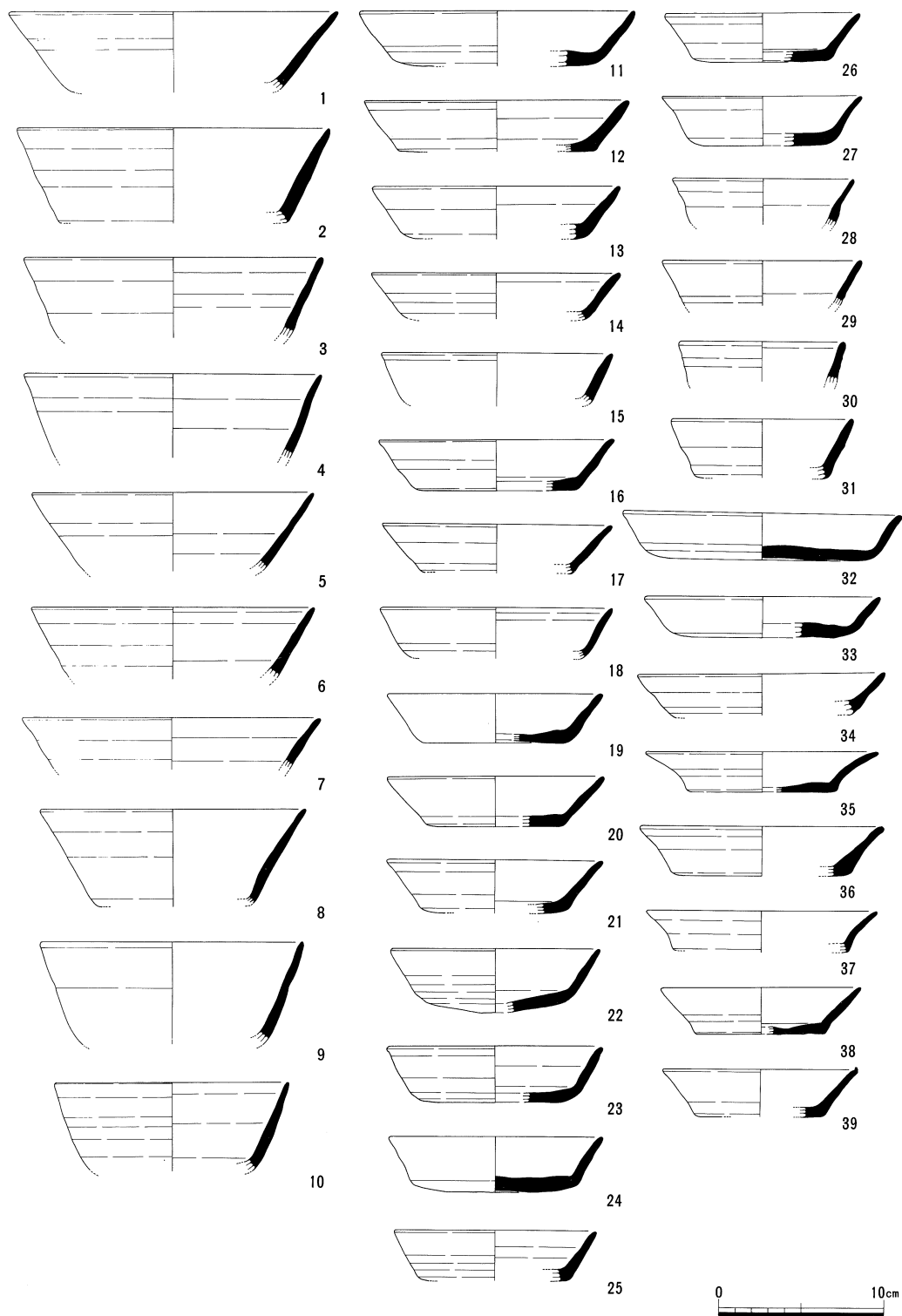
出土遺物

今回の調査では、遺物は主に河道の縁辺に残された2枚の灰原から出土しているが、他にも削平を免れた斜面の裾部や河道内の堆積物のなかに窯壁の破片などに混じって出土している。出土遺物はその大部分が須恵器によって占められているが、それ以外にも若干の土師器や黒色土器の他、削平を逃れた斜面裾部から鉄斧が1点出土している。出土した須恵器は小片のうえ変形したものも多く、形態と器種構成を正確にとらえることが難しいが杯・皿・碗・壺・蓋・鉢・高杯・平瓶・甕が認められる。器種ごとにその特徴を記すると以下のようなになる。

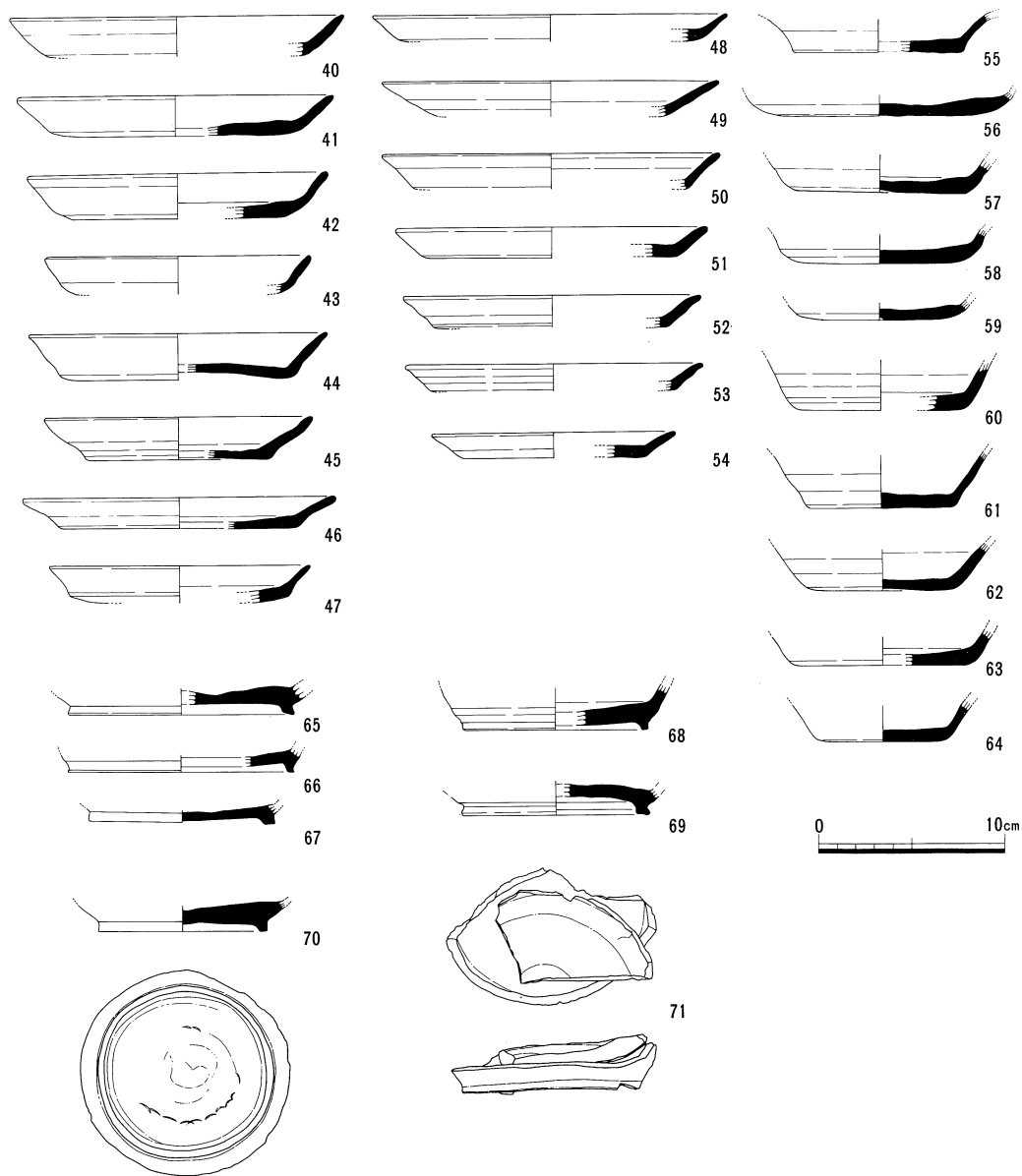
須恵器（第7～11図）

杯（1～39・65～71）

須恵器のなかで出土点数が最も多い器種である。形態から無高台のA類（1～39）と高台の付くB類（65～71）に大きく分けられるが点数はA類のほうが多い。A類は平らな底部から斜め外上方に延びた口縁をもつ形態である。体部は直線的なもの、外反するもの、やや内湾するものがあるが、外反するもののなかにはその度合いが著しいものがみうけられ、熱によって変形した可能性がある。底部と体部の境界が明瞭な稜線をもつものと不明瞭なものが認められ、大きさから口径14～20cm・器高5cm以上のもの（1～10）、口径13～17cm・器高3～4cmのもの（11～21）、口径10～13cm・器高3～4cmのもの（22～31・38・39）、口径14～17cm・器高2.5～3cmのもの（32～37）に分けられる。大型で器高の高いもののなかには碗A類に分類するほうが妥当な個体も含まれている。また、32・33は平城京で杯Cとして分類されているものに該当する可能性があるものである。底部外面は回転ヘラ切り痕をそのまま残すもの（第10図142・143・図版6-1・2）が大半であるが、更にその後繊維状のものでナデ調整が施されるもの（図版6-3・4）や、ヘラ削りが行われるもの（図版6-5）も認められる。しかし、ナデ調整は不徹底なままのものが多く、また、ヘラ削りを施されたものは全体のなかでは極めて少ない。体部は内外面とも横ナデ調整が施されるが、底部との境が特に強く撫でられるものが認められる。底部内面もナデ調整が施されるが、なかには、底部外面の調整の際に用いられた当て具の痕跡が残るもの（第10図144・145）がある。B類はA類の杯に高台が付いた形態のものと考えられるが全体の器形を伺える資料はなく、中には皿B類も含んでいると思われるが出土点数も少なく分離できなかった。高台の脚端面は水平のものと外傾するものの2種類がある。底部外面はヘラ切りのままのもの（図版6-7）



第 6 図 十楽寺遺跡出土土器実測図 (1)



第7図 十楽遺跡出土土器実測図（2）

と粗いナデ調整が施されたものがある。また、底部外面に爪形状圧痕が高台内を一周するもの（70・図版6－8）も1点出土している。

皿（40～54）

杯同様、無高台のA類と高台付きのB類が存在する可能性があるが、破片のためにB類は杯B類と区別できない。皿A類は偏平な底部に斜め上方にひらく短い口縁部が付く形態のも

ので、体部が直線的に伸びるものが大部分を占めているが、中にはやや外反するものも認められる。口径は13～14cmのやや小型のもの（43・45・47・54）と16cm以上のものに分かれるが器高は両方とも1.5～2.5cmで口径の大きさによる差は認められない。底部は杯同様回転ヘラ切りの後にナデ調整が施されている。

杯蓋（72～96）

杯蓋は、偏平な天井に屈曲する縁部がつく形態のもの（72～93）と、天井が丸く笠形で縁部が屈曲しない形態のもの（94～96）に分けられるが出土点数は圧倒的に前者が多い。つまみの残るものは少ないが、擬宝珠形のもの（75～78）が認められる。調整は天井部外面はヘラ切り後にナデ調整またはヘラ削りが加えられるがナデ調整のほうが多い。中には、内面に杯同様調整の際に用いられた当て具の痕跡の残る個体（146・図版7-1）もある。

壺蓋（97～109）

いずれも偏平またはそれに近い天井部に、やや丸みをもって折れ曲がる縁部がつくもので、縁部は外反ぎみのものと、ほぼ垂直なもの、内湾するものがあり、口唇端部も平坦なものと外側に向かって斜めにそぎ落とす形態のものがある。天井部はヘラ削り、口縁部はナデ調整によって整えられるものが多い。口径の大きさから、だいたい10～12cmの小型のものと、14cm前後の中型のもの、16cmの大型のものの3種類に分けられる。

碗（110）

内湾する口縁に内傾する口縁端部がつく銅碗形の形態をとるものと考えられるものが、わずか1点出土しただけである。平城京で杯Eに分類されている。

平瓶（111）

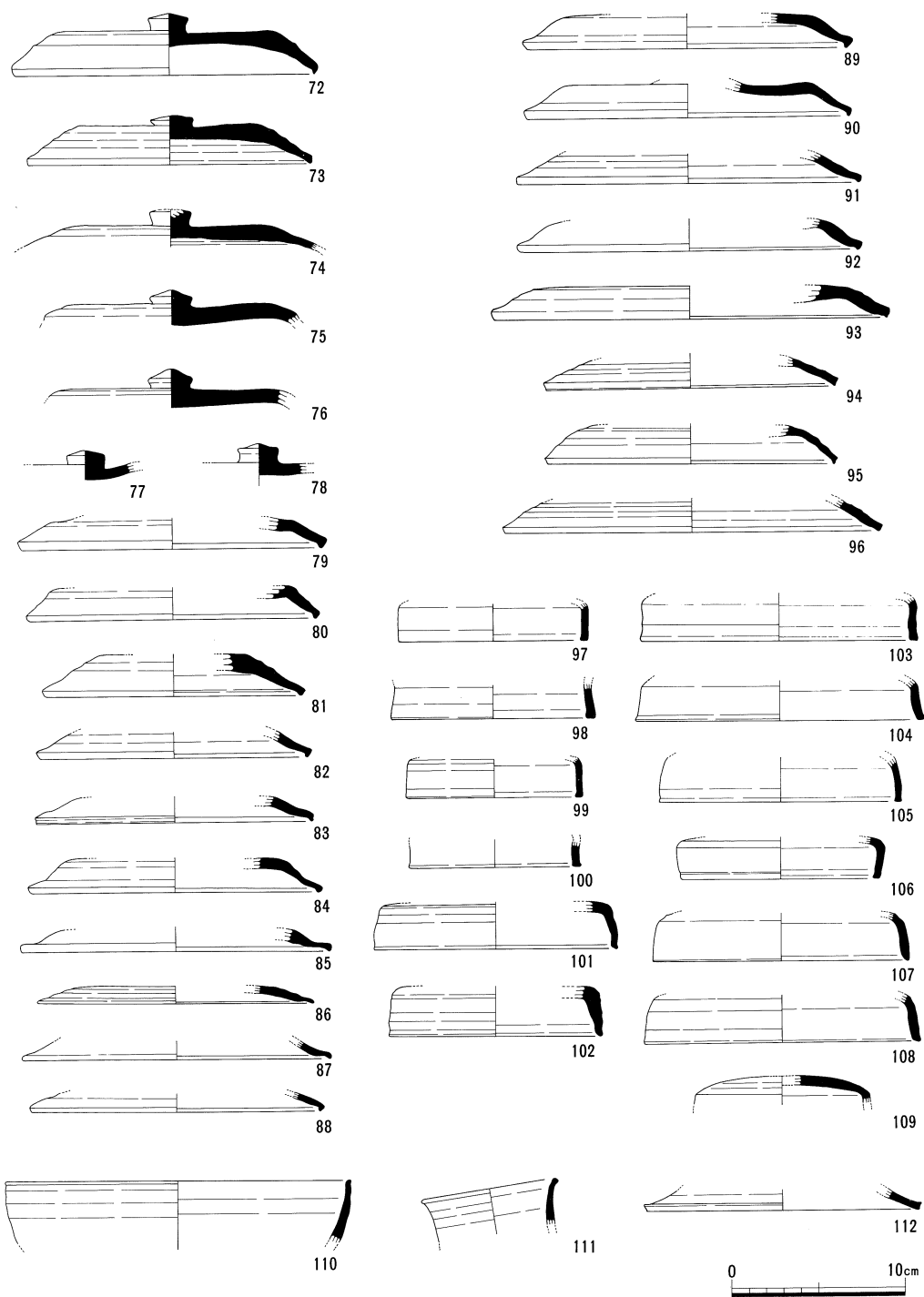
口縁端部を丸くおさめた広口の口縁部の小片と、把手の一部と考えられる破片がそれぞれ1点ずつ出土しているのみである。

高杯（112）

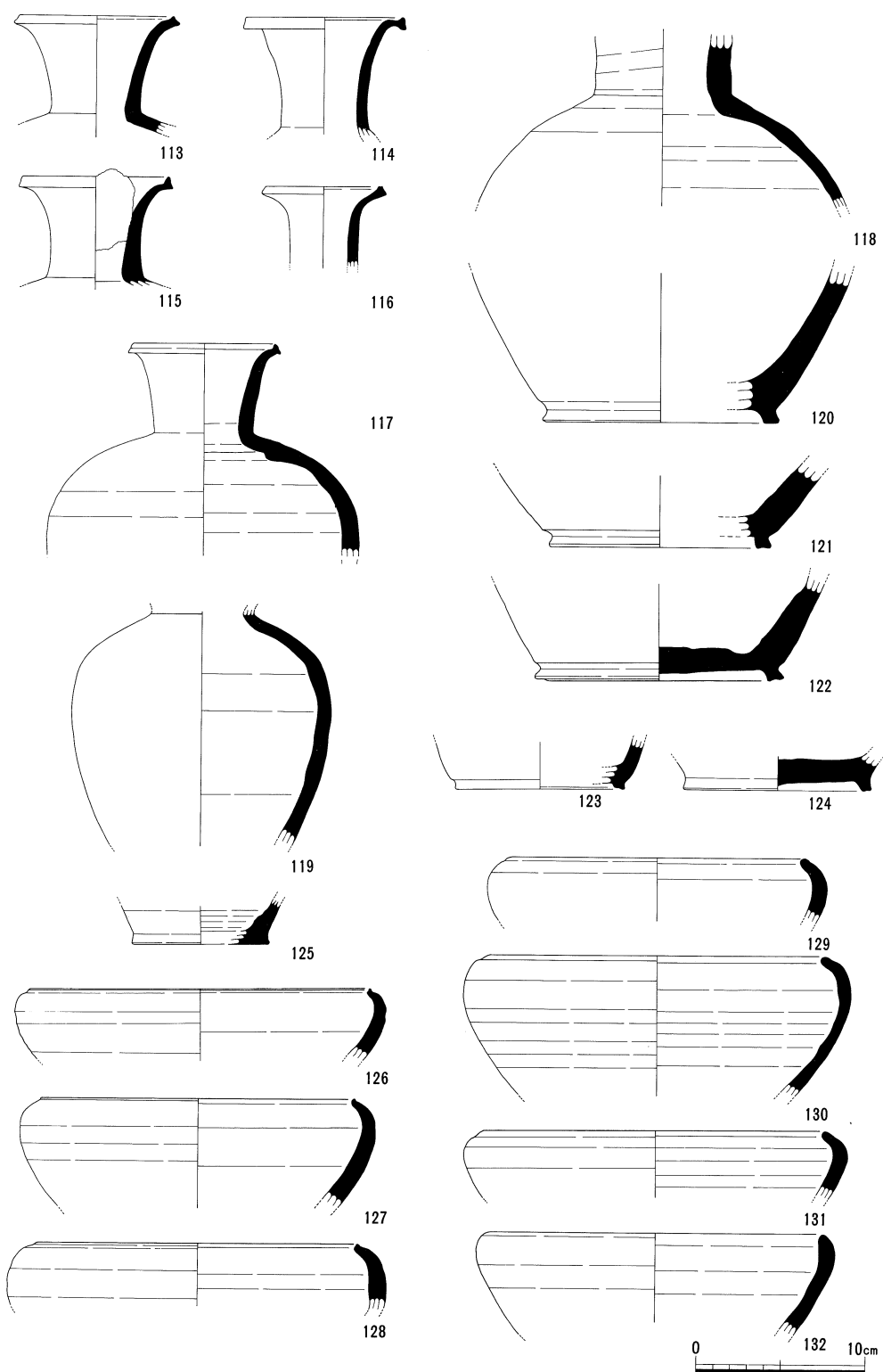
杯部の一部と考えられる破片と脚端部の破片が出土しているが、杯部は脚柱との境付近の破片のため、口縁部の形態などは不明である。2点出土している杯部のうち1点は外面がヘラ削り、内面がナデ調整によって整えられ、内面の一部に布によるとみられる圧痕（図版8-6）が認められる。

壺（113～125）

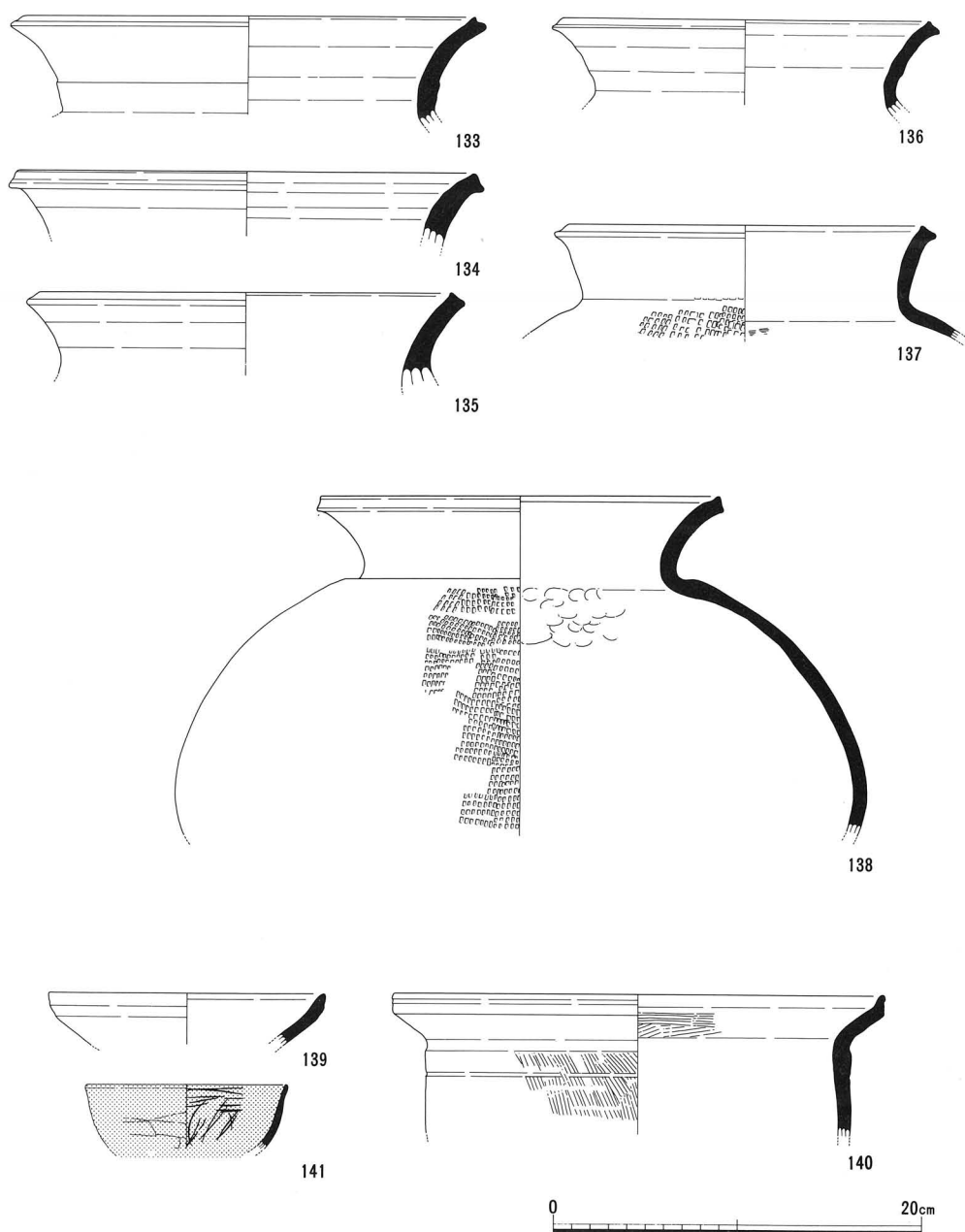
高台のついた卵形の体部と、頸部から緩やかに外反しながらのびる口縁端部を尖り気味に上方に摘み上げる形態の口頸部を有する、平城京で壺Lに分類されるものが大半を占めているが、1点だけ底部に回転糸切り技法の跡を残す壺Gと考えられる破片（125・図版7-8）も出土している。口頸部と体部は別々に作られた後に接合されたらしく、頸部と体部の境界には接合痕を明瞭にとどめるもの（117・図版7-5）がある。体部外面には回転ナデ調整



第 8 図 十楽遺跡出土土器実測図 (3)



第9図 十楽寺遺跡出土土器実測図(4)

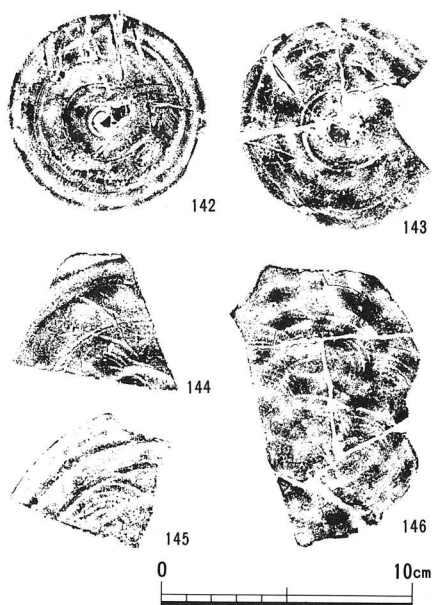


第10図 十楽寺遺跡出土土器実測図（5）

が入念に施されているがなかには体下半に回転ヘラ削りが加えられるものもある。ハの字形の高台の付いた底部には回転ヘラ切り痕をとどめ（図版7-6）、高台の周囲は接合をよくするためか丁寧に撫でられている。また、底部内面は一般的に調整が粗雑で指頭による粗いナデや圧痕（図版7-7）がそのまま残されている。

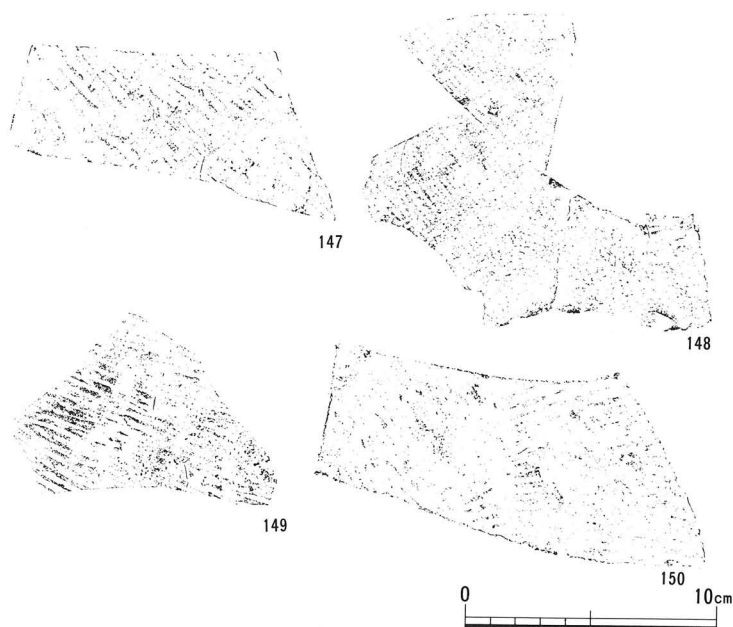
鉢 (126～132)

底部からいったん斜め外上方に大きく開いた後、肩部から口縁にかけて内湾する形態の体部をもつ、いわゆる鉄鉢形の土器と呼ばれるもので、平城京で鉢A類に分類されるものに類似する。口縁の形態から、端部が外反して上方に短く立ち上がるもの(126～128)とそのまま丸く収められるもの(129～132)の2種類に分類される。底部は丸底と考えられるものが1点出土している以外、明確に平底や尖底と判断できる資料は出土していない。調整は何れも器外面全体に回転ナデ調整が施されているが、それに先立ちヘラ削りが加えられているものもある。



甕 (133～138)

杯とともに出土点数は多いが、胴部の破片が 第11図 杯及び杯蓋内外面の成形・整形痕



第12図 甕胴部外面の叩き目文

大半で図示できたものはごく僅かである。頸部から直線的あるいは緩やかに外反しながら外上方にのびる口縁端部は上方または下方につまみ出している。口縁から頸部にかけては回転ナデ調整が施されるが、ヘラ削りの後にナデ調整が行われたもの（133・134・図版8-3）も認められ、頸部に段が付くもの（133・136）もある。また、頸部と体部の境を強くナデるもの（138）がある。体部の調整は、外面は格子目または平行叩きが施された後にナデ調整が加えられるが、叩きの種類は格子目のものが圧倒的に多く（第11図147・148、図版8-1）平行叩きはごく僅かである（第11図149、図版8-2）が、なかには両方を併用しているもの（第11図150）もある。内面にも同心円文叩きが施されるが後に丁寧にナデ消され、叩き目の判読できるもの（図版8-4）は少ない。

土師器（第11図）

杯（139）

河道中の堆積の中から1点出土している。直線的に伸びる口縁端部はやや肥厚し丸く収められ、横なでが施されている。

甕（140）

杯と同じく河道中から数点出土したが口縁部の破片は1点だけである。口縁部は、屈曲の少ない半球に近い胴部からいったん斜め外上方に直線的にのびた後、上方に屈曲する。口頸部は横ナデ、胴部は粗いハケ目調整が加えられている。

黒色土器（第11図）

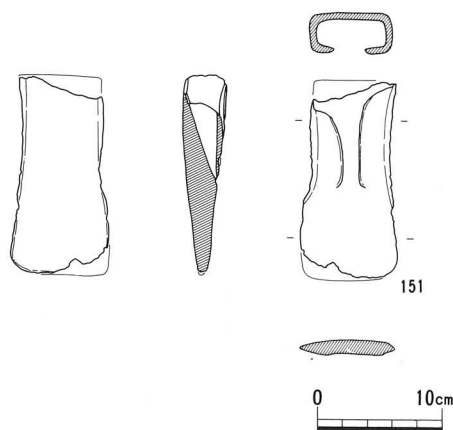
碗（141）

内湾気味に立ち上がる口縁部の破片が1点だけ出土している。内外面ともヘラ磨きが施されている。

鉄製品（第12図）

鉄斧（151）

山裾部で検出された前庭部または焚口部分と推定された灰原部分から袋柄式のもものが1点出土している。灰原中からの出土状況から考えてこの窯跡と同じ年代のものであると考えられる。



第13図 十楽寺遺跡出土鉄器実測図

(3) 考察

出土遺物について

本遺跡の出土遺物は、山裾の緩斜面から自然流路内にかけて堆積した灰原と、その周辺から出土した須恵器・土師器・鉄器からなるが、何れも斜面部と流路内という堆積が不安定な場所からの出土で、時期的にも幅広い時期のものを含んでいる可能性が考えられる。このような状況のもとで出土した遺物のなかでも出土点数の最も多い須恵器は、杯A・B・皿Aをはじめとして蓋A・B・壺L・G・甕A・高杯・鉢A・碗A・平瓶・壺蓋などの器種から構成されている。このような須恵器の器種構成と形態上の特徴は、概ね8世紀から9世紀前半にかけての時期に属するものと考えられ、本遺跡の年代の一端もこの範囲で捉えることができると考えられる。さらにこれを細かく見ると、破片ながら出土点数の最も多い杯の口径が20cmまでで、20cmを越える大型のものが見られないことや、同時期の土師器の形態を模倣した杯Cと考えられるものがほとんど存在しないこと、鉢Aの形態が丸底に近いものであると考えられること、壺は高台のついたLによって占められているが、壺Gが1点ではあるが出土していることが上げられる。このうち杯、皿と壺の特徴を平城京で示された編年にあてはめてさらに細かな年代を推測してみると、杯や皿に土師器の模倣形態のものが減少しはじめるのが平城京ではⅣ段階からで、杯Cが消滅するのはⅤ段階といわれている。また、壺Lは少なくとも平城京Ⅱ段階くらいに出現し9世紀以降まで続く形態であるが、壺GはⅤの段階から出現しⅥ以降急増するとされている。このことから総合的に判断すると、本遺跡の須恵器の年代の上限は少なくとも平城京のⅣないしはⅤの段階に位置づけることができるのではないかと考えられる。ただ、鉢Aについては平底或いは丸底風の平底から尖底への移行の時期がⅢ以降とされていることから若干遡る可能性もあるが、平城京Ⅵ段階でも丸底は残ることからⅣないしはⅤ段階でも矛盾することはないと考えられる。また下限については、須恵器の組成からみると確実に8世紀末までの年代が与えられる組み合わせが認められ、それ以降も存続する器種があることを考慮すると、9世紀前半頃までの年代を考えたほうがよいと思われる。

4 まとめ

今回の十楽寺遺跡の調査では、窯本体そのものは既に破壊され、詳しい構造などは一切明かにすることはできなかったが、その立地条件からは山裾の緩斜面を利用した窖窯であったことは間違いはないと考えられる。吉野川北岸の土成・上板町周辺で須恵器の窯跡に関連する調査が行われた遺跡に土成町前田遺跡と市場町香美遺跡が挙げられるが、本遺跡同様、灰原やその周辺部の調査が実施されただけで窯本体の構造は不明である。年代的には前田遺跡が9世紀末から10世紀初め、香美遺跡が平安時代中期（9世紀）と平安時代末（11世紀末～12世紀）とされており、いずれも本遺跡より後出する時期のものである。しかし、出土した須恵器の器種構成をみると、前田遺跡や香美遺跡の平安中期段階のものは杯・杯蓋・甕を中心に水瓶・壺・鉢・などが含まれる点は本遺跡と共通する部分が多く、奈良時代から平安時代中期までの須恵器生産の器種構成に大きな変動がなかったことが伺うことができる。しかし、各遺跡の年代幅や遺跡ごとの隔たりも大きく今後は窯本体の構造やより細かい年代をおさえることが可能な遺跡の調査が実施されることが期待される。

参考文献

- | | |
|-------------|---|
| 平安学園考古学クラブ | 『陶邑古窯跡群』Ⅰ 1966年 |
| 大阪府教育委員会 | 『陶邑』Ⅰ～Ⅲ 1976年 |
| 奈良国立文化財研究所 | 『平城宮発掘調査報告』Ⅶ 1976年 |
| 奈良国立文化財研究所 | 『平城宮発掘調査報告』ⅩⅠ 1982年 |
| 徳島県教育委員会 | 『香美窯址現地説明会資料』より 1987年 |
| 徳島県教育委員会文化課 | 『土成前田遺跡』 1987 |
| 福家清司編 | 『土成前田遺跡－県道船戸切幡上板線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』徳島県教育委員会 1989年 |
| 古代の土器研究会編 | 『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』 1992年 |
| 古代の土器研究会 | 『古代の土器研究－律令的土器様式の西東－』 1992年 |

第1表 十楽寺遺跡出土遺物観察表

No	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	形態の特徴	技法	備考
1	杯 (口縁部)	19.9	4.9	体部はななめ外上方に直線的にのびる。口縁部はやや尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。	
2	杯	18.9	5.8	体部はななめ外上方に直線的にのびる。口縁部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
3	杯	18.0	5.9	体部は外上方に直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 体部外面は底部付近が回転ヘラ削り。	
4	杯 (口縁部)	17.9	5.1	体部はななめ外上方に直線的にのび口縁部近くでやや外反する。端部はやや尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。	
5	杯 (口縁部)	17.0	4.7	体部はななめ外上方に直線的にのびる。口縁端部はやや尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。	
6	杯	17.0	4.3	体部は外上方に直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
7	杯 (口縁部)	18.0		体部はななめ外上方に大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
8	杯	16.0	5.9	体部はほぼまっすぐ外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ削りの後にナデ。	
9	杯	15.9	6.2	体部はほぼまっすぐ外上方にのびる。	回転ナデ調整。	
10	杯	14.2	5.3	体部はやや内湾ぎみに外上方にのびる。口縁端部は尖り気味。	回転ナデ調整。	
11	杯	16.7	3.3	体部はななめ外上方にやや内湾しながらのびる。口縁端部は尖り気味におさめる。体部と底部の境は不明瞭。	回転ナデ調整。底部と体部の境は強いナデが施される。底部は回転ヘラ削りの後にナデ調整。	
12	杯	16.0	3.1	体部はやや内湾気味にななめ外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ削り。	
13	杯	15.0	3.2	体部はななめ外上方に直線的にのびる。端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
14	杯	15.0	2.8	体部は外上方に直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ヘラ削りの後回転ナデ調整。	
15	杯	14.1	3.2	体部は内湾気味に外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
16	杯	14.2	3.1	体部は直線的に外上方にのびる。口縁端部は尖り気味。	回転ナデ調整。体部外面、下半部のナデは強め、底部は回転ヘラ削り。	
17	杯 (口縁部)	13.9	3.0	体部は外上方に直線的に開く。口縁端部はやや尖り気味におさえる。	回転ナデ調整。体部外面は底部との境が強くナデられる。	
18	杯	14.1	3.1	体部は内湾気味に外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部付近は回転ヘラ削りか。	
19	杯	13.0	3.0	体部はななめ外上方に直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ削りの後にナデ調整。	
20	杯	13.2	3.0	体部はななめ外上方に直線的にのびる。口縁端部はやや尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。底部と体部の境は強いナデが施される。底部は回転ヘラ削りの後にナデ調整。	
21	杯	13.0	3.2	体部はやや外反しながら外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。体部外面は底部との境が強くナデられる。	
22	杯	12.8	4.0	体部はななめ外上方に直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
23	杯	13.0	3.5	肩部から丸く内湾して口縁部につづく。口縁端部は外反しながら上方に短かくたち上がる。	回転ナデ調整。 体部外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整。	
24	杯	13.0	3.4	体部は外反しながらななめ外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
25	杯	12.3	3.1	体部は直線的に外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
26	杯	11.8	3.0	体部はななめ外上方に直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。体部外面は底部との境が強くナデられる。	

№	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	形態の特徴	技法	備考
27	杯	12.0	3.0	体部は外反しながらななめ外上方にのびる。口縁端部は尖り気味。底部と体部の境は不明瞭。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ。	
28	杯	11.0		体部は内弯気味に外上方へのびる。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。体部外面は下半部が強くナデられる。	
29	杯 (口縁)	12.0	2.7	体部は外上方へ直線的にのびる。 端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
30	杯	10.1	2.4	体部は外上方に直線的にのびる。 端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
31	杯	11.0	3.5	体部は外上方に直線的にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 体部外面下半は強くナデられる。	
32	杯	16.9	2.9	体部はやや外反ぎみにななめ外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ。	
33	杯	14.2	2.5	体部はななめ外上方に直線的にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ。	
34	杯	15.0	2.5	体部は直線的に外上方へのびる。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 ナデは強く施す。	
35	杯	14.0	2.5	体部は強く外反しながら、ななめ外上方に大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。底部との境は不明瞭。	回転ナデ調整。体部外面は底部との境が強くナデられる。底部は回転ヘラ切りの後ナデ。	焼成時に変形?
36	杯	14.7	3.0	体部は外反しながらななめ外上部にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
37	杯	14.0	2.5	体部は大きく外反して上方へのびる。 口縁端部は尖り気味。	回転ナデ調整。 体部外面下半部は強くナデられる。	焼成時に変形?
38	杯	12.0	2.8	体部はななめ外上方に直線的にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。体部外面は底部との境が強くナデられる。底部は回転ヘラ切り。	
39	杯	11.8	3.0	体部はやや外反しながら外上方へのびる。 端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
40	皿	17.9	2.1	体部はななめ外上方に直線的に大きく開く。口縁端部は尖り気味。	回転ナデ調整。 底部はハケによるナデ調整。	
41	皿	16.9	2.2	体部はななめ上方に直線的にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
42	皿	16.1	2.4	体部は内弯気味に外上方へのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。体部外面は底部との境が強くナデられる。底部は回転ヘラ切り。	
43	皿	14.2	2.0	体部は内弯して外上方へのびる。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
44	皿	16.1	2.5	体部は外上方へ直線的にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
45	皿	14.5	2.3	体部は一たん外反したのち若干内弯気味に外上方へのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。体部外面は底部との境が強くナデられる。底部は回転ヘラ切りの後ナデ。	
46	皿	16.8	1.7	体部は外反ぎみに大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後、板ナデ?調整。	
47	皿	14.0	2.0	体部はまっすぐ外上方へのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
48	皿	19.0	1.4	体部は外上方に直線的に短かくのびる。 口縁端部はとがり気味。	回転ナデ調整。	
49	皿	18.1	1.9	体部はななめ外上方に大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
50	皿	18.1	2.0	体部はいったん内弯気味に立ち上がった後、外上方に直線的にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
51	皿	16.8	1.7	体部はななめ上方に直線的にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	

No	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	形態の特徴	技法	備考
52	皿	16.0	1.7	体部は外上方に直線的に大きく開く。 口縁部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 底部はナデ。	
53	皿	16.0	1.4	体部はかるく外反しながら外上方にのびる。 口縁端部はやや尖り気味。		
54	皿	13.1	1.4	体部は直線的に外上方に大きく開く。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
55	杯 (底部)	底径 9.1		体部は大きく外反したのち、ななめ外上方に大きくのび、底部と体部の境は不明瞭。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切り。	
56	杯 (底部)	底径 10		底部と体部の境は不明瞭。	回転ナデ調整。	
57	杯 (底部)	底径 9.0		体部はななめ外上方にたち上がる。 体部と底部の境は不明瞭。	回転ナデ調整。	
58	杯 (底部)	底径 8.2		体部はゆるやかに内弯して外上方にのびる。 体部と底部の境は不明瞭。	底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。内面見込み部は板ナデが施こされる。	
59	杯 (底部)	底径 6.2		体部はななめ外上方に直線的に大きく開く。	底部は回転ヘラ切りの後、板ナデとナデが施こされる。	
60	杯 (底部)	底径 8.8		体部はななめ外上方に大きく開く。	回転ナデ調整。	
61	杯 (底部)	底径 7.7		体部はななめ外上方に直線的にのびる。	回転ナデ調整。体部外面は底部との境が強くナデられる底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
62	杯 (底部)	底径 7.4		体部はやや内弯しながらななめ外上方にのびる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
63	杯 (底部)	底径 9.1		体部と底部の境は不明瞭。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ削りの後ナデ。	
64	杯 (底部)	底径 6.2		体部はななめ外上方に直線的にのびる。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後ヘラ削り。	
65	杯 (底部)	底径 12.1		底部は平らでハの字形の高台が付く。	底部は回転ヘラ切りの後、ヘラケズリとナデが施こされる。	
66	杯 (底部)	底径 12.1		平らな底部にハの字形高台が付く。	底部は回転ヘラ切りの後、ナデ調整。	
67	杯 (底部)	底径 10.0		平らな底部にハの字形高台を付ける。	底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。 高台貼り付けに際して回転ナデ調整がおこなわれる。	
68	杯 (底部)	底径 10.0		平坦な底部に低いハの字形の高台が付く。	底部は回転ヘラ削りによって整えられる。高台の貼り付けに際して回転ナデ調整が用いられる。	
69	杯 (底部)	底径 9.0		平坦な底部に直立する高台をつける。	回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切りの後、ナデ高台貼り付けに際してナデ調整。	
70	杯 (底部)	底径 9.5		体部はななめ外上方に内弯気味にのびる。 底部にはハの字形高台がつく。	底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
71	蓋	17.7	3.6	平らな天井から外下方になだらかに下る。口縁部は下方に折り込み端部は尖る。中央部がやや高い扁平なつまみを付ける。	回転ナデ調整。口縁部外面は強くナデられる。天井外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整。	
72	蓋	17.7	3.6	平らな天井から外下方になだらかに下る。口縁部は下方に折り込み端部は尖る。中央部がやや高い扁平なつまみを付ける。	回転ナデ調整。口縁部外面は強くナデられる。天井外面は回転ヘラ削りの後、ナデ調整。	
73	蓋	16.5	3	平らな天井から外下方になだらかに下る。口縁部は下方に折り込む。 中央部がやや高い扁平なつまみを付ける。		
74	蓋		2.1	天井部は平らで扁平なつまみが付く。	天井部は回転ヘラ削りの後ナデ調整。 内面には調整の際のアテ具の痕跡がある。	

No.	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	形態の特徴	技法	備考
75	蓋			天井部は平らで擬宝珠形のつまみが付く。	天井外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
76	蓋		2.2	平坦な天井部に擬宝珠形のつまみが付けられる。	天井外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整。 内面には整形の際のあて具の痕跡が認められる。	
77	蓋		1.7	天井部はやや凹み、中央がやや高い扁平なつまみを付ける。	ナデ調整。	
78	蓋		2.5	平坦な天井部に中央がやや高い扁平なつまみを付ける。	天井部外面は回転ヘラ切りの後、ナデ調整か？。	
79	蓋	17.9	1.8	天井部からゆるやかに外下方にのびる。口縁端部は内下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。 口縁から天井まで回転ヘラ削り。	
80	蓋	17.0	1.9	平坦と考えられる天井部からゆるやかに外下方にのびる口縁端部は内下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
81	蓋	15.2	2.5	平坦な天井部からゆるやかに外下方にのび口縁との間によい段を生じる。口縁端部は下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
82	蓋	16.0	1.5	口縁端部は下方に折り込み尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。	
83	蓋	16.1	1.5	天井部からなだらかに外下方にのび口縁近くで段をもつ口縁端部は下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
84	蓋	17.0	2.0	口縁部は天井部との間で屈曲して段を生じる。口縁端部は、内下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
85	蓋	18.0	1.4	低い天井部からなだらかに外下方にのび口縁近くで段をもつ。口縁端部は下方に折り込まれ丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
86	蓋	16.0	1.0	低く平らな天井部からなだらかに外下方にのびる。口縁端部は折り込まれず丸くおさめる。	回転ナデ調整。 外面は回転ヘラ削りを行なう。	
87	蓋	17.9	1.1	なだらかに下方にのび弱い段を生じる。口縁の端部はかるく下方に折り込まれ丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
88	蓋	17.0	1.0	やや丸みを持ってなだらかに口縁部に続く。口縁端部は内下方に折り込みやや尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。 外面は回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。	
89	蓋	19.1	2.0	平坦な天井部からなだらかな丸みを持って外下方へのび口縁近くで段をもつ。口縁端部は下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。 天井部外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整。	
90	蓋	18.9	2.0	天井から口縁部に向けてゆるやかに下る。口縁端部は、内下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。 天井部外面は回転ヘラ削りが施こされる。	
91	蓋	20.0	1.8	口縁端部は下方に短かく折り込み丸くおさめる。 段を持つ。	回転ナデ調整。 外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整。	
92	蓋	20.0	1.9	天井部からなだらかな丸みを持って外下方へのび口縁近くで弱い段を生じる。口縁端部は内下方に折り込み丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
93	蓋	23.0	1.9	天井部からゆるやかに外下方にのびる。口縁端部は下方に短かくつまみ出す。	天井部外面は回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。	
94	蓋	16.9	2.0	天井部からなだらかな丸みを持って下方へのびる。 口縁端部は下方へわずかにつまみ出す。	回転ナデ調整。 外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整。	

No	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	形態の特徴	技法	備考
95	蓋	16.9	2.3	天井部からなだらかな丸みをもって外下方へのびる。 口縁端部は下方にわずかにつまみ出す。	回転ナデ調整。 外面は回転ヘラ削りの後、ナデ。	
96	蓋	21.9	2.0	天井部から丸みを持ちなだらかに口縁部までのびる。口縁端部は平ら。	外面は回転ヘラ削りの後回転ナデ調整。	
97	蓋	10.9	2.1	口縁はほぼまっすぐ垂下し口縁端部は平ら。	回転ナデ調整。	
98	蓋	11.8	1.9	口縁部はややなめ外下方に垂下し口縁端部は平坦につくる。	回転ナデ調整。	
99	蓋	10.2	2.2	平坦と考えられる天井部から口縁がほぼまっすぐに垂下する。口縁端部は、やや内弯して平ら。	回転ナデ調整。	
100	蓋	10.0	1.6	垂下する口縁端部はわずかであるが外反し平ら。	回転ナデ調整。	
101	蓋	14.1	2.7	水平に近いと思われる天井部から口縁がやや弯曲しながら垂下する。口縁端部は尖る。	天井部は回転ヘラ削り。 口縁部は回転ナデ調整。	
102	蓋	12.4	2.9	ほぼ水平とおもわれる天井部から口縁がなめ下方に直線的に垂下する。口縁端部は尖る。	天井部は回転ヘラ削りの後ナデ調整。 口縁部は回転ナデ調整。	
103	蓋	16.0	2.8	口縁は、天井部からやや外反ぎみに垂下する。 口縁端部は平らに仕上げられる。	回転ナデ調整。	
104	蓋	16.7	2.4	天井部から外反ぎみに垂下する口縁をもつ。 口縁端部は平らでやや外側に拡張する。	回転ナデ調整。	
105	蓋	14.1	2.6	口縁部は内弯気味に垂下し端部は平坦になる。	外面は回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。	
106	蓋	11.5	2.5	口縁部は平坦に近い天井から内弯気味に垂下する。口縁端部は平ら。	天井部外面は回転ヘラ削り。 口縁部は回転ナデ調整。	
107	蓋	14.8	2.8	口縁部はやや内弯気味に垂下し端部は尖る。		
108	蓋	16.0	2.8	口縁部はややなめ外下方に垂下する。 口縁端部は平ら。	口縁部外面の一部まで回転ヘラ削り。 回転ナデ調整。	
109	蓋 (天井部)	10.0	10.7	天井部はやや丸みを持つ。	回転ナデ調整。 天井部外面は回転ヘラ削り。	
110	椀	20.0	4.0	体部はやや内弯気味に上方へのびる。 口縁端部は外側にやや拡張気味で平坦ぎみに仕上げる。	回転ナデ調整。	
111	平瓶 (口縁)	7.9	2.7	頸部から口縁にむかってやや外反しながらのびる。 口縁端部は外向きにつまみ出し丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
112	高杯 脚部	(底径) 16.0	10.3	脚端部は平らで上に若干つまみ上げられる。	回転ナデ調整。	
113	壺	9.8	7.2	頸部から口縁にむかって外反してのびる。 口縁端部は外上方につまみ上げ丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
114	壺	9.7	6.8	頸部は口縁にむかって大きく外反する。	回転ナデ調整。 頸部と体部の境は強いナデが施こされる。	
115	壺	9.1	6.1	頸部は口縁にむかってやや外反ぎみに外上方へのびる。	回転ナデ調整。	
116	壺 (口縁)	9.0	4.4	口縁は外反しながら外上方へのびる。 口縁端部は尖り気味に上方につまみ上げる。	回転ナデ調整。	

No	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	形態の特徴	技法	備考
117	壺	90		ゆるやかに内弯する肩部に直立する頸部がつけられる。	回転ナデ調整。	
118	壺			ゆるやかに内弯する肩部に直立する頸部がつけられる。	回転ナデ調整。	
119	壺			体部は肩部付近でゆるやかに内弯する。	回転ナデ調整。	
120	壺 (底部)	(底径) 14.0	8.8	ハの字形の高台を付けた底部から外上方に直線的にのびた体部をもつ。	回転ナデ調整。	
121	壺 (底部)	(底径) 13.1	4.2	底部にハの字形高台を付ける。 体部は直線的に外上方にのびる。	体部下半は回転ヘラ削り。 底部は高台貼り付けのため回転ナデ調整。	
122	壺 (底部)	(底径) 14.8	5.7	平坦な底部はハの字形の高台が付く。 体部は、ななめ外上方にむかって直線的にのびる。	底部外面と体部は回転ヘラ削り、高台取り付けに際しては回転ナデ調整。体部との境は、強くナデる底部内面は、ほとんど未調整。	
123	壺 (底部)	(底径) 10.1	2.8	体部はやや内弯気味にたち上がる。 底部には、ハの字形高台がつく。	体部下半は回転ヘラ削り。 高台張り付けに際して回転ナデ調整が加えられる。	
124	壺 (底部)	(底径) 11.1	2	平坦な底部にハの字形の高台が付く。	底部は回転ヘラ削り、高台取り付けに際しては、回転ナデ調整底部内面はナデ調整、調整の際の工具の痕が連続してみられる。	
125	壺 (底部)	(底径) 8.2		体部は平坦な底部から直線的に外上方にのびる。	底部は回転糸切り。	
126	鉢	20.1	4.3	肩部から丸く内弯して口縁部につづく。 口縁端部は外反しながら上方に短かく立ち上がる。	回転ナデ調整。	
127	鉢	18.5	6.5	肩部から丸く内弯して口縁部につづく。 口縁端部は外反しながら上方に短かく立ち上がる。	回転ナデ調整。 体部外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整。	
128	鉢	19.0	3.8	肩部から丸く内弯して口縁部につづく。 口縁端部は外反しながら外上方に短かく立ち上がる。	回転ナデ調整。	
129	鉢	17.5	3.7	肩部から丸く内弯して口縁部につづく。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
130	鉢	19.8	8.3	肩部から丸く内弯して口縁部につづく。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 体部外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整。	
131	鉢	20.2	4	肩部は内弯して口縁部につづく。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
132	鉢	19.8	5.3	肩部から丸く内弯して口縁部につづく。 口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。 内面には回転ヘラ削りが認められる。	
133	甕	25.8	5.3	頸部から口縁にむかってゆるやかに外反し途中に段を持つ。口縁端部は、外下方につまみ出し丸くおさめる。	回転ヘラ削りの後回転ナデ調整。	
134	甕	25.8	3.5	頸部から口縁にむかってななめ外上方に直線的にのびる。口縁端部は外下方につまみ出し丸くおさめる。	内外面ともに回転ヘラ削りの後にナデ調整。	
135	甕	23.8	4.5	頸部から口縁にむかって直線的に外上方に短くたち上がる。口縁端部は上方に短く引き出す。	回転ナデ調整。	
136	甕	21.0	4.6	頸部から口縁にむかってゆるやかに外反する。 口縁端部は尖り気味に上下に短く引き出す。	回転ナデ調整。	
137	甕	22.8	6.1	頸部から口縁にむかってななめ外上に直線的にのびる。口縁端部は外下方につまみ出して丸くおさめる。	回転ナデ調整。 体部外面は格子タタキ。内面はタタキを施こした後、入念なナデ調整。	
138	甕	22.0	18.4	頸部から口縁にむかってゆるやかに外反する。 口縁端部は、上方に短かくひき出す。	口縁部は回転ナデ調整。 体部外面は格子目タタキ。内面はタタキを施こした後、入念にナデを加える。	

No	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	形態の特徴	技法	備考
139	皿	15.0	2.8	体部はいったんななめ外上方に直線的にのびた後、口縁近くで内弯する。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
140	碗 (口縁)	11.0	3.5	体部は、内弯しながら外上方へのびる。口縁端部は、丸くおさめる。	口縁近くでは、ナデ調整。 体部は、ヘラ削り内面はヘラ磨き。	
141	甕	26.8	7.6	直立する体部にくの字形に屈曲する口縁部がつく。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面はナデ調整、内面は一部にハケ目調整。 体部外面は縦のハケ目調整、内面はナデ調整。	



調査区遠景



A地区自然流路土層堆積状況（南壁）

図版 2



灰原検出状況（北東から）



灰原検出状況（東から）



A地区自然流路内土层堆积状况



同灰层堆积状况

図版 4



鉄斧出土状況



灰原内遺物出土状況

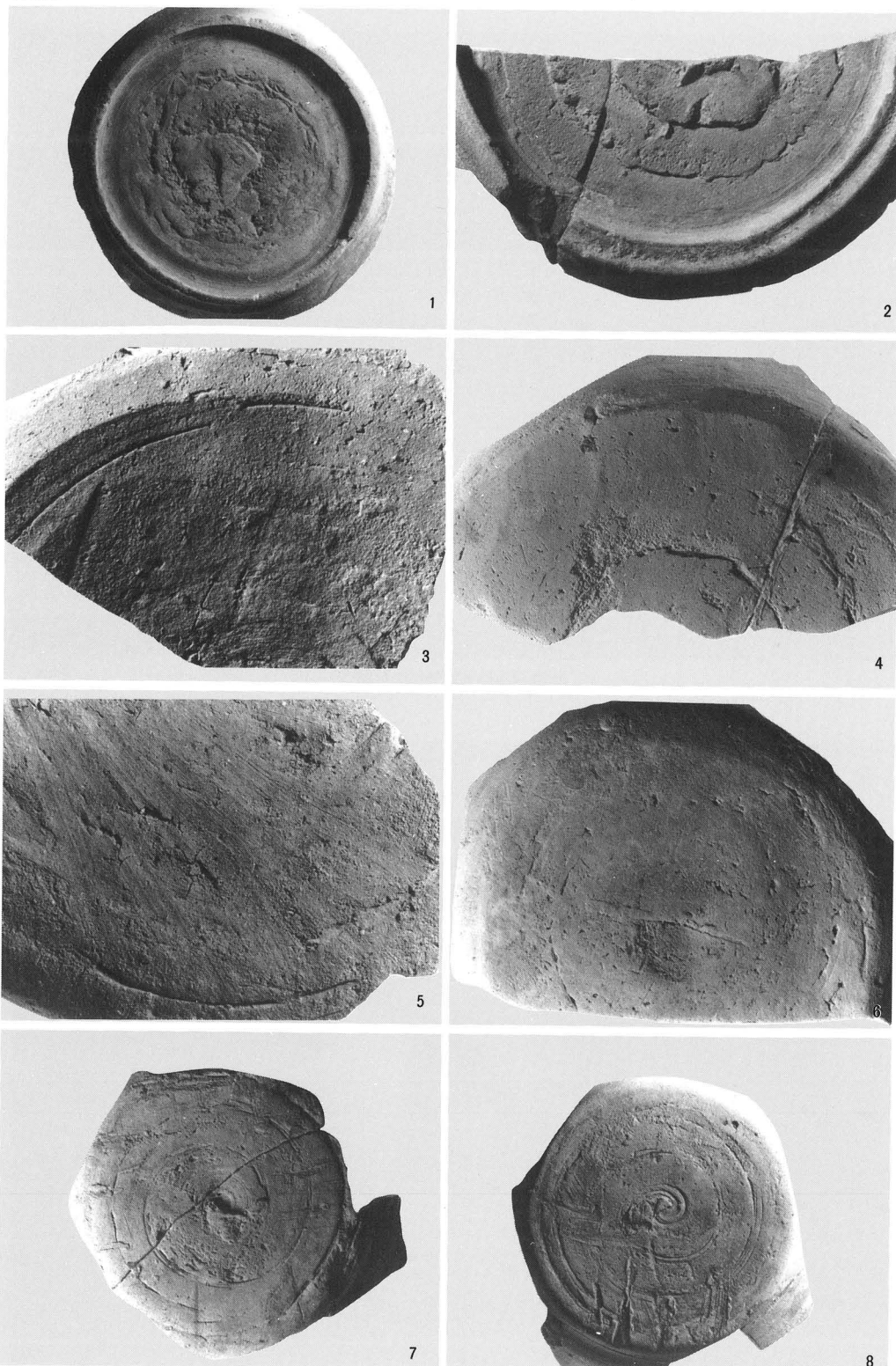


自然流路内遺物出土状況

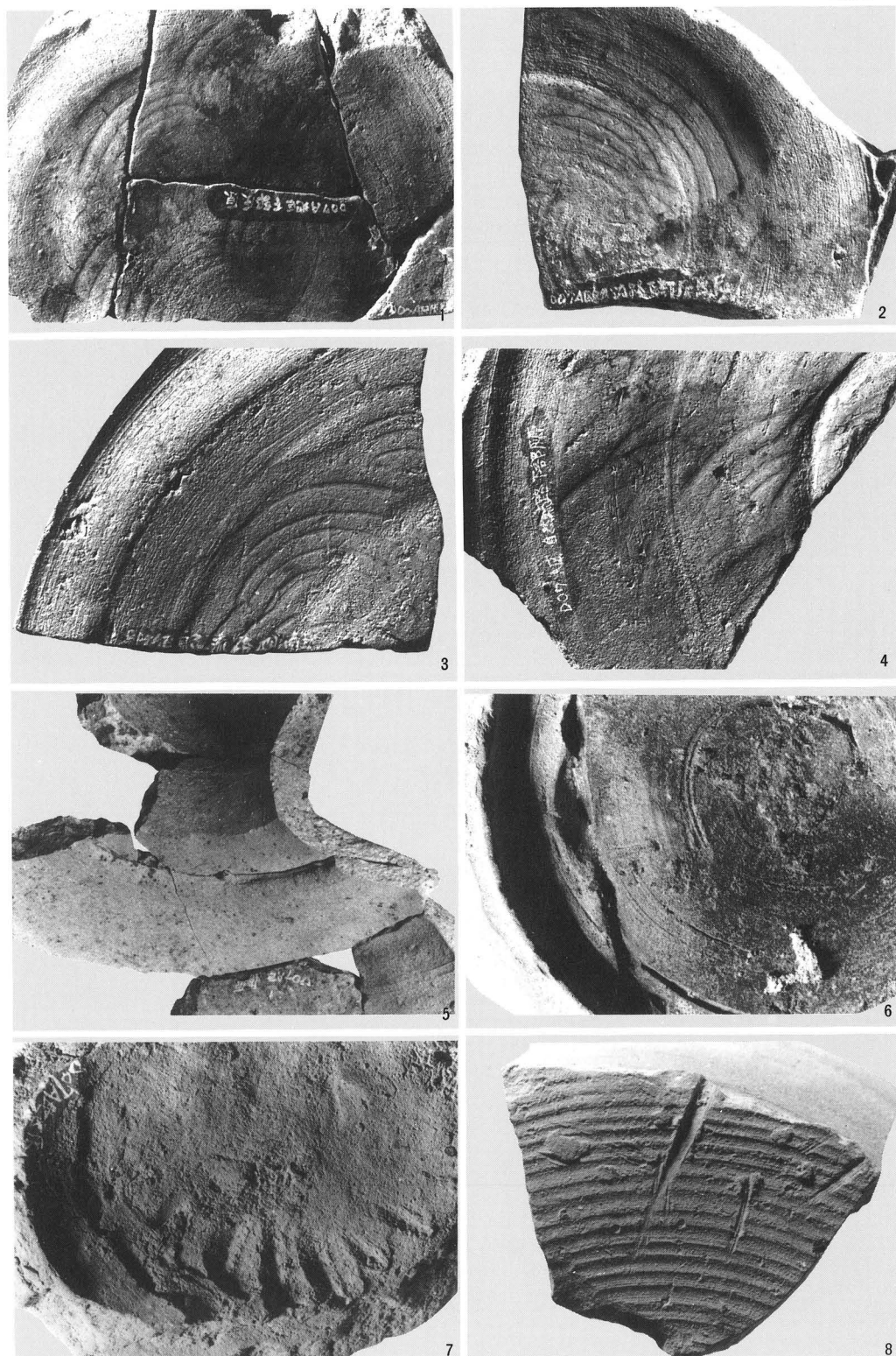


自然流路内遺物出土状況

图版 6

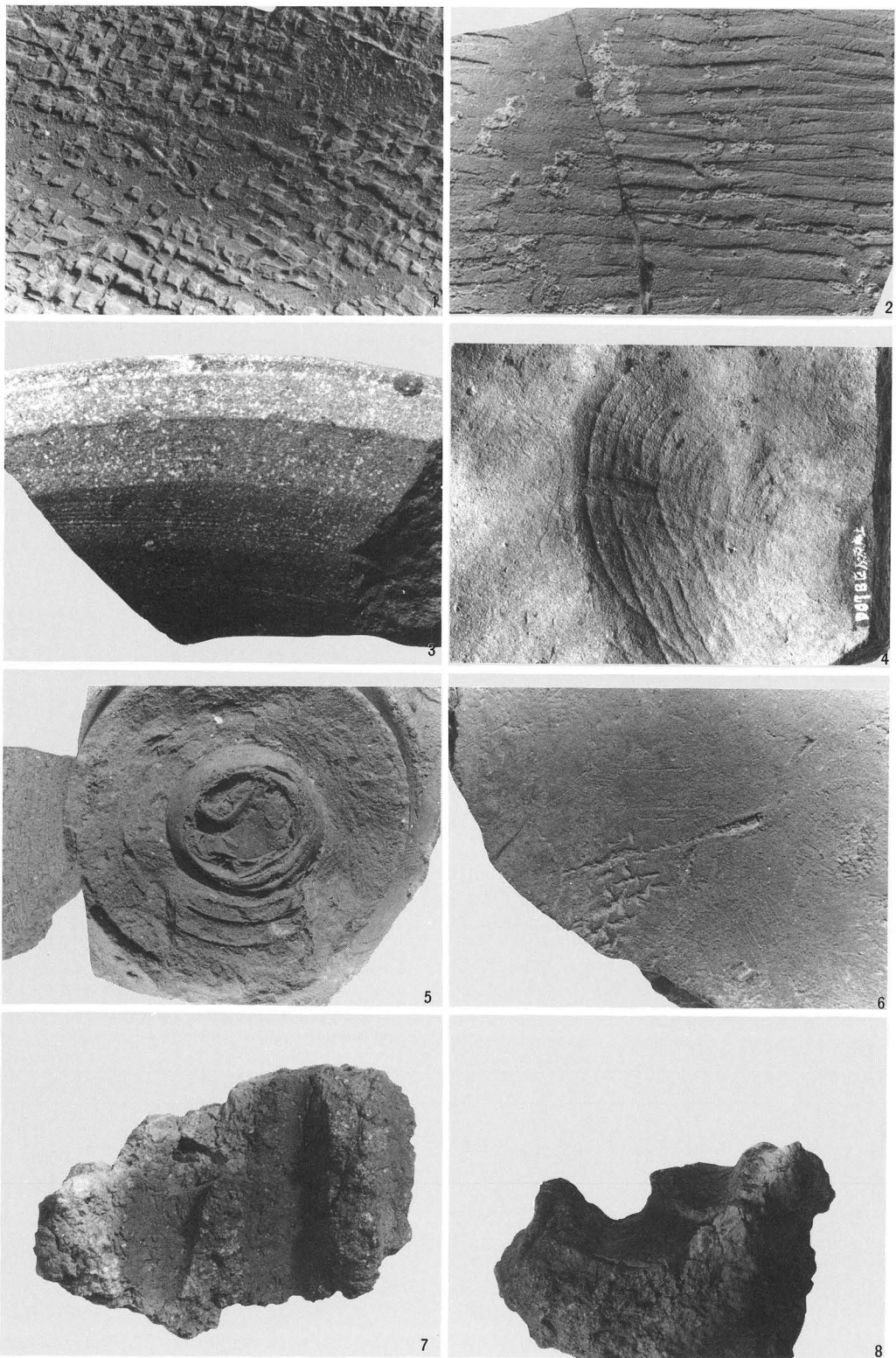


出土遺物 (1)

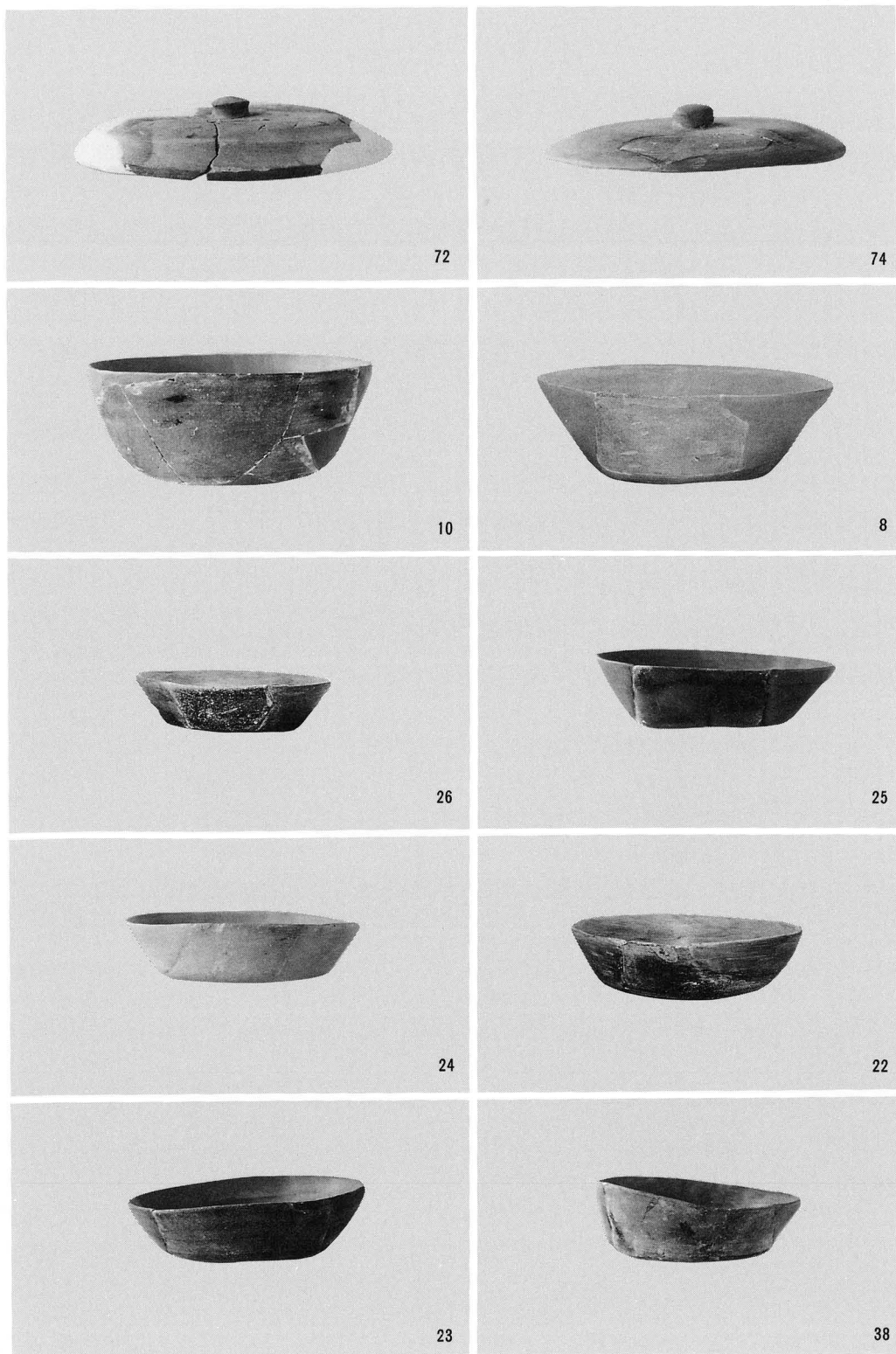


出土遺物 (2)

图版 8

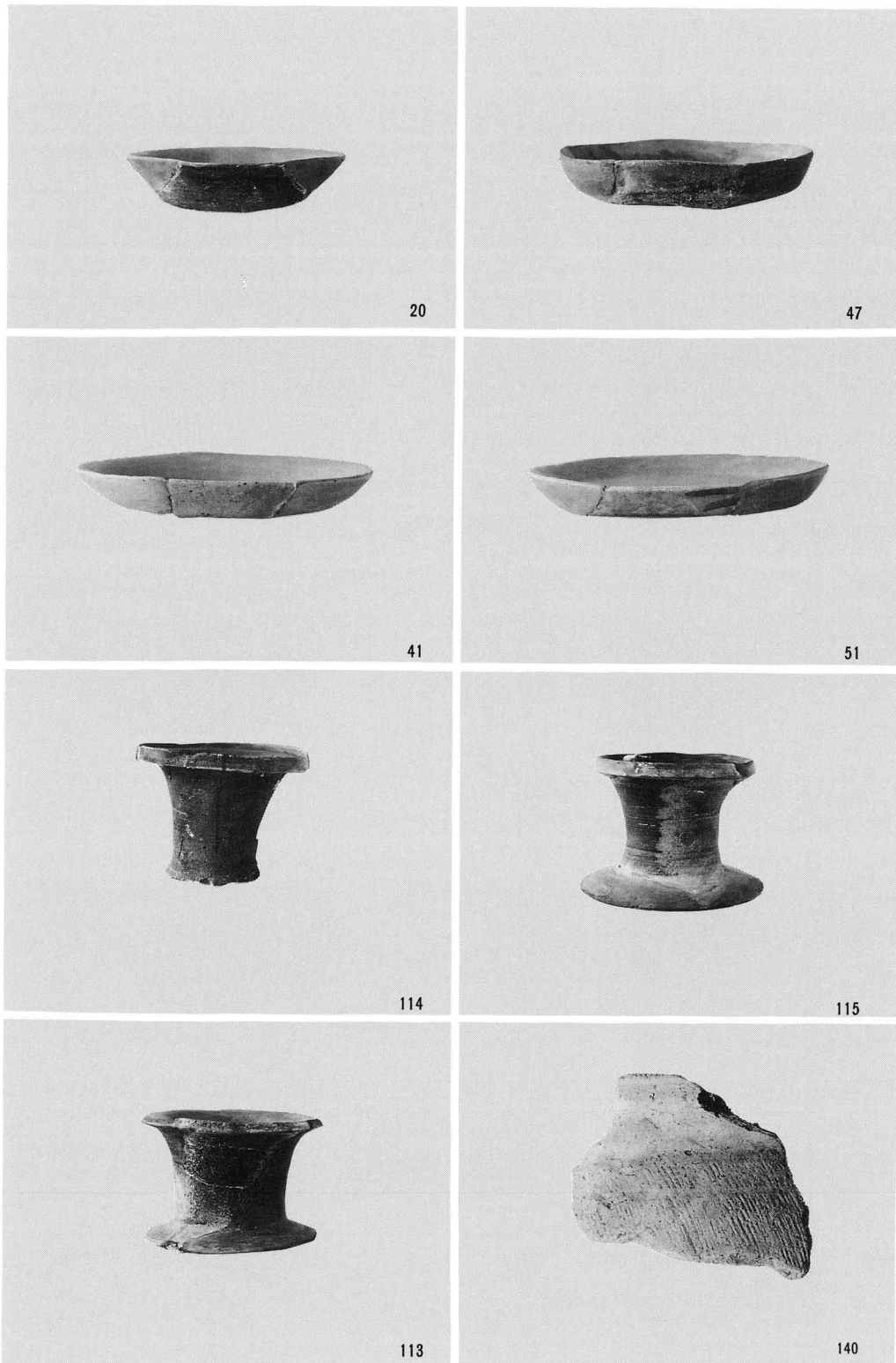


出土遺物（3）

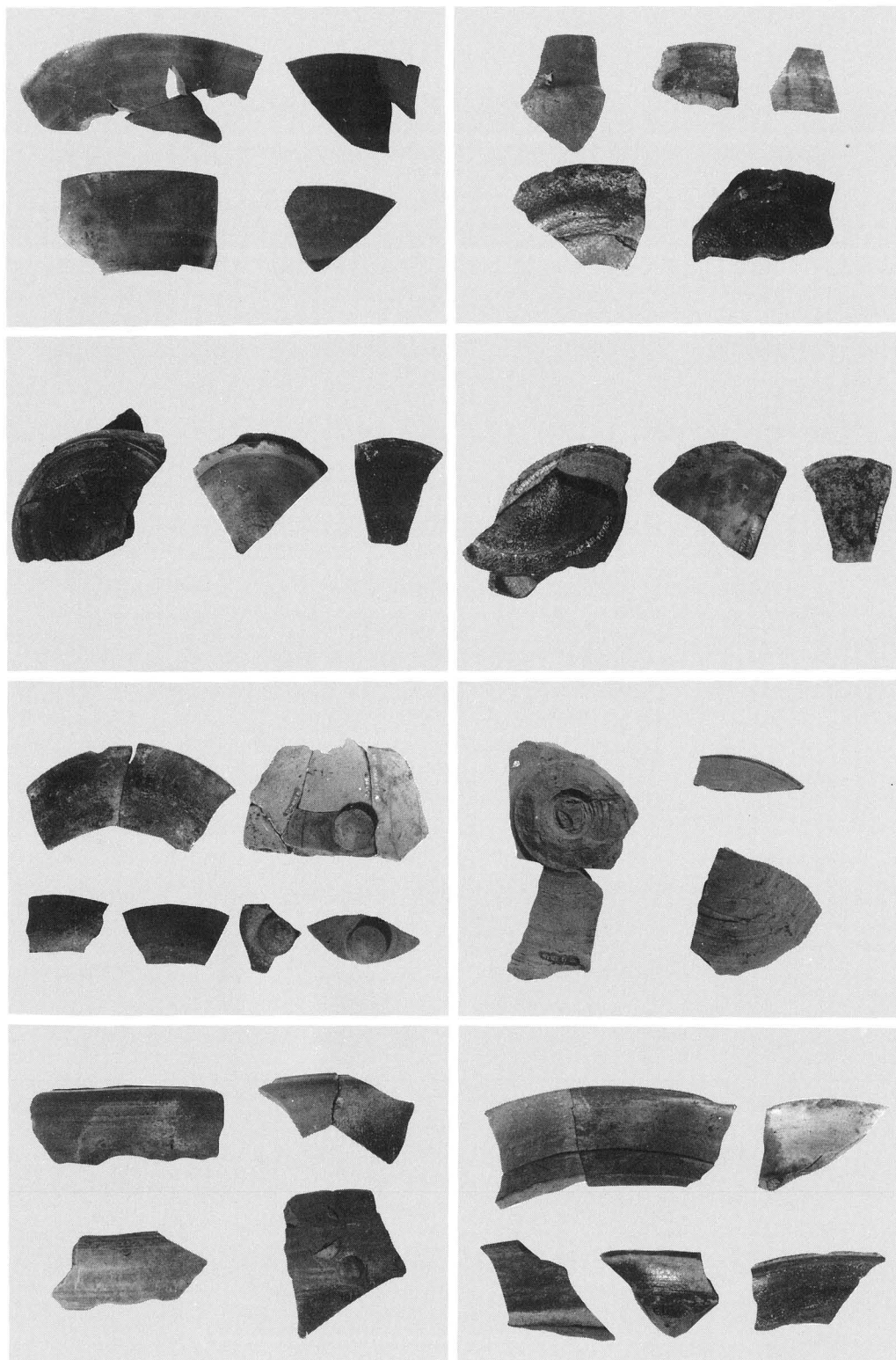


出土遺物 (4)

图版10



出土遺物（5）



出土遺物（6）

IV 椎ヶ丸～芝生遺跡

- 1 本章は四国縦貫自動車道建設に伴う椎ヶ丸～芝生遺跡の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査機関及び報告書作成の実施期間は次の通りである。
- 3 遺物番号、挿図番号はすべて通し番号とした。

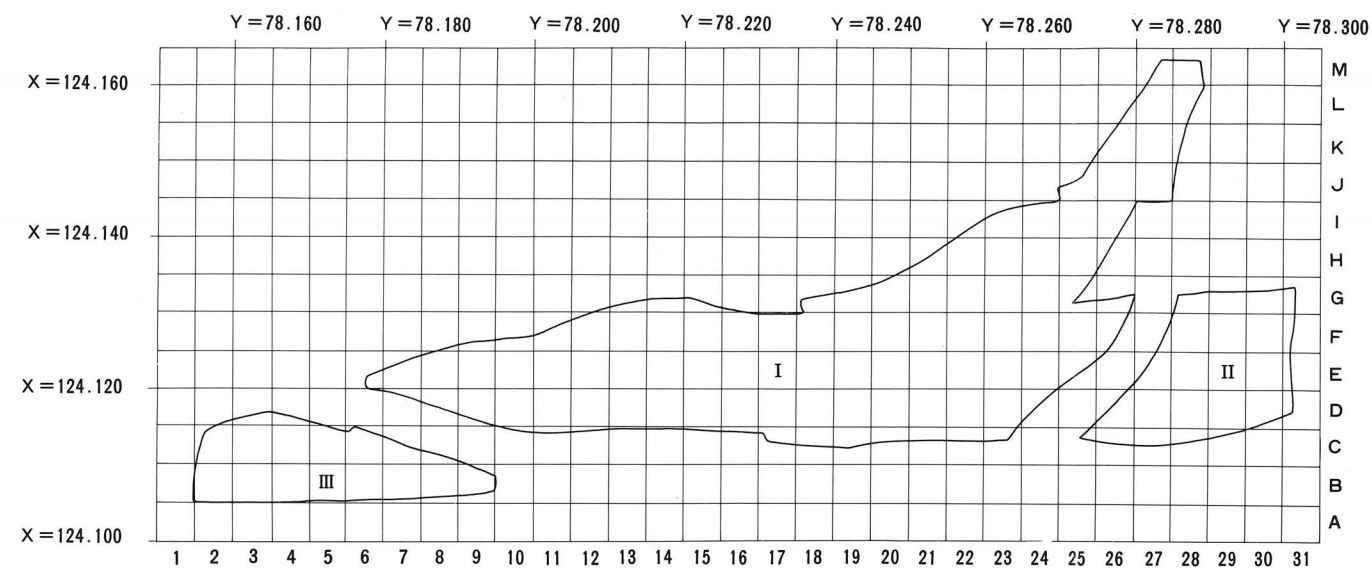
遺跡抄録

遺 跡 名	椎ヶ丸～芝生
読 み	しいがまる～しばう
所 在 地	板野郡土成町吉田字椎ヶ丸13- 1 他 X = 124. 25～124. 165 Y = 78. 055～78. 305
種 別	集落
時 代	旧石器・弥生・中世
主な遺構	竪穴住居跡・土坑
主な遺物	旧石器・弥生土器・石器

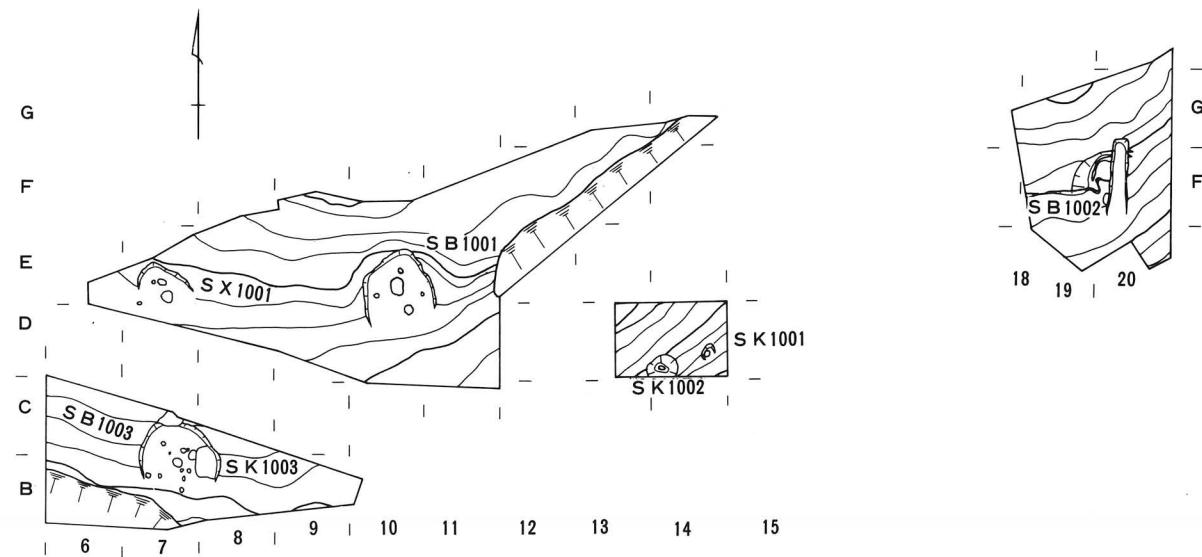


第1図 椎ヶ丸～芝生遺跡調査地位置図





第2図 椎ヶ丸地区グリッド配置図



第3図 椎ヶ丸地区遺構配置図

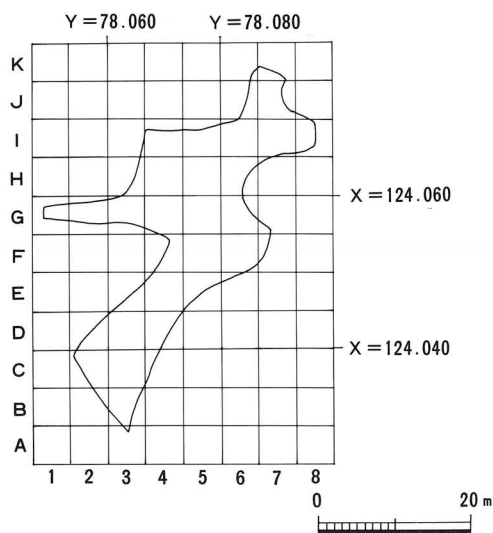


1 調査の経過

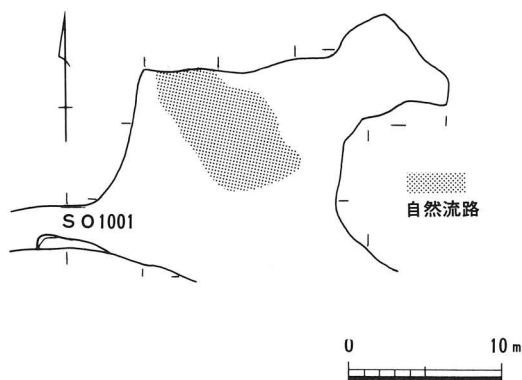
(1) 調査の経過

椎ヶ丸～芝生遺跡は標高90mの中位段丘面上の椎ヶ丸地区と、その段丘下の扇状地に位置する芝生地区の立地の異なる2つの地点によって構成されている。このうち、椎ヶ丸地区に関しては、1976年その存在が学会に発表されて以後、徳島県下最大の旧石器の遺跡として広く周知され、きわめて小範囲ではあるが県教育委員会文化課による調査も実施されている。

これに対して芝生地区は従来全くその存在が確認されていなかった遺跡で、縦貫道予定地区内の分布調査が行われた際に遺物が採集されたことから調査区域の中に組み込まれ、試掘調査対象地とされたものである。ただ、椎ヶ丸に関しても、路線が東西に延びる段丘崖上の勾配の強い斜面に設定されていることから調査の必要性が疑問視されたため、芝生地区とともに試掘調査を実施することとなった。両地区の試掘調査は10月15日から10月26日にかけて行われ、合計42本のトレンチが発掘された。その結果、椎ヶ丸地区からは斜面部でありながらナイフ形石器などの旧石器が、また、芝生地区からは瓦器や須恵質陶器などの中世遺物がそれぞれ出土したため、椎ヶ丸地区については3100㎡、芝生地区については450㎡を本調査の対象面積として決定した。



第4図 芝生地区グリッド配置図



第5図 芝生地区遺構配置図

(2) 発掘調査の方法

椎ヶ丸、芝生の二地区とも発掘調査の基準となるグリッドの位置は、発掘調査統一基準に
ならい第Ⅳ系国土座標を基準とし、5 m×5 mのメッシュを国土座標の線上に組み、南西の
隅を基点として座標軸Xの線上にアラビア数字、Yの線上にアルファベットを記号として順
にふり、グリッド名とした。また、これとは別に椎ヶ丸は、調査区が東西に走る町道と町道
から段丘上に伸びる農道によって3箇所に分割されたため、それぞれにⅠからⅢまでのロー
マ数字をあてて区域名とした。

(3) 調査日誌抄

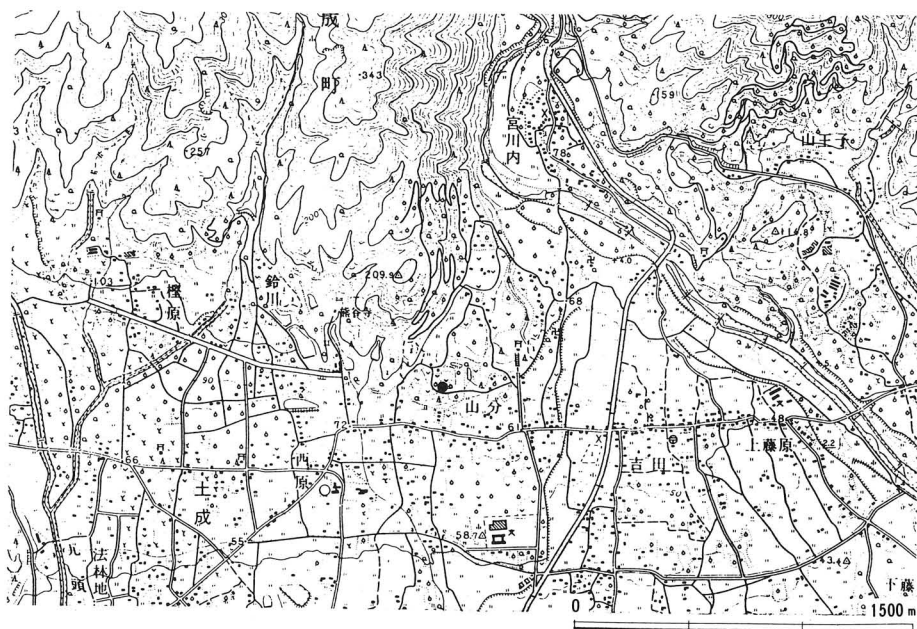
		東側の旧石器出土地点の精査を継 続。
1990年		1月29日 芝生地区の機械掘削開始。
12月25日	起工測量の立ち合いの後、機械掘 削開始。	1月30日 Ⅰ区東側の旧石器の調査を終了。 同じⅠ区の中央部で弥生時代の遺 物が出土しはじめる。
1991年		
1月7日	東側のⅡ区から本格的な人力掘削 開始。	1月31日 Ⅰ区A地点で土壌S K 1001・1002 を検出
1月9日	Ⅰ区の東側斜面部の人力掘削開始。	2月1日 S K 1001・1002の精査開始。芝生 地区の人力掘削作業開始。
1月14日	Ⅰ区東側斜面の人力掘削終了。	
1月15日	Ⅰ区西側人力掘削終了。	2月3日 Ⅲ区人力掘削開始。
1月16日	Ⅰ区西側でS X 1001検出される。 Ⅱ区の礫層中から旧石器出土。	2月4日 Ⅰ区東側の旧石器の平面図作製。 2月5日 Ⅰ区S B 1001の掘り下げ、S K 1001 ・1002の掘り下げ、図化作業終了
1月17日	Ⅰ区西側で谷状の落ち込み確認。 部分的に深掘りを行った結果、旧 石器が出土。	2月6日 Ⅱ区の完掘状況の写真撮影。Ⅰ区 東側の旧石器出土地点の西側に新 たに谷状の落ち込みを検出（以後 B地点）。
1月18日	Ⅰ区西側で弥生住居址S B 1001検 出。精査開始。	
1月22日	Ⅰ区の谷状の落ち込み（以後A地 点）を本格的に掘り下げる。表土 下1 mで弥生土器が出土しはじめ る。Ⅰ区東側斜面の調査で旧石器 出土。	2月7日 Ⅰ区B地点の谷状の落ち込みの掘 り下げ。 2月8日 Ⅰ区S B 1001写真撮影終了。Ⅰ区 中央部に新たに住居址S B 1002を 検出。Ⅰ区B地点の掘り下げ終了。
1月23日	Ⅱ区の土層図作製作業。	2月12日 Ⅰ区S B 1002の遺構検出状況写真 の撮影。午後遺構掘り下げ開始。
1月25日	Ⅱ区の完掘状況の写真撮影。Ⅰ区	

- 2月13日 S B 1001周辺の地形測量。Ⅰ区A
地点の旧石器の精査終了。Ⅲ区で
新たに住居址 S B 1003検出。
- 2月14日 Ⅰ区 S B 1001周辺の地形測量終了。
Ⅲ区 S B 1003の検出状況写真撮影
の後掘り下げ開始。
- 2月19日 Ⅰ区 S B 1002の図化作業。
- 2月20日 S B 1002周辺の地形測量。Ⅰ区B
地点の掘り下げ終了。
- 2月21日 S B 1003の精査中、床面から新た
に S K 1003を検出。
- 2月22日 Ⅰ区B地点とその周辺地域の地形
測量。
- 2月25日 芝生地区は出水が激しいため、作
業を一時中断。
- 2月26日 Ⅰ区B地点の遺物の出土状況写真
と図化作業。
- 2月27日 芝生地区の調査再開。
- 3月4日 芝生地区の遺構検出作業。自然流
路1本と炭窯1個を確認。検出状
況写真撮影後掘り下げにはいる。
- 3月5日 芝生地区の遺構掘り下げ作業終了。
S B 1003完掘。
- 3月6日 S B 100完掘状況写真撮影。Ⅰ区
A・B地点の土層図作製。
- 3月7日 Ⅲ区 S K 1003の平面図作製。芝生
地区の炭窯図化作業。
- 3月11日 芝生地区の遺構図化作業終了。
- 3月12日 芝生地区の完掘状況の写真撮影。
- 3月13日 全ての作業を終了、センターに帰
還。

2 遺跡の立地と地理的環境

遺跡の地理的環境

今回の報告の対象となった椎ヶ丸～芝生遺跡は、阿讃山脈南麓の段丘上に位置する椎ヶ丸地区と、段丘崖下の扇状地が解析されて出来た小支谷の中に位置する芝生地区の2つの調査区から構成されている。椎ヶ丸は阿讃山脈から吉野川に向かって流れだす中小の河川のなかでも比較的規模の大きい宮川内谷川によって形成された中位段丘上に位置する遺跡である。段丘面上の標高は約90m、下の扇状地との比高差は約25mほどを計る。宮川内谷川右岸に広がる段丘面は、段丘上を流れる小規模な河川によって解析された谷が扇状地に向かって何本か開いている。調査区が設定された地点は西側に延びた尾根と東側を流れる牛屋谷川の間に南に向かって扇状に広がる段丘崖を形成し、調査区の西側付近が最も南に張り出している。芝生地区はこの段丘崖にそって西から東に向かって開けた標高約70mの小規模な谷の中に位置している。現在は水田化しているこの谷は、通称、岡の山の麓を北から南に向かって流れる小河川によって解析されたもので、西側の熊谷川が形成した谷とは山裾から南にのびた微高地によって隔てられている。



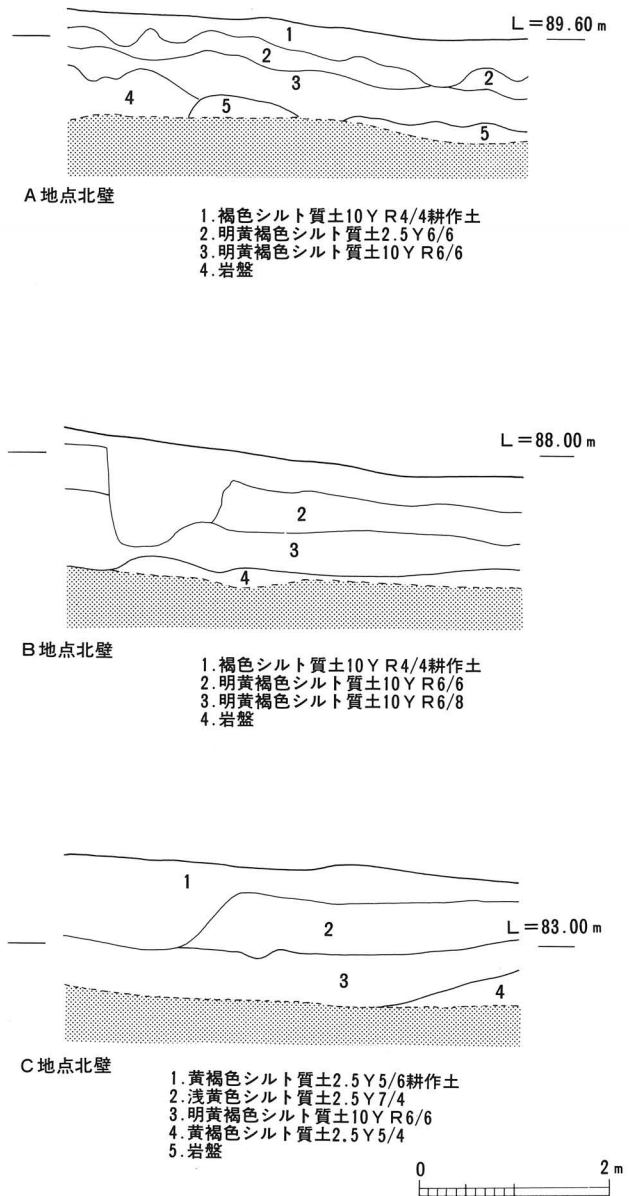
第6図 椎ヶ丸～芝生遺跡位置図

3 調査成果

(1) 遺跡の基本層序

椎ヶ丸地区

椎ヶ丸地区については、1983年、高橋正則氏の報告がある。氏はこの中でこの段丘上で旧石器の出土する地点を4カ所あげている。今回の調査地点は高橋氏報告の第2地点の南東部から第4地点の北側にかけてと思われる。高橋氏はこの第2地点で断面の露頭観察を行い基盤の和泉層群までを表土を含めて4層に分けて報告している。今回の調査はこの第2地点の一部を調査区の中に含んでいるが、高速道路の路線が東西に延びた不安定な段丘崖縁辺部を斜めに横切るように設計され、調査区自体が地点によってかなり比高差のついた斜面上に設定されることになり、地点ごとに土層の堆積が複雑に変化することが考えられた。遺跡の中を通る2本の道路によって3カ所に分かれる調査区のうち、段丘崖上に東西に長く



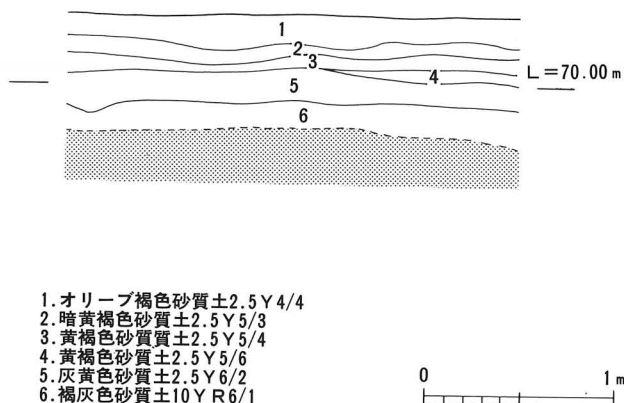
第7図 椎ヶ丸遺跡基本層序

延びるⅠ区と東側に道一つ離れて隣接するⅡ区は、調査区の西側付近で段丘崖が最も南に張り出し、東の牛屋谷川に向かうにつれて緩やかに弧を描きながら北東に延びている。この一見ならかに見える段丘崖も調査してみると浸食作用の為か崖線の至るところで凹凸が認められ、風化の進んだ泥岩質の和泉層の岩盤が浸食作用を受けてUの字状に切れ込んだ地点が認められた。Ⅰ区西側のE 6～11からF 8～11グリッド付近にかけては段丘崖が南に向かって尾根状に張りだしているために土壌の堆積が薄く、30～40cmで基盤の和泉層群の泥岩層に達している。この岩盤はこれから東に向かうにつれ徐々に南東方向に下がっているが、途中D・E-16グリッド付近ではいったん隆起して南南東に延びる小規模な突出部を形成している。このD・E 18～20グリッド付近ではE-7～11からF-8～13付近より更に土壌の堆積が少なく、表土層を除去した時点で岩盤が現れるという状況がしばしばみられる。この状態はD～G-21グリッド付近まで続くが、これより東側のD-1-22～25で岩盤は一度大きく段丘側に切れ込んで埋没谷的な地形を形成し、その後再びB地区の牛屋谷に向かうにつれて緩やかに南に張りだしている。先述したように、調査区の多くが段丘崖線上に設置されたため調査区全体の堆積が不安定な状況で、黄褐色のシルト質土壌に大小の砂礫が多量に混入している状況が殆どである。ただ、埋没谷的な状況のD～F-15～16やH・I-22～26付近では他と比較すると土壌の堆積が厚く、特にⅠ区では1層から5層に分けられる土層の第2層が弥生の遺物包含層、3層上面が弥生の遺構検出面、3層と4層が旧石器の遺物包含層という状況を観察することができた。

芝生地区

芝生地区の土層の堆積は比較的単純で、地表下30～35cmまでは4枚の水田土壌の堆積が認められた後、5層目に灰黄色砂質土、6層目に暗灰黄色砂質土層という扇状地上の自然堆積層が続いている。このなかで第5層の灰黄色砂質土層中からは瓦器や須恵質土器などが出土し中世の遺物包含層であることが確認されたが、6層中からの遺物の出土はなかった。

ただ、6層上面で検出さ



第8図 芝生地区基本層序

れた自然流路の中からは弥生土器と石鏃が出土し、少なくとも6層が弥生時代またはそれ以前に堆積した層であることが認められた。しかし、それ以下は湧水のために調査が不可能となったため、今回の調査は第6層までで終了することとした。

(2) 検出された遺構と遺物

椎ヶ丸地区

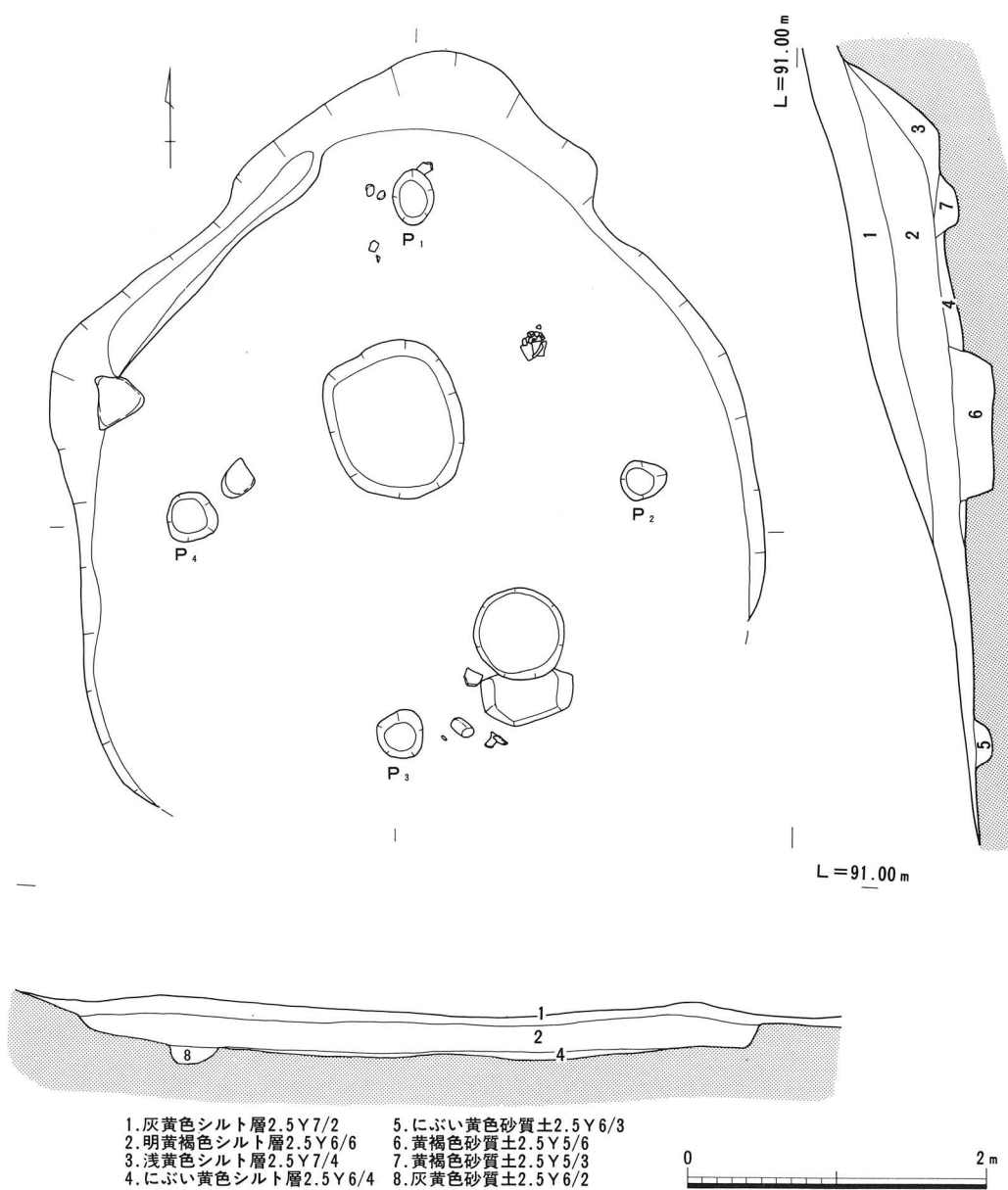
弥生時代の遺構と遺物

1978年の県教育委員会文化課の発掘調査の際には、今回の調査区より北の段丘中央寄りの地点でナイフ形石器、尖頭器、石鏃などを含む500点余りの石器と若干の弥生土器、土師器が出土しているが、今回の調査区内のC地区付近でも1983年頃に農道の切り通しの断面から弥生土器の甕が採集されている。このため、今回の調査でも弥生時代の遺構や遺物の出土する可能性が考えられていた。調査の結果は、当初の予想どおり弥生時代中期から後期にかけてと考えられる住居跡3軒と土壇3基、性格不明の遺構1基、それに弥生土器を中心とする遺物若干を得ることができた。遺構は住居跡一軒を除いて主としてA地区西側からC地区にかけての、段丘崖が南に向かって突出している地点に集中している。遺構検出面は段丘崖線上の斜面という条件のため、土壇の堆積の不安定な地点が多いが、他と比較して土壇の堆積が厚い埋没谷状の地形の中に位置するSK1001と1002は、旧石器しか含まない黄褐色砂質土の上面から検出されている。

竪穴住居跡（SB1001）（第9図）

標高91m付近の段丘崖の斜面上のD・E-10～11グリッドにまたがって検出された直径約4.5mの不整楕円形のプランの遺構である。住居跡は北から南に向かって傾斜している斜面に作られているため、北側の壁は掘り方が比較的明瞭に残っているが、南の低い方は壁と床面の一部を流失している。また、残された壁自体も崩落のためか形が若干いびつになっている。床面の中央部からやや北寄りに長さ1m・深さ50cmの楕円形の炉が設けられ、周りに柱穴と考えられるピットが4個認められる。またこれとは別に、南側の床面には直径60cmほどの浅い穴が掘られ、その横には台石として用いられたと思われる大型の砂岩の円礫が床面を若干掘り込んだ状態で据えられていた。この他にも北西の壁際で周溝とみられる掘り込みが検出されたが、ごく一部に見られるだけであった。

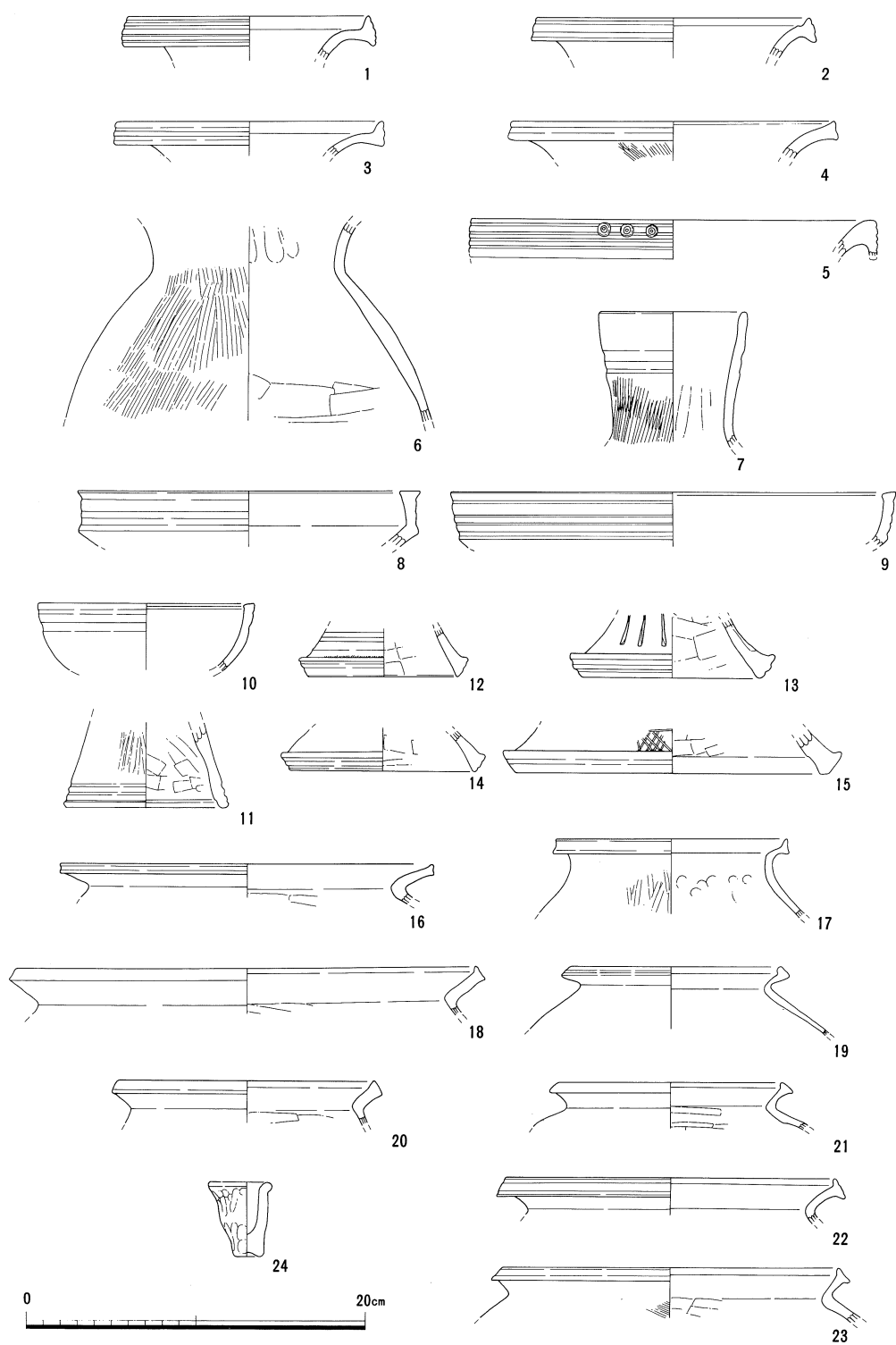
遺構内からの遺物の出土は土器を中心にかかなりの点数にのぼるが、何れも小片のものが大部分を占め、図示できたものがごく僅かである。



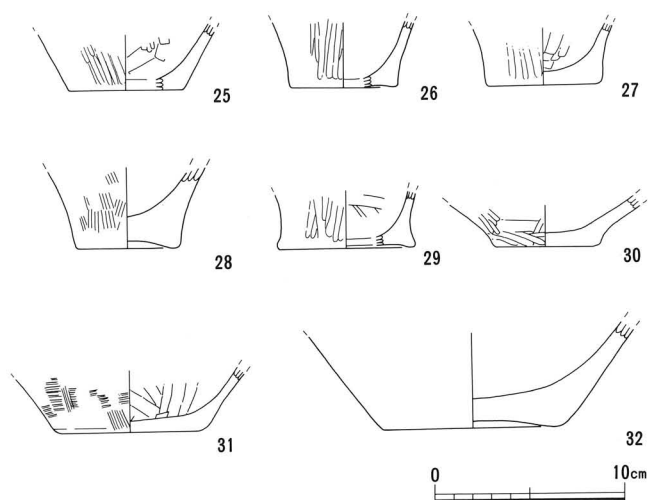
第9図 SB1001実測図

出土遺物 (第10～13図)

1～6は広口壺の破片である。口縁端部を上下に拡張し凹線文を巡らせたものが多いが、中には5のように口縁端部を下方へ著しく垂下させたものも出土している。7は直口壺の口縁部の破片で、僅かに内湾しながら上方に向かってのびる口縁の端部は尖り気味に仕上げられ、口縁からやや下がった位置には浅い凹線が巡らされている。8～10は高杯の杯部、11～

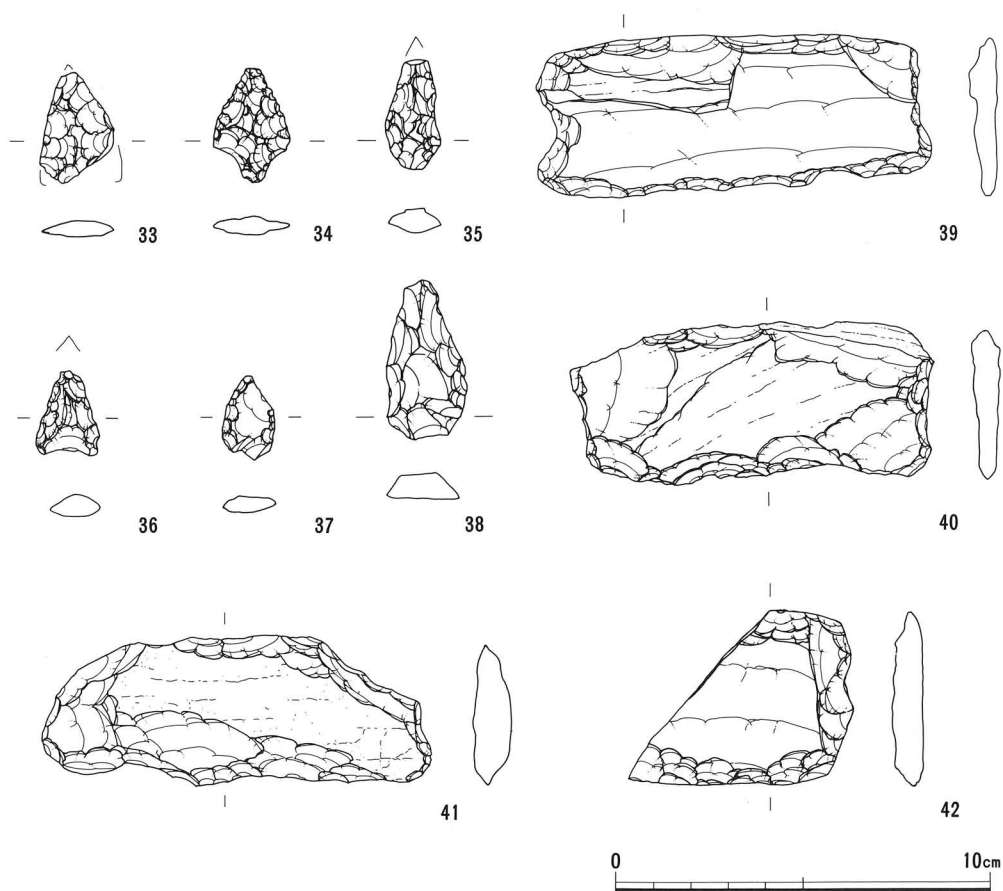


第10図 S B 1001出土土器実測図



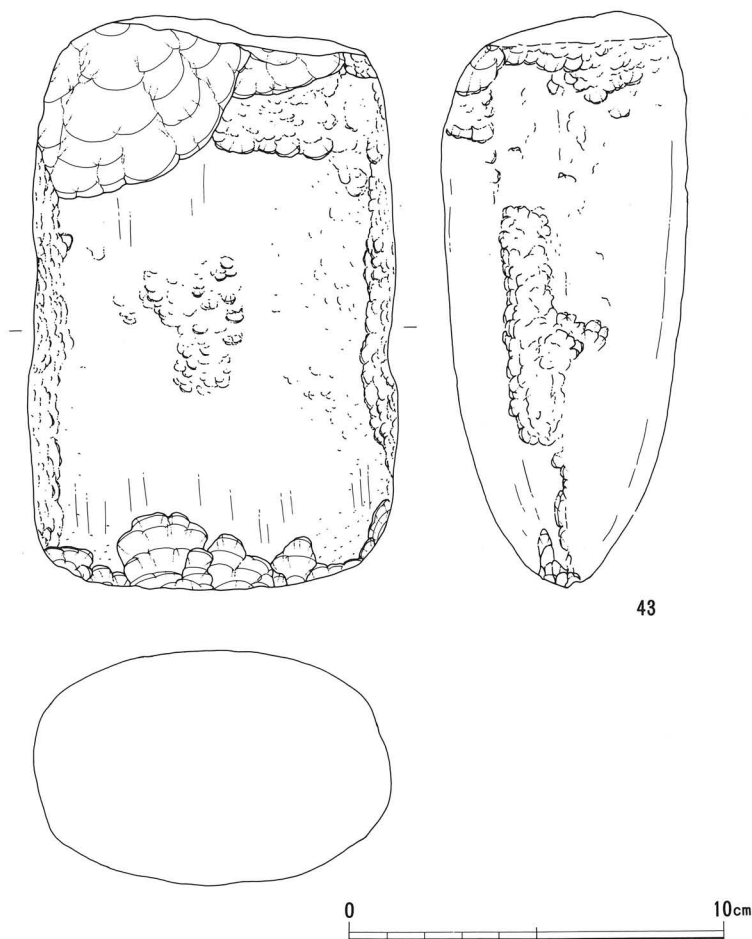
第11図 S B 1001出土土器実測図

14は同じく高杯の脚端部の破片である。8は口縁部の屈曲が顕著で綾をもち、直立する口縁の端部は内外に拡張されて平坦に仕上げられている。9は8と比較して口縁部の立ち上がりの屈曲の度合いが弱く、口縁端部の拡張もごく僅かである。11は碗状の杯部をもつ高杯で口径は13cm足らずと小型のものである。2点とも口縁部に凹線を巡らせてい



第12図 S B 1001出土石器実測図

る。脚端部は11を除いて何れも端部が上方へ拡張され、そこに凹線が巡らされたり強い横ナ
 デが加えられている。また、脚部には格子目文や長い三角形の透かしが入れられている。11
 は脚端部が拡張されずに丸く収められ、凹線が付けられている。甕も出土点数は多いが全形
 を伺えるものは皆無で、器面調整などの詳細は不明なものがほとんどである。口縁部の形態
 から分類を試みると、大まかに口縁の断面が方形のもの、口縁端部が上方にのみ拡張される
 もの(17~20)、端部が上下に拡張されるもの(21~23)の3種類に分けられ、何れの形態の
 ものにも端部に凹線が付けられる個体がある。また、胴部内面のヘラ削りも観察できるもの
 については頸部との境まで及んでいるものが大半を占めている。24はミニチュアの甕形土器
 で全面に指頭圧痕が残されている。石器はサヌカイト製の石鏃と、結晶片岩製の石包丁を中



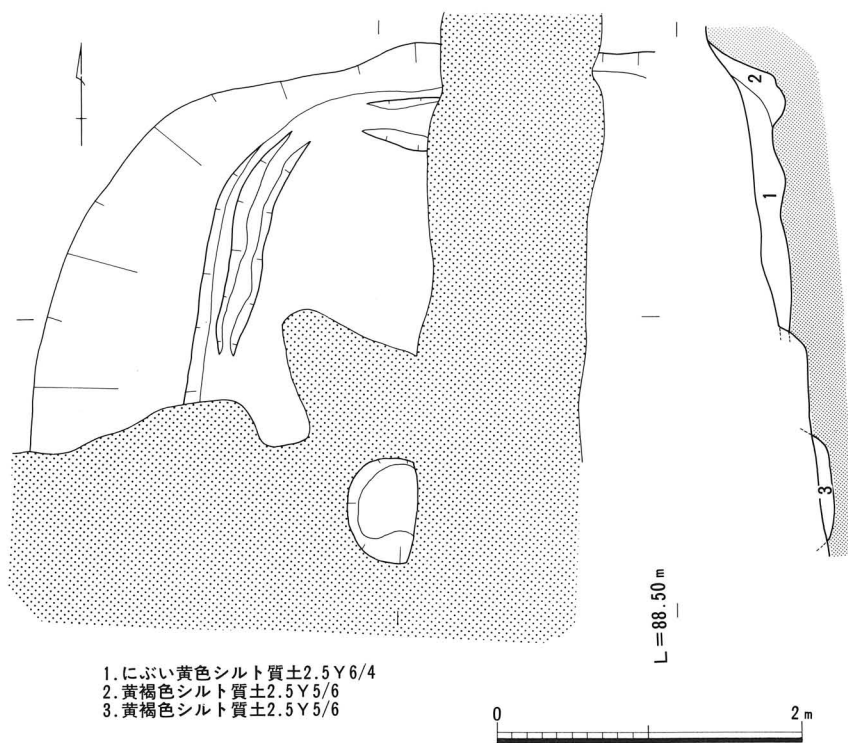
第13図 SB 1001出土石器実測図

心とする石器組成
 が認められ、他に
 太型蛤刃石斧や楔
 形石器などが出土
 している。6点出
 土している石鏃の
 うち形の明かなも
 のは凸基有茎式の
 もの1点(34)、
 凸基無茎式のもの
 1点(35)、凹基
 無茎式1点(36)
 の3点で、他は未
 製品と思われるも
 の2点(37・38)、
 基部が破損してい
 るため形態が不明
 なもの1点(33)
 となっている。こ
 の凸基無茎式のも
 の、凹基無茎式の
 ものについても先
 端部を欠失してい
 る(1)。結晶片岩製

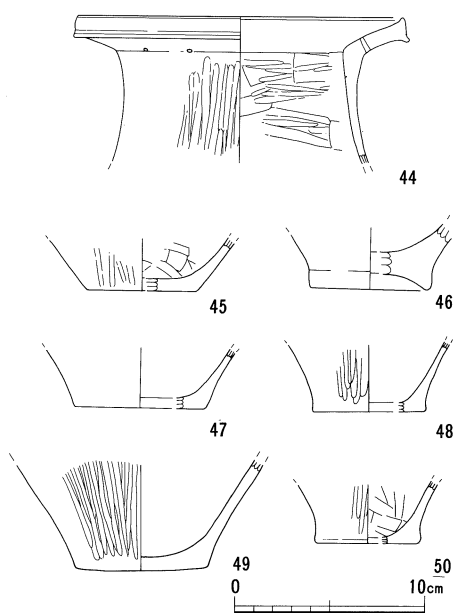
の打製石包丁は4点出土しているが、方形に近い形状に整えた結晶片岩の剥片の両端に抉を入れたものが、身部の半分を欠失している1点を含め3点出土し(39・40・42)、もう1点(41)は不整形な四辺形の形態に整えられている。43は石材は不明だが太型の蛤刃石斧を転用した叩き石で両側縁と刃部、それに身部中央に敲打痕を大きく残している。恐らく何等かの原因で刃部の再生が不可能になったための処置であろう。このほか、覆土や床面からは多くのサヌカイトの剥片に混じって楔形石器も何点か出土している。

竪穴住居跡 (S B 1002) (第14図)

S B 1001から約45m離れたF-20グリッドの斜面上に位置する遺構である。遺構の検出された斜面部は基盤の岩盤が大きく南側に向かって張りだした地点で土壌の堆積状態が不安定で流失しやすい場所である。遺構は表土直下の浅い位置から検出されたため遺存状態は極めて悪く、南東部分は既に壁面はおろか床面までが流失してしまっていたのに加え、残った遺構の中を果樹栽培に伴う溝状の攪乱が走り、北西側の壁を中心に全体の四分の一足らずが残されていただけであった。このため、遺構の正確な大きさなどは不明であるが、残された遺構から推測すると恐らく直径5m前後の円形に近いプランをもつものであったと考えられる。



第14図 S B 1002実測図



第15図 S B 1002出土土器実測図

て稜をもつ。45～50は壺または甕の底部で、平底意外に上げ底のものも見られる。調整は外面がヘラ磨き、内面はヘラ削りのものが多い。

竪穴住居跡（S B 1003）（第16図）

S B 1001の南西のⅢ区の斜面上から検出された遺構で、この住居跡のすぐ南側で斜面は崖となって下の谷にむかって大きく落ちこんでいる。他の二つの住居跡と同様、傾斜地に遺構が掘り込まれているため比高の高い北側は壁面の立ち上がりは明瞭であるが、南側三分の一は流失して検出できなかった。直径約5 mの大きさで、円形に近いプランを持っていたと考えられる住居跡の床面には柱穴を含む11のピットが検出され、中央部付近には直径約60 cm・深さ約20 cmの炉址が設けられている。また、東側の壁際には長さ約2.1 m・幅1.4 mの集石を伴う土壌S K 1003が検出されている。1001・1002で検出された周溝は精査したにもかかわらず発見できなかった。北側の床面上には黄褐色土が低い土手状の高まりとなって帯状に連なっている部分が認められたが、自然にできたものか人為的なものかは不明である。

出土遺物（第17～18図）

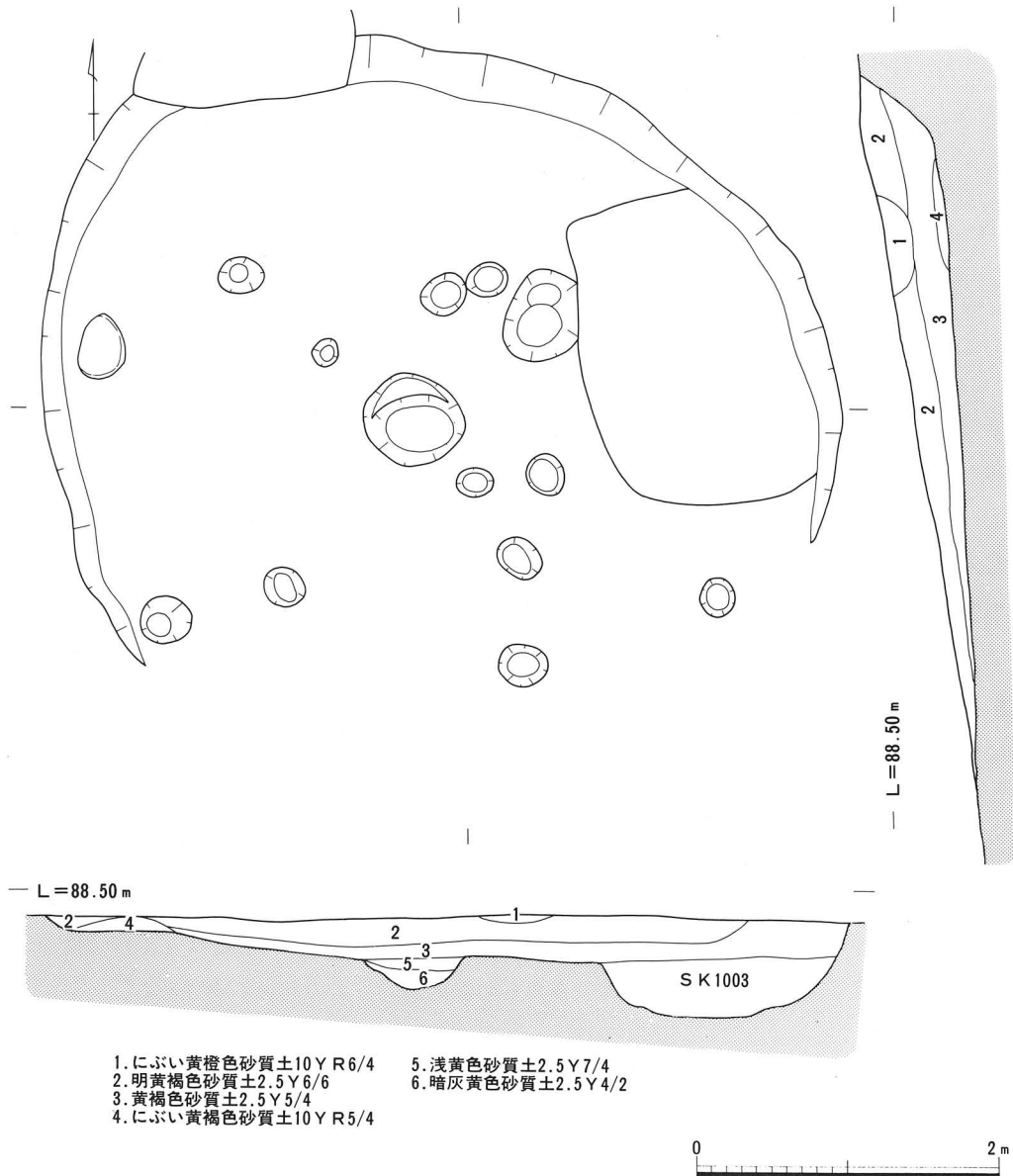
1001同様に土器を中心に遺物の出土数は多いが、細片のものが大部分で図示できたものはごく僅かである。51・52の壺はいずれも口径が20 cmに満たない中、小型の広口壺で口縁端部を上下に拡張する形態のものであるが、51では拡張された端部に凹線文を巡らせているのに

残された床面からは周溝の一部や浅い土壇らしい落ち込みの痕跡が検出されたが柱穴の数や位置などは全く不明である。また、壁面も傾斜地という不安定な場所のためか西側部分などに大きく崩落した所がみられた。

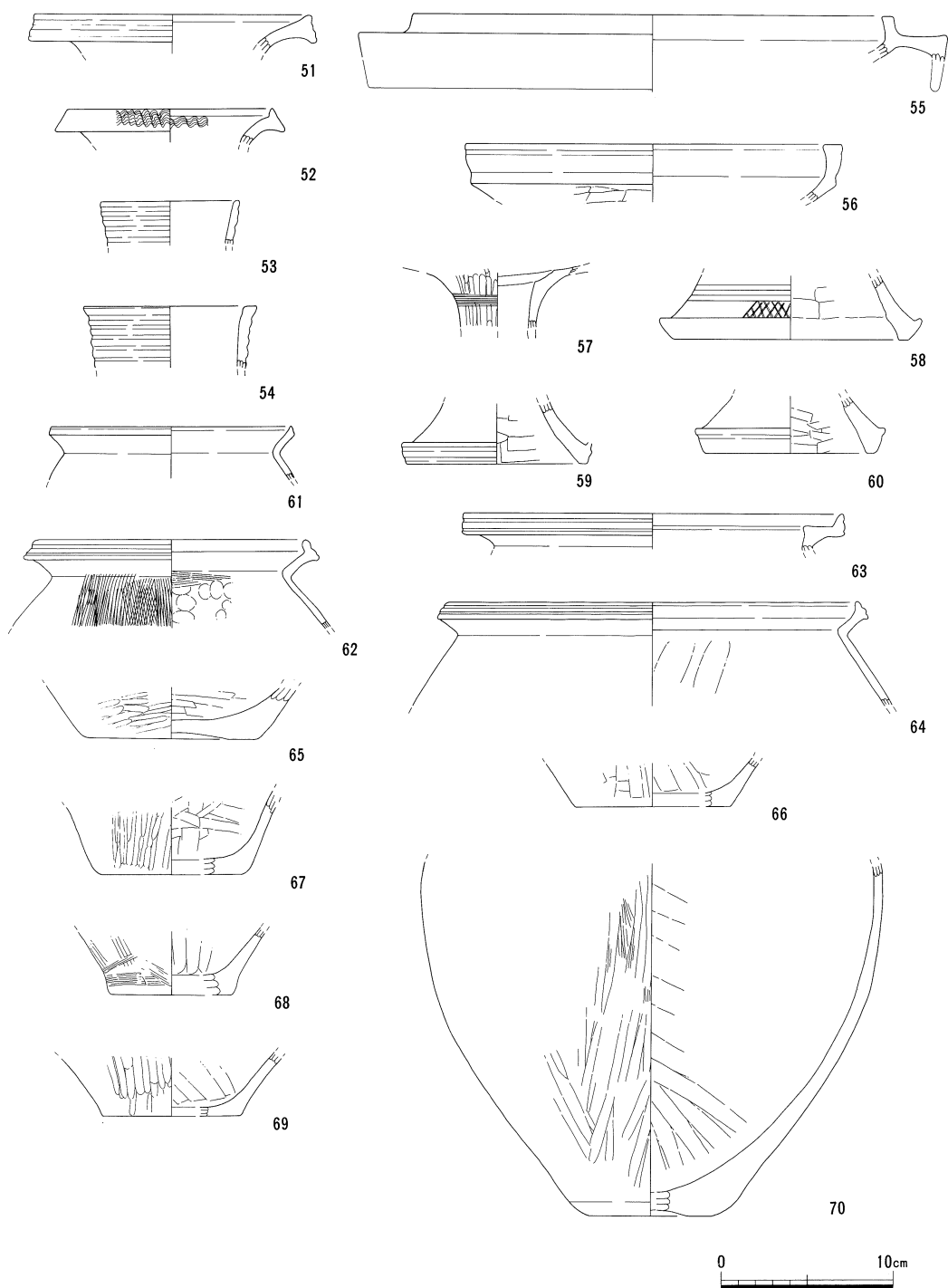
出土遺物（第15図）

遺構自体の遺存状態が極端に悪いことを反映して遺物の出土数も少なく、弥生土器が小片で検出された意外はサヌカイトの剥片が若干出土しただけで、石器に関しては製品となるようなものは出土しなかった。44は筒状の頸部と、上下に拡張された端部に凹線文的な横ナデが加えられた直線的な口縁部を持った壺で、口縁部と頸部の境はくの字形に屈曲し

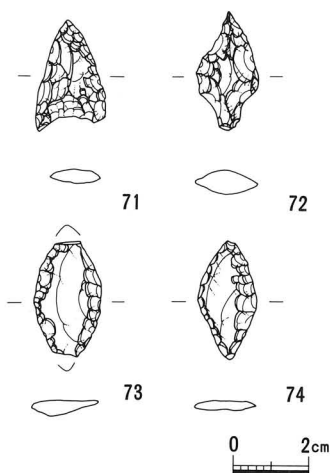
対して52では櫛描の波状文が描かれ、口縁内面にも同様の文様が付けられている。53・54は筒状の口縁を持つ直口壺で、54の口縁端部は平坦に仕上げられている。何れも口縁直下から凹線文が始まっている。55・56と57～60はそれぞれ高杯の杯部と脚部である。55は水平口縁の口縁端部が幅広く下方に垂下するもので、畿内あるいはその周辺部からの搬入品であろう。56は口縁部が稜をもってやや内湾ぎみに上方に立ち上がり凹線文が巡らされている。58～60の脚端部は上方に拡張され、横ナデや凹線が巡らされている。57の脚柱部には平行直線文、



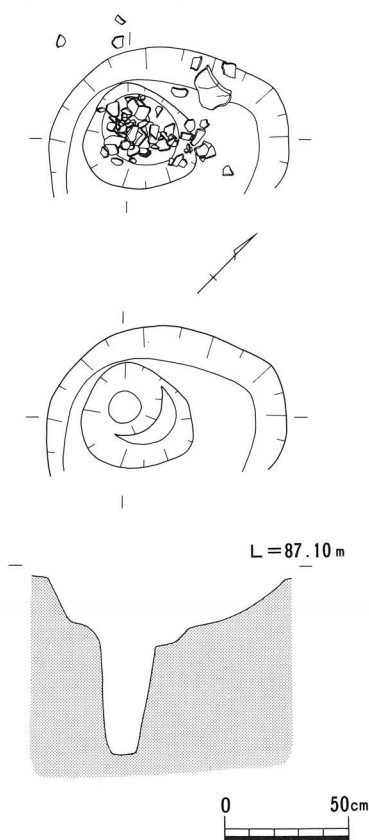
第16図 S B 1003実測図



第17图 S B 1003出土土器实测图



第18図 S B 1003出土石器実測図



第19図 S K 1001実測図

58の脚端部付近には格子目文が付けられている。甕にはS B 1001同様、口縁端部の形態が61のように方形に作り出されるものと、62のように上方にのみ拡張されるもの、63・64のように上下に拡張されるものの3種類が出土している。また、住居址の床面からはサヌカイトの剥片がかなりまとまって出土しているが、楔形石器以外の製品は石鏃が4点出土しているだけで打製石包丁などは見つかっていない。4点のうち、71が凹基無茎式石鏃、72が凸基有茎式石鏃、73～74が凸基無茎式石鏃にそれぞれ分類される。

土壌 (S K 1001) (第19図)

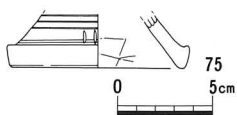
S B 1001と1002が検出されたI区の段丘面突出部の東側の埋没谷状地形の斜面から発見された遺構である。北西から南東に向かって落ちる斜面上に位置するため、地形の高い北西側の壁は掘り込みが明瞭に残されているのに対して南東側は流失してしまっているが、長さ約1 m・幅約70～80 cm以上の大きさの楕円形のプランを持つ遺構であったと考えられる。最も深いところでも20 cm足らずの底面には、更に直径20 cm・深さ40 cmほどのピットが掘り込まれている。遺物はこのピットの埋積土を中心に弥生土器がかなりの点数出土しているが、小片のため図示できたものは高杯の脚部1点だけである。

出土遺物 (第20図)

75は高杯の脚端部の破片である。上方に拡張された端部は横ナデ調整が施され、脚の裾部分にはヘラによる平行沈線と刺突文がつけられている。

土壌 (S K 1002) (第21図)

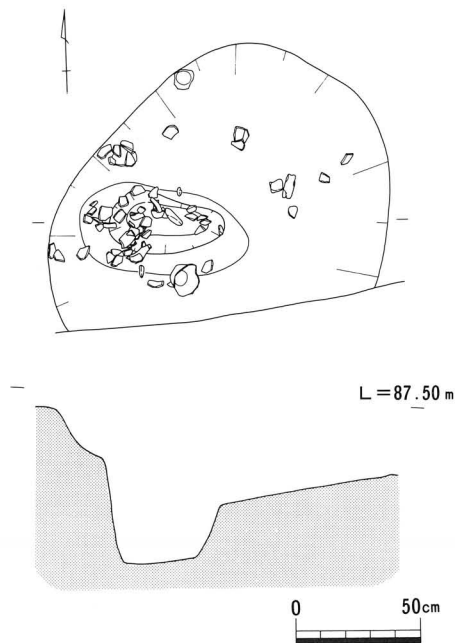
S K 1001の西側に隣接して検出された土壌である。南側の一部が調査区外に延びているため正確な大き



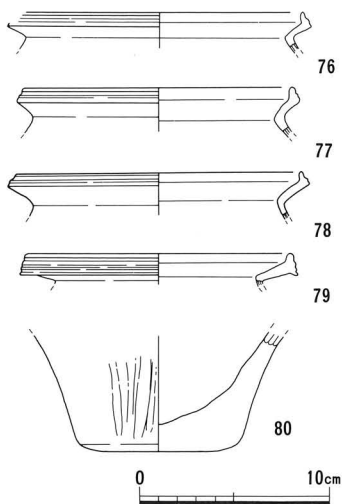
さは明らかではないが長さ1.5m以上・幅1.2m前後の楕円形のプランの遺構だと考えられる。S K 1001と同じ斜面上に掘り込まれているため、南東側の立ち上がりは不明瞭で遺構の

第20図 S K 1001出土土器実測図

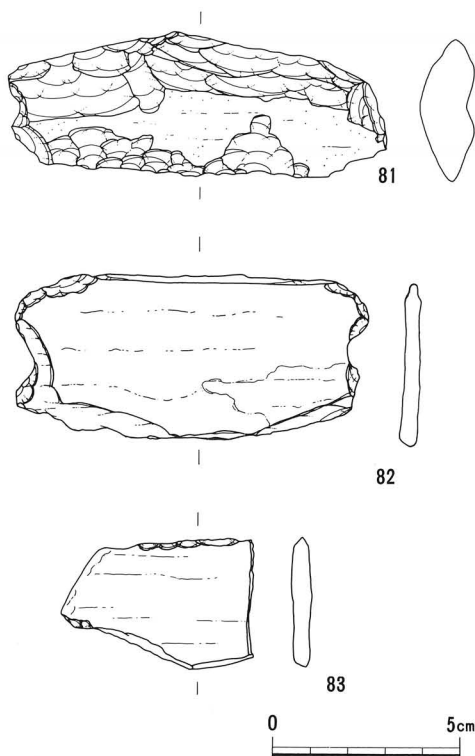
中心に向かってだらだらと落ち込んでいる。この土壌の底にも S K 1001同様、長さ約70cm・幅約30cm・深さ30cmのピットが掘り込まれている。また S K 1001もそうであったがピットの埋積土中には焼土に混じって多量の炭化物が出土している。両土壌ともどの様な目的のもとに作られたものか推測しがたい遺構である。



第21図 S K 1002実測図



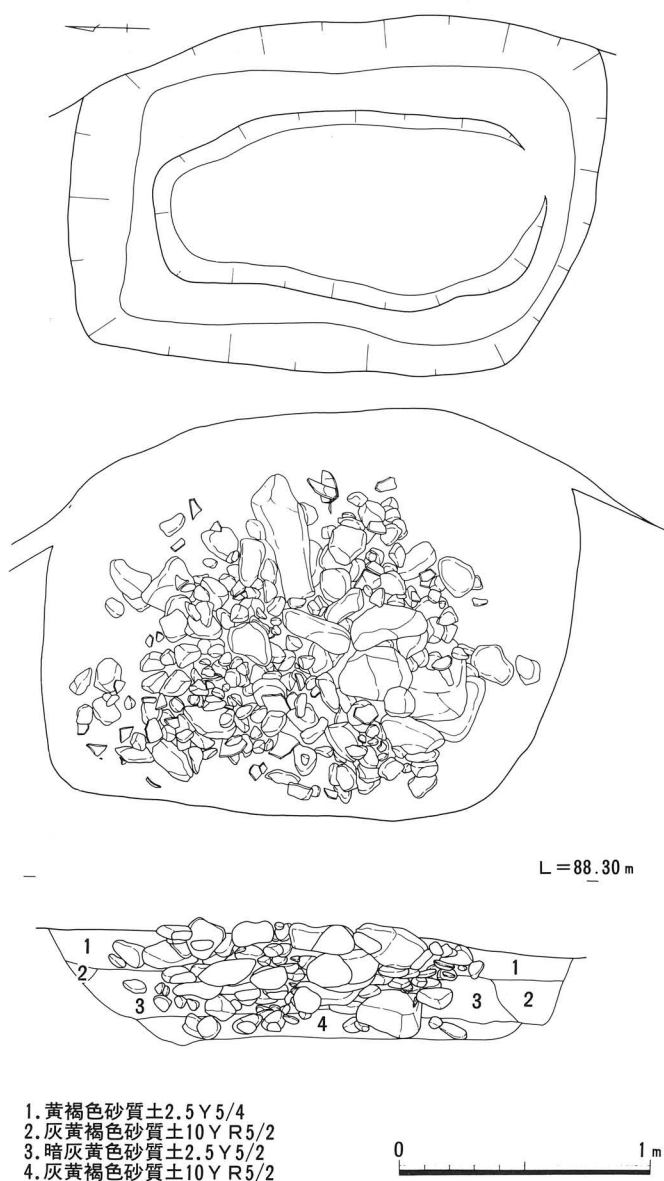
第22図 S K 1002出土土器実測図



第23図 S K 1002出土石器実測図

も出土している。76～79は甕の口縁部の破片である。79以外は口縁端部を上方に拡張し、そこに凹線を巡らせている。口縁の内外面とも横ナデ調整が施されているが胴部以下は不明である。79は口縁端部を上下に拡張し凹線を加えたもので、口縁内外面の調整は他の甕と同じく横ナデ調整が施こされている。胴部以下は不明であるが、この形態の口縁をもつ甕には外面に叩き目が施されるものが多い。石器は打製石包丁が3点出土している。81は粘板岩を用いたと思われるもので、片面に自然面を残す厚みのある素材を用い、全体にずんぐりとした

印象を受ける。両端に抉を入れる形態のものであろうと考えられるが、片方の抉は不明瞭である。82・83は結晶片岩製のもので、81同様、片面に自然面を残す素材を用いている。83は破損がひどく形態は不明であるが、82は両端に抉を入れた形態のもので、いずれも刃部などへの加工の度合いは低い。

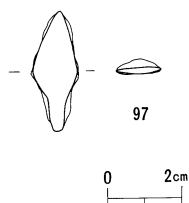


第24図 S K 1003実測図

土壌（S K 1003）（第24図）

住居跡S B 1003の東側の床面から検出された長軸方向の長さ2.1m・幅1.6m・深さ45cmの隅丸方形のプランを持った土壌である。他の2基の土壌と異なり、壁面の立ち上がりが見え、プランもはっきりしている。また、遺構内に意図的に多量の礫が投げ込まれた集石遺構でもあるが、同様の集石を伴う土壌は周辺の弥生遺跡でも検出例は少ない。この土壌の床面は一部が更に掘り込まれ、同じように

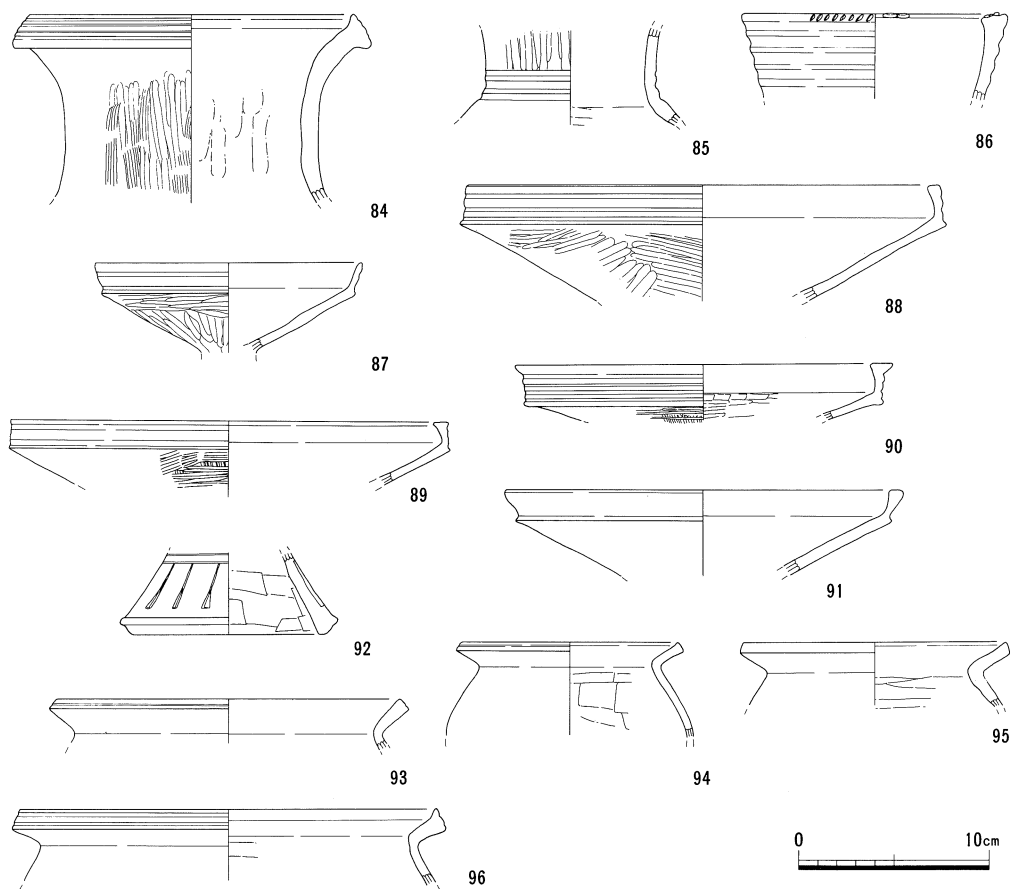
礫がはいっていた。遺物の多くはこの集石の間から出土している。この様に集石を伴う弥生時代の土壌は中期後半から後期初頭にかけての時期に吉野川北岸地域で検出例が多く、一般的に何らかの祭祀に関連する遺構としてとらえられているものである。



第25図 S K 1003出土鉄器実測図

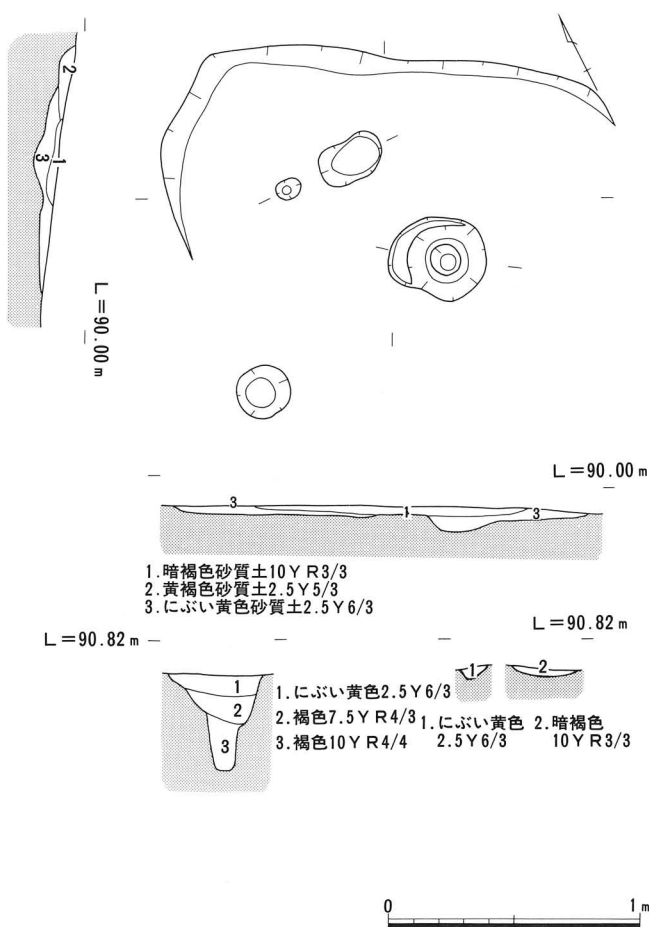
出土遺物（第25～26図）

遺物は弥生土器の破片が多数出土したが、他の遺構同様、小片が多い。84・85は中小型壺の口頸部の破片である。84の口縁は筒状の頸部から斜め外上方に緩やかにのび、口縁端部は上下に拡張され凹



第26図 S K 1003出土土器実測図

線が三条巡らされている。口縁部の内外面は強く横ナデが施され、頸部外面はハケとヘラ磨き、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。85は口縁の形状は不明であるが、ヘラ磨きによる調整の施された筒状の頸部と胴部の境には凹線が巡らされている。86は小型の鉢形土器で、緩やかに内湾しながら上方に開く口縁部には凹線文が巡らされ、端部は内外に若干拡張されて平坦面が作り出され、一對のボタン状の貼り付け文とヘラによる刻み目が付けられている。87～90・91は高杯の杯部、92は脚台部の破片である。杯部は何れも口縁部との境に明瞭な稜線が作り出されるが、口縁の立ち上がりの形態によって88～90のように上方にほぼ垂直に立ち上がるものと、87・91のように斜め外上方に緩やかに開くものに大きく分けられる。口縁端部の形態によってさらに分類が可能で、特に87や90・91の形態のものは88・89に比べてより後期的な特徴をもつものであると考えられる。92の脚台の裾部は平行沈線とともに三角形の透孔があげられ、脚端部は上方にかかるく拡張されて横ナデが加えられている。93～96は甕の口縁部の破片である。93～95は口縁端部が断面方形、96が上方に拡張される形態のもので、観察可能なものでは、内面のヘラ削りは何れも頸部との境付近まで施されている。



第27図 S X 1001実測図

は、内面のヘラ削りは何れも頸部との境付近まで施されている。

S B 1003の床面から検出されたS K 1003は、検出当初は住居跡に付随する施設とも考えられていたが、出土した土器、特に高杯を比較してみると時期的に若干の前後関係のあることが考えられる。S B 1003出土の53の水平口縁の高杯は畿内またはその周辺から搬入されたと考えられ、IV様式でも新しい段階のものとされるものであるがS K 1003の89のように口縁端部の外方への拡張が顕著なものや87・92のように口縁部が斜め外上方に開くものは中期最終末から後期に属する可能性が強いもので、S B 1003よりも若干後出する時期のものだと考えてもよいもの

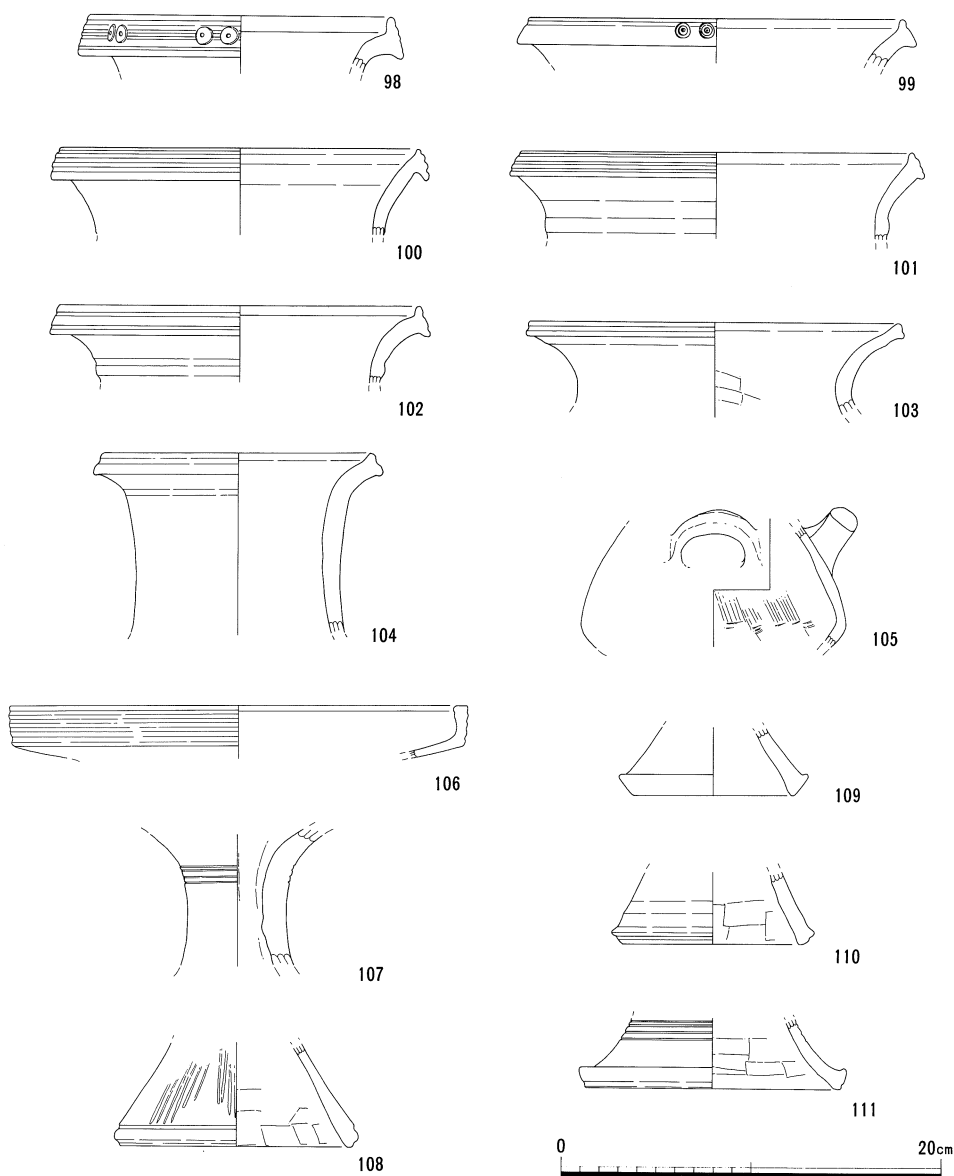
だともまれる遺物である。

不明遺構（S X 1001）（第27図）

住居跡 S B 1001の西で検出された遺構で、緩斜面上の遺構検出面が表土から浅いためか削平が著しく、遺構北側の掘り方の一部とこれに関連すると思われる大小のピット4個を検出ただけである。当初住居址の可能性も考えられたが他の住居址のように明確に炉址と認められるものが見あたらないため、ここでは性格不明の遺構として扱っておく。出土遺物はまとまったものは出土していない。

包含層出土遺物（第28～30図）

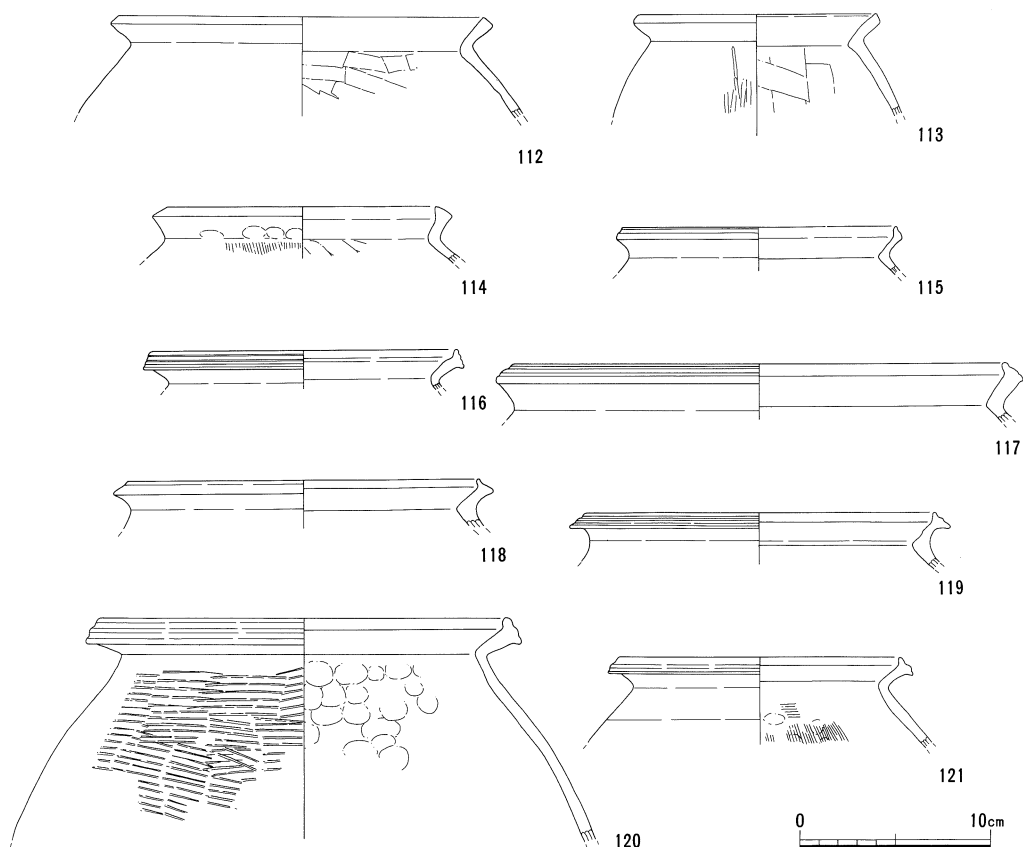
本遺跡は、基本層序の項でも述べたように段丘崖線上に調査区が設定されたために弥生時代といっても土層の堆積状況が不安定で、比較的安定していたのは旧石器と同様、埋没谷内に堆積したシルトからの出土遺物に限られている。また、弥生時代中期後半から後期初頭に限って言えば、この地域ではもともと遺構以外からの遺物の出土が少ないという状況も認められている。このように包含層出土遺物の出土点数が限られているため、今回はそれ以外の耕作土や攪乱層からの遺物も含めて包含層出土遺物として報告する。98～104の壺形土器は広口壺と称されるものであるが、口径が20cm以下で頸部の細長い中型のものと、口径が20cm以上で太くて短い頸部がつく大型のものに分けられる。98・99・104は中型のもので、口縁端部は上方または上下に拡張され、凹線や円形浮文が付けられている。100～102は大型に分類されるもので、筒状の頸部から緩やかに外反しながら斜め外上方に延びる短い口縁端部は上下に拡張され、凹線が巡らされている。また101・102は頸部にも太い凹線が認められる。いずれも口縁から頸部外面にかけては横ナデによって入念に仕上げられている。103は頸部の屈曲の度合いが強く、口縁端部は上方へ若干拡張されるだけで凹線も1条巡らされるのみである。調整は粗く、頸部内面にはヘラ削りが認められる。105は水差し形土器で、算盤玉形の胴部の肩に半環状の把手が付けられているが、破片のため口縁の形態などは不明である。また、遺存状態が悪く調整なども不明な部分が多いが、胴部内面に僅かにハケ目調整が観察できる。106は皿形の高杯の杯部で、直立する口縁部外面には凹線が巡らされ杯部と口縁部との境界は緩やかな稜線を形造る。107は同じく高杯の脚柱部で太い平行直線文が2条巡らされている。108～111の脚台には端部を上方に拡張するものと、まったく拡張しないものがあるが、拡張された端部には凹線が付けられるものと、横ナデのみで仕上げられるものがある。また、111のように裾部に平行直線文が加えられた例もある。何れも外面はヘラ磨きまたはナデ、内面はヘラ削りで仕上げられている。112～121の甕は、口縁端部の形態によって口縁の断面が方形または丸みをもった形状に仕上げられただけで端部が拡張されないもの、



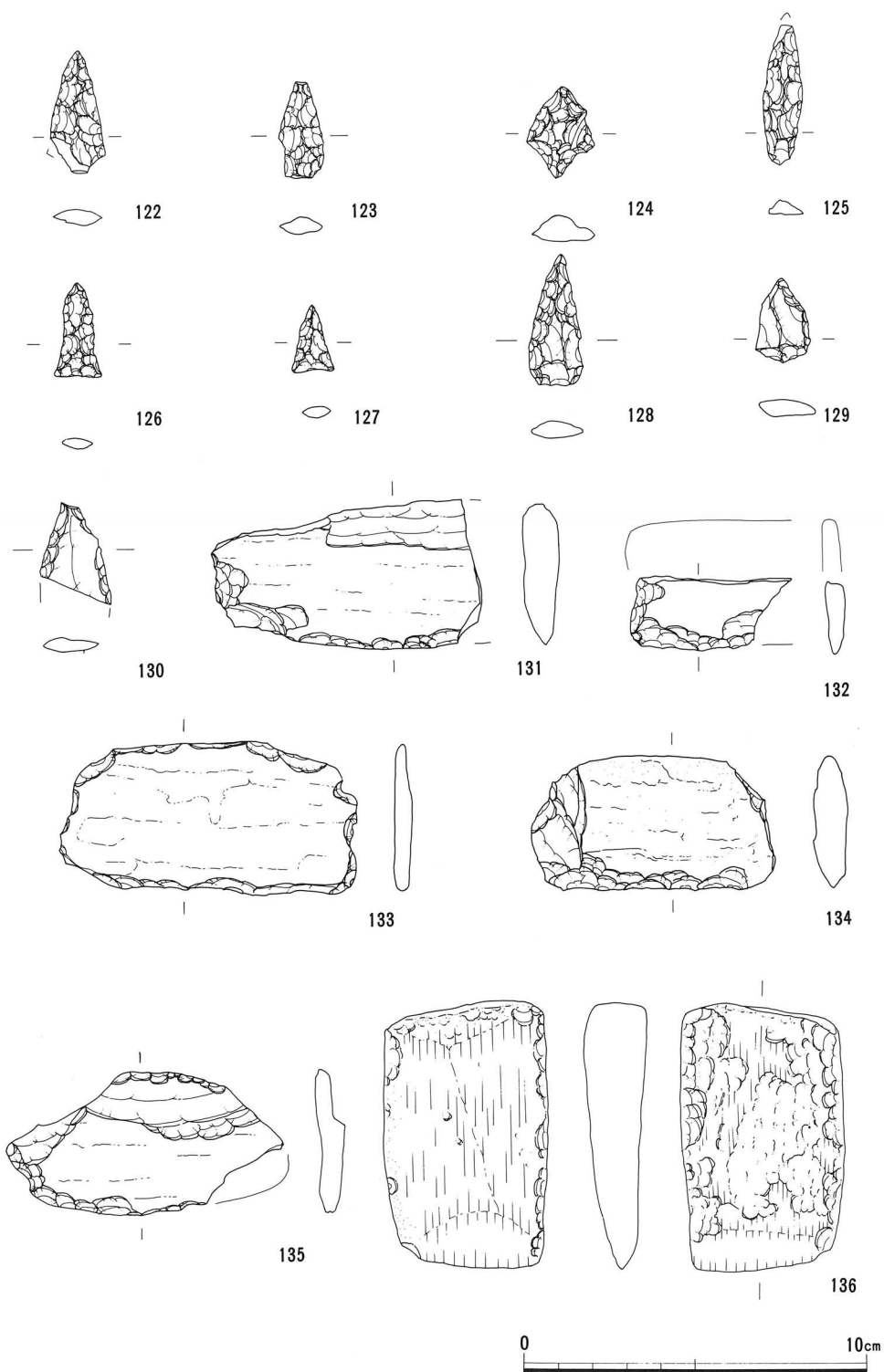
第28図 包含層出土土器実測図

端部が上方のみに拡張されるもの、端部が上下に拡張されるものの3種類に分類される。112・113は端部が方形またはそれに近い形状のもので凹線は認められず、内面のヘラ削りは頸部との境まで施されている。114・115は口縁端部が上方に拡張されるもので、114では端部には凹線が認められないが115は1本巡らされている。2点とも頸部以下の残りが悪く形態・調整なども殆ど不明だが、114では僅かに残された胴部部分にハケ目とヘラ削りが認め

られる。116～121は口縁端部が上下に拡張されるもので、拡張の程度は様々であるが端部には何れも凹線が認められる。また、114・115と同じく頸部以下の形態を観察できるものは少ないが、比較的遺存状態のよい120では外面は幅の広い粗い平行叩きが、内面には指押さえがそれぞれ頸部との境まで施されている。121の場合は外面はナデ調整、内面は指押さえの後にハケ目調整が施されている。通常、口縁端部を上下に拡張する甕で外面に叩き目に加えらるものは、叩き目の上にさらにハケ目調整やナデが施される場合が多いが120の場合はそのまま残されている。叩き目の形状とともに特異な例である。122～129はサヌカイト製の打製石鏃でそれぞれ122～124が凸基有茎式、125・128が凸基無茎式、126・127が凹基無茎式に属する。129・130はサヌカイトの剥片の側縁に調整を加えたもので石鏃の未製品と考えられるものである。131～135の打製石包丁は両端に袂を加えたもの（132～133）と袂を持たないもの（134・135）が出土している。136は扁平片刃石斧で蒲鉾形の断面をもつ身部には成形の際の敲打痕が多く残されている。



第29図 包含層出土土器実測図



第30图 包含層出土石器実測図

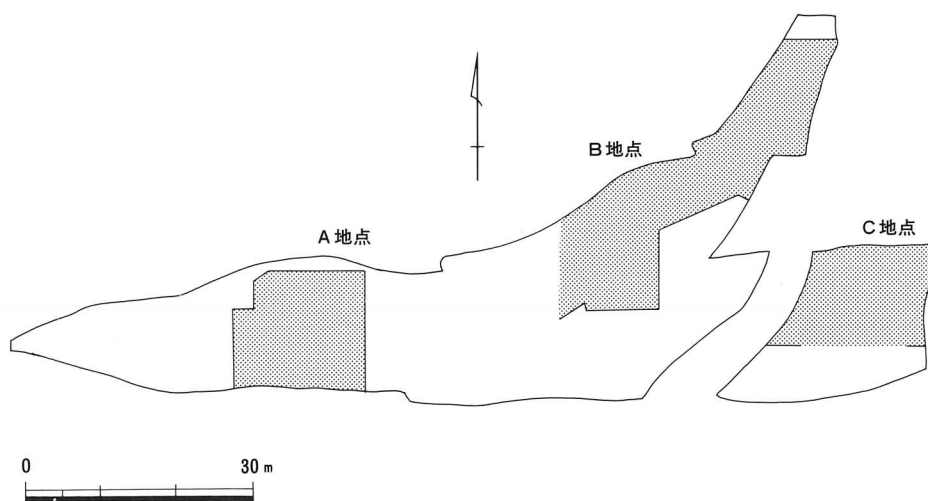
旧石器時代の遺物（第33～49図）

今回、報告する旧石器はⅠ区で検出された2箇所の埋没谷状地形内に堆積したシルト層と東側の牛屋谷に面したⅡ区の段丘面上に堆積した段丘礫層を中心に出土したものである。何れの層も堆積状況が不安定で、その層中に含まれる石器も原位置を遊離している可能性が強い遺物である。この3地点を西から仮にA、B、Cの記号を付け、周辺から出土した遺物も交えて説明することとする。

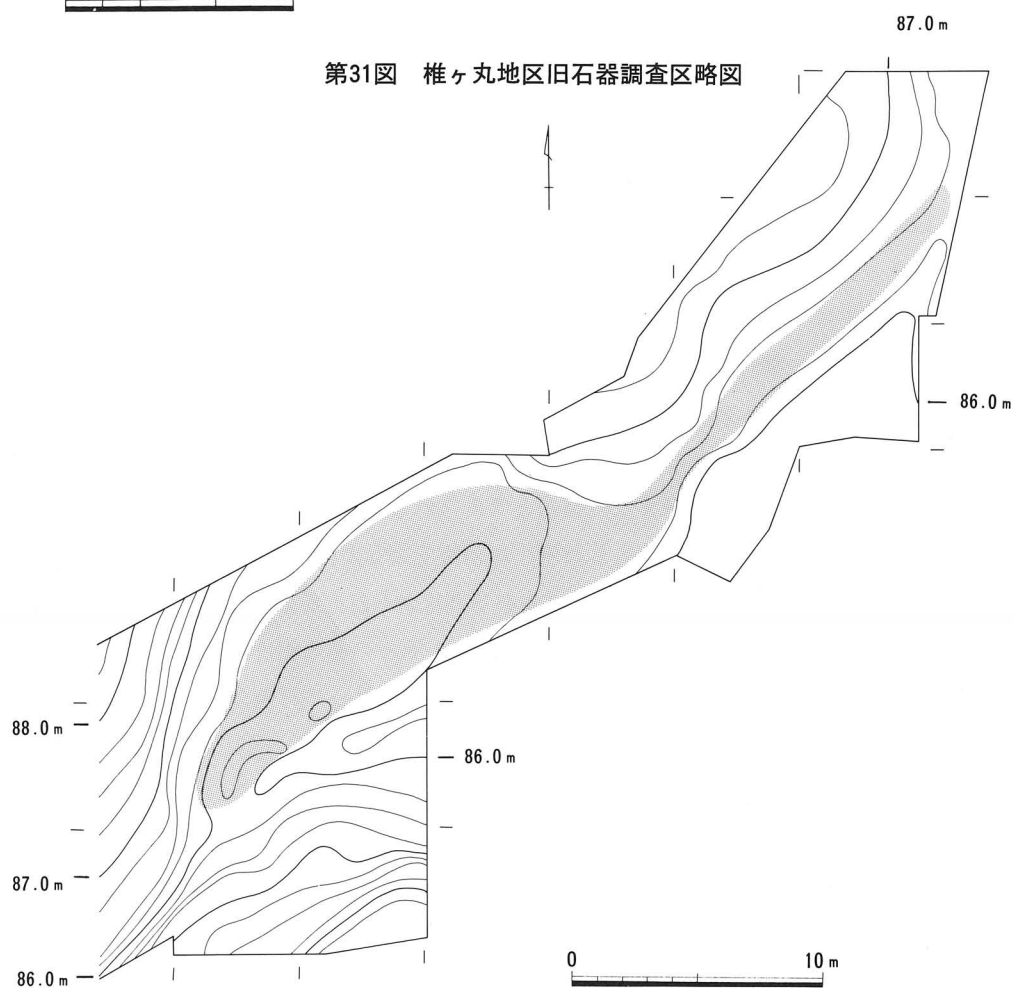
A地点出土遺物（第33～39図）

A地点とその周辺からは、ナイフ形石器や、削器、石核などを含む遺物が出土している。

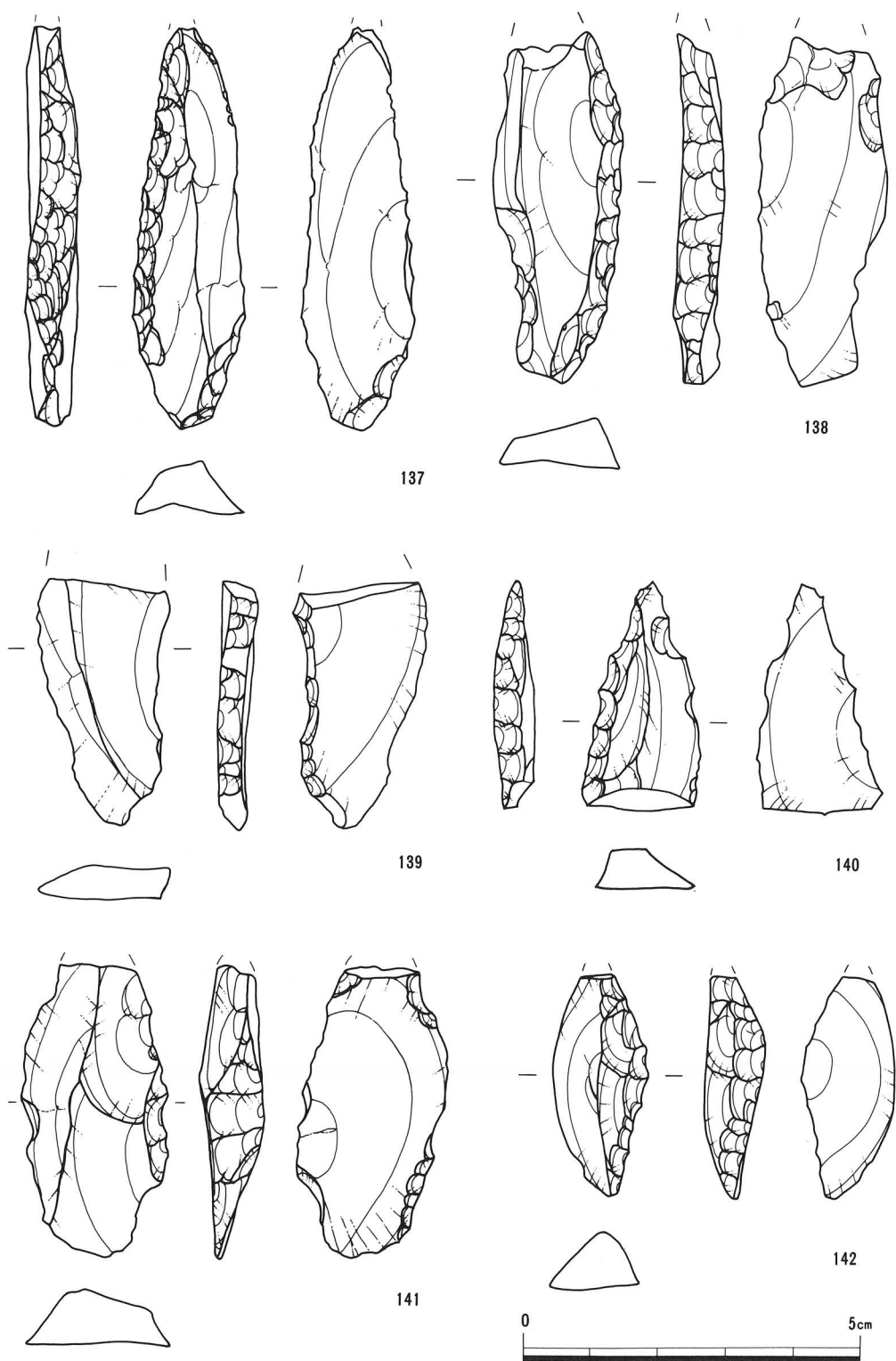
137は背面に2枚のポジティブな剥離面が残る横長の素材を用いたナイフ形石器で、調整剥離が片側縁のほか刃縁部側の一部にも施されている(2)。138・139は背面が1枚のネガティブな剥離とポジティブな剥離面によって構成される翼状剥片を素材とするナイフ形石器で、調整の方法は138が137と同じく片側縁と刃縁部側に施されているのに対して139は片側縁に施されるだけである。140～144はいずれも背面が複数のネガティブな剥離面と1枚のポジティブな剥離面により構成される横長剥片が素材として用いられ、調整は片側縁にだけ認められる。145・146は同じ片側縁に調整を施す横長剥片を用いたナイフ形石器ではあるが、背面は1枚のネガティブな面のみによって構成されている。147・148も横長剥片を素材とするが、調整は一部を除いて周縁部全面に加えられたタイプのナイフ形石器である。147の横長剥片は背面と打面の一部にそれぞれ自然面を残している。149は翼状剥片の側縁部に簡単な調整を加え刃部としたナイフまたは削器と考えられる石器で、素材となる翼状剥片の一方の側縁には自然面が残り、もう一方には簡単な調整が施されている。150～155は何れも比較的厚みのある剥片を素材とする削器または搔器と考えられる石器である。150は、背面と腹面の両方からの加撃によって打点を除去した剥片に調整を施した削器である。151は背面が自然面と複数のネガティブな剥離によって構成される剥片から打面を除去し、縁辺部に調整を加えた削器または搔器と考えられる石器である。152も厚みのある剥片の打点を取り去り、縁辺部に調整を加えて搔器としている。153は複数の加撃によって打瘤が取り去られた腹面から、背面に向かって縁辺部全体に調整を加えて搔器としたもので、円みをもった刃部が作り出されている。154・155も150～153同様の特徴を持った石器であるが、155は他と異なり素材となった剥片の打面がそのまま残されている。154の素材となった剥片の背面は複数のネガティブな剥離面が認められる。また、156も簡単な調整を側縁に加えただけの削器であるが、素材には横長剥片を取ったと考えられる剥片を用いた石核が転用されている。158～163は横長剥片、164は調整剥片である、161は一見翼状剥片に類似しているが、腹面はポジティブな剥離面とネガティブな剥離面が1枚ずつ認められる。また165は背面がネガティブ



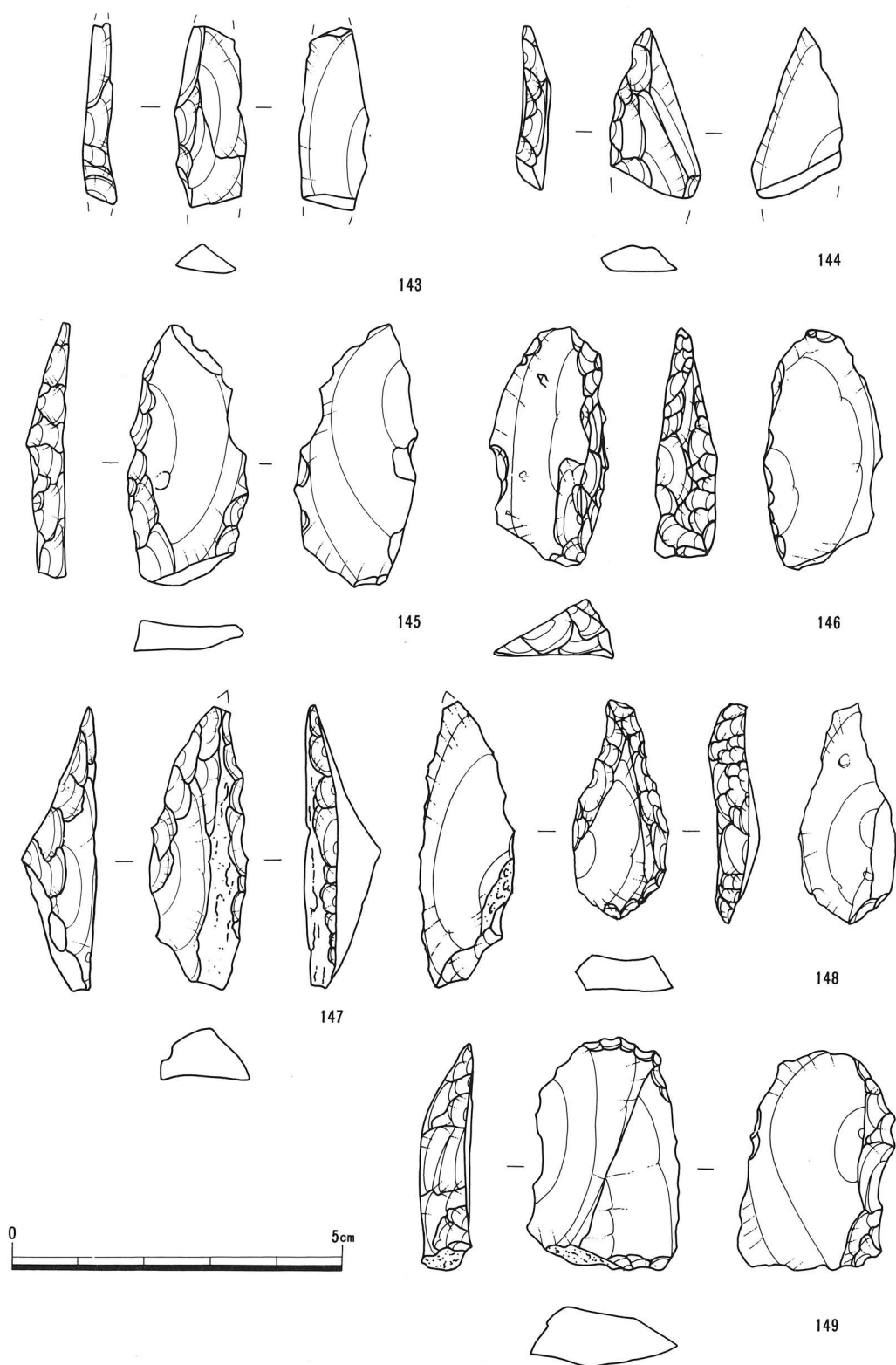
第31図 椎ヶ丸地区旧石器調査区略図



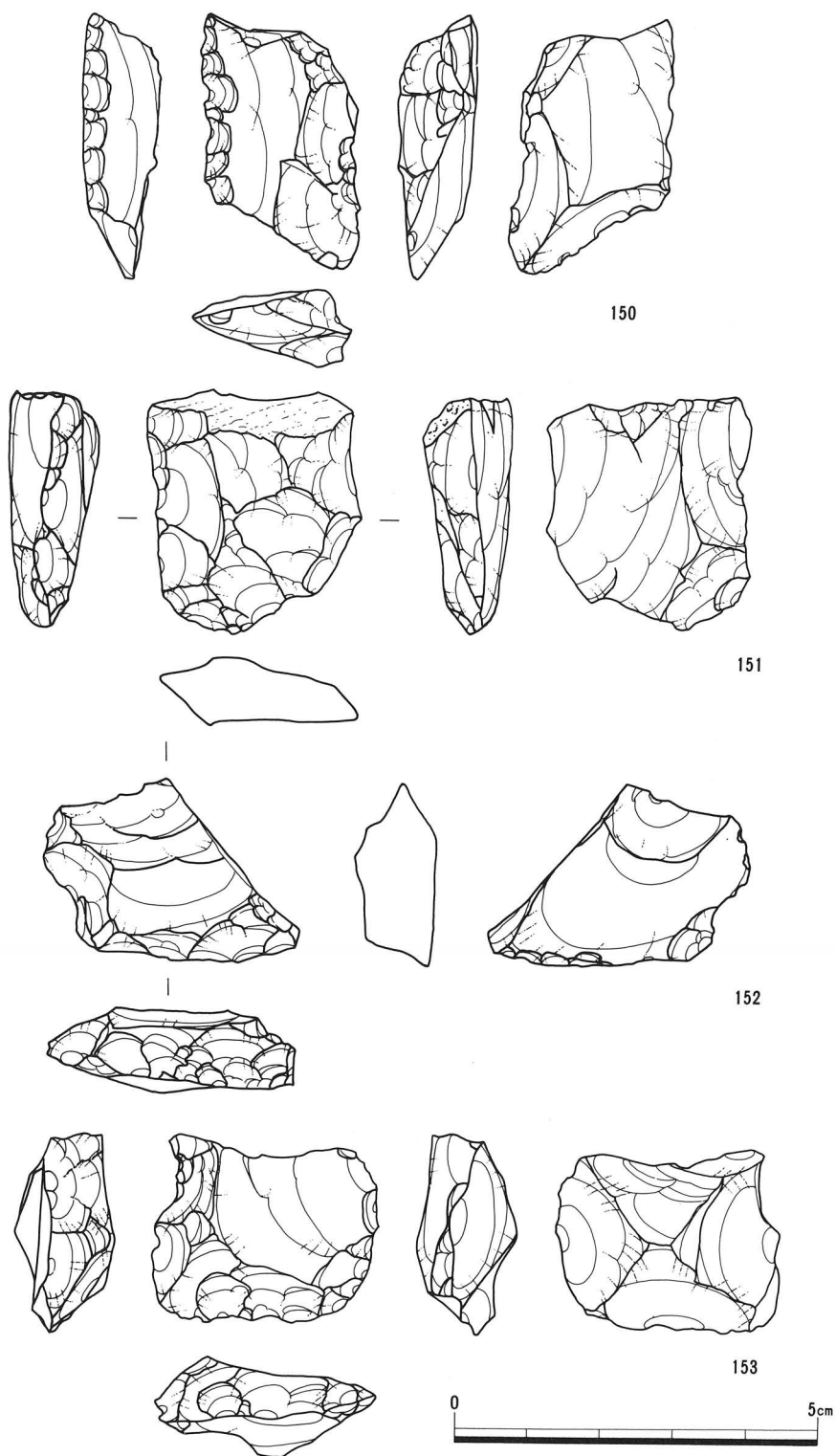
第32図 B地点埋没谷状地形測量図



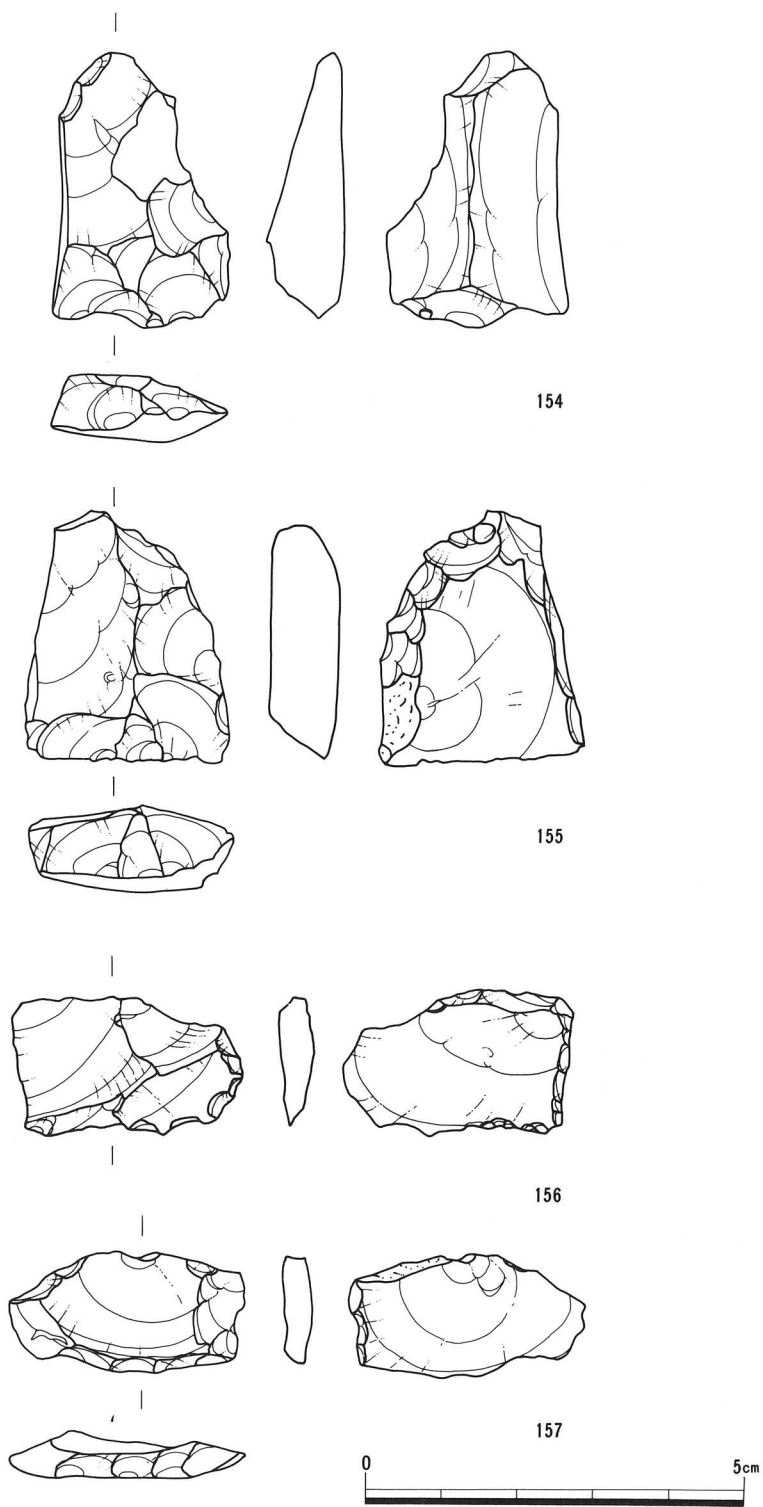
第33图 A地点出土旧石器实测图



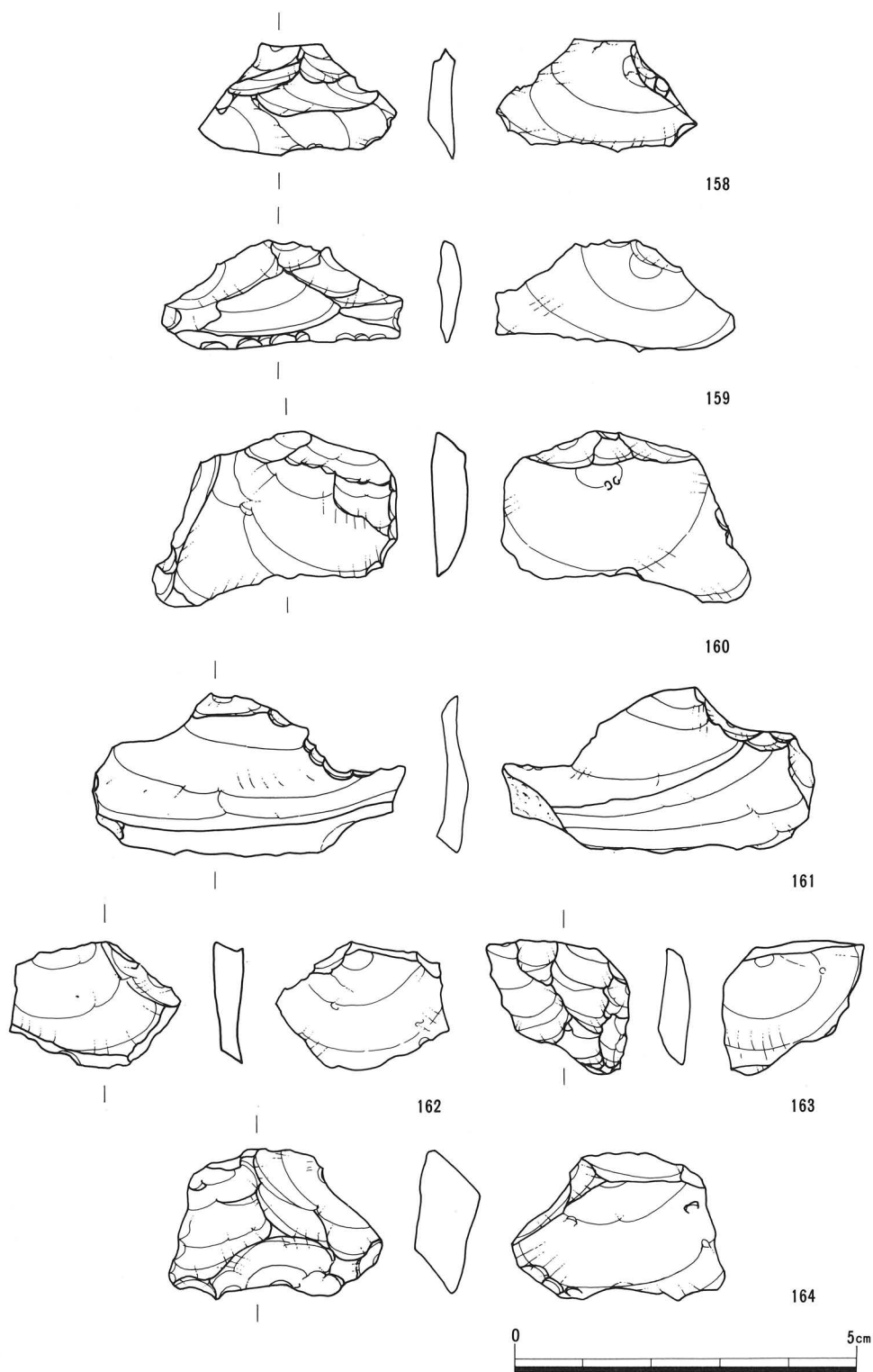
第34图 A地点出土旧石器实测图



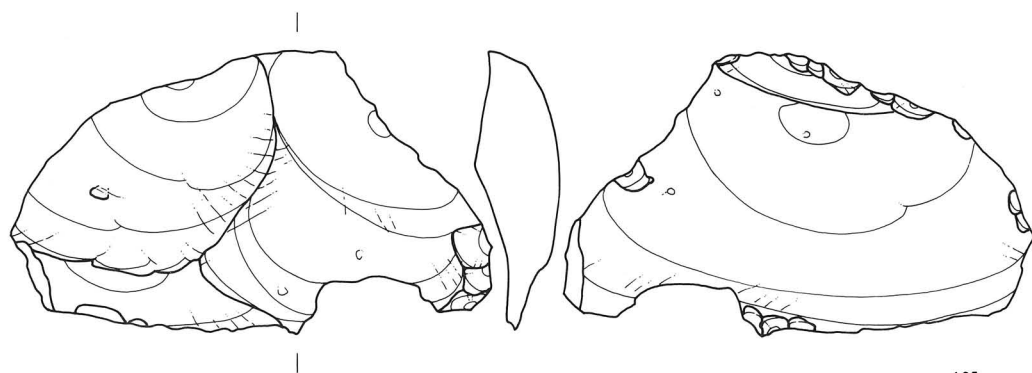
第35图 A地点出土旧石器实测图



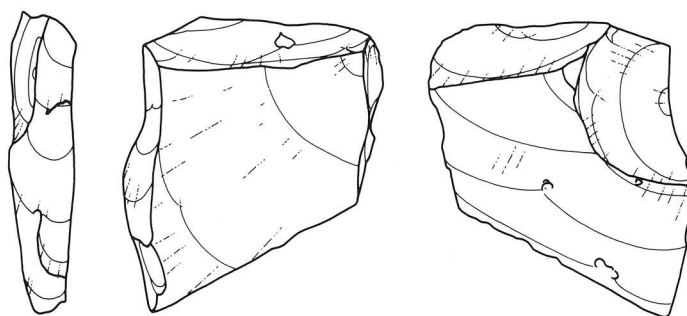
第36图 A地点出土旧石器实测图



第37图 A地点出土旧石器实测图



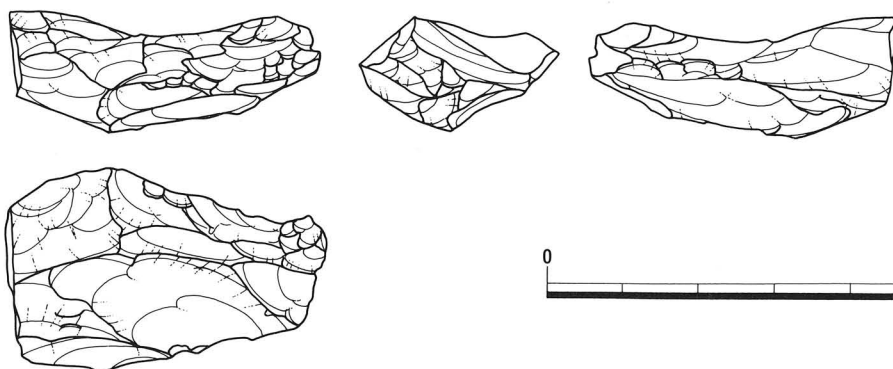
165



166



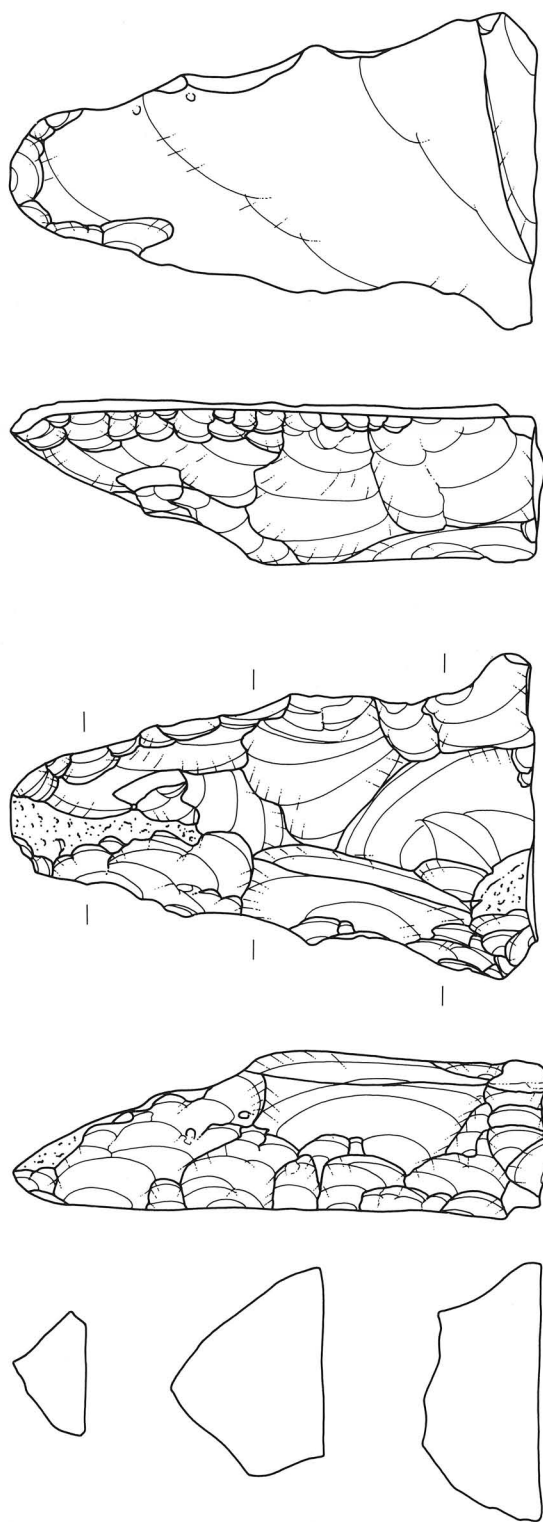
167



168



第38图 A地点出土旧石器实测图



第39图 A地点出土旧石器实测图

な剥離面2枚とポジティブな面1枚によって構成される大型の剥片である。166～168はいずれも横長剥片石核と考えられるものである。166は腹面側に、167では腹面と背面の両方にそれぞれ剥片を剥離した痕が残されている。168は複数の剥離面によって構成される打面から背面側に向かって剥離作業が行われている。169は大型の角錐状石器である。背面に自然面を残す大型の剥片を素材とし、側縁部に腹面から背面に向けて調整を加え形状を整えている。また、腹面の先端にも簡単な調整がおこなわれている。

B 地点出土遺物（第40～45図）

A 地点同様、埋没谷状地形の堆積の中からナイフ形石器を中心とする石器が出土している。170～174は翼状剥片を素材とするナイフ形石器である。170～172は調整が片側縁のみに施されているが、173には簡単な調整が刃縁部側にも加えられている。174は非常に大型のナイフ形石器で、上半部を欠失するがそれでも残存部の長さは6 cmある。残された下半部の側縁と刃部には全て調整加工が施されているが、刃縁部側の調整の範囲は欠損しているため不明である。175のナイフ形石器の背面には複数のネガティブな剥離面と1枚のポジティブな剥離面が残され、片側縁に腹面からの調整が施されている。176～181は横長剥片を素材として用いたものであるが、176・177は背面が1枚のポジティブな剥離面によって構成される横長剥片を素材としており、145・146の資料同様、ネガティブな剥離面が調整によって除去された翼状剥片の可能性もある。176は刃縁部側の中央部から開始された調整によって先端部が円く仕上げられている。177も刃縁側に調整が加えられているが基部近くで調整の加えられる方向が逆になっている。178・179は背面が複数のネガティブな剥離痕で構成され、両側縁の調整がほぼ全体に及ぶもので、179は177同様、基部付近で調整が逆に加えられている。180は背面が1枚のネガティブな剥離面で構成される横長剥片を用いるナイフ形石器または削器と考えられるもので、片側縁には腹面から、刃縁部側の一部には背面側からの簡単な調整痕が認められる。181はナイフ形石器の身部中央付近の破片で、横長剥片を素材とし、背面には方向の異なるネガティブな剥離面が残され、両側縁には調整が認められる。182～187は削器または搔器と考えられる石器である。182は打面調整の際に生じたと考えられる大型の剥片を用いたもので、側縁部にはネガティブな剥離面が残され、その上に簡単な調整が施されている。183は大型の横長剥片の縁辺部に腹面から背面に向けての調整を加えて刃部を作出したもので、部分的にノッチ状の抉が施される。184はチャート製の縦長剥片の片方の側縁に簡単な調整を加え刃部としたもので、打面は未調整の自然面をそのまま使用し側面には縦長剥片を剥ぎ取った複数のネガティブな剥離面が残されている。185は打瘤を除去した小型の厚い横長剥片に簡単な調整が加えられている。186は横長剥片石核に粗い調整を加え削器としてのもので、3枚のネガティブな剥離面によって構成される腹面から、背面にむかって横長剥片を剥ぎ取った痕

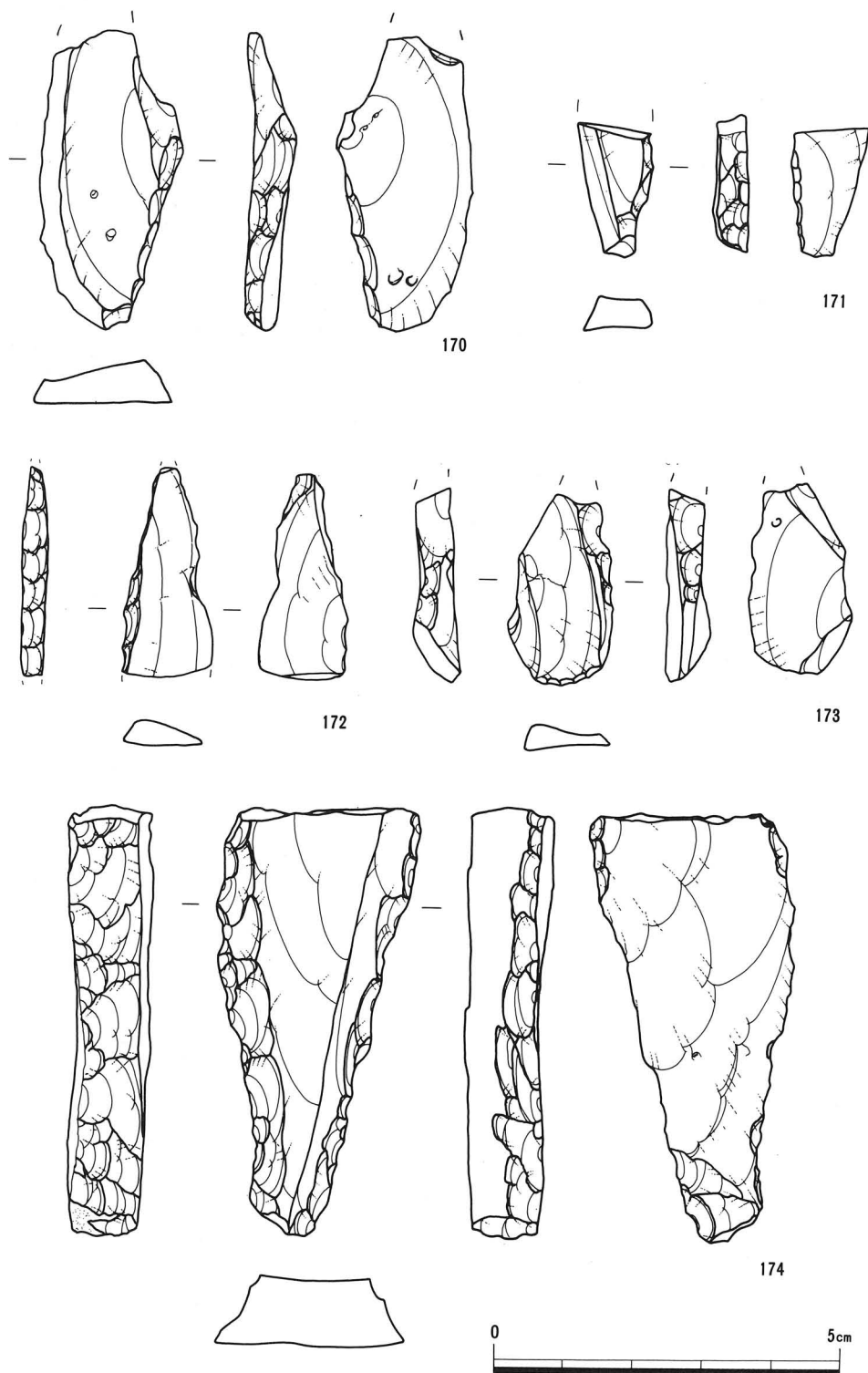
跡が残されている。187は背面と腹面にそれぞれ1枚のネガティブな剥離面とポジティブな剥離面が残された大型の盤状の剥片の縁辺部に、腹面から背面にむかって粗い調整を加えて鋸歯状の刃部を作出し搔器としたものである。188・189はともに楔形石器に属するもので、189はチャート製の小型の製品である。190～195は横長剥片、196・197は縦長剥片で、いずれも背面はほぼ同一方向からの加撃によって生じた複数のネガティブな剥離面によって構成されている。198～200は調整剥片で、背面に残された複数の剥離面の加撃の方向は一定していない。201は横長剥片石核で、素材に背面の一部に自然面を残す厚い剥片を用い、剥片の剥離作業は全て腹面側から背面に向かって行なわれている。用いられた素材の形状や石器の形態は角錐状石器に類似している。

C地点出土遺物（第46～48図）

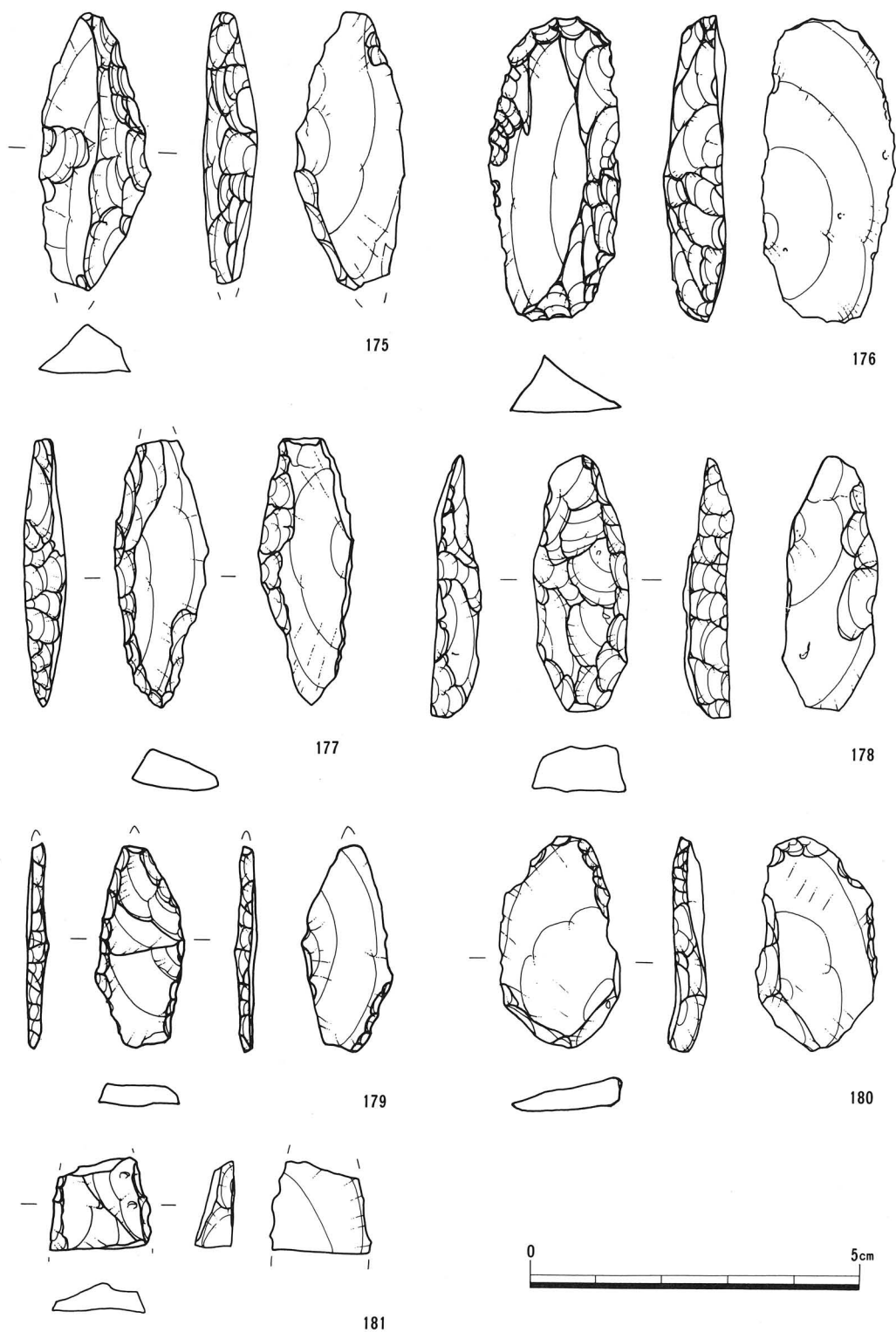
牛屋谷に沿って南に張り出す段丘崖上に堆積した砂礫層中から出土したもので、3地点のうち最も土層が不安定で礫層中には何枚かの流れの痕跡が認められた。石器の出土は3地点のうち最も少なく、ナイフ形石器も1点しか出土していない。

202のナイフは翼状剥片を素材とするもので、基部を欠失しているが現存する部分だけで長さが6 cmある大形のものである。調整は片側縁のみに認められる。203～206は削器または搔器に属する石器である。203は背面に複数のネガティブな剥離面を残す調整剥片と考えられる素材の2側縁の一方には背面から、もう一方には腹面から調整が加えられている。208は151や153同様、打面を除去した厚みのある剥片の縁辺部に調整を加えて削器または搔器に加工したものである。205は背面がネガティブな剥離面と自然面を残す厚みのある偏平な剥片の一侧縁に調整を加えたものである。206は背面に自然面を大きく残した剥片の腹面に何回か加撃を加えて打点を除去した後、側縁部に腹面から背面に向けて粗い調整を加えて刃部を作出している。207～213の剥片のうち、翼状剥片と考えられるものは207だけで、他は縦長剥片や調整剥片などがそれぞれ数片ずつ出土しているだけである。

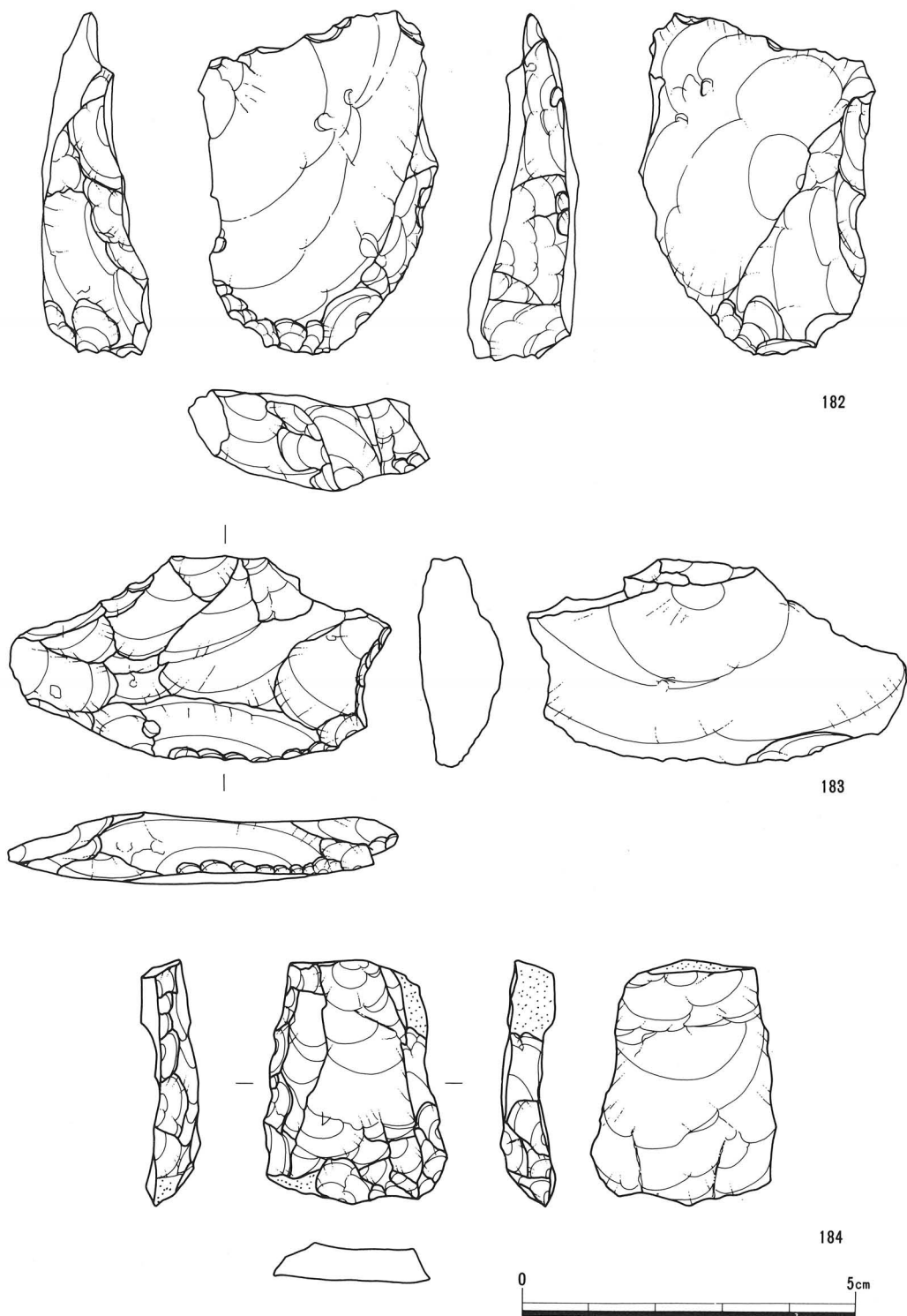
この他に、調査区に隣接する地域から調査中に何点かの遺物が採集されているので合わせて報告することとする（第47図）。3点採集されたナイフ形石器のうち、214は翼状剥片を素材とするナイフ形石器で上半部を欠失する。調整は片側縁のみに施されている。215・216は共に小形の横長剥片を用いたもので、調整は215が片側縁だけであるのに対して、216は刃縁部側の基部と先端部にも加えられる。217は細長い横長剥片石核の残核と考えられるものの側縁部に簡単な調整を加えて石器としたものである。218は背面が自然面と複数のネガティブな剥離面で構成される剥片の周辺に、腹面方向からの調整を加えて削器としたものであるが、他の削器に度々認められる打瘤の除去は行われていない。



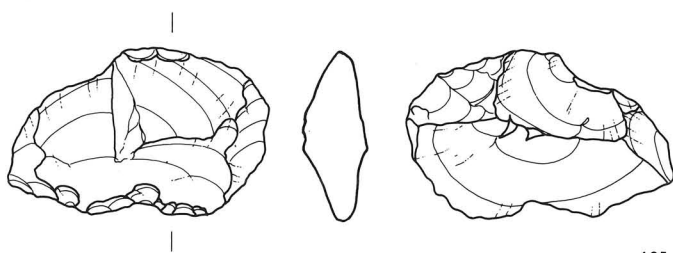
第40图 B地点出土旧石器实测图



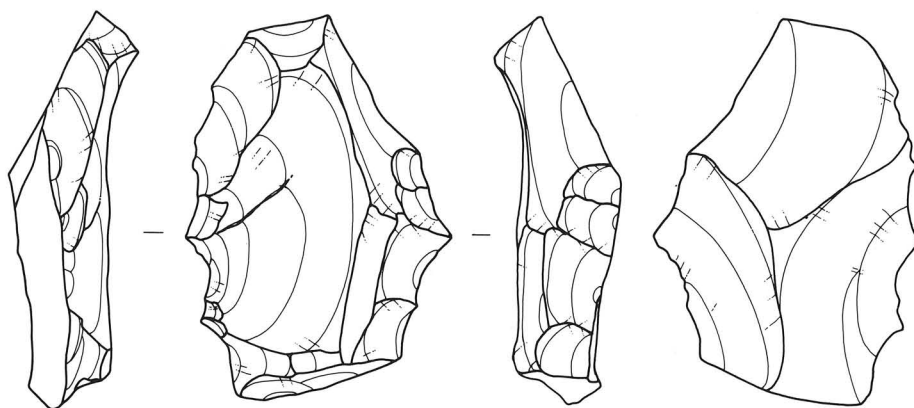
第41图 B地点出土旧石器实测图



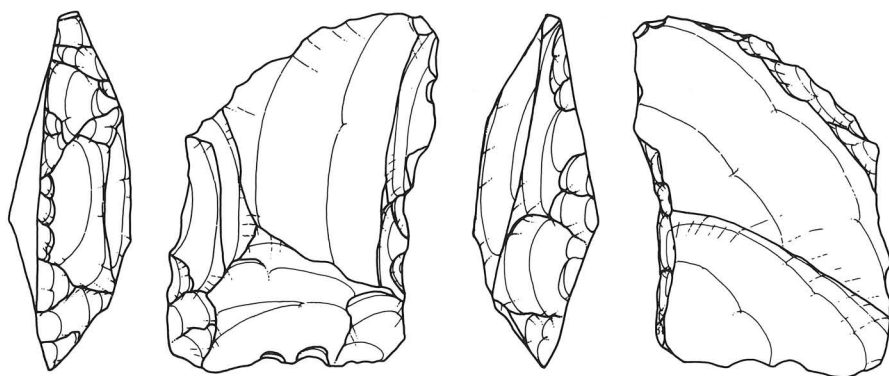
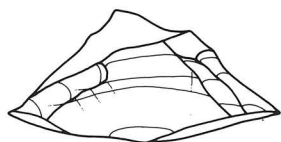
第42图 B地点出土旧石器实测图



185



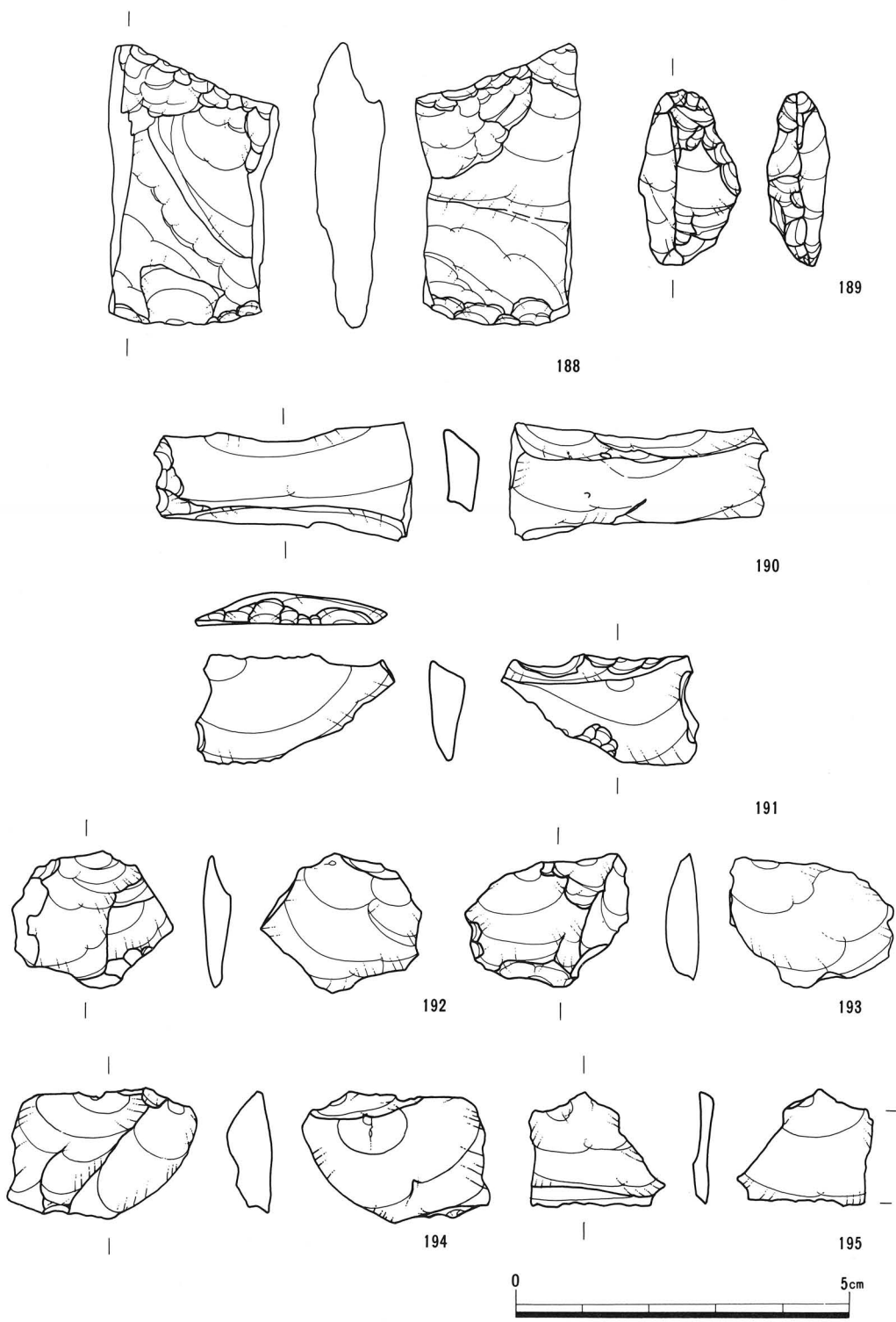
186



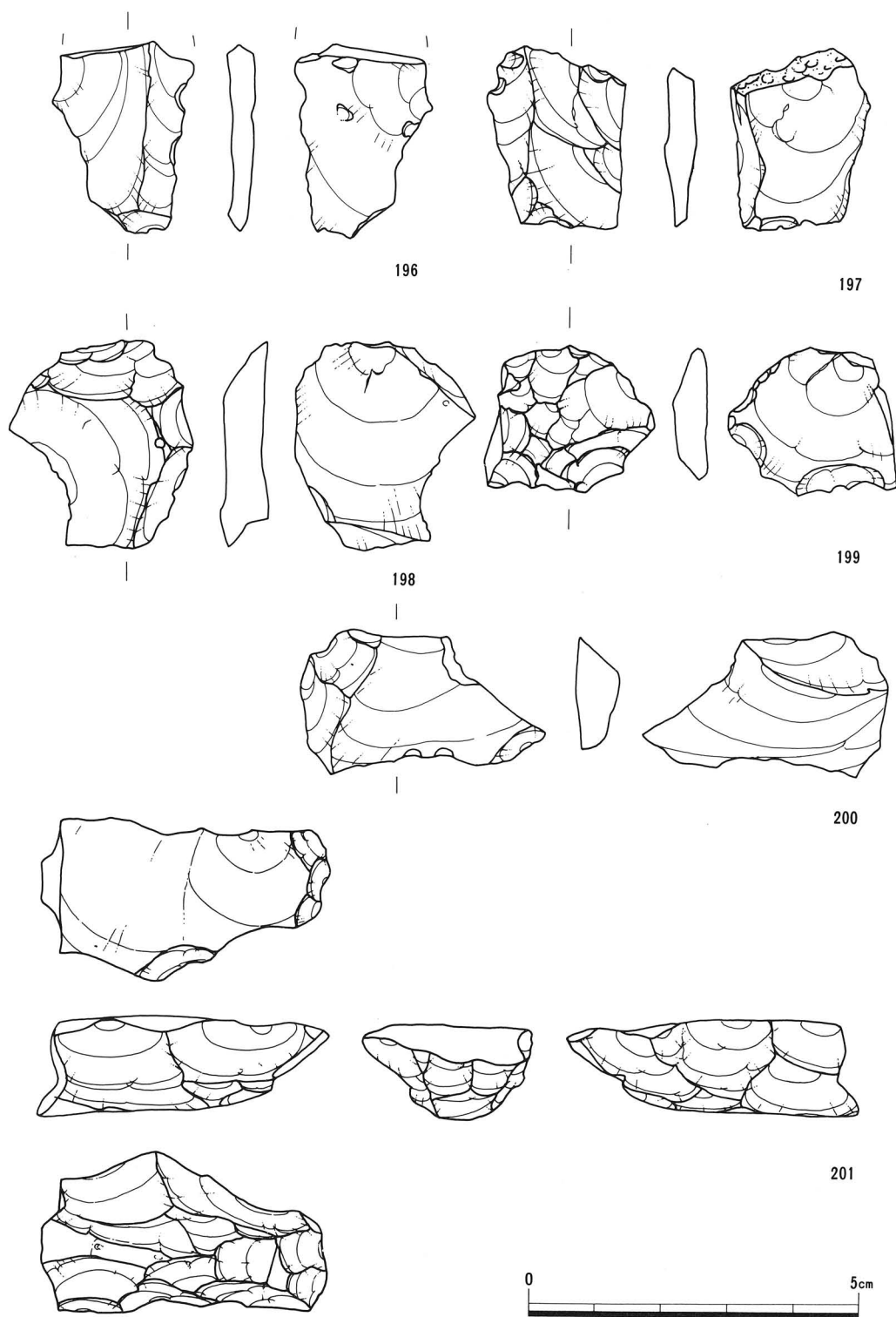
187



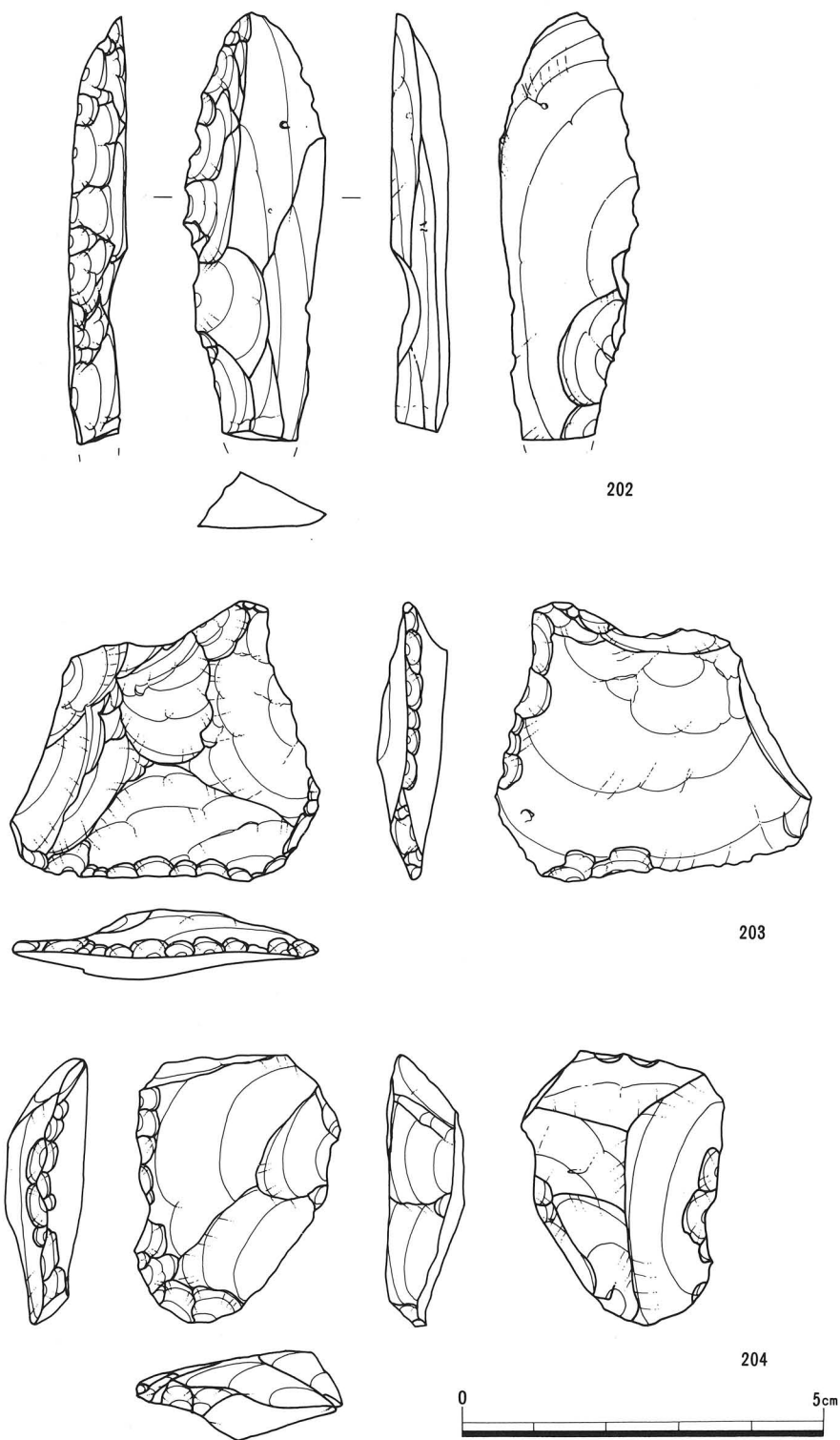
第43图 B地点出土旧石器实测图



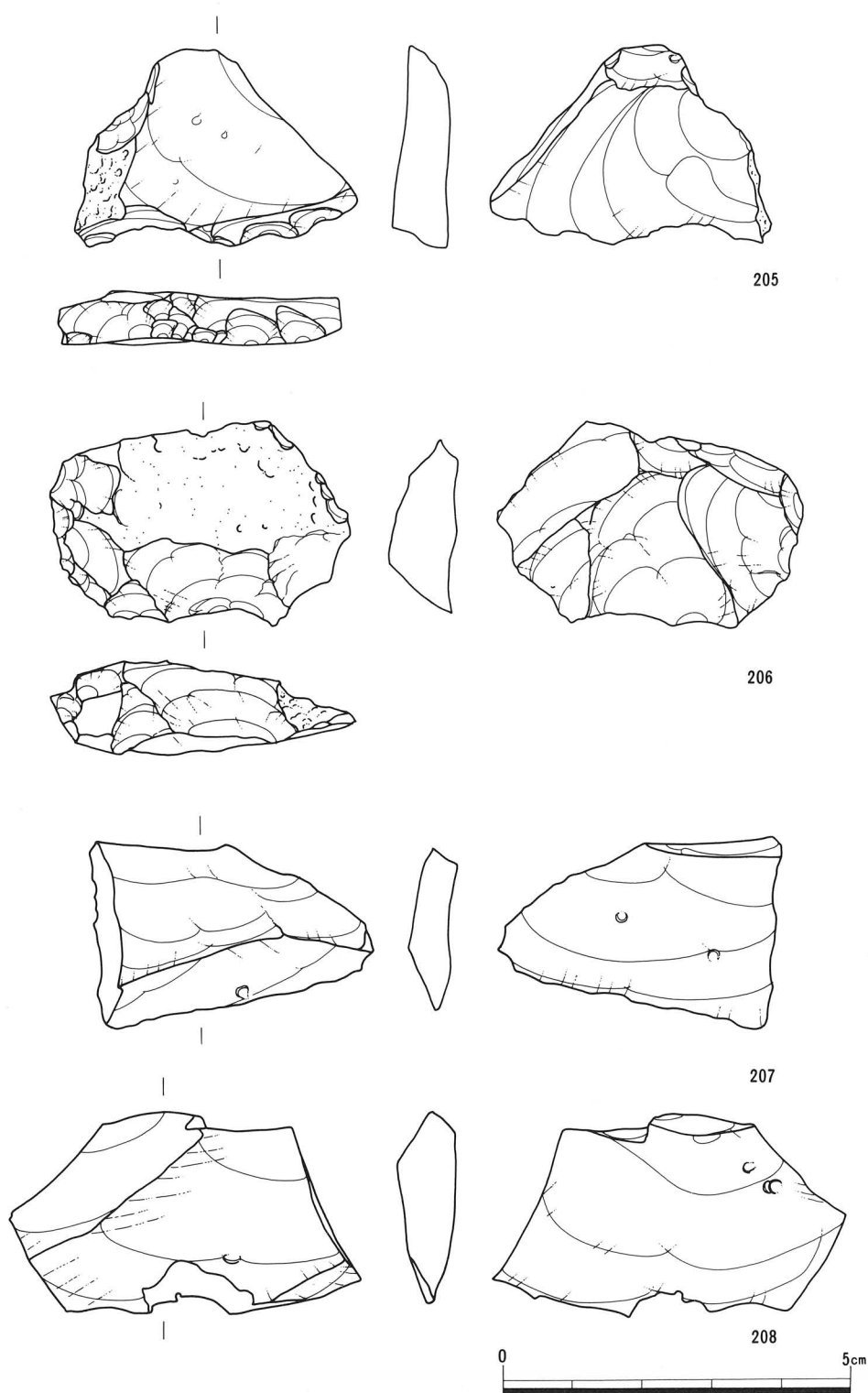
第44图 B地点出土旧石器实测图



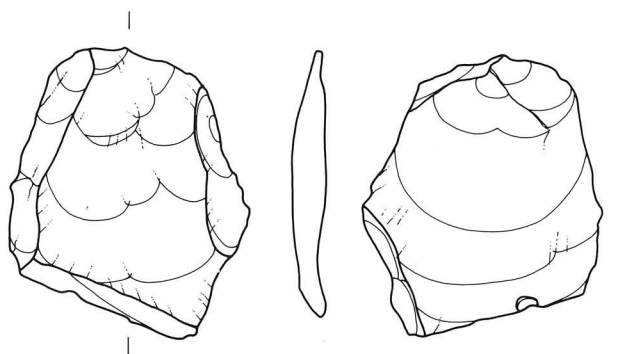
第45图 B地点出土旧石器实测图



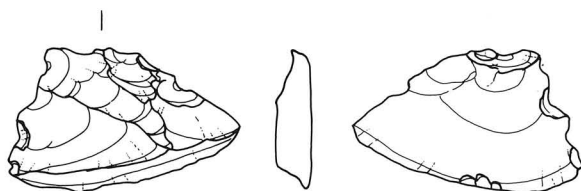
第46图 C地点出土旧石器实测图



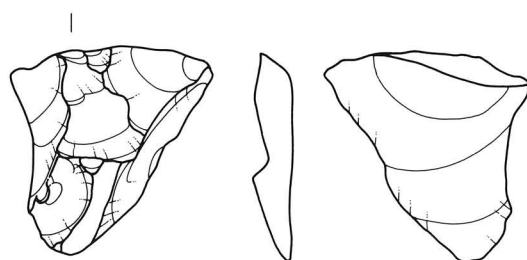
第47图 C地点出土旧石器实测图



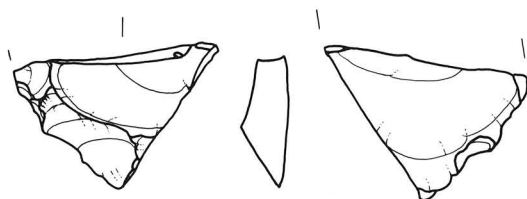
209



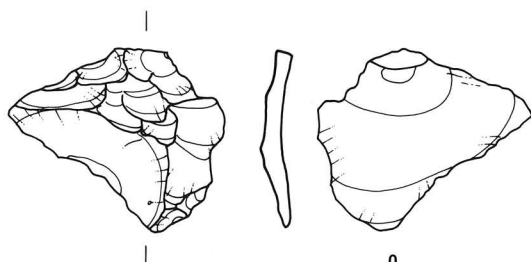
210



211



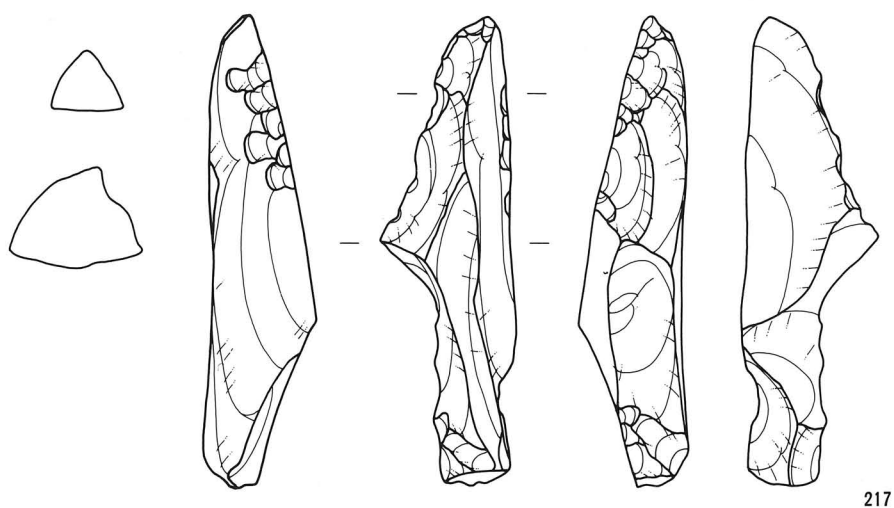
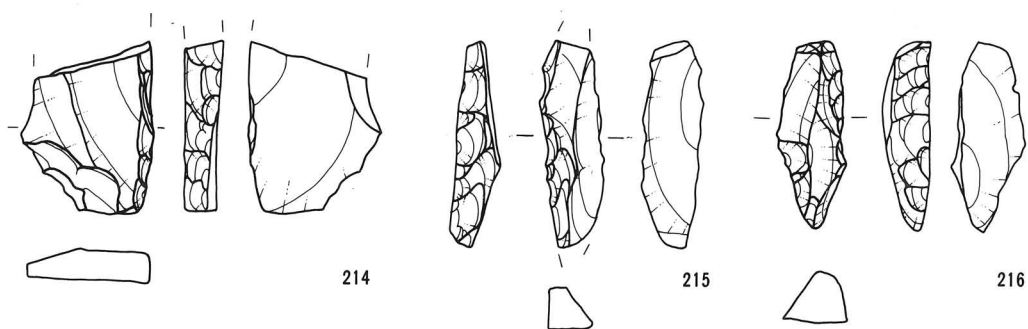
212



213



第48图 C地点出土旧石器实测图



第49図 表面採集遺物

芝生地区

検出された遺構と遺物

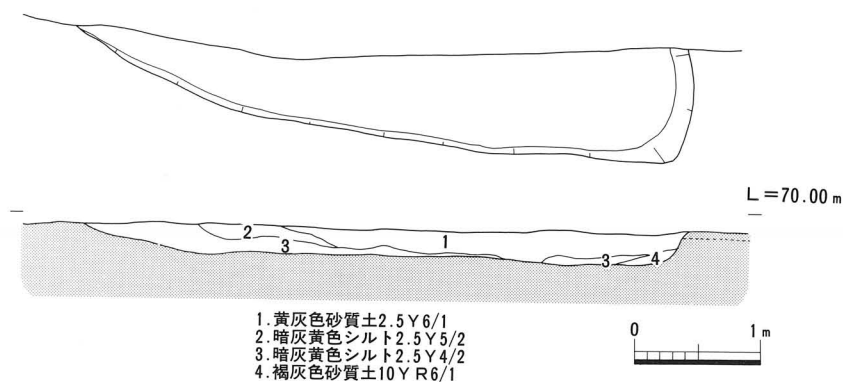
自然流路（S R 1001）

水田土壌下の灰色の粘土質シルト層上面で検出された幅約 1 m の規模の流路で埋土は砂混じりの大小の砂岩の礫によって構成されている。出土した遺物は弥生土器とサヌカイト製の石鏃が 1 点ずつ出土しているだけである。周囲には同じ時期の遺物が出土していないことから、上流からの流れ込みの可能性が強い。また、この自然流路と遺構検出面の上に堆積している暗灰色土層からは、中世の遺物が小片ではあるが出土しているが、流路内の堆積の中には全く混じっていないことから、この流路が機能していた時期はほぼ弥生時代に限定されるものと思われる。

炭窯（S O 1001）（第50図）

S R 1001 同様、灰色の粘土質シルト上面で検出された遺構で一部未発掘な部分があるために正確な規模は不明であるが、長さ 5 m ・ 幅 1 m 以上の大きさはあると考えられる遺構である。遺構内から遺物は全く検出されなかったため、正確な年代は不明であるが、遺構上に堆積した暗灰色土層からは、若干の瓦器と須恵質土器、それに土師器の小片が出土している。須恵質土器と土師器については年代は不明だが、瓦器碗は小片ながら 13 世紀末から 14 世紀代前半のものと考えられるものであることから少なくともそれと同時期か若干遡る時期の遺構

と思われる。このような炭窯は土成町の金蔵～上井遺跡や市場町日吉～金清遺跡で平安～鎌倉時代の遺物を伴った遺構が検出されていることから、鎌倉時代という年代も矛盾するものではないと考えられる。



第50図 S O 1001実測図

(3) 考 察

弥生時代の遺物について

今回の調査で出土した弥生土器は、壺・高杯・甕を中心とするが、何れも細片の状態のものが多く、出土点数も少なく、遺構から出土したものに関しても覆土中からの出土が殆どで、床面から検出されたものはごく稀である。また包含層出土遺物も遺構出土の土器と同様、細片ばかりで全形の伺えるものは全く出土していない。出土した壺は一般に広口壺とされる口径15～20cm内外の中型のものが中心で、口縁端部が上方或いは上下に拡張され凹線文が施されたものが最も多く、なかには円形浮文が施されたもの（5・98・99）や櫛描波状文（52）も認められる。また口縁端部が垂下する例（5）も若干ではあるが認められる。これらは紫雲出山遺跡出土の壺2類に比定される畿内第Ⅳ様式並行段階のものと考えられるが、101や102のように凹線文B種が多段に施される可能性のあるものは、岡山県の雄町第5類あるいは仁伍式とされるものに類似するものが存在する。直口壺は紫雲出山で壺C2またはC3に分類される凹線文B種が口頸部に多条に施されるもの（53・54・86）と、同じく筒状の口縁に浅い凹線が2条めぐらされただけのもの（7）が出土している。高杯は杯部が屈曲してほぼ垂直に立ち上がり屈曲部に明瞭な稜線を持つものが殆どを占めているが、一部には碗形の形態のもの（10）や水平口縁のもの（55）も認められる。屈曲部に明瞭な稜線を持って立ち上がる高杯は、口縁端部を内外に拡張して平坦な面を作り出す特徴とともに（8・9・56・88・89・106）瀬戸内東部の岡山県ではⅣ－2段階に顕著な存在である。また、杯部が屈曲する形態のもので口縁端部の外方への拡張が著しいもの（90）は、口縁部が屈曲部から斜め外上方にのびるもの（87・91）とともにより後期的な土器で、北原遺跡や前田遺跡から同様の形態のものが出土している。55の水平口縁のものは北原遺跡・光勝院遺跡で高杯Bとされたものである。高杯の脚部は脚端部を上方に拡張する紫雲出山遺跡で高杯脚台2に分類される形態のものと、そのまま直線的に終わるものの2つの形態に分けられるが、端部を拡張するタイプのもものは裾部に並行沈線や格子目文・三角形の透かしが施されたものが多く、57のように脚柱部に施される螺旋状の平行線文とともに、紫雲出山遺跡のものに類似する。このような加飾性の強いものは光勝院寺内遺跡でも多く出土しているが、隣接する前田遺跡や北原遺跡などからはまったく出土していない。水差し形土器（105）も北原遺跡で出土例があるが胴部が長くのびる形態のもので、105のような下部が算盤玉形に張る形態のものと異なっている。甕については口縁部のみの破片が多く、胴部以下の器面調整が判読できる例は少ないが、口縁端部の断面が方形または上方に拡張する例では胴部内面のヘラ削りが頸部との境まで及ぶものが殆どであるのに対して、口縁端部を上下に拡張する例では胴部内面

上半部の調整は指頭圧痕とハケ目調整による例が認められる。これは叩き目の施される例が少ないこととともに隣接する北原・前田両遺跡と同じ傾向である(3)。

本遺跡の弥生土器は、零細な資料ながら上述したような特徴からおおむね中期後半の畿内第Ⅳ様式並行から後期初頭にかけての時期に位置づけられるものと思われる。なかでも S B 1001・1003の住居址や土壌 S K 1003から出土した三角形の透かしやヘラ先による刺突文・格子目文などの加飾性の強い脚端部をもつ高杯と、口縁部に凹線文を多段に施した直口壺は、紫雲出山遺跡で中期 2 または中期 3 とされる畿内Ⅳ様式でも前半の段階のものに対比できるものと思われる。零細なうえに遺構覆土中という出土状況の遺物から、この 2 つの住居址の時期をⅣ様式でも前半の段階のものとするのが許されるならば、隣接する前田遺跡や北原遺跡など宮川内谷川右川の段丘面から扇状地にかけて展開する弥生遺跡のなかでは時期的には早い段階のものと考えられる。

旧石器時代の遺物について

今回の調査で出土したナイフ形石器を素材となった剥片と調整方法から一応の分類を試みると、①背面が 2 枚のポジティブな剥離面によって構成され、調整が片側縁の他刃縁部側の一部にもほどこされるもの (137)、②背面がそれぞれ 1 枚のポジティブな剥離面とネガティブな剥離面によって構成され、調整が片側縁部のみに加えられるもの (139・170・171)、③背面が 1 枚のポジティブな剥離面とネガティブな剥離面で構成され、調整は片側縁と刃縁の一部に加えられるもの (138・173・174・202・214)、④背面が 1 枚のポジティブな面によって構成され、調整は片側縁と刃縁部の一部に加えられるもの (176・177)、⑤背面が 1 枚のポジティブな剥離面と複数のネガティブな剥離面で構成され、調整は片側縁のみに認められるもの (140～144・175)、⑥背面が 1 枚のネガティブな剥離面のみにより構成され、調整は片側縁のみに施されるもの (145・172)、⑦背面が 1 枚のネガティブな面によって構成され、調整は片側縁に背面側と腹面の両面から加えられるもの (146)、⑧背面が複数のネガティブな剥離面で構成され、側縁の調整が全体に及ぶもの (178・179)、⑨背面の一部に自然面を残し調整が周縁部全体に施されたもの (147) に分けることができる。椎ヶ丸出土の旧石器については、既に天羽利夫氏と高橋正則氏の論考がある。特に高橋氏は川井豊吉氏採集の 73 点のナイフ形石器について、使用された剥片をⅠ類からⅥ類に分類し、これに a・b・c に分類した調整方法をくわえてナイフ形石器の分類を行っている。このなかで、最も出土数の多いⅠ a 類を瀬戸内技法により作出されたナイフ形石器(いわゆる国府型)とし、Ⅰ a 1～a 7 類も基本的にはⅠ a に属し、採集されたナイフ形石器の過半数にのぼるものとしている(4)。今回の調査で出土したナイフ形石器で、このⅠ a 類またはⅠ a 1～a 7 類に属すると考

えられるものは②と③に該当し点数は8点と最も多い。また、①のような前回の資料中には認められなかった背面が2枚のポジティブな剥離によって構成される剥片も出土しているが、これは瀬戸内技法に伴うファーストフレイクと考えられることからⅠa類と同じ国府型ナイフに含めてよいと考えられる。この他の内訳は高橋氏分類のⅡa1・a3類が④の2点、Ⅲa類が⑤の6点、Ⅳ類が⑥の3点、Ⅳb類が⑦の1点、Ⅴ類に属するものが⑧の2点、Ⅵa1類が⑨の1点となっている。今回の資料も高橋氏の報告同様に国府型に属するとされたⅠa類とⅠa1～a7類をあわせたものが最も多いことは変わらないが、前回よりⅢa類の比率が高くなっていることが注目される。このうちⅡ類は瀬戸内技法と関連付けられる可能性があると考えられる剥片であるが、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類については瀬戸内技法から作出される翼状剥片と区別され、国府型ナイフの範中から除外されているものである。前回の報告では全体の25パーセントであったが、今回は表採資料をふくめて報告したナイフ形石器の総数28点中13点と45パーセントをこえる高い比率をしめしている。高橋氏はこれら非瀬戸内技法の剥片のうちⅢ・Ⅵ類については横長の剥片を剥ぎ取ることを目的とした石核から剥ぎ取られたものと考えている。今回の資料中の166や167・168・201・217などがこれに該当するものと考えられるが、168・201・217のように分厚い剥片の側縁部のほぼ全体に剥離作業が行われる例と、166・167のように側縁の一部に2～3回剥離作業を行っただけのものに分けられる。また、削器とした186や206も前者の石核に含まれるか、これを転用したものである可能性がある。Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ類は前回の報告では段丘面中央部の第1地点でのみ検出されるとされているが、今回の調査区は高橋氏のいう第2地点あるいは第4地点に近い位置にあると考えられ、段丘面全体にこのような非瀬戸内技法的な剥片が分布している可能性が高いことを示している。これ以外に前回の資料と比較して出土点数が大幅に増加したものに削器・搔器類がある。前回は5点しか報告されなかったが今回は20点出土している。いずれの場合も分厚い剥片が素材として用いられ、151や206・218のように一部に自然面を残す例もある。剥片の側縁部に簡単な調整を加えて削器または搔器としたものは少なく、多くの場合、背面と腹面はともに複数の剥離面で構成され打点は除去されている。また、作出される刃部は直線的な形状に仕上げられるものは少なく、搔器か削器か区別できないものが多い。この中で技法的に注目されるのは187で、素材に分厚い剥片を分割したものを用いているが同様のものは阿波町日吉谷遺跡の国府期の資料の中にも認められる。

4 まとめ

今回、調査が実施された2地区のうち、椎ヶ丸地区は県下最大の旧石器散布地として知られている遺跡である。ただ今回の調査では調査区が遺跡縁辺部の段丘崖線上に設定されたため、調査前から旧石器についてはその成果を疑問視する考えがあった。調査の結果は旧石器の遺物自体の出土はかなり多かったものの、予想どおり斜面の不安定な堆積状況下での出土で、出土状況をもとにした新たな見解を導くことはできずこれまでの表面採集資料に基づく分析結果を追認するにとどまる結果となった。いっぽう、弥生時代については、これまでその存在が予測されていただけで具体的な遺物や遺構の確認が行われていなかっただけに、悪条件であったとはいえ、住居跡をはじめとする遺構の検出や弥生中期後半から後期初頭にかけてというある程度の時期決定ができたことは一定の成果であると考えられる。特にその時期に関しては、段丘下の扇状地上に展開する前田遺跡とともに畿内第Ⅳ様式並行でも古い段階のものが含まれていることは注目される。考察の中で述べたように2つの住居跡・S B 1001と1003が畿内第Ⅳ様式でも前半に位置づけられる時期のものであることが認められるならば、宮川内川右岸の弥生中期の扇状地への進出が沖積地や扇状地の扇端部などから扇状地の扇央部、扇頂部というように上へ上へと順次行われていったのではなく、段丘面、扇状地という地理的条件を問わず、ある一時期に一気に進行したことが考えられる。今後の周辺部の調査の進展がまたれるところである。

註

- (1) 打製石鏃の名称は小林行雄 佐原真也『紫雲出』詫間町文化財保護委員会 1964年中の呼称方法にのっとる。
- (2) 剥片の分類方法については柳田俊雄「ナイフ形石器にみられる剥片生産技術」『旧石器考古学』21 1980年及び高橋正則「徳島県土成町椎ヶ丸遺跡の旧石器」『旧石器考古学』27 1983年中の分類方法に則った。
- (3) 前田遺跡の詳細については『土成前田遺跡』徳島県教育委員会 1989年及び『土成前田遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告第2集 1993年を、また、北原遺跡については『土成町北原遺跡』徳島県教育委員会 1988年及び本報告書所収の『北原～大法寺遺跡』を参照。
- (4) 椎ヶ丸遺跡出土のナイフ形石器の分類の詳細については高橋正則「徳島県土成町椎ヶ丸遺跡の旧石器」『旧石器考古学』27 1983年中の分類を参照

参考文献

- 小林行雄 佐原真他『紫雲出』詫間町文化財保護委員会 1964年
- 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化』3 雄山閣1976年
- 徳島県教育委員会「椎ヶ丸遺跡」『徳島県文化財調査概報』 1978年
- 柳田俊雄「ナイフ形石器にみられる剥片生産技術」『旧石器考古学』21 旧石器文化談話会1980年
- 高橋護「入門講座弥生土器－山陽1、2」『考古学ジャーナル』173、175 1980年
- 高橋正則「徳島県土成町椎ヶ丸遺跡の旧石器」『旧石器考古学』27 旧石器文化談話会 1983年
- 菅原康夫 高橋正則『光勝院羅内遺跡』徳島県教育委員会 1984年
- 真鍋昌宏『矢ノ塚遺跡－四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』第三冊 香川県文化財保護協会 1987年
- 林慎二 谷匡人『土成町北原遺跡－内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』徳島県教育委員会 1988年
- 福家清司他『土成前田遺跡－県道舟戸切幡上板線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県教育委員会 1989年
- 正岡睦夫 松本岩雄編「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」 木耳社1992年

第1表 椎ケ丸～芝生遺跡遺構一覧表

遺構名	出土地点	規模 (cm)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S B 1001	D・E-10. 11	525	460	55	弥生土器片・磨製石斧 石鏃 打製石廬丁	
S B 1002	F-19. 20	400	335	20	弥生土器片	
S B 1003	B・C-7. 8	516	450	50	弥生土器片 石鏃	
S K 1001	D-14	98	60	70	弥生土器片	
S K 1002	D-14	139	120	60	弥生土器片 打製石廬丁	
S K 1003	B・C-8	206	132	40	弥生土器片 鉄鏃	
S X 1001	E-7	168	80	6	弥生土器片	
S O 1001	G-2. 3	504	94	25	無	

第2表 椎ケ丸～芝生遺跡出土一覧表 S B 1001 出土土器

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
1	広口壺	口径 14.5	口縁部は外方に大きく開く。端部は上下に拡張され4条の凹線が巡らされる。	口縁部は内外面とも横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	
2	広口壺	口径 16	口縁部は頸部からゆるやかに外反する。口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条巡らされる。	口縁部は内外面とも横ナデ。	橙色	砂粒を若干含む。	
3	広口壺	口径 15.5	口縁部は頸部から外方に大きく開く。口縁端部は上方にのみ拡張され凹線が2条巡らされる。	口縁部は内外面とも横ナデ。	明赤褐色	砂礫を若干含む。	
4	広口壺	口径 18.8	口縁はななめ外上方に大きく開く。口縁端部は上方にのみ弱く拡張され凹線が1条巡らされる。	口縁部外面は横ナデが施こされるが頸部近くではハケ目調整が加えられる内面は横ナデ。	橙色	砂粒を若干含む。	
5	広口壺	口径 18	口縁部はいったんななめ外上方にのびた後大きく下に垂下する。垂下してできた幅広い端部には凹線と円形浮文が施される。	内面は横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	
6	壺		頸部は胴部との境でいったんすばまった後、ななめ外上方にむかってゆるやかに外反する。	外面は頸部から胴部上半にかけてハケ目調整、内面は頸部が指頭によるナデ。胴部は下半にヘラ削りが認められる。	外面はにぶい橙色 内面は赤褐色	砂粒を多く含む。	
7	直口壺	口径 8.5	上方にむかってゆるやかに開く筒状の頸部にやや尖り気味の口縁がつく。口縁部には二条の浅い凹線が巡らされる。	口縁部は内外面とも横ナデ 頸部外面はハケ目調整、内面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色	礫を若干含む。	
8	高坏	口径20	口縁部は屈曲部に稜を持ち直立気味に立ち上がる。口縁端部は内外に拡張されて平坦部を作る。	内外面とも強い横ナデが施こされる。	明赤褐色	砂粒を多く含む。	
9	高坏	口径26	口縁部は屈曲部に弱い稜を持って立ち上がる。口縁端部は平坦。口縁部には4条の凹線を巡らせる。	内面は横ナデの後ヘラ磨きが施こされる。	橙色	少量の砂粒を含む。	
10	高坏	口径 12.5	ゆるやかに内湾しながらななめ外上方にのびる椀形の坏部を持つ。口縁部外面には浅い凹線が巡らされている。	内面は口縁端部近くは横ナデ。	浅橙色	少量の砂粒を含む。	

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
11	高坏	底径 9.5	脚端部は脚柱から直線的に外下方にのびる。脚端部は拡張されず尖り気味に収められ凹線が3条巡らされる。	脚部外面はへら磨き内面はへらケズリ。端部近くは横ナデが施こされる。	にぶい 橙色	砂粒を多量に混入する。	
12	高坏	底径 13.2	ゆるやかに外下方に開く脚台端部は上方に拡張され、端部との境には沈線とへら先による縦の刺突が施こされる。	脚部内面は横位のへら削り。	明赤褐色	砂粒を多量に含む。	
13	高坏	径 10.5	ゆるやかに外下方に開く脚台端部は上方に拡張され、2条の凹線が巡らされる他、裾部には三角形の透しが入れられる。	脚部外面はへらミガキとナデ調整、内面はへら削り。	橙色	砂礫を含む。	
14	高坏	底径11	内弯気味に外下方に開く脚台端部は上方に拡張され、凹線が2条巡らされる。	脚部内面はへら削り。	にぶい 橙色	砂礫を多く含む。	
15	高坏	底径 18.0	外下方にむかって大きく開く脚台端部は上方に拡張される。裾部には沈線による格子目文が帯状に巡らされる。	脚端部はナデ調整、内面はへら削り。	明赤褐色	砂礫を多く含む。	
16	甕	口径 22	口縁は頸部からななめ外上方に直線的にのびる。口縁端部は若干上方に拡張され凹線が1条巡らされている。	口縁部から頸部にかけて、内外面とも横ナデ	橙色	砂粒を若干含む。	
17	甕	口径 13.5	口縁部は頸部からいったん外上方にくの字形に外反した後上方にむかって短く立ち上がる。	口縁部は内外面とも横ナデ。頸部から胴部外面にかけてはへら磨き。頸部内面から胴部上半にかけては指頭によるナデ調整。	にぶい 赤褐色	砂礫を多く含む。	
18	甕	口径 27	くの字形に屈曲する頸部からななめ外上方に直線的にのびる口縁の端部は上方にのみ拡張される。	口頸部は内外面とも横ナデ。胴部内面は頸部との境までへら削り。	橙色		
19	甕	口径 12.5	口縁部は頸部からななめ外上方に短くのびる。口縁端部は上方にのみ拡張される。胴部は上半で大きく肩が張る。	口縁部から頸部にかけては内外面ともに横ナデ。	橙色		
20	甕	口径15	くの字形に外反する頸部から、ななめ外上方に直線的にのびる口縁の端部は上方に拡張される。	口頸部は内外面とも横ナデ。胴部内面は頸部の境までへら削り。	橙色		焼成不良。
21	甕	口径14	くの字形に外反する頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は上下に拡張される。	口縁から頸部にかけては内外面とも横ナデ。胴部内面は頸部との境までへら削り。	淡橙色		
22	甕	口径 14.5	くの字形に外反する頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は上下に大きく拡張され凹線が2条巡らされている。	口縁から頸部にかけては内外面とも横ナデ。	浅黄橙色		焼成はやや良。
23	甕	口径 20	くの字形に外反する頸部から、ななめ外上方にのびる口縁端部は上下に拡張される。	口縁から頸部にかけては内外面とも横ナデ。胴部内面は頸部との境までへら削り。	淡橙色		
24	ミニチュア土器	口径 4 高さ8.8	口縁がラッパ形に開く甕の形態をとる。	手づくねで成形され全面に指頭の痕を残す。	にぶい 橙色		

S B 1002 出土土器

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
44	広口壺	口径 17	口縁は筒状の頸部から外方に大きく張り出し、端部は上下に拡張する。	口縁部内外面は横ナデ。頸部外面はへら磨き、内面は板ナデ、またはへら削り。	にぶい 褐色	砂粒を若干含む。	
45		底径 5.5	底部は平底。胴部は底部からななめ外上方に直線的にのび、底部との境に明確な稜をもつ。	胴部外面はへら磨き。胴部から底部内面はへら削り。	にぶい 橙色		やや不良 焼成はやや不良。
46		底径 6.5	底部は若干上げ底。		橙色		

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
47		底径 7	底部は平底。		明赤褐色		
48		底径 6	底部は平底。 胴部は底部から上方に向かって直線的にのびる。	胴部外面にはヘラ磨きが施こされている。	にぶい 橙色		
49		底径 7	底部は平底。 底部から胴部にむかってゆるやかなめ外上方に開く。	胴部外面はヘラ磨き。	にぶい 橙色		
50		底径 5.5	底部は平底。 底部から胴部にむかってななめ外上方に開く。	胴部内面はヘラ削り、外面はヘラ磨き。	明赤褐色土		

S B 1003 出土土器

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
51	広口壺	口径 15.5	ななめ外上方に開く口縁端部は上方に拡張され凹線が巡らされる。	口縁部内外面とも横ナデ。	赤色	砂粒を多く含む。	
52	広口壺	口径 12	ゆるやかなななめ外上方にのびる口縁端部は上下に拡張され、内外面には櫛描波状文が施こされている。	口縁部内外面とも横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	
53	直口壺	口径 8	筒状の頸部からわずかに開きながら上方にのびる口縁端部は丸くおさまられる。 口縁から頸部にかけて凹線が巡らされる。	口縁部内面は横ナデ。	にぶい 橙色	砂粒をほとんど含まず精良。	
54	直口壺	口径 10	筒状の頸部からわずかに開きながら上方にのびる口縁端部は平坦に作られる。 口縁から頸部にむかって凹線文がめぐらされる。	口縁部内面は横ナデ。	橙色	砂粒をほとんど含まず精良。	
55	高坏	口径28	口縁端部は一担、外方に水平に拡張された後、下方に垂下する。	口縁部内面は横ナデ、外面はヘラ磨きとナデ調整。	橙色	良好。	
56	高坏	口径22	口縁は明瞭な稜をもって屈曲して立ち上がり口縁端部は内外に若干拡張されて平坦に作られる。	口縁部内外面とも横ナデ。 坏部は外面は板ナデまたはヘラ削り。	明赤褐色	砂粒を若干含む。	
57	高坏		脚柱部との接合は円盤充填法がとられる坏部との境界付近には細い沈線文がラセンに施こされる。	脚柱部外面は入念なヘラ磨き。	明赤褐色	良好。	
58	高坏	径13.5	ななめ外下方に開く脚台端部は上方に拡張され裾部には格子目文と沈線が巡らされている。	外面は横ナデ。 内面はヘラ削り。ヘラ削りの範囲は脚端部まで及ぶ。	赤橙色	砂粒をあまり含まず良好。	
59	高坏	径 8.5	ゆるやかなななめ外下方にのびる脚台端部は上方に拡張され凹線がめぐらされている。	外面は横ナデ、内面は横方向のヘラ削り。	橙色		
60	高坏	径 9.5	ゆるやかなななめ外下方にのびる脚台端部は上方に拡張され1条の凹線がめぐらされる。	外面はナデ調整、内面はヘラ削り。	橙色		
61	甕	口径 14	くの字形に外反する頸部からななめ外上方に直線的にのびる口縁の端部は、上方にのみ拡張される。	口縁部内外面はナデ調整。	にぶい 橙色		
62	甕	口径 22	くの字形に屈曲する頸部からいったん水平方向にのばされた口縁は上方にむかって拡張され、端部に2条の凹線が巡らされる。	口縁内外面ともにナデ調整。	にぶい 橙色	砂粒をあまり含まず良好。	
63	甕	口径 15.5	くの字形に屈曲する頸部からななめ外上方にのびる口縁の端部は上下に大きく拡張され凹線が2条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目、内面は指頭圧痕とハケ目が併用される。	橙色		

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
64	甕	口径 23.5	くの字形に外反する頸部から、ななめ外上方にのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線が2条めぐらされる。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部内面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色		
65		底径10	底部は若干上げ底。 胴部は底部からななめ外上方に大きく開く。	胴部外面はへら磨き、内面はへら削り。	灰オリーブ色		
66		底径9	底部は平底。 底部から胴部にむかってななめ外上方に大きく開き、底部との境は明瞭な稜を持つ。	胴部外面は、へら磨きとへら削りが併用される。 内面はへら削り。	赤褐色土		
67		底径8	底部は平底。 底部から胴部にむかってやや外反ぎみに大きく開き、底部と胴部の境は明瞭な稜をもつ。壺の底部か？	外面はへら磨き。 内面はへら削り。	黄橙色	砂粒を多く含む。	焼成は不良。
68		底径7	底部は平底。 底部からななめ外上方にむかってゆるやかにのびる。	胴部外面はハケ目調整、内面はへら削り。	灰褐色		
69		底径8.5	底部は平底。 胴部と底部の境は丸みを持つ。	胴部外面はへら磨き、内面はへら削りが施こされる。	明赤褐色		
70	壺	底径8	上げ底の底部から内湾しながらななめ外上方にゆるやかにのびる。底部と胴部の境は丸みを持つ。	胴部外面は縦のへら磨き、内面はへら削り。	にぶい橙色	砂礫を多く含む。	焼成は不良。

S K 1001 出土土器

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
75	高坏	脚端部径 9	ゆるやかに外下方にむけてのびる脚台端部は上方にむけて拡張される。裾部にはへら先を用いた平行沈線と縦の刺突が加えられている。	脚端部は横ナデ。 内部はへら削りが加えられる。	橙色		

S K 1002 出土土器

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
76	甕	口径 15	くの字形に外反する頸部からななめ外上方にのびる口縁の端部は上方に拡張され、凹線が1条めぐらされる。	口縁内外面は横ナデ調整。	明赤褐色	砂粒をあまり含まず良好。	
77	甕	口径 15	くの字形に外反する頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は上方に強く拡張され、凹線が2条巡らされる。	口縁部内外面は横ナデ。	灰色		
78	甕	口径 14	くの字形に外反する頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は上方に強く拡張され、凹線が1条巡らされる。	口縁部内外面は横ナデ。	橙色		焼成は不良。
79	甕	口径 14	頸部から外方に直線的にのびる口縁端部は上下に強く拡張され、凹線が3条巡らされている。	口縁部内外面は横ナデ。	橙色		
80		底径 7	底部はやや丸みを持つ。 底部からやや外反気味に外上方にのび胴部と底部の境は稜をもたない。	外面はへら磨き。 内面はへら削り。	浅黄橙色	砂粒を多く含む。	焼成は不良。

S K 1003 出土土器

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
84	広口壺	口径 17	筒状の頸部からゆるやかになめ外上方にのびる口縁の端部は上下に拡張され、4条の凹線がつけられる。	口縁部内外面は強い横ナデ。頸部外面は細かなハケ目調整とヘラ磨きが併用される。頸部内面は指頭によるナデ。	淡赤橙	砂粒を多く含む。	焼成は不良。
85	壺		胴部から筒状にのびる頸部を持つ壺で頸部と胴部の境には凹線が3条めぐらされる。	頸部外面はヘラ磨き。	にぶい 橙色	砂粒をほとんど含まない。	焼成は良好。
86	直口壺	口径 14	頸部からなめ外上方にゆるやかに開く口縁の端部は内外に若干拡張され平坦になる。口縁端部はヘラによる刻み目が施こされ、口頸部には凹線文B種が巡らされる。	口縁部内面はナデ調整。	にぶい 赤褐色	砂粒をほとんど含まない。	焼成は良好。
87	高坏	口径 14	坏部との境に明瞭な稜線をもって立ち上がる口縁はなめ外上方にむかつてのび端部は尖る。	口縁部外面はナデ調整とヘラ磨き。坏部外面は縦方向のヘラ磨き。	明赤褐色		焼成は良好。
88	高坏	口径 24.8	口縁部は坏部との境界に明瞭な稜線をもってほぼ垂直に立ち上がり、凹線が巡らされている。口縁端部は平坦に作り出されている。	口縁部内面はナデ調整。坏部外面は斜行するヘラ磨き。	にぶい 橙色		
89	高坏	口径 20	口縁は坏部との境界に明瞭な稜線をもってほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部内外面はナデ調整。坏部外面はヘラミガキが縦方向と横方向に加えられる。	橙色	砂粒をあまり含まない。	焼成は良好。
90	高坏	口径 20	口縁は坏部との境に明瞭な稜線をもって屈曲しほぼ垂直に立ち上がり4条の凹線をめぐらす。口縁端部は内外方向に拡張して平坦面を作り出している。	口縁部内面は横ナデ。坏部外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りとヘラ磨きを併用。	明赤褐色	砂粒をあまり含まない。	焼成は良好。
91	高坏	口径 21	口縁は坏部との境界に明瞭な稜線を持って立ち上がり、外上方にむかつてのびる。口縁端部は平坦に作られる。		橙色	砂粒をあまり含まない。	焼成は良好。
92	高坏	脚端径 10	なめ外下方に開く脚台端部は上方にむかつて弱く拡張され凹線を作り出す。脚台裾部にはヘラによる三角形の透しが施こされている。	脚部外面は横ナデ、内面はヘラ削り。	にぶい 橙色		
93	甕	口径 18	くの字形に外反する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部がつく。口縁端部は断面方形につくられ凹線が1条めぐらされる。	口縁部内外面はナデ調整。	にぶい 橙色		
94	甕	口径 11.5	くの字形に屈曲する頸部からなめ外上方に直線的にのびる口縁端部は断面方形に作られ凹線がめぐらされる。	口縁部内外面はナデ調整。胴部内面はヘラ削り。	橙色		
95	甕	口径 13.5	くの字形に屈曲する頸部から、なめ外上方にのびる口縁の端部は断面方形につくられる。	口頸部内外面は横ナデ。胴部は頸部との境までヘラ削り。	浅黄褐色	砂粒を多く含む。	焼成は不良。
96	甕	口径 22	くの字形に外反する頸部からなめ外上方にのびる口縁の端部は上方に拡張され、凹線が2条施こされる。	口縁部内外面は強い横ナデ。胴部内面は頸部との境までヘラ削り。	にぶい 橙色		

包含層出土土器

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
98	広口壺	口径 16	なめ外上方にのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線。	口縁部内外面とも横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	
99	広口壺	口径	なめ外上方にのびる口縁の端部は上下に拡張される。				

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
100	広口壺	口径 20	筒状の頸部から、ななめ外上方にゆるく外反してのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線が施こされる。	口縁部内外面とも横ナデ。 頸部内面は指オサエの後軽くナデ。	明赤褐色		
101	広口壺	口径 21	筒状の頸部からななめ外上方にゆるやかに外反しながらのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線が施こされる。 筒状の頸部には凹線文B種が施こされる。	口縁部内外面は横ナデ。	にぶい 橙色	砂粒を多く含む。	焼成は良好。
102	広口壺	口径 19	筒状の頸部からななめ外上方にむかってゆるく外反しながらのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線が施こされる。 筒状の頸部には凹線文B種が巡らされる。	口縁部内外面は横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	焼成は良好。
103	広口壺	口径19.5	頸部からななめ外上方に大きく開く口縁の端部は断面方形に仕上げられ凹線が1条めぐらされる。	口縁部内面は強い横ナデ。 頸部内面へら削り。	淡橙色		焼成不良。
104	広口壺	口径 14	筒状の細長い頸部にななめ外上方にのびる短い口縁部がつく。口縁端部は上下に弱く拡張され、凹線が施こされる。		浅黄橙色	砂粒を多く含む。	
105	水差し形土器	胴部最大径 14	横方向の把手がついた胴部は下半部にむかっていったん広がった後底部近くで内側に屈曲する。	胴部内面上半はハケ目調整。	浅黄褐色	砂粒を多量に含む。	
106	高坏	口径 24	口縁部は坏部との境に弱い稜を形成して上方にはほぼ垂直に立ち上がり凹線が4条ほどこされる。 口縁部は平坦に作り出される。	口縁部内面は横ナデ。	橙色		
107	高坏	脚柱部径 5	脚柱部外面には並行沈線が4本施こされる。	脚柱部外面はへら磨き。	淡赤橙色	砂粒を多量に含む。	焼成は不良。
108	高坏	脚端部径 12	ななめ外下方にむかって直線的に開く脚台端部は若干肥厚し丸くおさめ、端部近くは凹線が施こされる。	脚部外面は縦のへら磨き、内面は横方向のへら削り。	にぶい 橙色	砂粒を多く含む。	
109	高坏	脚端部径 8.5	ななめ外下方にのびる脚台の端部は上方に拡張される。	脚端部は強い横ナデが施こされる。 脚部内面はへら削り。	にぶい 橙色		
110	高坏	脚端部径 9.5	外下方に直線的にのびる脚台の脚端部は上方に弱く拡張され、1条の凹線が巡らされる。	脚裾部外面は強い横ナデ内面はへら削り。	橙色		
111	高坏	脚端部径 13.5	外下方にむかってゆるやかに開く脚台の脚端部は上方に拡張される。脚台裾部は平行沈線とへらを用いた刺突文が施こされる。	脚部内面はへら削り。	橙色	砂粒を含まず精良な粘土。	焼成は良好。
112	甕	口径 19	くの字形に外反する頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は断面方形に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部内面は頸部との境までへら削りが施こされる。	にぶい 橙色		
113	甕	口径 12.5	ななめ外上方に開く口縁の端部は断面が方形に仕上げられる。	胴部外面はへら磨き、内面はへら削りが施こされる。	赤橙色	砂粒をあまり含まない。	
114	甕	口径 14.5	くの字形に屈曲する頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は上方に拡張される。	頸部と胴部の境付近には指オサエが施こされた後ハケ目調整が加えられる。 胴部内面のへら削りは頸部との境付近まで及ぶ。	明赤褐色	砂粒を多く含む。	
115	甕	口径 15	口縁端部は上方のみ拡張して端部には凹線が巡らされる。	口縁部内外面は横ナデ。	明赤褐色		焼成不良。
116	甕	口径 16	口縁端部は上下に拡張され2条の凹線が巡らされる。	口縁部内外面は横ナデ。	赤橙色		
117	甕	口径 26	口縁端部は上下に拡張され凹線が巡らされる。	口縁部内外面はナデ。	にぶい 橙色		
118	甕	口径 18.5	くの字形に外反する頸部に口縁端部は上下に拡張した短い口縁部がつく。	口縁部内外面は横ナデ。	橙色		

番号	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調	胎土	備考
119	甕	口径 18.5	くの字形に外反する頸部に端部を上下に拡張し、凹線を施こした短かい口縁部がつく。	口縁部内外面とも横ナデ。	にぶい 橙色		
120	甕	口径 18.5	くの字形に外反する頸部に端部を上下に拡張し、凹線を施こした口縁部がつく。	胴部外面は並行タタキ。 内面は指頭による圧痕が認められる。	明赤褐 色	砂粒を多 量に含む。	焼成良好。
121	甕	口径 15	くの字形に外反する頸部に端部を上下に拡張し凹線を施こした口縁部がつく。	口縁部外面に施こされる横ナデは胴部 上半まで及ぶ。 胴部内面は指オサエの後ハケ目が施こ される。	浅黄橙 色	砂粒をあ まり含ま ない。	焼成良好。

S B 1001 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
33	打製石鏃	29	19	4	2.2	サヌカイト	基部を欠失
34	打製石鏃	30	20	5	2.5	サヌカイト	
35	打製石鏃	29	15	6	2.1	サヌカイト	先端部を欠失
36	打製石鏃	22	17	6	1.8	サヌカイト	先端部を欠失
37	打製石鏃	22	14	4	1.7	サヌカイト	未製品
38	打製石鏃	43	21	7	7.6	サヌカイト	未製品
39	打製石庖丁	42	105	7	41.8	結晶片岩	
40	打製石庖丁	43	97	7	42.1	結晶片岩	
41	打製石庖丁	39	103	10	56.3	結晶片岩	
42	打製石庖丁	46	60	8	31.3	結晶片岩	
43	磨製石斧	151	98	62	1650	蛇紋岩?	

S B 1003 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
71	打製石鏃	29	15	4	2	サヌカイト	
72	打製石鏃	28	17	6	2.4	サヌカイト	
73	打製石鏃	31	18	4	2.2	サヌカイト	両端を欠失
74	打製石鏃	32	16	3	1.4	サヌカイト	

S K 1002 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
81	打製石庖丁	38	101	13	73.4	粘板岩	
82	打製石庖丁	44	94	5	38.6	結晶片岩	
83	打製石庖丁	35	51	5	14.6	結晶片岩	

包含層出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
122	打製石鏃	35	15	5	2.4	サヌカイト	基部を欠失
123	打製石鏃	28	13	5	1.8	サヌカイト	
124	打製石鏃	27	20	8	3	サヌカイト	
125	打製石鏃	40	12	4	2.1	サヌカイト	先端を欠失
126	打製石鏃	27	13	3	0.8	サヌカイト	
127	打製石鏃	20	12	3	0.6	サヌカイト	
128	打製石鏃	38	16	5	3.6	サヌカイト	
129	打製石鏃	25	16	5	1.8	サヌカイト	
130	打製石鏃	29	20	4	1.8	サヌカイト	先端と基部を欠失
131	打製石庖丁	42	78	10	59.3	結晶片岩	
132	打製石庖丁	21	46	6	8.4	結晶片岩	
133	打製石庖丁	45	86	5	36	結晶片岩	
134	打製石庖丁	39	70	9	40.1	結晶片岩	
135	打製石庖丁	42	80	7	32.7	結晶片岩	
136	磨製石斧	77	47	18	110.3	蛇紋岩?	

A 地点 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
137	ナイフ形石器	59	17	7	8.6	サヌカイト	
138	ナイフ形石器	52	19	6	7.5	サヌカイト	
139	ナイフ形石器	36	20	5	4.4	サヌカイト	
140	ナイフ形石器	34	17	6	3.1	サヌカイト	
141	ナイフ形石器	43	22	9	7.9	サヌカイト	
142	ナイフ形石器	33	14	8	3.5	サヌカイト	
143	ナイフ形石器	27	11	4	1.3	サヌカイト	
144	ナイフ形石器	26	14	4	1.5	サヌカイト	
145	ナイフ形石器	40	18	5	4.9	サヌカイト	
146	ナイフ形石器	36	18	9	5.4	サヌカイト	
147	ナイフ形石器	43	15	11	4.8	サヌカイト	
148	ナイフ形石器	33	15	6	3.2	サヌカイト	
149	ナイフ形石器?	35	23	7	7.4	サヌカイト	
150	削器	36	21	10	7.4	サヌカイト	
151	削器	33	29	12	12.3	サヌカイト	
152	削器	25	36	11	9.9	サヌカイト	

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
153	削器?	25	31	13	9.5	サヌカイト	搔器?
154	削器	36	23	10	7.4	サヌカイト	
155	削器	33	27	9	11.5	サヌカイト	
156	削器?	18	30	4	3.5	サヌカイト	
157	削器?	16	31	3	2.7	サヌカイト	ナイフ形石器?
158	横長剥片	17	29	3	1.8	サヌカイト	
159	横長剥片	16	35	3	2	サヌカイト	
160	横長剥片	25	36	5	5.3	サヌカイト	
161	横長剥片	24	46	3	5.3	サヌカイト	
162	横長剥片	19	25	4	2.4	サヌカイト	
163	横長剥片	20	21	4	2	サヌカイト	
164	調整剥片	22	31	8	5.3	サヌカイト	
165	横長剥片	38	63	11	21.1	サヌカイト	
166	石核	39	35	8	13	サヌカイト	
167	石核	38	28	5	7.5	サヌカイト	
168	石核	27	42	14	15.3	サヌカイト	
169	角錐状石器	69	43	21	60	サヌカイト	

B地点 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
170	ナイフ形石器	43	21	4	4.7	サヌカイト	
171	ナイフ形石器	19	11	5	1.4	サヌカイト	
172	ナイフ形石器	30	13	4	1.6	サヌカイト	
173	ナイフ形石器	28	15	6	2.4	サヌカイト	
174	ナイフ形石器	62	29	12	23.8	サヌカイト	
175	ナイフ形石器	42	17	8	5.1	サヌカイト	
176	ナイフ形石器	47	20	9	9	サヌカイト	
177	ナイフ形石器	41	14	6	3.5	サヌカイト	
178	ナイフ形石器	39	14	7	4.9	サヌカイト	
179	ナイフ形石器	31	13	3	1.5	サヌカイト	
180	ナイフ形石器	32	18	5	3.1	サヌカイト	
181	ナイフ形石器	14	16	5	1.1	サヌカイト	
182	削器	51	36	16	25.1	サヌカイト	
183	削器	31	57	12	18.8	サヌカイト	
184	削器	37	28	7	10.4	チャート	

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
185	削器	22	34	9	5.7	サヌカイト	
186	削器	51	35	13	21.7	サヌカイト	
187	搔器	47	36	17	25.7	サヌカイト	
188	楔形石器	42	25	11	11.5	サヌカイト	
189	楔形石器	27	16	9	3.1	チャート	
190	横長剥片	18	38	5	4.4	サヌカイト	
191	横長剥片	17	30	5	2.2	サヌカイト	
192	横長剥片	21	24	4	2	サヌカイト	
193	横長剥片	20	25	5	2.1	サヌカイト	
194	横長剥片	20	29	6	3.3	サヌカイト	
195	横長剥片	17	21	2	1.1	サヌカイト	
196	縦長剥片	29	22	4	2.7	サヌカイト	
197	縦長剥片	28	21	5	3.6	サヌカイト	
198	調整剥片	32	28	7	5.3	サヌカイト	
199	調整剥片	22	26	5	4.6	サヌカイト	
200	調整剥片	22	37	7	4.6	サヌカイト	
201	石核	24	43	14	16.4	サヌカイト	

C地点 出土石器計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
202	ナイフ形石器	59	20	8	9.4	サヌカイト	
203	削器	39	43	9	13.3	サヌカイト	
204	削器	38	28	11	10.5	サヌカイト	
205	削器	29	41	8	8.7	サヌカイト	
206	削器	29	43	9	13.5	サヌカイト	
207	翼状剥片	27	41	6	7.7	サヌカイト	
208	横長剥片	29	51	8	12.8	サヌカイト	
209	縦長剥片	38	32	4	6.8	サヌカイト	
210	横長剥片	19	31	5	3.5	サヌカイト	
211	調整剥片	28	27	5	3.4	サヌカイト	
212	調整剥片	19	27	6	2.3	サヌカイト	
213	調整剥片	24	29	3	1.7	サヌカイト	

表面採集資料 計測一覧表

番号	機 種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	備 考
214	ナイフ形石器	23	18	5	2.7	サヌカイト	
215	ナイフ形石器	27	8	6	1.3	サヌカイト	
216	ナイフ形石器	25	9	7	1.5	サヌカイト	
217	石核	63	18	13	11.6	サヌカイト	
218	削器	57	36	16	34.6	サヌカイト	



椎ヶ丸調査区遠景



芝生調査前風景

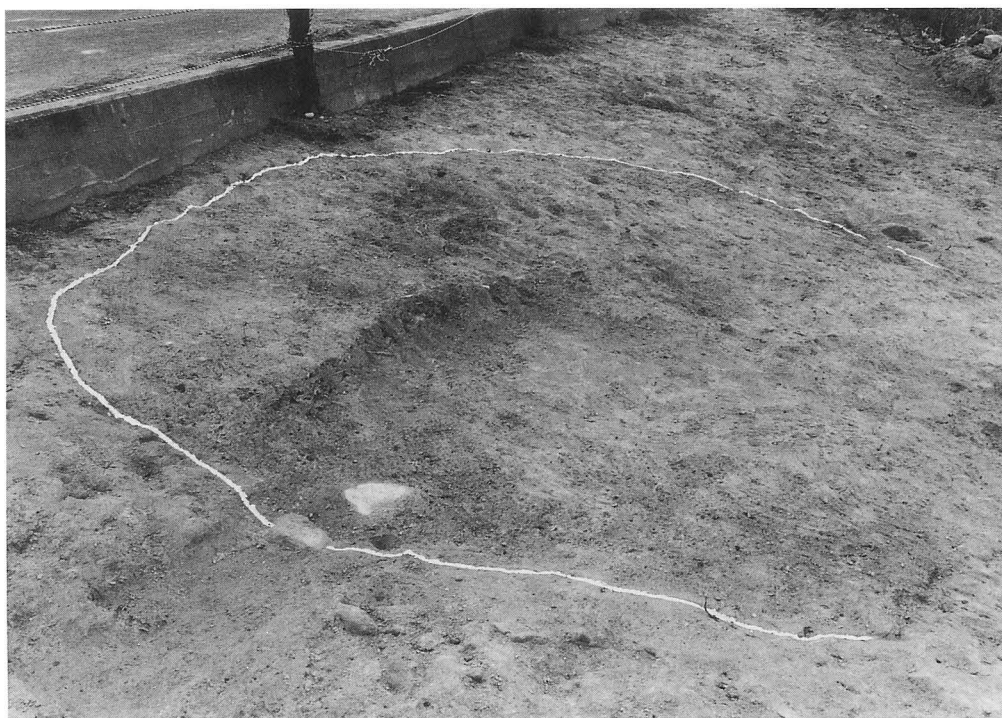
図版 2



S B 1001完掘状況（南から）



S B 1001完全掘状況（北から）

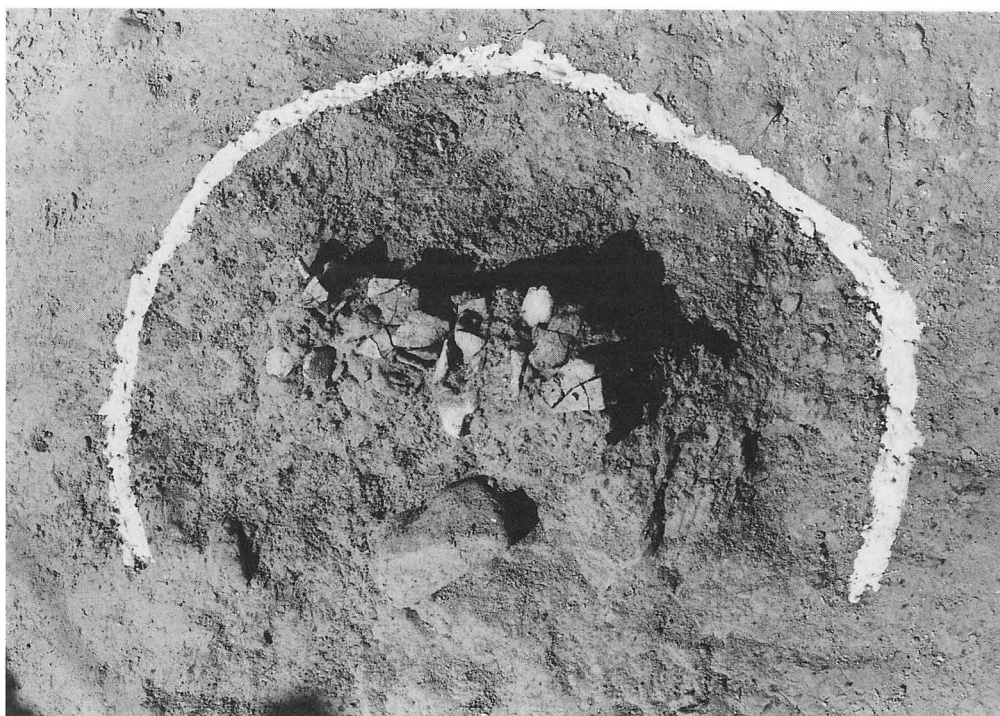


S B 1003検出状況（西から）

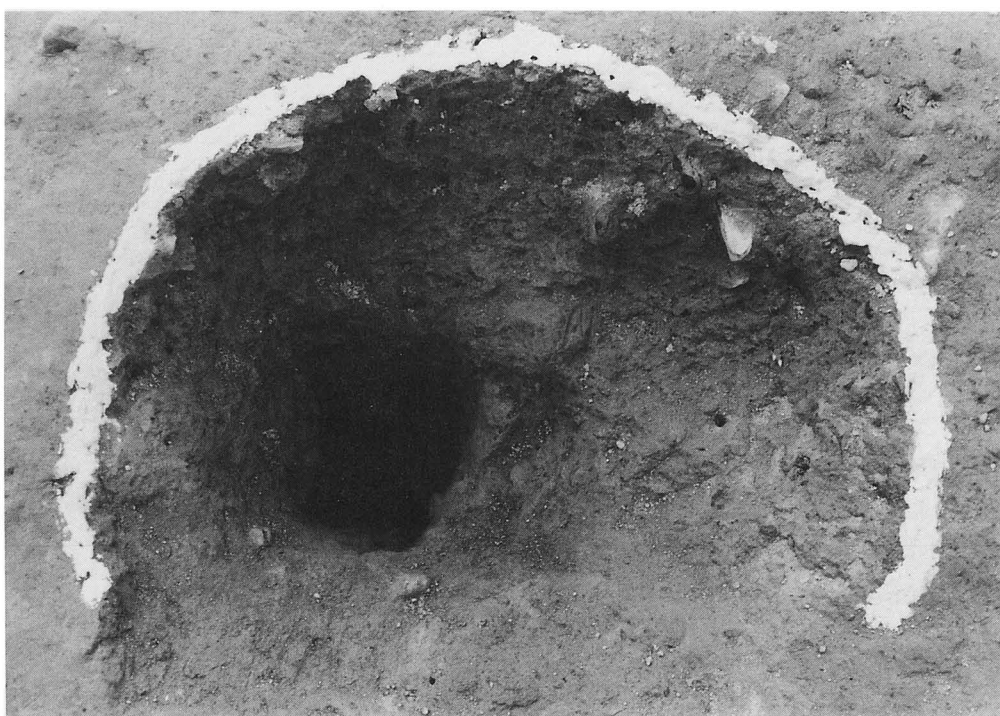


S B 1003完掘状況（南から）

図版 4



S K 1001検出状況



S K 1001完掘状況



S K 1002検出状況



S K 1002完掘状況



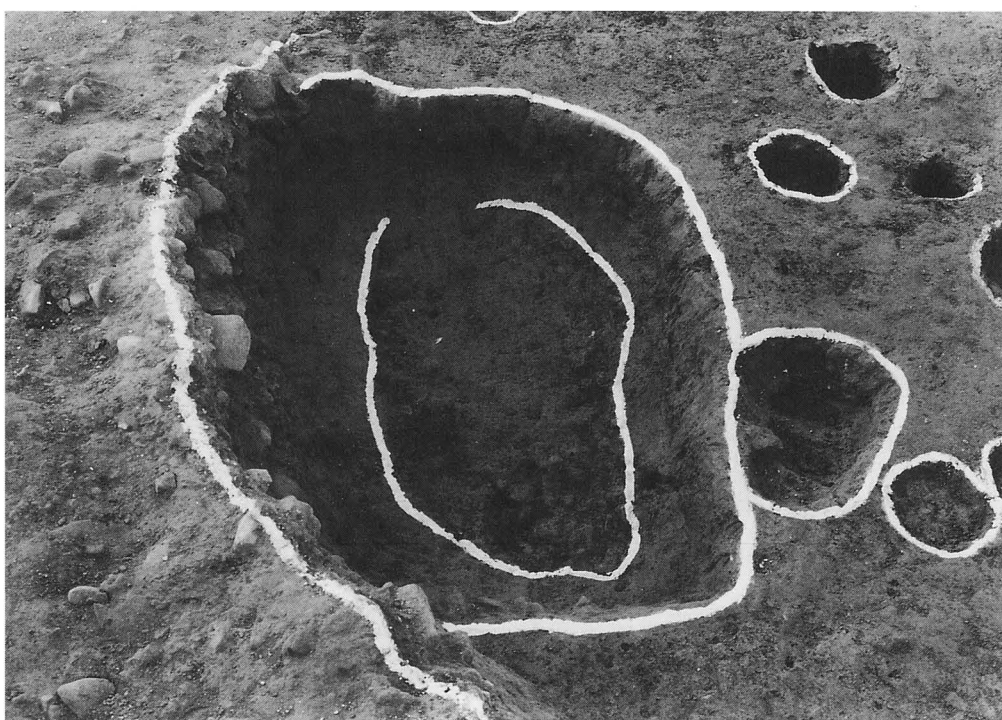
S K 1001・1002完掘状況



S K 1003検出状況

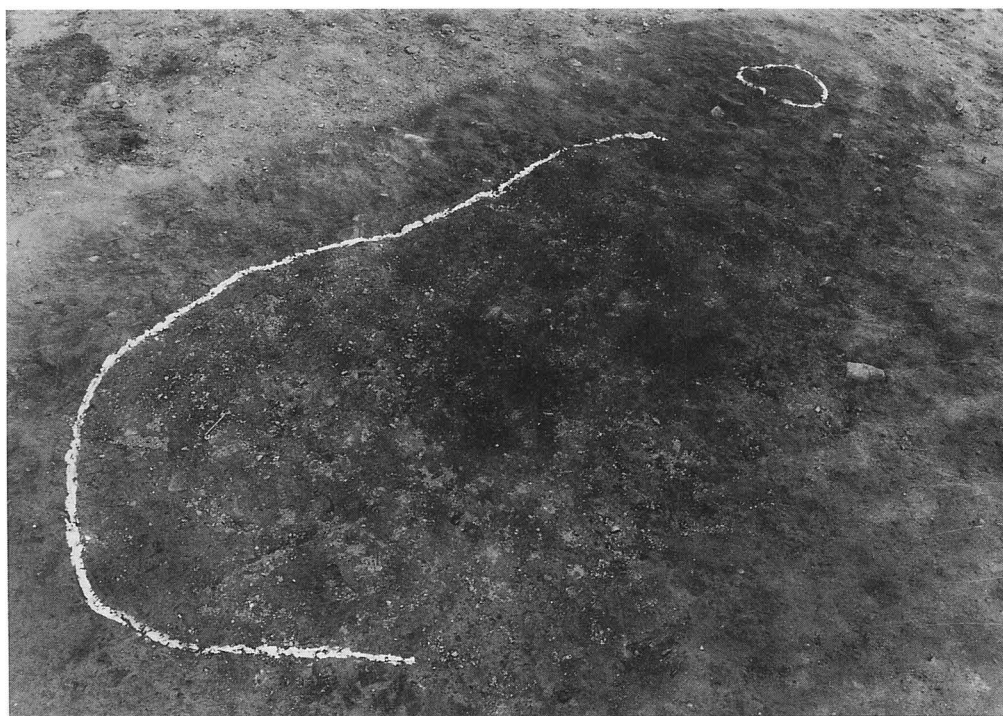


S K 1003掘り下げ状況（西から）



S K 1003完掘状況（北から）

図版 8



S X 1001 検出状況



S X 1001 完掘状況



S B 1001遺物出土状況



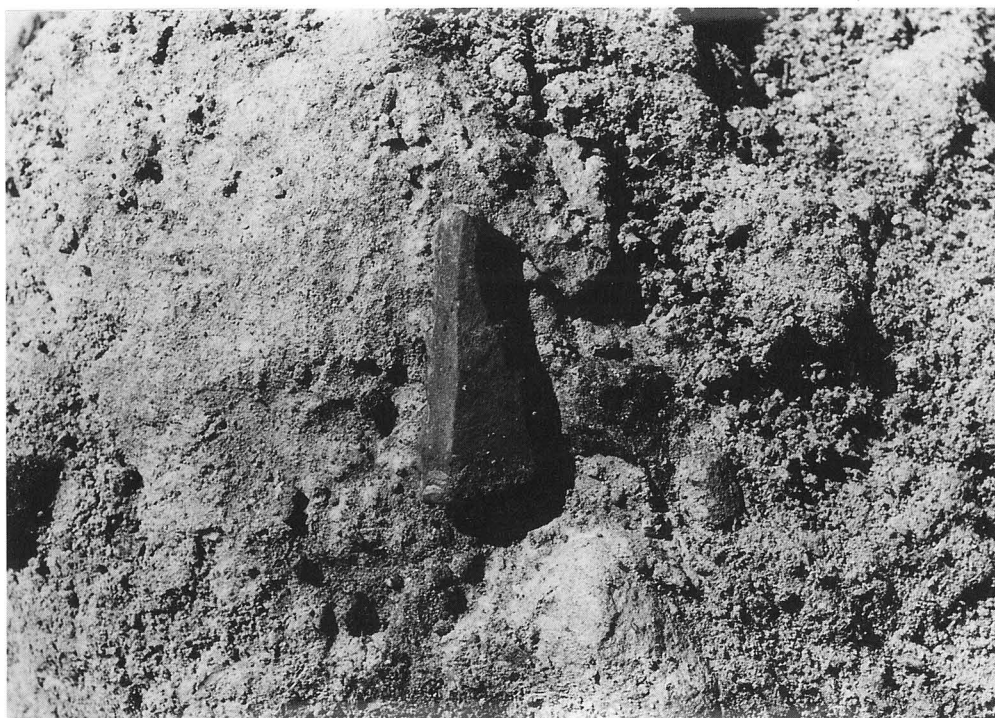
S B 1001遺物出土状況（弥生土器）



A地点 ナイフ形石器出土状況



B地点 ナイフ形石器出土状況

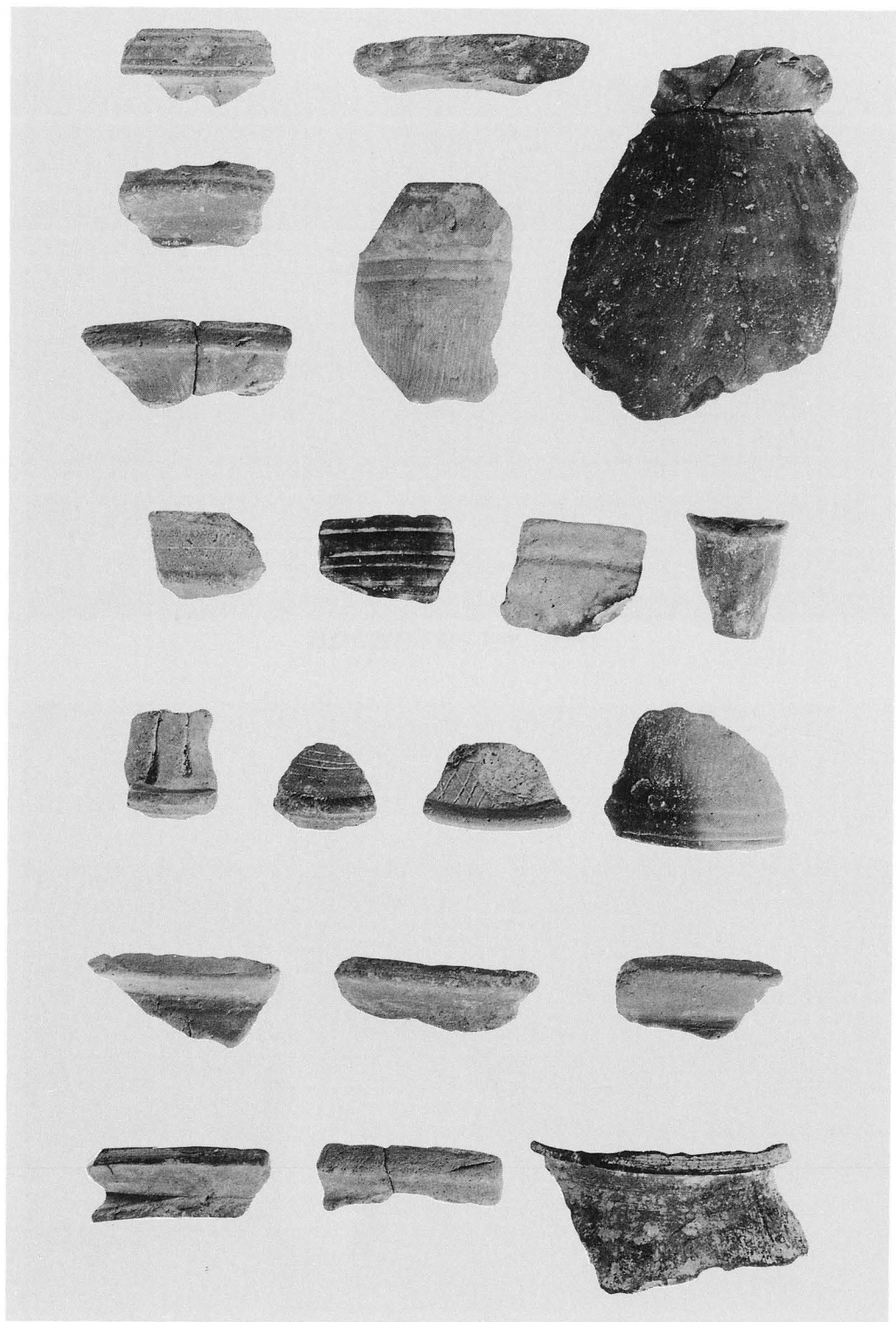


B地点 ナイフ形石器出土状況

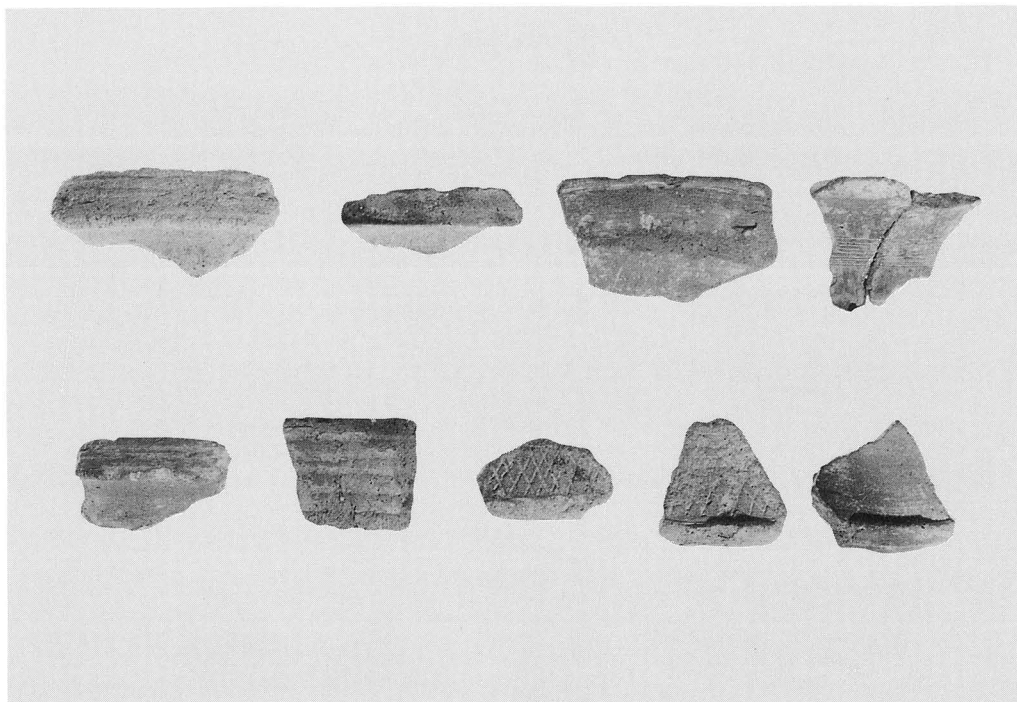


B地点スクレイパー出土状況

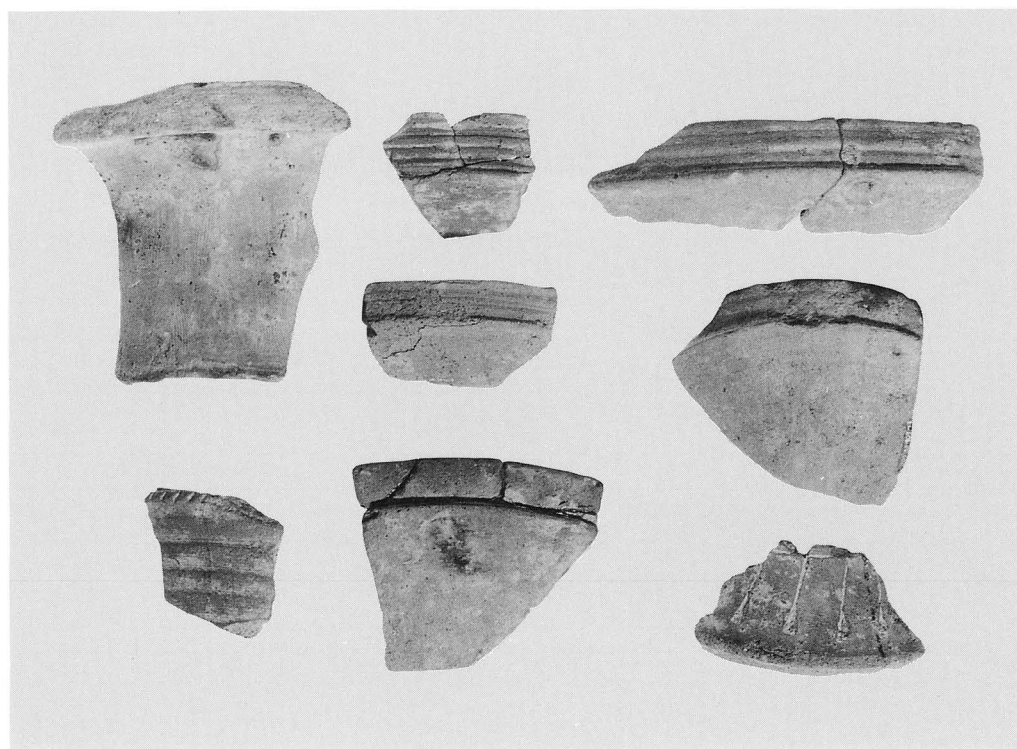
図版12



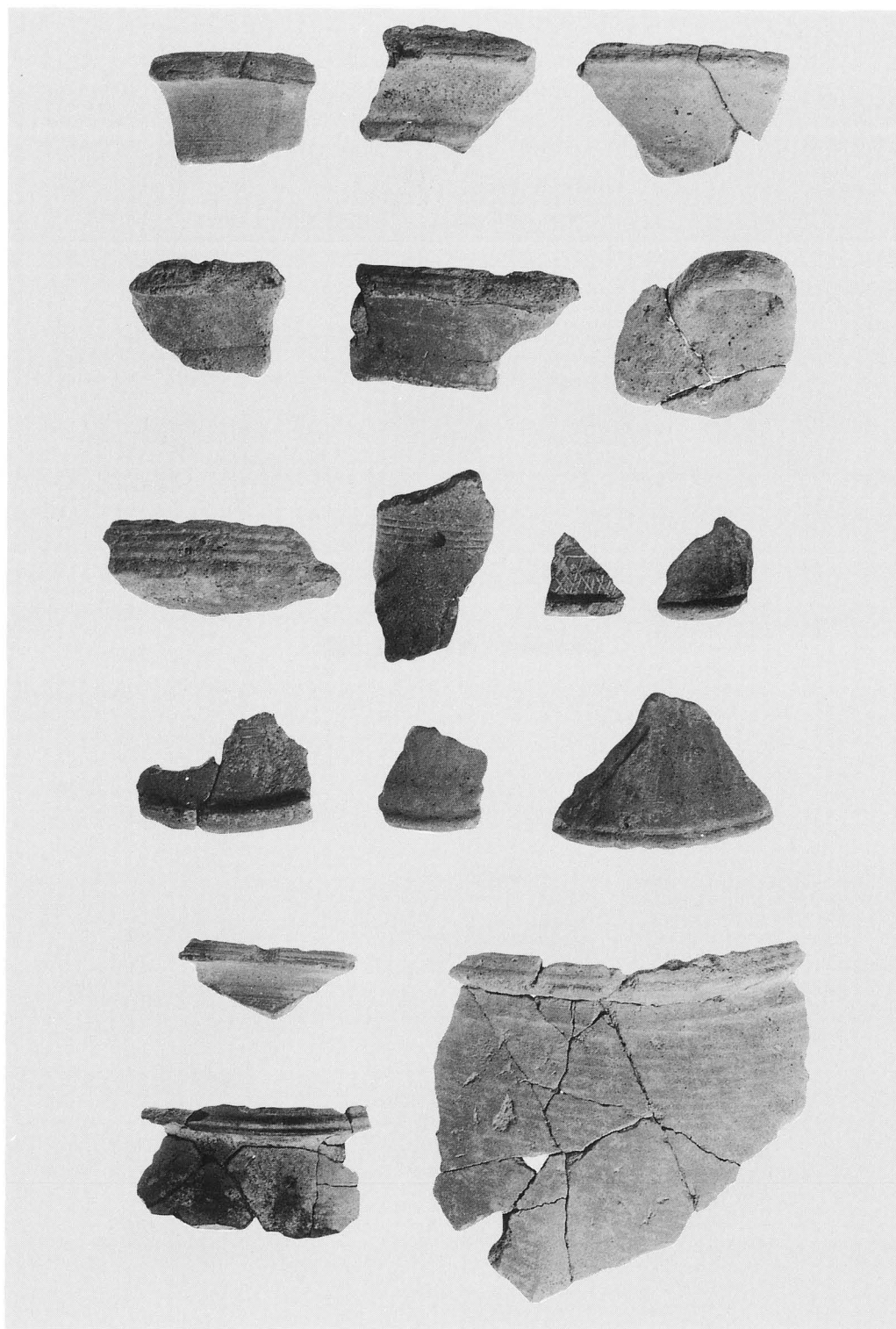
S B 1001出土遺物（弥生土器）



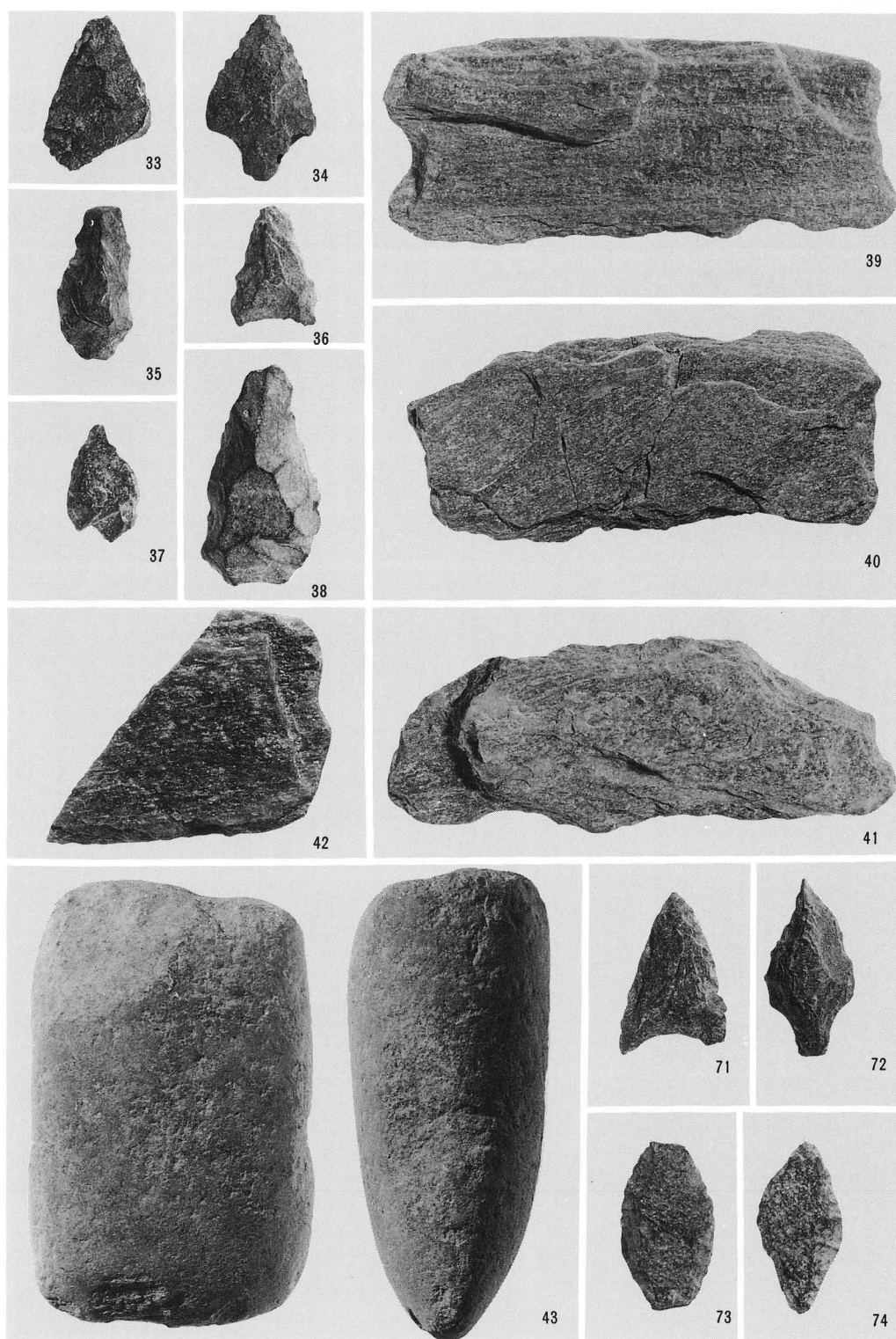
S B 1003出土遺物 (弥生土器)



S K 1003出土遺物 (弥生土器)

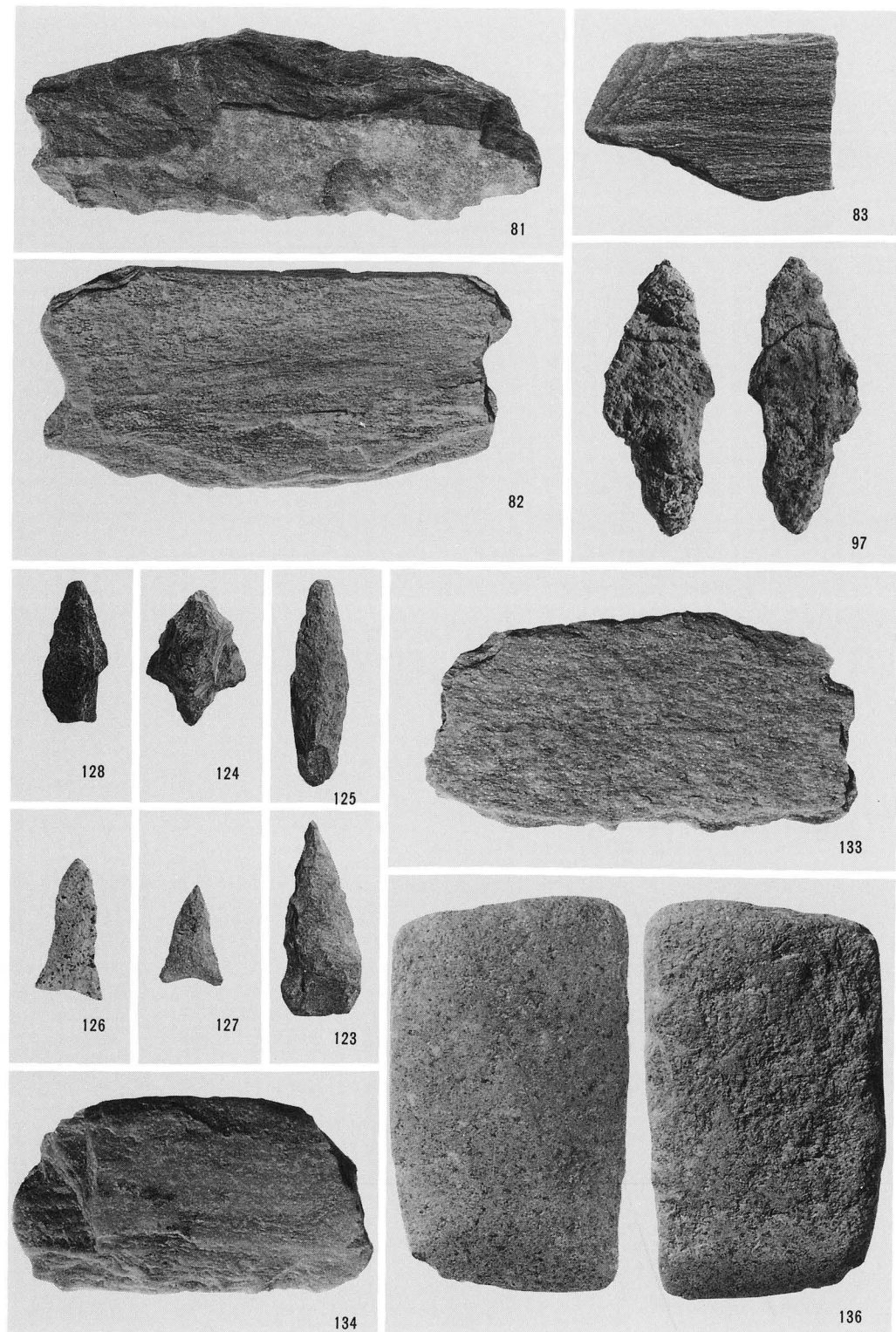


包含層出土遺物（弥生土器）

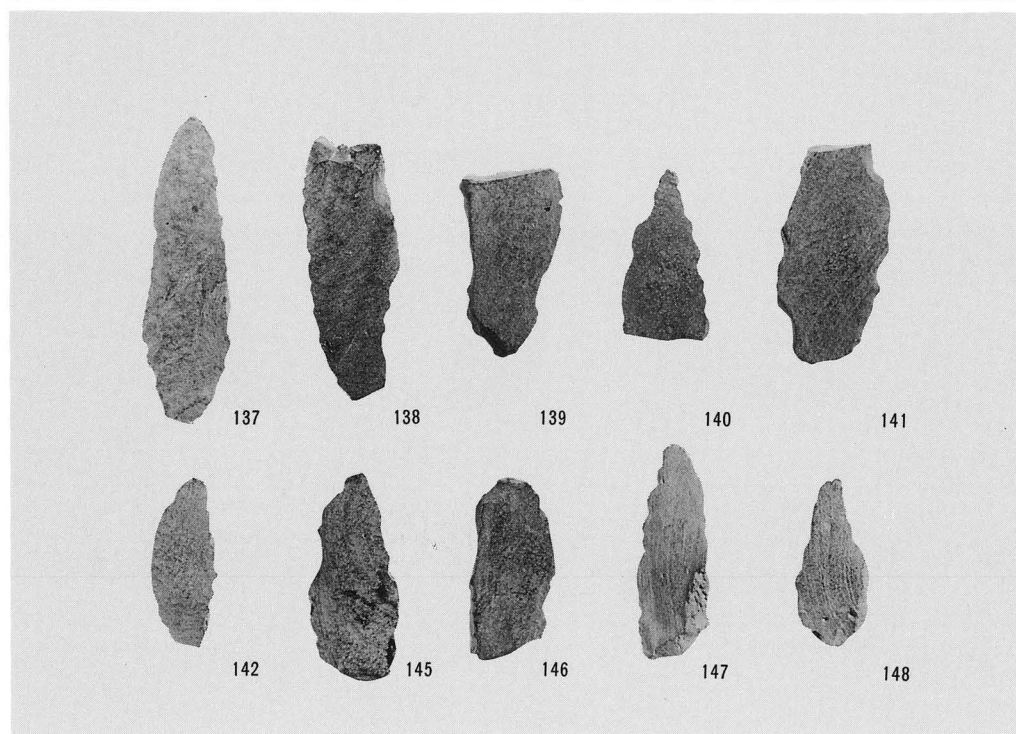
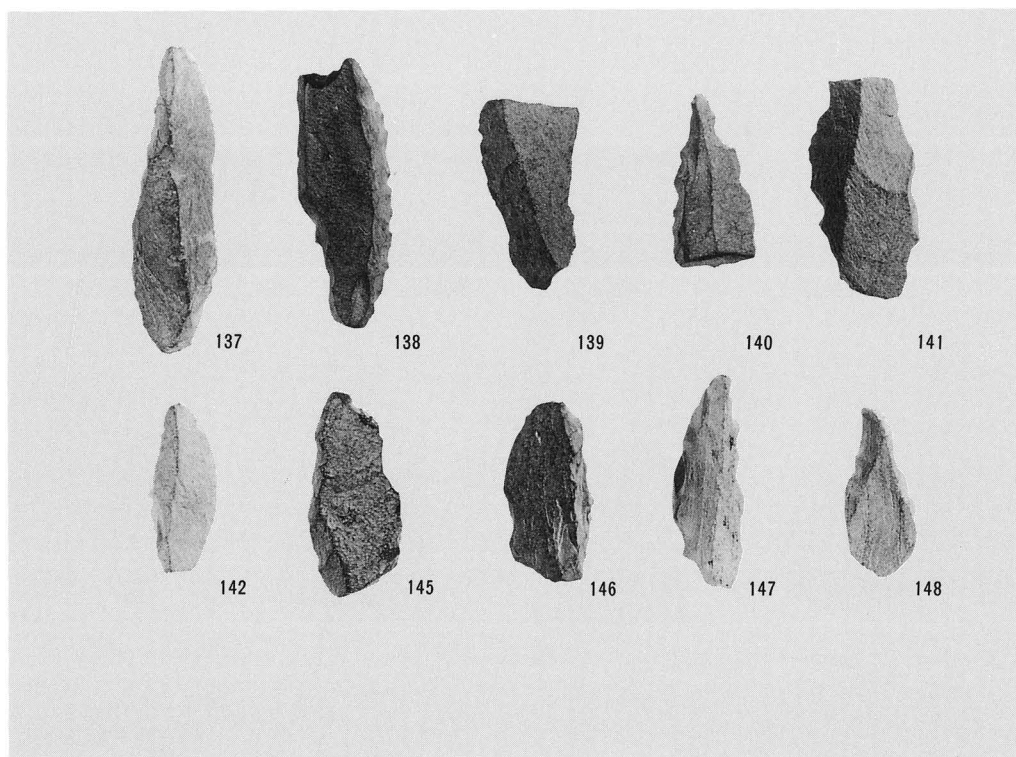


出土遺物（弥生石器）

图版16

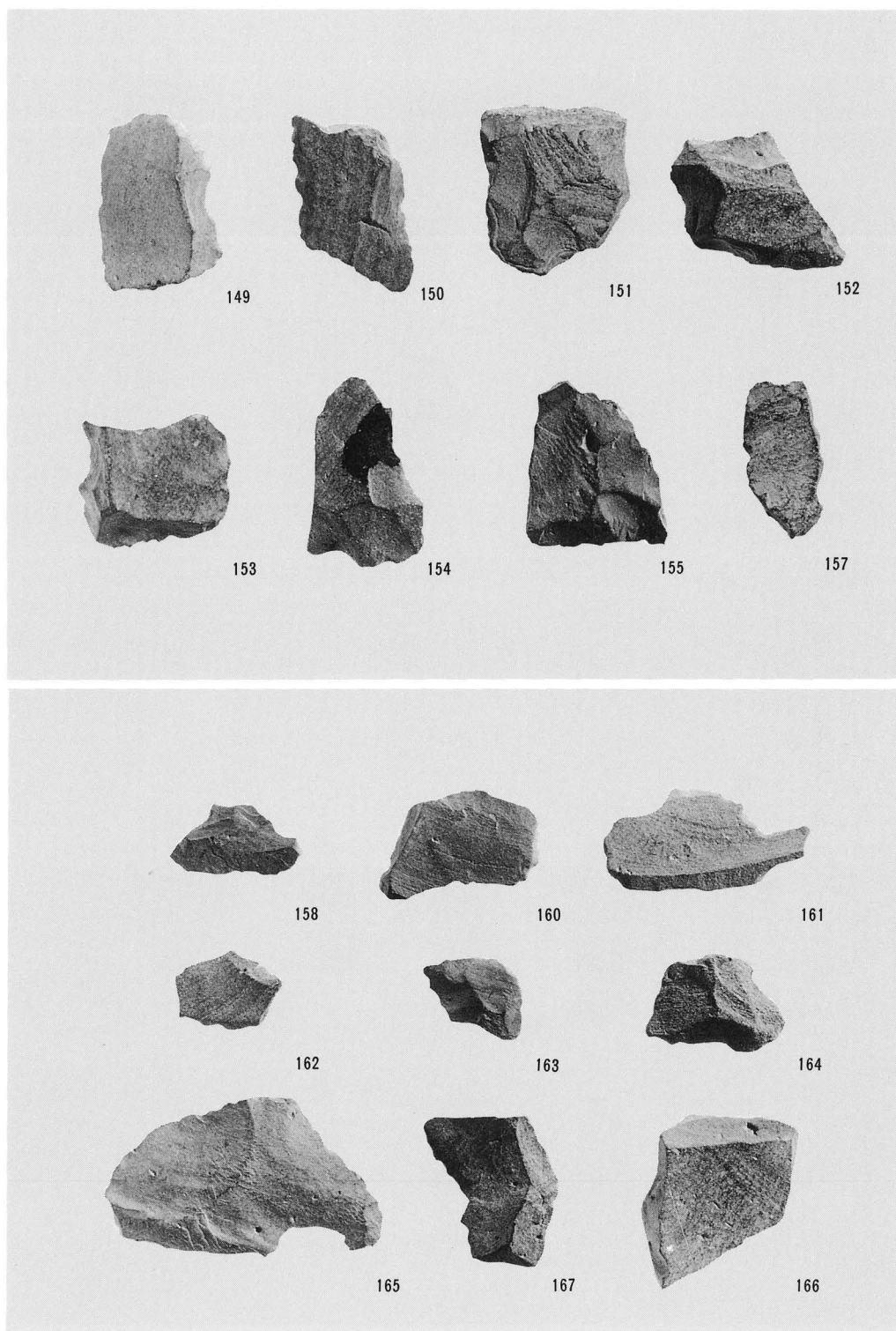


出土遺物（弥生石器）

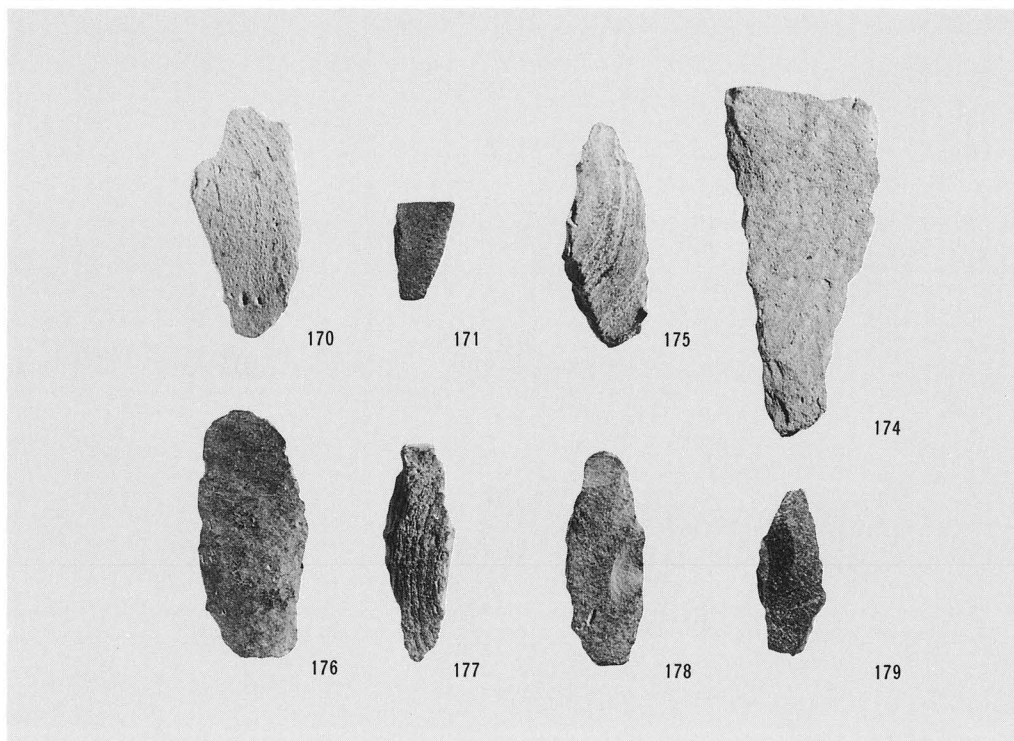
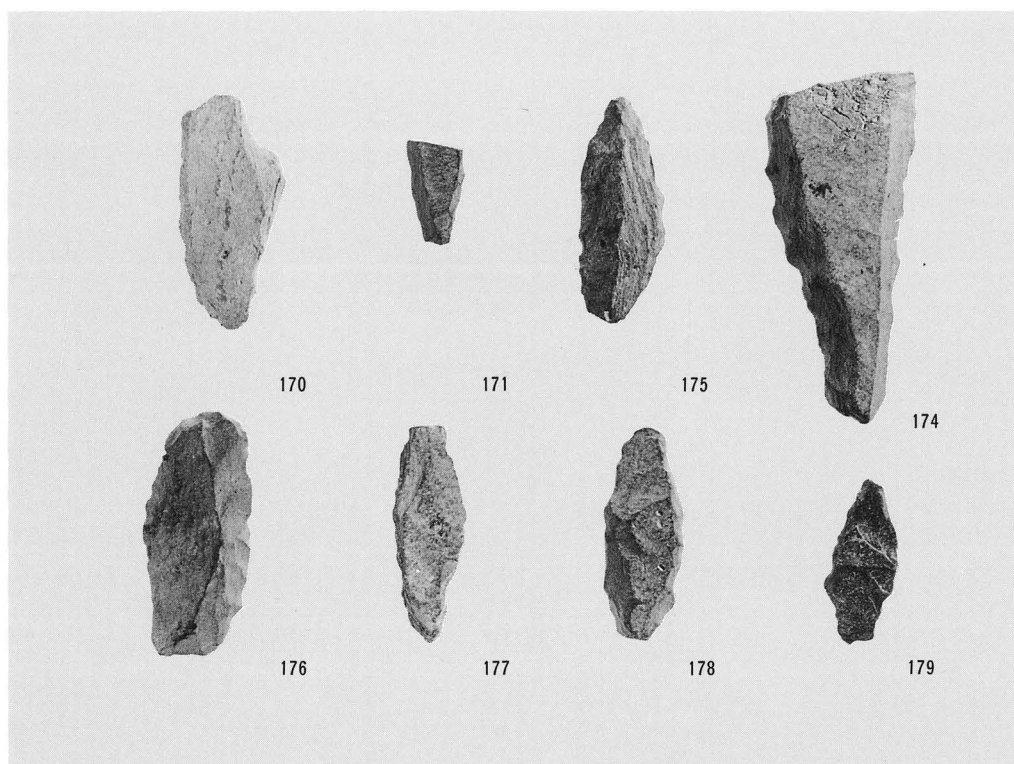


A地点出土遺物（旧石器）

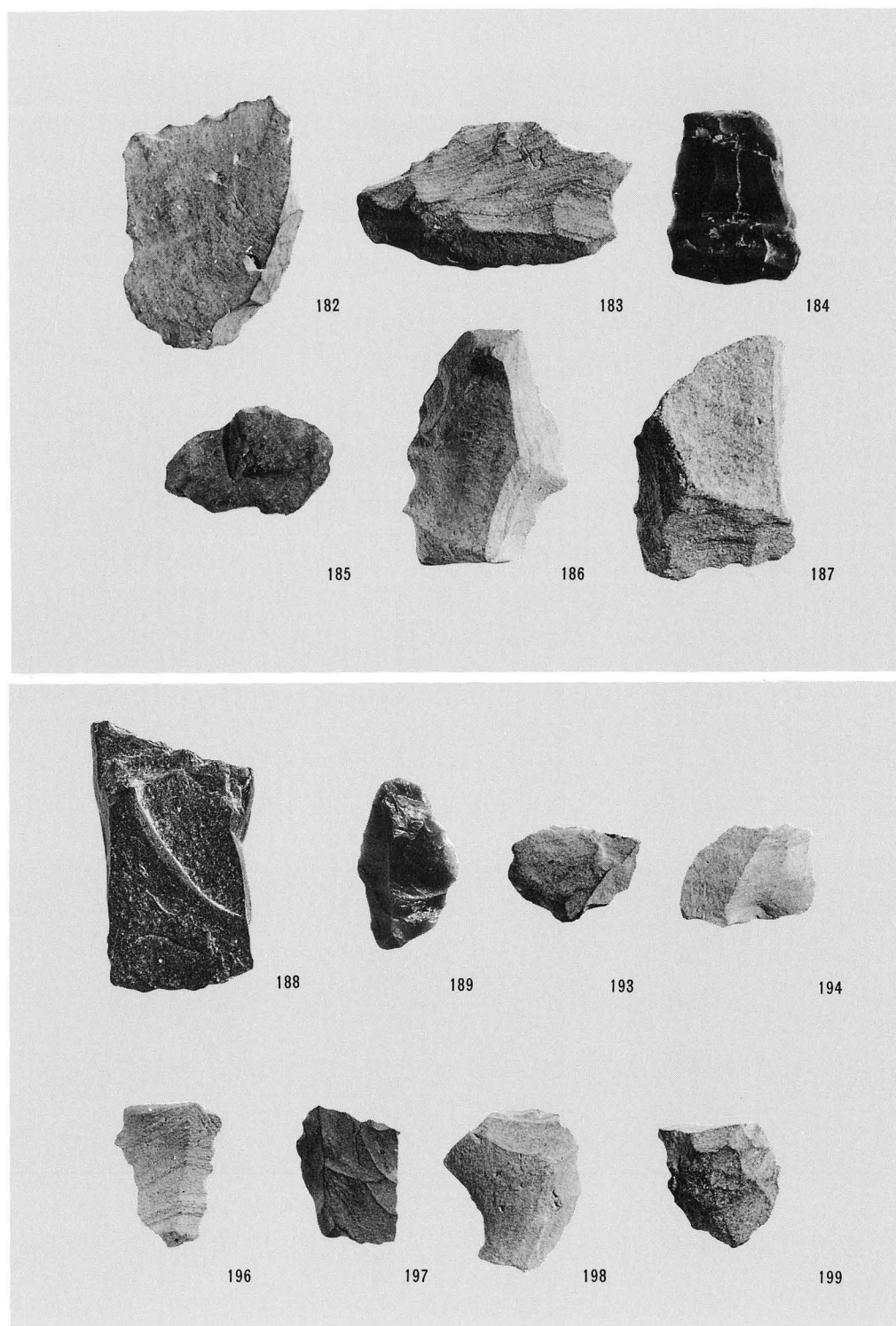
图版18



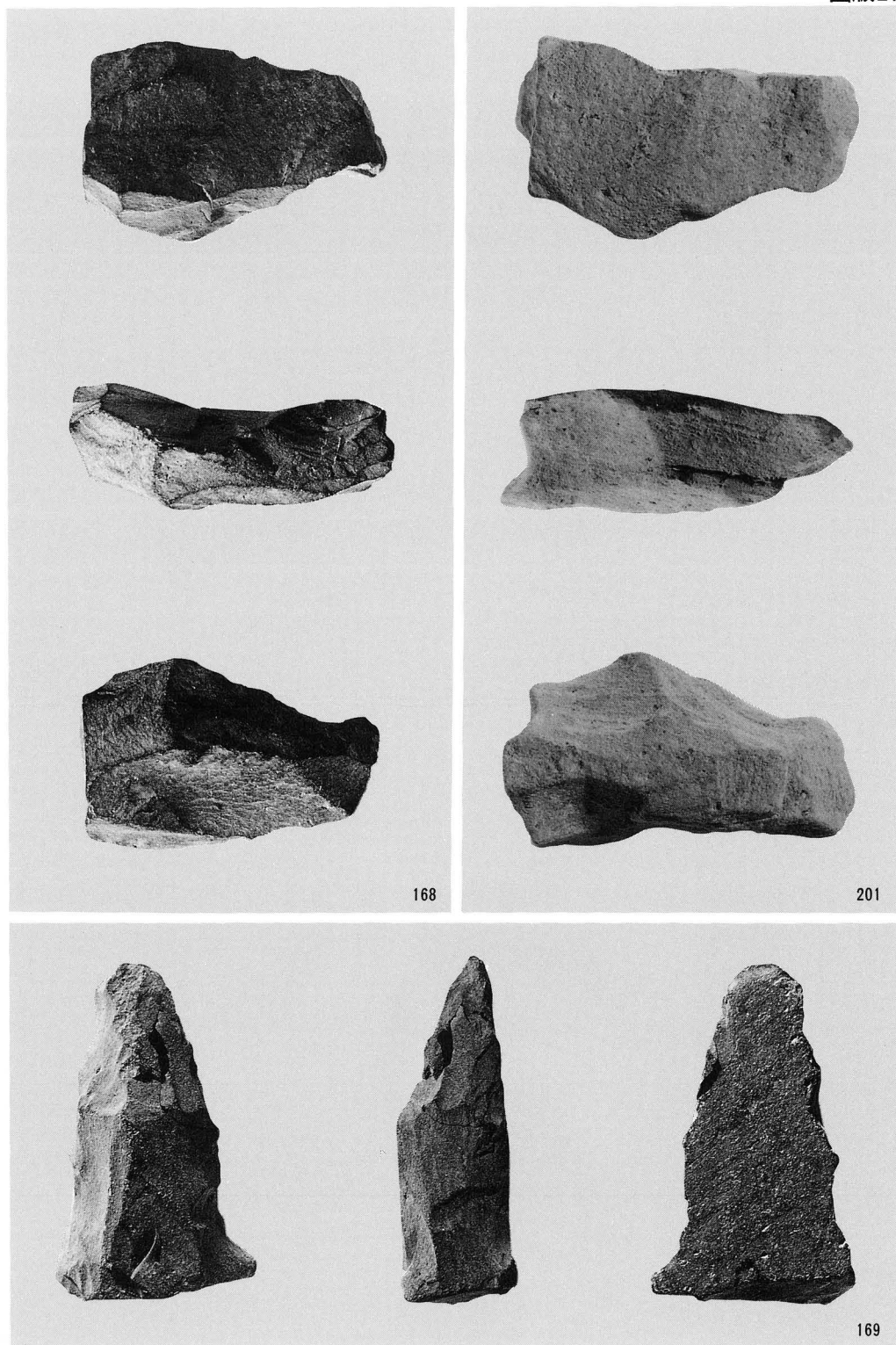
A地点出土遺物（旧石器）



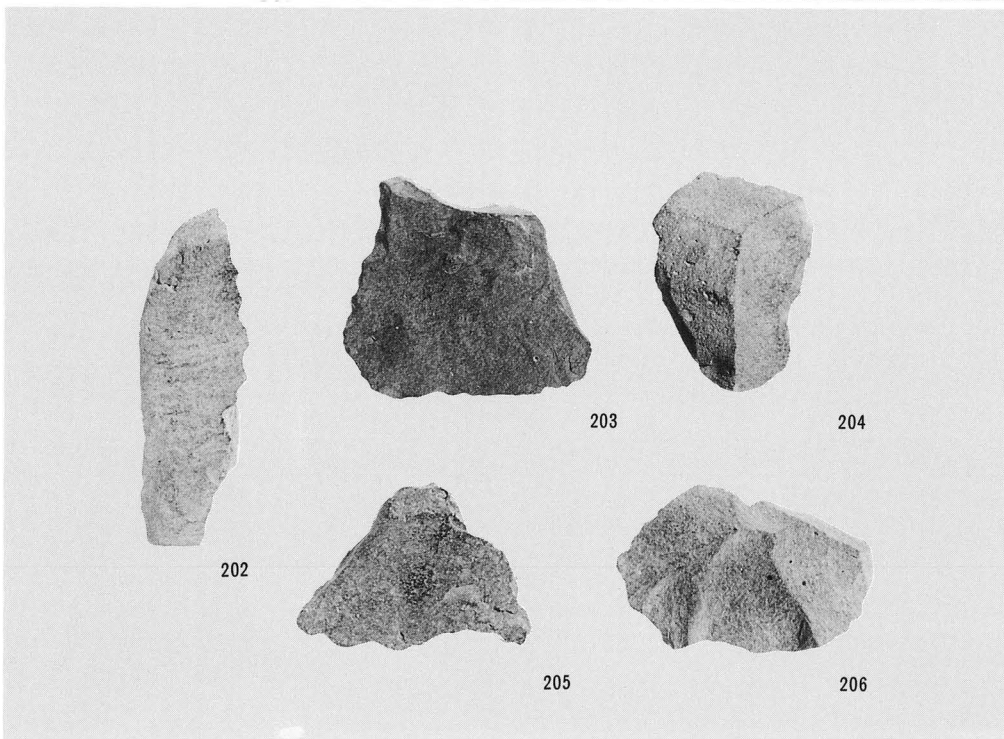
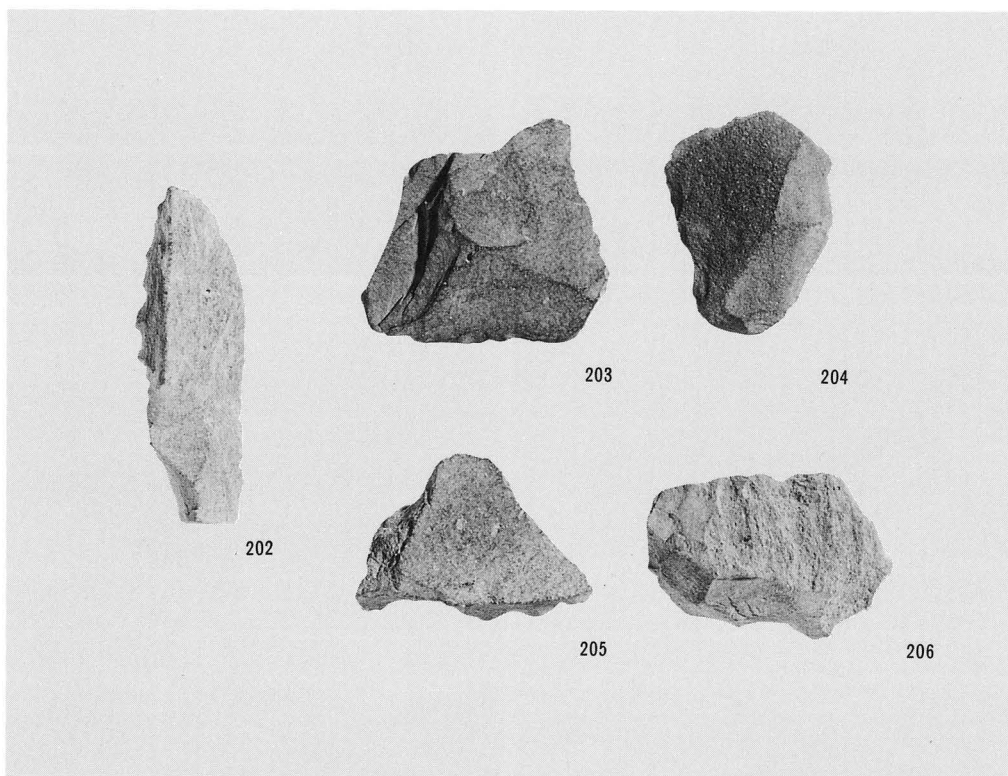
B 地点出土遺物（旧石器）



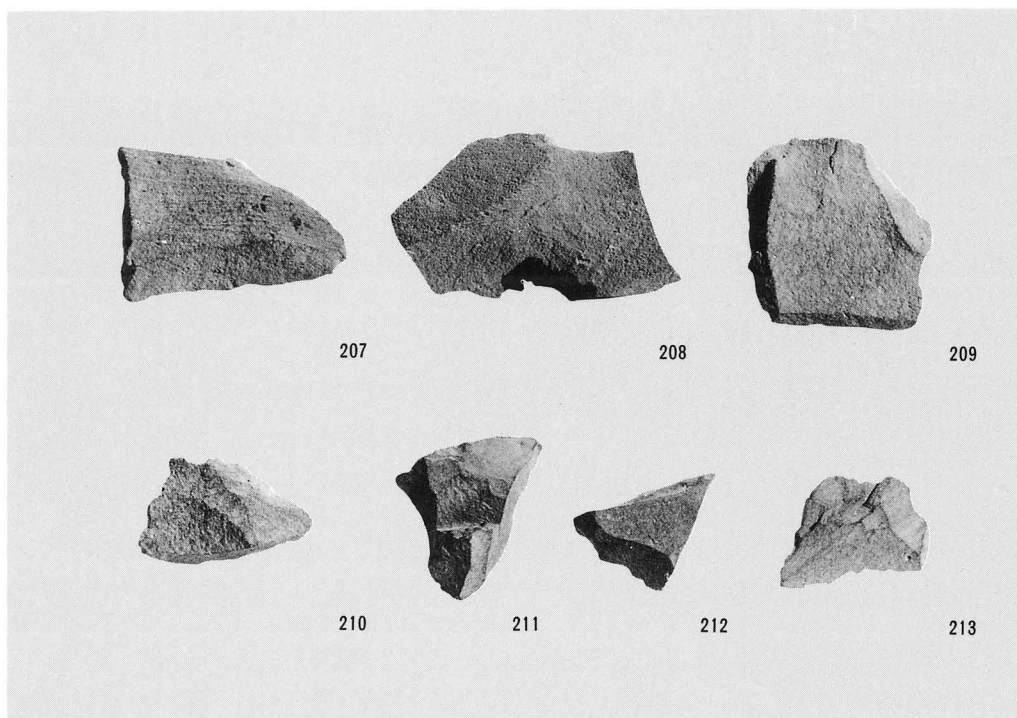
B 地点出土遺物（旧石器）



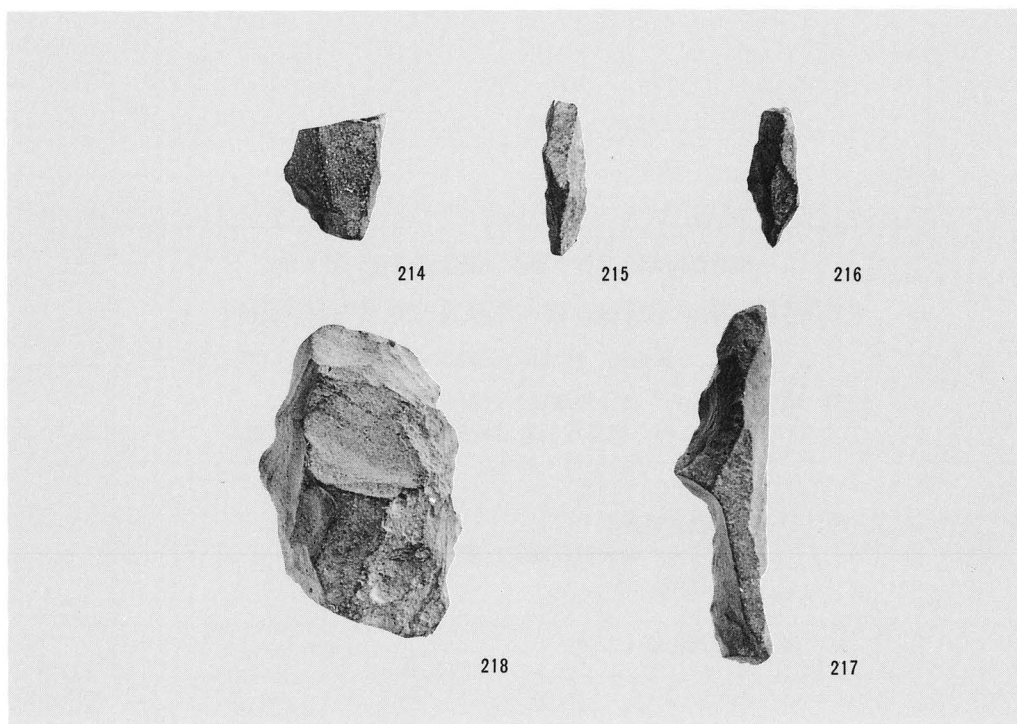
B 地点出土遺物（旧石器）



C地点出土遺物（旧石器）



C地点出土遺物（旧石器）



表面採集遺物

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第6集

四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 6

発行日 平成6（1994）年3月

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779 - 01 徳島県板野郡板野町川端字関ノ本25番
TEL (0886)72 - 4545

発行 徳島教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

印刷 (株)教育出版センター